
暁の銀嶺と黄昏の蒼

天野原 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の銀嶺と黄昏の蒼

【Nコード】

N0233M

【作者名】

天野原 唯

【あらすじ】

弟（一応ね）と一緒に交易の旅に出ていた俺。

予定通りに行かない旅もあと少し、そう思って油断していたら。

更に予定外の出来事を抱えるハメになった。

成り行きで同行する事になった少女に振り回される俺は自覚のあるヘタレらしい。

それでも一応の目的と、手に入れたいものの為に精一杯頑張る。

001 国境にて

ザワザワとした宿場の気配に、いつも以上の不穏なざわめきを感じ取る。

朝一番に国境の関所越えの手続きを済ませ、役人の事務所から出て来たばかりの俺と、上司にして、俺の弟を装っているラウ……ラウドラチャクリンは暗がり慣れしてしまった目を瞬間閉じて外光へと順応させた。

無事に荷の国境通過の許可を得て、後は関所を出るばかりだというのに。

バーラートからイクシールへ抜ける関所前の宿場と言う場所柄もあり、人の往来も多くざわつく場所だが、今日は少しばかり緊迫していないか？

怪訝そうに上司を見遣ると、彼も目線で同意を告げてくる。

そのまま人垣を少し抜けたところで俺達は足を止めた。

何人かの人やり取りしているらしい気配にそちらへと視線を向けると。

少し先では雑貨ばかりを扱う下級の商人と、その護衛らしき男達3、4人が何やら寄り集まっているのが見え、その手前には一廻り小さく見える人影が一つ、立ちすくむように認められた。

地味な色のマントで頭迄をすっぽりと覆っているものの……その体格で若い娘であるとは容易に推察出来る出で立ちだ。どうやら彼女はこの商人達に絡まれているらしい、と俺でも咄嗟にそう判断出来る。

元々荒っぽい者が少なくないこの界限では喧嘩沙汰も珍しいものではないのだが、こんな光景は滅多に無かった。

すぐ傍に関所があり、役人も常駐している場所だけに。

その為か周りを囲む人々もどう口出したものか、厄介事を避けたがる人々の常で手を出し倦ねて居るように見える。

「結構です、貴方がたの同行は要りません？」

娘の断固とした拒絶の言葉の端々に僅かながら恐怖か怒りか、の震えが在る。

「だけどさあ、ここからイクシールの首都もしくはルクアディナルファまでは峠越えの難所も幾つか在るんだぜ？通い慣れた者なら兎も角、何も知らなさそうなお嬢さん一人じゃ無理だって、俺たちや親切にも心配してやってんだ」

押し切ろうと言うのか、男の声が畳み掛ける。

雑貨商としても今ひとつうだつの上がない風采にむさ苦しい護衛の男達、信用しろという方が無理だろうと思うのは俺だけじゃない筈だ。

「別に金目当てって訳じゃないぜ？ちゃんと連れてってやるよ」
……確かに金目当てじゃない事位はそのにやけた顔付きで解るんですけど？

振り返り、隣に立っている表向き弟である上司……を見上げた、じゃない見下ろした。

上司で、俺よりかなり年上で、勿論尊敬もしているけれど、彼は少しだけ俺より背が低い。

いや俺の方が変に高いのか？

自分の頭が周りの人垣から飛び出しているのは充分承知だ。

それにしてもこのまま奴らに連れ去られれば、彼女の身の安全の保証どころか命の保証すら無い。

ふと、先程まで居た入出国管理の事務所での役人の話を思い出した。

娘が一人、同行出来る隊商は無いかと聞いて回っていると。

何でも遠国からこの地迄何とか旅して来たものの知り合いも無く、伝手も無いのでこの先への同行者を探していると言う事らしい。取

り敢えず通行証等にも不審な点は無いので、無謀などこかの令嬢ではないかと役人は言っていたっけな。

「……どうします？」

そんな事を思い出しながら、明らかに厄介事を恐れている周りの人垣を見遣り、ラウドラチャクリンに尋ねる。

「お前がリーダーだろう？ ファドラーン「兄上」」

「わかりました」

面白がっている様な彼の言葉から、自分に良い様に返答を見つける。

……つまり好きにしろ、と言う事だ。

勿論、自分でその責任も負うのだが。

そのラウドラチャクリンに頷き、俺は前へと踏み出す。人垣を掻き分けて娘の側に歩み寄ると、彼女と下級商人達の間には立ちほだかる様に立ち、少しだけ息を吸い込む。

それから威嚇するように肩を怒らせた。

「そこ迄だ、役人から話は聞いて来た。この御婦人の同行は我々が引き受ける」

断固とした口調と、俺の視線に一瞬気圧される男達。

しかし、次には口々に反論をはじめた。

「な、何だど？ てめえ、俺達の方が先に声を掛け……じゃない交渉してんだぜ？ 割込むつもりか？」

外套のフードを真深く被ったラウドラチャクリンを従えた形で立ちほだかった俺に、奴らは人数を頼んで強硬に言い募る。

二人連れの俺達に対して、彼等は所謂多勢だ。

「では御婦人、どうされる？」

振り向きもせず問うと、一瞬の間があって、彼女のそれでも気丈そうな声が応じる。

「彼等との交渉はここ迄ですわ。あなた方との同行の条件についてお聞きしたいと思います」

凜とした鈴のような声だが、少し高飛車に、人にものを命じるの

に慣れた口調。

この場の状況からすれば、その声に少し躊躇いがあるのは仕方のない事だろう。

もつとも、自分から関わっておいて言うのもなんだが、居丈高な貴族娘を連想して少しばかり後悔した。……ちよつと苦手なタイプかも知れない。

それと同時に彼女の対応と言葉遣いなどから、やはり、何処か良家の子女だと知れる。

「ふざけんな？俺達に恥かかすつてのか？」

自分たちの事など眼中にない様子の俺たちに痺れを切らしたのか、護衛の一人が喚きながら娘の肩に掴み掛かろうとする。

俺は大きく踏み出しもせずに片手でその手を払いのけ、同じ手の肘でそいつの腹に容赦のない一撃を叩き込んだ。

護衛だろうと思われる出で立ちの割りには大して腕の立つ男でもなく、雑作もない。

腹を押さえてくずおれる仲間を目の当たりにして、色めき立つ他の護衛達。

廻りの人垣がどよめいて乱闘になるかと思われた時、今まで黙って後ろで控えていたラウドラチャクリンが一步踏み出すと俺の隣へと並んで立った。

002 交渉

真深く被ったままの外套のフードは、彼等ごときには顔を見せる必要すらないと言わんばかり。

そして、さほど大きくはない、けれどよく通るいつもの声色で口を開く。

「お前達はバーラートの者であろう。我々はバーラートのジャヤル家の御用を預かる商家の者だ。我々に楯突いてここでこれ以上騒ぎを起こすのならば、自らの国ですら商売も出来ぬようになると思うが……それでも良いのか？」

鶴の一声とはまさにこの事だろう、その言に彼等は怯まざるを得ない筈だ。

現在バーラートには大小20を超える藩王家があるのだが、ジャヤル王家は其中でも五本の指に入る最大の王家だった。

バーラートの民であれば知らぬ者はない名前と言っても過言ではないだろう。

ラウドラチャクリンは、バーラートに於いてはそのジャヤル王家と個人的に強い結び付きを持っている。現に今も彼が属するこのアルマンスール家は、その王家の用を賜り、商いをしているように装っているのだから。

「……それは……」

護衛の一人が明らかに怯む。

「いや……そ、それならそうと早く言って下さいよ。勿論王家と深い縁の在る方々のお言葉ならば従わせていただきますとも、勿論」

途端にその護衛を押しつけて、主人の下級商人は手のひらを返したように下手に出ると、そそくさと護衛達を引き連れて逃げるように姿を消した。

本心は兎も角、楯突き用の無い名を出されてしまった以上、彼等は引き下がらぬ訳には行かなかったのだ。

それに一時の気まぐれと、たかが女一人への執着で、これからの商売をふいにする気はさらさらなかったろう。

すぐごと引き下がった彼等を見送っていると、安堵したかのように周りの人垣が少しずつ崩れて行く。物見高い人々も三々五々散ってゆくのを確認すると、俺はようやく娘の方へと向き直った。

「我々：私はイクシール・ルクアディナルファ間の交易を商いにしている商家、アルマンスール家の長男、ファドラーン・アルマンスール。あちらは弟のラウドラチャクリン・アルマンスールです。交渉……とおっしゃいましたが、詳しい話は我々の宿で致しませんか？　すぐそこですから」

はだけかけたフードをかぶり直した娘が、ほんの一瞬だが人目を気にしたその仕草に訝有りなのを察してそう申し出ると、俺は無意識に腕を差し出した。

いつも通り貴族の令嬢に奉仕する時の様に。

そして腕を差し出された相手も、当然の様にその腕に手を重ねる。

ちらり、と隣に立っていたラウドラチャクリンがそれに目をやるのに気が付く。

なにか気になる事でも……？

俺の視線での問いかけにも、しかし彼は何も言わなかった。

そのまま特に何か話をする訳でもなく、押し黙ったままの彼女を伴って宿へと道を歩く。俺達の隊商が逗留している中流の宿に戻ると、隊商のメンバーに出発迄の時間と指示を与えて、いつもの来客に対応するように社交室の奥まった一角のテーブルに彼女を案内した。

席に着いた彼女は躊躇いはしたものの、その時になってようやく外套のフードを外したので……同じ様に外套を脱いだ俺は、その姿から目が離せなくなってしまった。

室内独特の暗さを払うかのように、彼女の髪が一際輝く。

金髪、というものなら多く目にした事がある。しかし彼女の髪の

色は更に淡く透明で、まるでそれ自体が光を放っているかの様に輝いている。

バーラートは多民族の国だが、この国でこんな色の髪は見た事が無かった。

「この辺りではあまりお目にかかりませんが……ユグドラセアの方ですね？」

静かなラウドラチャクリンの声にはっとして、俺も彼女もラウを見遣った。

ユグドラセアとはバーラートよりも西方に在る王国の中でも、更に遠方の国だ。

彼の国とバーラート間では少しだが交易に拠る外交があるものの、イクシール、ましてや奥地のルクアディナルファでは名前を聞く事も滅多に無い。

「御国からここ迄は流石にお一人では無理でしょうから……途中迄はお供の方かご家族とご一緒だったのでは？」

取り立てて追求するふうでもないラウドラチャクリンの確認のよきな質問に、彼女も漸く口を開いた。

「……ええ、バーラートまでは家族と一緒にでした。私の父はユグドラセアの貴族で投資の為の視察でしたが、私はもう少し奥地のイクシールやルクアディナルファも見てみたかったので、一人旅を」

「しかし……っ」

咄嗟に口を開きかけた俺の踵をラウドラチャクリンが軽くつま先で突つく。

黙れって事か？

しかし彼女の説明は今ひとつ腑に落ちない、本当とは思えないものだった。

娘がたった一人、好奇心だけでバーラートの西から北西のこの地、イクシールとの国境迄やって来たと言うのか？通常の貴族の旅と言えば護衛や使用人などを大勢従えた賑やかな物の筈だ。一人での旅など正直考えられない。

バーラートは彼女の国よりも遥かに大きく、広大な国土と雑多な民を抱える国なのだ。

「……まだ貴女のお名前を伺っておりませんでしたね」

ラウドラチャクリンだけはマントを外さず、フード深く被ったままだ。その姿に少しどころかまだ全然警戒を解いていないふうの彼女は、その問いに一瞬の戸惑いを見せた。

「セシリア・I・グレンフォード、です」

「失礼ですが、年齢は？」

「……17になりました」

俺の問いかけに躊躇いがちに俯いてそう答えた彼女。つい、無意識に俺はため息をついていた。気丈そうな見た目の印象よりもかなり若い。

「よくまあ……ここ迄無事に来れたものですね？」

誉めるような、呆れたような、そんな俺の口調に少し彼女の目が柔らかく和んだ。そこへふとラウドラチャクリンが口を挟む。

「ミドルネームのIは？」

「イエライシャ……ですが」

怪訝そうに返事をした彼女にラウドラチャクリンは答えた。

「では我々は貴女をそう呼びしましょう。我々の事は呼び捨てで構いませんから」

それから俺の方をちらりと見て、奴は少しふっと……笑みを浮かべて続けた。

普段あまり感情を表情に表さないラウドラチャクリンのその微笑みに、咄嗟には意味迄も掴み切る事は出来ない。結構付き合いは長いと自負しているんだけれどな。

「我々は移動に馬を使っていますが、持ち馬は居ますか？」

「いいえ、宿場間の貸し馬を使っていましたから」

特にそれには執着するものはないのだろう、あっさりとした口調の彼女にラウは軽くなづく。貸し馬とは宿場間で馬持ち達が小遣い稼ぎにしている商売で、隊商などの余った馬を移動させるついで

に人を乗せてゆく、或いは貸し出したりするものだ。

「それでは、この隊の馬をお貸しできるようにしましょう。あとは我々と同行していく間の道々の費用等ですが、当面この隊商が肩代わりして、貴女の目的地に着いた時点で清算させて頂く事にして頂けますか？」

「判りました。では、前金を如何程お支払いすればよろしいですか？」

事務的な交渉ごとを気負い無くこなしてゆくラウを見つめながら、こんな世俗的な事にも随分慣れたな、と感慨に浸る。

そして対しているイエライシャ嬢にも同様の旅慣れた雰囲気だな、などという感想を抱いた。同行者とは最初の取り決めが肝心で、問題が発生したり事態によって少しづつ調整して行くのが常だ。

彼女の見かけの身分からすれば、そんな細事に通じているのは意外なのだが。

「それも最後、旅が終わってからでよろしいですよ」

先ほどまでと全く変わりのない穏やかな口調のラウドラチャクリン。

「……そんな訳にはいきませんし、そんな話聞いた事も無いわ」

けれどイエライシャ嬢の口調はそうはいかなかった。

いくら何でも怪しい、と彼女が思い始めているのが俺にも判って、どう間に入ろうかと思ったところでラウが最後の条件を出して来た。

「その代わり、と言っては何ですが……途中の宿場町の小さな宿では余分の部屋を確保できないので、私達との同室で我慢して頂かなくてはなりません。それで宜しければこの条件で お請け致しますが？」

003 交渉成立（前書き）

配分ミスで、少ないです。

003 交渉成立

「な……」

瞬間異議を挟みそうになって、慌ててラウ……ラウドラチャクリンを見つめる。

同じようにうろたえたイエライシャ嬢の視線をふと感じたものの、意図の分からないラウの真意を見極める方が重要な気がしていた。けれど深めにかぶったフードから伺えるのはいつも通りの余裕の微笑みだけ。

俺の方が背が高い分、奴の表情が判りづらい。

年齢からしても未婚の女性、しかも他国の貴族に同室の提案って……正直まともな神経じゃない。

これじゃあ、同行を申し出たのがこちらとは言え、断ってくれと言っているようなものじゃないか。

どうしてだかその事に少し焦りを感じて俺はラウを見つめ続けて。

「……わかりました。その条件で異存はありませんが、当然道中の安全も保証頂けるのですね？」

だからそう彼女の声が答えたとき、意外なその答えに驚くと同時に、それだけ彼女には前に進まなければならない、のっぴきならない事情があるのだとも悟ってしまった。

「勿論、可能な限りですが」

それらすべてを見透かしているかのようなラウは、何食わぬ顔でそう答え、そして続けた。

「我々はこれからご希望通りイクシールへと向かいます。その首都

ツァイデアルに在る我々の商家にて荷を選別して、編成し直し次第……最終目的地であるルクアディナルファへと出発します。貴女の宜しい所迄ご同行下さって構いませんが、御家族の元へお戻りになる気になったなら、早いうちにおっしゃって下さい」

彼はそう言うのと、商人に相応しからぬと常々言い聞かせている、貴族顔負けの優雅な礼をして隊の方へと戻っていった。その背を見送り、娘……イエライシャ嬢に目を戻すと彼女は少し青ざめた顔で口元を両手で覆っていた。

心なしか震えてすらいる。

「驚かせてしまいましたか？」

問い質そうとしたが、彼女は口をつぐんで首を振った。

「では、貴女の荷物を取りに行きませんか？何処かの宿に預けてあるのでしょうか？」

さっきの広場で見せた高飛車な態度からは想像出来ないほど弱々しく見えるその姿に、アレは廻りを威圧する為の虚勢だったのだと思ひ当たった。

むしろ今の姿の方が地のようだ。

世慣れても居ない貴族の娘がたった一人とは、かなりの訳ありという事か。

そう納得した俺は、何食わぬ顔で彼女を誘うと自分達の宿を後にした。

004 経過（前書き）

視点を改めてみました。

004 経過

ああ……どうしよう。

私は内心の怯えと動揺を悟られぬように息を吸い込んで口を開いた。

「結構です、貴方がたの同行は要りません？」

きっぱりと拒絶の言葉を口にしながらも、それに大して怯む気配もない彼等に恐怖を感じずにはいられなかった。

廻りには人垣も出来つつあるのに、それを気にするふうもない。ましてや、ここは国境管理の役人の居る施設からも近いと言うのに。

こんな相手は初めてだった。

交渉を持ち掛けられたのは初めてではなかったのに、今までの相手は私が声を荒げたり、役人の気配を漂わせれば大抵は引き下がってくれたからだ。

睨み付けるように……目の前の五、六人の男達を見つめる。

大して羽振り良さげな商人でも無さそうなのだが、マントの隙間からこぼれた私の髪の色に気付かれたのがいけなかったのだわ。急に積極的に誘いかけてくれるようになり、その裏に潜む思惑には流石に気が付いてしまった。

下卑た彼等の微笑みに、身の危険を感じる。

何とか彼等を振り切ってしまうないと、とんでもない事になるのは明らかだもの。

「だけどさあ、ここから……」

あからさまな猫撫で声で何かを話しかけて来る彼等を睨み付けつつ、役人の所へと逃げ込む隙を狙っていた。

この状況が忌ま忌ましくて……つい舌打ちしてしまう。

この先、私が目指そうとしている土地までの行程がとても厳しいものだと聞いていなければ、旅の道連れなんて捜しはしないのに。

「そこ迄だ。役人から話は聞いて来た。この御婦人の同行は我々が引き受ける」

背後から突然私の真横をすり抜け……商人達との間に入り込んだ人影。

そう声がした時は、目の前の商人達同様……私もただ啞然としていた。

誰も廻りの人達は助けてはくれないのだと思っていたのに。

呆氣にとられて私がその人物の背中を見つめるのと、商人達が口々に反論とも言えない罵りの言葉を吐き出すのとは同時だったろうか。

「では……御婦人、どうされる？」

とても……背の高いその人物が、外套を軽く羽織った商人風の衣装に身を包んでいる若い男……だと認識したところで彼の声が私へと注がれる。

「彼等との交渉はここ迄ですわ。あなた方との同行の条件についてお聞きしたいと思います」

少し意地の悪い問いかけだとは思ったけれど、目の前の男達から身を守ろうと思えばそう答えるしかないじゃない。

勿論彼等との交渉でも条件が合わなければまた、他の隊商か商人

を当たれば良いのだし。

その程度の考えで口にした返事に、初めの商人とその護衛達は激昂してしまった。

「ふざけんな？俺達に恥かかすつてのか？」

そんなに強い反応が返ってくるとは思っていなかった。全く予想外の彼等の怒りの形相に身をすくませた時、目の前の若い男の身体がスイ……と動いた。

同時に鈍い音がして、対峙していた商人の護衛の一人が、私の脇を翳めて地面へと転がっていく。

私に掴み掛かろうとしたその護衛がこの若い男によって撃退されたのだと、認識する間にも事態はどんどん進んでいった。

いきり立つ商人達と若い男が睨み合いになって……どうしようとおろおろしていた私の、いつの間にか隣に居たもう一人の男が口を開いたのだ。

「お前達はバーラートの者であろう。我々はバーラートの藩王ジャヤル家の御用を預かる商家の者だ。我々に楯突いてここでこれ以上騒ぎを起こすのならば、自らの国ですら商売も出来ぬようになると思うが……良いのか？」

大して大きな声ではなかったのに、よく通る声でそう問いかけられた商人達は逡巡し……口惜しそうではあったもののあっさりと引き下がってしまった。

しかも、去り際のその態度は媚び諂うような卑屈なものだ。

それはそうだろう、とも思う。

ジャヤル王家……バーラートの滞在先で私自身何度も耳にした事のある名家の名だもの……を我がもののように語るこの男達に、しかし改めて警戒しなければならなかった。

私がバーラートからここまで来た経緯からすれば、こんな所でジヤールの縁者、いやむしろバーラートの者になぞ関わらない方が良いはずだもの。

そんな事に気を取られている間に、先に私を助けてくれた若い男は視線を私の方へと向けてきていた。

「我々……私はイクシール・ルクアディナルファ間の交易を商いに行っているアルマンスール家の長男、ファドラーン・アルマンスール。あちらは弟のラウドラチャクリン・アルマンスールです。交渉、とおっしゃいましたが、詳しい話は我々の宿で致しませんか？すぐそこですから」

打って変わった穏やかな口調で話しかけられ、咄嗟に、自分の着ていた外套のフードをかぶり直していた。

気が付けば先程の強引な商人達は姿を消していて、廻りを遠巻きにしていたやじ馬も散りつつある。

それでも用心に越した事はないわと考えたの。

さっきはこの下に隠していた髪を見られて……厄介な事になったのだもの。

ファドラーンと名乗った男が少し身を屈めるようにして自分の腕を差し出して来る。

貴族や、それなりに身分と言うものを持つ女性に対する礼儀を弁えたその仕草。

どうやら彼等には少なくとも私の身分は判ってしまっていたらしい。

今更逃げ出す訳にもいなくて、何となく滅入った気分での腕に自分の手を預ける。

それはエスコートを許す、と言う言葉に替わる承諾の仕草だったから。

すぐだと言われた通り、彼等の宿は先程の広場から見渡せる場所にあった。

ランクは高いとは言えない、よくて中流の宿だが人の出入りもかなりあって活気のある所のようなわ。

彼等の隊商の者だろうか……出入りしている男の一人を捕まえたファドラインが何やら指示らしきものを出しているのを視界の隅に捉えていると、宿の中年の女性が社交室のテーブルへと案内してくれた。

奥まったそのテーブルは部屋を出入りする客達の目に付きにくいように衝立てで仕切っており、商談などで彼等がよく使う席なのかしら。

相変わらず穏やかなファドラインに勧められて腰掛けたが、いつまでも外套のフードをかぶったままというのも……逆に訳ありだと言うのを強調するばかりのような気がする。

むしろ……開き直って旅行者を装ってしまった方が良いのではないかしら、役人にもそう説明していたのだし。

そう決めると、思いきってフードを降ろす。

向かい合うように座ったファドラインが動揺……したかのように瞳を眇めるのが小気味良い。

この大陸に渡ってからと言うものの、この髪の色に振り返らなかった人は居なかったわ。　まあ……そのせいでいろんな厄介事に巻き込まれもしたのだけれど。

「この辺りではあまりお目にかかりませんが……ユグドラセアの方ですね？」

ただ一人、未だフードをかぶったままの人物……ラウドラチャクリン・アルマンスール……ファドラーンの弟だと紹介された彼がその口を開いて、今度は私が狼狽してしまった。

バーラートの隣国であるこのイクシールに来てから、この髪の色から生まれた国を見破った者は一人として居なかったのだもの。

そして、バーラート絡みの私の素性に気付かれていたのかしらとも思い……慌ててしまった。

けれど彼の問いは追求するようなものではなく、知っている事を確認する程度の気楽な問いかけだった。

「御国からここ迄は流石にお一人では無理でしょうから……途中迄はお供の方かご家族とご一緒だったのでは？」

「ええ、バーラートまでは家族と一緒にでした。私の父はユグドラセアの貴族で、投資の為の視察でしたが、私はもう少し奥地のイクシールやルクアディナルファも見てみたかったので、一人旅を」

そう、そういうふうに話を持っていきたかったの。

ファドラーンは驚いたような表情をしているのだが、特に何も異議を挟んではこなかった。

だから私も渡りに船、とばかりにラウドラチャクリンの言葉に同意する。

いつまでもフードをかぶったままで、何て言うのか……少しばかりうさん臭い感じがする男性だったが、柔らかな声の彼は私の事を怪しんではないみたい。

このまま彼等に同行して、ルクアディナルファへと渡る事も可能かもしれないわ。怖い思いをしたばかりだと言うのに、私はそう安易に考えはじめていた。

「……まだ貴女のお名前を伺っておりませんでしたね」

緊張が緩みかけた所へそう問われ、狼狽える。訊ねられて当然の問いだったのに、咄嗟に誰かの名前を騙る事も出来ず、本名を告げていた。

「セシリア・I・グレンフォード」

「失礼ですが、年齢は？」

次にそう尋ねて来たのはファドラーン。

どう返事をするべきか戸惑ったが、今更何を偽っても益はないと観念してありのままを答える。

「……17になりました」

「よくまあ……ここ迄無事に来れたものですね？」

その答えに彼は驚いたような表情を見せ、もう少し年上に見せようと背伸びしていた効果は一応あったらしいと判った。でも、もうその必要もないみたいだけれど。

その次にはラウドラチャクリンに省略していたミドルネームを訊ねられ、彼等はその名で私を呼ぶ事にくれた。

生まれた時に付けられた名の中でも、このイェライシャと言う名は古い言葉に因むものとかで、普段は使わないのだ。……変に偽名を使うよりも初めからこの名を名乗っていれば良かったのだとは、今更になって気が付いた。

そして、後は同行する為の条件を幾つか取り決めれば、この取り引きは成立する。

私の希望はこのバーラートとイクシールの国境から、更に奥地にあると聞き及ぶルクアディナルファと言う国を目指す事。

そしてその目的は、どう言えば良いのだろうか……？

自分自身ですら漠然としか考えていない事を彼等に上手く説明する自信は無かったが、彼等は特にそれを尋ねて来ない。だから、彼等が私の事を物好きな観光客くらいにしか考えていないのだと……

思い込んでしまった。

ここから目的地までの大体の日程と期間の説明をしてもらい、旅費の交渉をするのはいつものお約束。

貴族の女性が旅をする場合は付き添いの婦人が同行するのが常識で、そう言った交渉毎はその付き添いの役目なの。

けれど、今の私は一人きり。

だからそう言った事までしっかりと確認をとるのは自分自身のためにも必要なの。

片道とは言え、一つの国を通り過ぎる旅は結構な時間がかかる。

宿に泊まる回数からしても前金に随分な額を提示されるだろうと思っていたのに、旅が終わってからで良い、とあっさりとラウドラチャクリンに言い切られてしまった。

しかも、最後に清算するまではアルマンスールの隊商が全てを肩代わりした上、移動の為に使う騎乗用の馬すら自分達の隊商の馬を貸してくれると言う。

流石に……こんな美味しい話怪しいわよ、と気付いて私も身構える。

けれどまるで見越していたかのように……所でその代わりに、と彼は口を開いた。

「途中の宿場町の小さな宿では余分な部屋を確保出来ないの、私達との同室で我慢して頂かなくてはなりません。それで宜しければこの条件でお請け致しますが？」

にっこり余裕の微笑み、と言ってもマントのフードで顔の上半分は伺えないのだが……のラウドラチャクリンに対して、私とファドラインがそれぞれ引きつった表情をした……と思う。

けれど、私と同様の反応を示したファドラインに妙な安心感を抱いたのも事実だった。

兄弟二人がまるでいつも通りとばかりに動揺のない様子だったら、今度こそ身の危険を感じずにはいられなかったろうと思うもの。

だから、礼儀正しい上に女性との同室で狼狽える、そのファドラーンの生真面目そうな所を信じる事にしたの。

「……わかりました。その条件で異存はありませんが、当然道中の安全も保証頂けるのですね？」

そう重ねて確認をしたのは、既に意地になっていたからかしら。

「我々は今日の午後イクシールへと向かいます。その首都ツアイデアルに在る我々の商家にて荷を選別して、編成し直し次第最終目的地であるルクアディナルファへと出発します。貴女の宜しい所迄ご同行下さって構いませんが……御家族の元へお戻りになる気になったなら、早いうちにおっしゃって下さい」

条件に異存のない事を伝えた時、一瞬ラウドラチャクリンの口元が綻んだように見え……けれど次にはそう言葉を紡ぎ出していた。

表向きは、無謀な旅に出ようとしている娘に対して改めて覚悟を問うようにも聞こえるその言葉。

そしてその裏で……自分の家族や他の事を何時まで放り出しておくつもりなのか？と問いかけ、いいえ……暗に責めてでもいるかのよう。

言いたい事だけを言ってしまうと、ラウドラチャクリンは落ち着いた物腰で一礼して私の前から去っていった。

「驚かせてしまいましたか？」

うろたえてしまっていた私にそうファドラーンが声を掛けてくれる。

優しく気づかうふうのその言葉に、ゆっくりと首を振り……なんでもないと返す。

得体の知れない彼等への恐怖と警戒心はあるものの、動き出した

この事態に任せようと覚悟を決めるしかなかった。

ど^どのみち今の私には前に進む事しか出来ないのだから。

006 出発

イエライシヤが逗留していた宿は宿場の関所のすぐ近くで、かなりランクの高い大きな宿だった。彼女は宿の主に同行出来る隊商が見つかった事を告げ、礼を言ってその宿を引き払う。

思っていたよりも少ない荷を受け取り再び我々の宿に戻ると、待ち受けていたらしいラウドラチャクリンが俺たちを見つけたのか何やら手に持ってやって来た。

そして手にしていたその小さな袋をイエライシヤに差し出す。

「これは？」

袋を受け取りながらも怪訝そうな表情を見せる彼女にラウは口を開いた。

「貴女の髪の色は人目を引き過ぎるので……少しばかり暗い色になるよう染め粉です。勿論使っても使わなくても構いませんがね。丁度荷の中に在りましたから」

相変わらず外套のフードを深く被っているが、口の端に面白がっている時の表情が浮かぶ。

「この宿場で……貴女を我々が引き受けたのは多くの人が見ていますから、次の大きな町か首都に入る前辺りで姿を変えたほうが自由に動けるでしょう。その髪の色ではどうにも目立ってしまうし、あのままの町を見物するには必要かもしれないので。勿論ユグドラセア貴族の令嬢としての……格式を維持した旅をご希望なら、そのように宿なども手配せねばなりません」

「いいえ……出来れば目立たないようにして頂きたいわ？これはじきに使わせて頂くことにします、ありがとうございます。ラウドラチャクリン殿」

「呼び捨てで結構ですよ。……では後ほど」

ようやく彼女は納得した表情で、受け取ったその小袋を服の合わせに仕舞い込んだ。

そしてそのままラウドラチャクリンの後ろ姿を見送ると、俺にも軽く頭を下げて、イエライシャは一時的に彼女の荷物を運び込んだ部屋へと入っていく。

昼食後すぐが出発の予定だった。

暗くなる頃には途中の宿の有る町に着く。大きな隊商筋らしく、進む速度に合わせて野宿しなくても済む様に自然と町が一定の距離を置いて街道沿いに出来上がっていた。

勿論それ故にハイエナも多い。

ここからの日程にして2日程進んだ辺りの途中に有る大きな森を抜ける為に、今回の旅では少しばかり危険を冒さねばならないかもしれない、と言う事を予測していた。

ここしばらくその森の近辺で隊商を狙うかなり荒っぽい盗賊が出ると、もっぱらの噂だったからだ。

部屋へと戻り隊商用の荷を改めていたラウドラチャクリンは一つの包みから重めの長剣を取り出すと、後ろで見守っていた俺に無造作に放り投げてよこした。

「自分は良いんですか？」

渡された自分の剣の鞘を払い刀身を改めてから、相変わらず丸腰のラウドラチャクリンに目をやる。

返って来たのはいつも通りの余裕の笑みだった。

「わたしは必要ないが……ファドラーン、お前は彼女を守ってやらねばならんだろう？」

「何か有ると、起きると思ってるんですか？」

貴方には先見の力……未来予知の為の……は無い筈でしょ？と目

で尋ねるのを受け流された。

「……判らん、その為に先遣りを出してあるんだろう？」

二日の日程差で先行する数人の一行を送り出したのを指摘される。

「何か有れば……見つければ報告が有る。」

確かにそうなのだが、避けようと思えば避けられるのに……？

「今回の襲撃を、甘んじて受けるおつもりですか？」

「同行者も出来た手前、安全な旅にしておきたいお前の気持ちは判らんでもないがな。しかし……この不穏な地域で一回も襲われていない、それ自体があらぬ噂の元になりかねん」

不審がついているとも受け取れるだろう俺の言葉に、表情を崩す事なく彼はそう言葉を続けた。アルマンスール家が盗賊と通じているかもしれない……とは、商家としては決して囁かれてはならない噂だ。

「うちは手練揃いですらねェ。……襲ってくださいますかね？」

「女がいる。極上の金の髪の娘。しかも妙齡の乙女とあれば……バ―ラート辺りの好き者なら言い値で買うだろうね。しかも我々がその女性を同行に加えた事は衆人の知る所だし」

ふざけた調子で問い掛けた俺に、ラウがさらりと口にした返事。
思わず彼女が聞いては居ないかと後ろの扉を伺った。

「まさか……初めからそのつもりで？」

つい……声が潜めたものになる。

「それこそまさかだな。しかし考えられなくもないだろう……だからこそお前はしっかり彼女を守ってやれよ？」

珍しく明るい声を上げて笑い、俺を見つめたラウの何かを見透かすような蒼い瞳に正直うろたえてしまった。

「お前の責任だろう？ 言い出しっぺのリーダー殿」

そんな俺を見透し、鼻で笑う様にして彼は部屋を出ていく。馬小屋へと向かっているのは判っているから敢えて行き先は尋ねはしない。

出発前、彼は必ず愛馬と「話す」為の時間を作っている事になっている。それが彼が精神を集中させる為の言い訳だと知ってはいるが、隊商の皆はそれを黙認しているのだ。

あの堅物……その背中を見送りながら、しかし、と思い直す。彼は意外とまめだから、もしも好きな女性が出来たら尽くすんだろうな……ふとそんなことを考えた。

「イクシールの首都へ着いてからルクアディナルファへ行くのに、途中での休みは無いのですか？」

昼食を済ませて出発し、暫くするとイエライシャはそう訊ねて来た。

何故かずっと俺の隣に馬を並べているので、俺はともすれば彼女の髪に視線を向けそうになるのを懸命に誤魔化していた。

「今回は少し急いでいますから、イクシールの首都ツアイデアルで荷の選別の為に1、2日休むだけです。そこでは俺達の両親が店を守ってるんですが、ラウが出来ただけ急いでルクアディナルファへ帰りたいがっているんですよ。元々俺と奴がルクアディナルファの店の担当だし、今はルクアの王が病で臥せっておられるので。」

旅の行程を急ぐのとルクアディナルファの王がどう関係するとうのか。怪訝そうな表情を見せるイエライシャに、思い出したというように付け加える。

「ああ……ラウと王は年は離れているんですが、気の会う友人みたいなものなんです。まあ、その見舞いに早く行きたくてラウが急いでいる……と云った方が良いかな？」

我ながら長ったらしい説明に、そっとうなづいて了解の意を表し

たイエライシャ。俺は見慣れたラウの背を見つめていた。

ルクアの王はおそらく最後の病だろう……と、言葉にするまでもなく皆が理解していた。

勿論この世に生を享けた時から人も他の生き物も、死から逃れる事は出来ないのだとは十分に判っている。

3、4馬身前方で隊商の前に立つラウドラチャクリンに視線を遣りながら俺が黙ってしまったのを、イエライシャは不思議そうな表情で見つめてくる。

ルクアの現王は若い頃からラウとは親しかった。

長寿の属性を持つが故に、周りの者が自分よりも先に老いてこの世から去って行くのを、どのような気持ちで見送っているのか。或は言い様の無い悲哀を感じているのか、あまりその感情を見せないラウを俺は少し神妙な表情で見遣った。

ふと隣のイエライシャが顔の向きを変えたとなん、輝く色の髪が日差しに煌めき……俺はそれに目を奪われそうになって、慌てて視線を反らした。

「貴男達は商人なのでしょう？なにに何故……剣を帯びておられるのですか？他の人たちもそうだけれど、剣を使えるのですか？」

「一応仕込まれているんですが、相手次第ですね。腕の立つ相手なら剣で話すより、財布と相談させますよ」

探るような彼女の問いに、ふざけたような軽口を叩きながらイエライシャを見返す。

メンバーの大半……ラウドラチャクリンを除いて……が帯剣しているのに気付いて、彼女は明らかに緊張しているようだ。普通の隊商ならば剣の使えない商人達が護衛として武人を雇うものなのだが、俺達の隊はそうではないからかもしれない。

「この先二日程行った先にある森の近辺では、ここの所良くない噂が囁かれてましてね。用心の為ですよ。襲われてから剣を出してちや間に合わんでしょう？」

「襲われて……のんびりした口調で随分な事を言うのね」

呆れたふうの彼女に笑みを返しながらも廻りに気を配る。

そのまま初日は事も無げに終わり、夕日がすっかり山脈に隠れてしまう頃（山地なので日暮れは早いのだ）ようやく見え始めた集落で隊商は馬を止めた。

事前に本人に了解を取っていたとは言え、本当にイエライシャは俺とラウドラチャクリンとの同室になった。

隊商の他の者達は大部屋だ。小さな集落の宿では大きな町の様に設備や部屋数を確保出来ないからだ、明らかに緊張した俺とは反対に……ラウも、そしてイエライシャも至って平気な表情でそれぞれの身仕舞を整えると、さっさとベッドへと引き取ってしまった。

……もつともイエライシャの方は初めて外套のフードを払ったラウドラチャクリンの方を気にしているらしく、しきりにちらちらと彼を見遣っていたが。

彼女の考えている事はよく分かった。

兄弟だと触れ込んでいる割りには俺とラウが似ていない、と思っているのだろう。

苦笑してその様を眺める。

血縁なぞ2人の間には無い、と俺は割り切っていた。

主従関係ならあるのだが。

彼女と我々を隔てる衝立て越しに、早々に規則的な寝息を立てはじめたらしいイエライシャの方を見遣る。どうしようかと思っていた俺の心を読んだかの様に、ラウドラチャクリンがもう一度起き上がった。

「……どうか？」

「いや。……少し夜空を見てくる。女性と2人きりだからって……イタズラするなよ？」

「な……？アンタと一緒にせんで下さいよ」

売り言葉に買い言葉とはこの事だ。

にやりとしてラウドラチャクリンは外へと出て行った。

余裕でからかわれているのが判っている俺はふて腐れた顔でベッドに横たわり、じきに眠りに入る。目が覚めたのは大分経ってラウドが戻った気配にだった。

目で問い掛けた俺に何でもないと言草を返して、彼もベッドに入った。

007 前触れ

翌朝……やはり彼の起きる気配で目が覚める。

朝の気怠い時間を楽しむ風もなく素早く身支度を調べると、一応気を使っているのだろう静かに室外へと逃れてゆく。

早起きの質なのは良いとしても……この時間を楽しまないなんて勿体ない、と俺は小さくため息をつく。そして、ぬくぬくとしたベッドの中でもう少しだけ夜明け前のひとときを楽しんだ。

……次に目を醒ましたのは身支度を調べたイエライシャが部屋の中の仕切り、彼女のベッドと俺達のベッドを仕切るのに使っていた衝立てを片付ける音だった。

漸く俺も起き上がり伸びをして、彼女の姿を目で追う。

「おはよう、イエライシャ嬢。良く眠れた？」

「ええ、ありがとう。……あら、ラウドラチャクリン殿……弟さんは？」

はにかんだような、けれど素直な口調で返事をくれた彼女は部屋を見回していた。

「少し前に起きて……今頃は馬を見に行っているんじゃないかな。

いつもの事です。……申し訳ないが少し待って下されば俺も支度出来るし、食事は一緒に摂りに行きませんか？」

見知らぬ男達と混じって食事をするのも気後れするだろうと思っ
て、そう声を掛ける。

俺の意図を知ってか知らずか……につこりと彼女が微笑み、カーテンを開けた窓からの朝日にその淡い色の金髪が輝くと、やはり俺の目はその輝きに釘付けになってしまう。

「もう少し切った方が良いかしら？」

「……え？」

何の事か判らず惚けた返事をする、イエライシャは困ったような顔で俺を睨んだ。

宿を出発して大分経った頃、昼の食事を支度する為に街道から少し外れた所で馬を止めた時だった。彼女はマントのフードを被り直す、脇からこぼれた金の髪をその中に押し込む。

「この髪です。ユグドラセアでは当たり前の色なのに、バーラートやこの辺りでは物珍しげに見られたわ。一人で旅に出てすぐにあやうく娼館に売り飛ばされそうになって、その時に大分切ったのだけれど……」

「自分で？」

「ええ、そうよ」

後ろ髪が纏ってないのはそのせいだったのかと納得。よほど慌てて切ったのだろうと推測できるが、それにしても娼家とは……。

「……良く我々を信用して下さったものですね？」

いかにも呆れた、といった俺の声色にイエライシャは困った様に微笑んだ。

「あなた方のタイミングが良すぎたのよ。あの商人達にもう少ししつこく絡まれたら、関所のお役人の所へ逃げ込もうと思って、逃げる準備をしていた所だったのですもの。……渡りに船とはこの事だと思っただわ？それに貴方やラウドラチャクリン殿は、他の人たちと少しだけ雰囲気違って……助けて下さるような気がしたのよ」

「……助ける？何から？」

けれど問い返した俺を何気ないふうにはぐらかし、彼女はそれ以上を追求させなかった。

「その髪を……切ってしまう前はどのくらいの長さだったの？ イェライシャ」

思いきってそう訊ねたのは、その夜、次の町の宿での夕食時だった。

大分遅い時間に宿に着き、皆で食卓を囲んだ時の事だった。一行の男達も彼女の存在に馴染み、イェライシャも警戒を大分緩めた頃だったろうか。

彼女は随分遠い眼差しで天井を見つめ、それから俯いて答えた。

「私のひざ下位かしら。ユグドラセアの女性は皆伸ばした髪を昼間は結い上げて、夜寝る前にはほどいてお下げにするのよ。手間だけれどまあ、最低限のたしなみってところね」

ふと俺の視線に気が付いたのかにつこりして付け加えた。

「まあ……今の長さも楽と言えば楽よ？ 旅の途中で髪に時間はかけられないしね」

俺はそんなに罪悪感いっぱい顔をしていたのかな？ 彼女の答えにそう考えてしまった。

しかし、一方で髪の長さを惜しむ風情を見せた彼女に、何か改めて釈然としないものを感じても居た。

ふと視線を感じ見遣ると、ラウドラチャクリンが意味ありげな微笑みを見せる。

今頃その疑問を抱くのか？……そう言いたげなその微笑みに、正直どう対応すべきなのか迷う。

「どうやら明日のようだな」

翌朝、出発の為馬を見に行ったラウはそう言いながら愛馬ヴァージャの鞍頭に止まった小鳥を見やる。

偵察の為の先遣りに出した男達に預けた連絡用の小鳥だ。

……二日の日程分先に進んでいる彼等は、他の隊商と同行しており、その隊が盗賊に襲われるか、盗賊に関する情報を手にした時点で連絡をしてくる事になっていた。

誰が指示する訳でもないが、小鳥の足に結わえられた通信文を読むラウの元へ隊の主立った者が自然と集まる形になる。

「昨日のうちに同行していた隊が襲われたらしい。……賊の人数が思っていたより多いようだな、気を締めて掛からねばならん。……ファド、お前はあのお嬢さんを守るんだ……判ってるな？」
きっぱりと真正面から言い切られては頷かざるを得ない。

「同じ街道沿いでこうも続けざまに隊商を襲いますかね？」

「根城か縄張りを変えるつもりなのかもしれんな。同じ国境沿いでももう少し北のルートはこの辺りよりも更に王国兵の守りが薄い」
サブリーダーとして隊を纏めているミシエイルの問いにラウドラチャクリンはそう答えてにやりとした。

甘えるようにラウの廻りを飛び回っていた小鳥は、次の用事を言い付けられたのか彼の肩から飛び立って行く。

それを目の隅にとらえながら俺は少し声を大きくしていた。

「実入りのいい場所を手放すつもりなら手加減はしてはこないだろうからな……奴らに最後の一儲けをさせてやる気はない。逆に奴らを潰すつもりで行くぞ、ミシエイル」

「……はい」

いつもながら、のんびりした返事だ。

少し睨んでみたら、穏やかな微笑みを返して来る。もう少し緊張してもいいと思うんだがな？

007 前触れ（後書き）

タイトル記入を忘れましたあああ・・・追加しています。

何気ない様子で立ちながらも、私は離れた所から常に彼等を観察していたわ。

一昨日の雑貨商のような下心のある態度をチラとも見せない彼等に安堵するとともに、彼等が纏う不思議な雰囲気がいまにも気になるからだった。

動転していた事もあり、あの日は細かい事を気にはしていられなかった。それに初対面の男性を正面からじろじろ見つめる勇氣も……殆ど残っていなかったし。

ただ、旅の途中で泊まる宿の都合からという理由で、彼等兄弟との相部屋を希望された時は流石に逡巡したわ。

結局は彼等のその不思議な雰囲気の流れに承諾してしまったのだけだ。

中流商家の息子だと名乗った2人の若い男性は、兄弟だというにはあまりにも似ていなかった。

初めての晩に逗留した宿で、改めて二人をまじまじと見つめて、いいえ、見比べてしまったくらいに。

兄だと名乗り宿場町で私を助けてくれたファドラーン・アルマンスールはとも背の高い男性で、話をしようと思ったらずい上を向くどころか見上げなきゃならない。

けれどただひよろ長いという訳でもなく、背中や肩の厚みや姿勢のよい立ち姿などからしてもバランス良く鍛えられた体つき、という印象だった。そして髪の色は少し明るい赤茶色、瞳の色は黒っぽく見えるものの時々明るい緑色が掠める。

対して、弟だと紹介されたラウドラチャクリン（ちょっと変わった名前だけれど）は、後ろから見たら女性かと思うくらいに長い黒髪を持ち主だった。

この辺りでは長髪の男性は多いらしく、確かに時々腰まである人も見かける。

ただ特異なのは、ラウの前髪が少し染めた様に青みがかった紫色に変色している事だ。

何かの意味があつてそうしているのか、生まれつきなのかは判らないけれど。

……他にも色々とは彼は人目を引く男だった。常にマントのフードを深く被っているのもうなづけるくらいに。

体格はファドラーンより少し小柄、もちろんそれでも決して低い身長ではないわ。

体つきにしても、細身で、でもしなやかな身のこなしから只の優男ではない事が伺える。

そして普段はフードで隠しているその面差しは実に整った、端正なものだった。

無口で取りつく島も無さそうだけれど、それでもきつと彼に群がる女性が多いのだろうな……と考えてしまうくらいに。

実際、宿泊していた宿の下働きの女性などがとても熱心に二人や他の隊商のメンバーを見つめているのに気が付いていたし。

出発前の打ち合わせかしら、2人の廻りには一行のサブリーダーだと紹介されたミシエイルさん、それに何人かの男達が立ち、厳しい表情をラウドラチャクリンに向けている。

その視線に押される風も無く口を開き指示らしいものを出している彼やファドラーンに応じて、彼等は歯切れの良い返事を返すとそれぞれの持ち場に就き……かさばる剣すら扱い慣れた風情で馬へと

跨がった。

気を引き締めた表情でラウドラチャクリンに返事をした男達は、まるで兵士のように。

皆が剣を身に帯びているから余計にそう感じてしまうのかしら。でも、明らかにこの隊商の指揮系統をファドラーンと二分しているらしいラウはその態度からしても、只の弟とは思えないわ。

見せ掛けとは違う何かがあるの、彼等には。

そんな気持ちたちが改めて確信めいて感じられた。

その日は何事もなく過ぎて、私達の一行は無事に街道沿いの次の宿に入る事が出来たわ。

私は緊張してばかりいたのに、廻りの人達はそうでもないみたい。穏やかに食事を済ませて、私にも挨拶をしてくれる隊商の人達。

皆の年齢はファドラーンと似たり寄ったりなのか、比較的若い男性ばかりで構成されているこの隊商。一番年上に見えるのはサブリーダーのミシエイルさんかしら。

逆に一番歳が若く見えるのはヨシユア、と呼ばれていた黒い髪とくるりとした茶色の瞳が印象的な男性かしら。まあ、若いと言っても私よりは年上だと思うわ。

そんな男性ばかりだというのに私の事情を突っ込んで聞いてくる人もいなくて、正直居心地は悪くない。

まだ夜の同室者には慣れないけれど、私はこんな風に穏やかな旅の日々が続くのだと思い込み始めてしまっていたの。

けれど次の日の午後、大きな森を抜けかけた所でその出来事は起こった。

木々の影で薄暗い木立の間を皆が隊列を乱す事なく進んでいく。特に急ぐ風もない馬の速度と、隣に居るファドラーンの特別気負いのない姿に私は随分と警戒を怠っていた。

ふと、空気に何か……唸るような音が加わり、それが弓矢の羽音だと私が理解する前に隊商の男達が幾人かそれぞれ慌てたような声を上げ、馬から落ちた。

「きゃあっ」

どこかぼんやりと他人事の様にその事態を眺めていた私は、突然隣から力強い手でバランスを崩され……鞍から放り出された。

鋭い音と共に今の今迄自分が座っていた鞍に矢が刺さるのを、目の隅で確認しながら地面に叩き付けられる痛みを覚悟する。

昔、乗馬を習い初めてすぐの頃、落馬して強かに体を打ち付けた時の痛みが記憶に蘇ってくる。

しかし今回はその衝撃は無く、むしろ優しく抱きかかえられて私はフアドラインに地面に組み伏せられていた。すぐ隣で彼が、驚きに前足を上げていた私の馬の手綱を取りつつ、いつでも剣を抜けるような姿勢で身を低くするのが目に入る。

飛んで来る矢の到達点を見切り、こんなに素早く動ける男が只の商人だと……？

この光景を目の当たりにして彼等の言い分を信じろと言うの？

現在の状況も忘れて衝動的に問いつめてしまいそうになった……

「あなた方は何者なのか？」と。

それでも……なんとか言葉を飲み込んで口をつぐむ。

私も彼等を偽ってここに居るのだもの、問えた義理ではないはずなのよ。

それにしても野盗の襲撃の直中に居るというのに、不思議と恐怖を感じない。

意外にも冷静に事態の推移を見つめている自分に驚き、肝が据わったものだ……苦笑してしまう。馬達ですら、驚きで前足を上げはするものの暴走する気配もなく、不思議な程落ち着いている。

矢音一つで暴走し、乗り手を放り出すものだわ。馬と言う臆病な動物は。

アルマンスールの馬は馴らされた、訓練された軍馬並みなのではないかしら。

もう何本かの矢音がして、1人2人と馬から落とされた。

心なしか、うめき声が妙にわざとらしく聞こえるのは気のせい？。

009 襲撃と結末

盗賊達は初めに矢で急襲し、次に剣を持った者が旅人を襲うのが常套手段だと聞いた事があったわ。残された荷をそれからゆつくりと漁ろうと言う心づもりなのかしら。

バラバラと足音がして、見回すと三十人近い男達が手近の木々から姿を現わすのが見えた。

馬の陰でファドラインに庇われたままの私は、押さえつけられたような態勢のまま彼等の動きを見ていた。

盗賊が特に慌てている様子もなく余裕の表情のように見えるのは、これがいつも通りの手順と言う訳なのだろう。

しかし、流石に今回ばかりは彼等の思惑通りにはいかなかったみたい。

倒れたアルマンスール家の男達の近くを通り過ぎようとした盗賊の何人かが、口々に悲鳴を上げて転倒する。

応じて立ち上がったアルマンスール家の男達はどこにも負傷した様子が無くて。不意打ちで矢を受け、倒れた様に見せかけていただけだったのだ……とようやく私にも理解できた。この時点で既に四、五人の盗賊が倒されている。

それでも数はまだアルマンスール家の方が劣勢だわ。

しかし、間合いを取ろうとする盗賊達と、幾人かのアルマンスール家の者が剣を交え、さして切り結ぶでもなく相手を倒してゆくのを私は呆氣に取られて見つめていた。

私の傍らに居たファドラインはいつの間にか立ち上がり、周囲を見回しながら幾人かの名を呼び指示を出して行く。それに応じて男達が動き、この襲撃のカタはあっけなく付くと思われた。

一人一人の力の差が歴然としていたのは素人である私にもよく分

かったから。

不意にすぐ隣に居てくれたファドラーンが動いた。
吃驚するくらい素早く剣を抜き……刀身が鞘を抜けるときの音と、
何かがぶつかる音がしたのはほぼ同時、だったと思う。

地面に落ちたのは綺麗に断ち切られた矢で、それが彼を狙ったらしいとようやく気が付いた。

それと同時に前方の木立の中程、大枝から叫び声とともに何か重いもの……すぐ人だと知れた……が枝を騒がせて落ちて来たときはあんまりびっくりしたものだから、握りしめていた手綱を引っ張ってしまいそうになった。

後を追うように落ちてきた弓からすると射手だったらしい男は、ぐったりとしてそのまま動かない。

首の付け根辺りに細身ながら長い刃を持つ小剣を打ち込まれ、出血しながら、しかし既に絶命しているふうだ。

けれど誰がこの小剣を放ったのかしら。

この状況に不意に合点がいった。

「わざと立っていたのね？」

木立に紛れた射手の居所を突き止める為に。……囧として。

ようやく気が付いた私の言葉に彼、ファドラーンはにやりと笑みを返す。

そして私はようやく周りを見回した。

戦いという程規模は大きくなかった事態は既に終わっていた。

飛び散った血潮は全て盗賊のもの……なのよね。

射手を仕留めた事で弓矢の心配をしなくても良くなったからか、ファドラーンは私に手を差し伸べて立たせてくれたのに、情けない事に私は足が震えてしまって自分だけでは立っていられなかった。

彼にしがみつく訳にもいけないから、馬の手綱を頼りにして、馬に縋り付いて廻りを見渡す事にしたの。

独特の血の匂いに膝から力が抜けそうになるのを、やはり馬の手綱でごまかす。

半分以上の野盗が切り伏せられ、その内の命永らえた者は道の一角に狩りたてられ、縄を打たれている。それらの動きすら手慣れている、手際の良過ぎるという感覚が拭えない。

それでも彼は暫く私の隣りに居てくれたわ。

大体の成り行きが片付いたと思われた頃ようやくファドラーンは私の側を離れ、木の根元で息絶えている射手の首から小剣を抜き取ると、刃先の血糊を死体の衣服で拭い柄を差し出した。

ラウドラチャクリンに向かって。

「相変わらずの腕だな」

褒めているのか、呆れているのか判らないファドラーンの言葉には直接答えず、受け取った刃を自分のブーツに隠していた鞆に納めたラウドラチャクリンにはやりと笑みを返し、自分の馬の元に戻ってゆく。

何をするのかしらと見つめていたら、今の騒ぎで傷付いては居ないかと馬の身体を熱心に検分している。……それも呆れる程の熱心さで。

私の心を読んだかの様に、かすかに笑いを抑えたファドラーンの声が隣の上から降って来た。

「……馬にあれだけこだわる男は女性にもうるさい好みがあるらしいが、惚れたらそりゃあ尽くすだろうってのが我々の意見でね。あいつがどんな女性に骨抜きにされるかを見届けるのが目下の俺の最大の楽しみだな」

探る様に見上げると、優しい笑顔に出会った。こんな修羅場のまっただ中だと言うのに、我知らず頬が上気して、気まずさに慌てて俯く。

それに気付いているのか居ないのか、隊の男達に指示を出す彼の声が頭の上で響いた。

「負傷した者は癒しが済んだら出発の支度を。次の街に着き次第、王国の兵に出てもらわねばならんからな……なるべく急いで」

……癒し？

聞き慣れない言葉の意味が理解出来ず、きょとんとしていた私には構わず、幾人かがラウドラチャクリンの元に集まってゆく。それぞれが衣服の腕や肩を捲り上げているのからすると、どうやら僅かだが打ち身や切り傷をこしらえた者達らしかった。

改めて倒木に腰を下ろしたラウドラチャクリンの周りに座り込んだ彼等の、何か不思議なその情景に惹かれたのか、或いは恐いもの見たさの好奇心からか……私もその傍らに近寄ってみる。

そしてそこで見たものは今迄の自分の生活、或いは文化には無いものだった。

目の前に差し出される……鮮やかな血糊が痛々しかった傷口が、かざされたラウドラチャクリンの手のひらの下でゆっくりとだが目立たぬ様になり、血が止まり切らぬ様に見えたその場所はついには、うつすらと赤みが残るだけになった。

自分の故国ユグドラセアの古い伝承や作り話（だと思われているもの）や、それらの話に残る呪い（まじない）の老婆、魔女として迫害された者達、或いは闇の神々を奉じると言う古の神官達……。そんな日の下では口にするのを憚られるような事ばかりが頭の中で渦巻き、当然の様にその業を施すラウドラチャクリンと、同様に当然と言う顔でそれを受ける男達が信じられなかった。

それとも……にわかに遠い存在の様に感じられた、というのが正しいのだろうか。

あまりに迷信や言い伝えなどには無頓着な様に見える彼等に、そんな事にこだわっている自分の方が小さな存在だと卑屈になってしまいそうになる。

「イエライシャ？」

黙って彼等を見下ろしていた私は、不意にラウドラチャクリンに問われ、その声で我を取り戻した。

「自分の見たものが信じられぬ……という顔だね。ユグドラセアの人々はこう言う力を持つ者を遠い昔に拒否したのだよ。今となっては昔語りに残るだけだろう？ 忌むべき者、……汚らしい者としてね。けれど、まだ……」

そこで言葉を切り私を見上げたラウドラチャクリンと目が合って、私はその青い瞳に今更ながらに驚いていた。

彼の顔立ちはこの辺りの人々とさして変わらぬだろうと思われるのに（勿論かなり整った：美貌と言っても良い程の顔立ちなのだが）瞳の色は深い深い空の青だ。

昼間の明るくさわやかな青ではなく、雲一つない夕暮れの、宵闇に混じる直前の蒼。

底知れぬ淵の中を覗き込んでしまったような……とても深く底の見えぬその瞳に、瞬間、鳥肌の立つような恐怖を覚えてしまった。

「……この辺りではまだ残っているのだよ、こう言う力を持つ者がね」

「そういう話は……噂には聞いていましたわ。伝説の王国の事も」
恐怖の余韻を引きずり何故かそう口にしてしまった。

……しまったと思ったけれど、もう遅いわね。

「……フィルダウス？」

先程覚えたばかりの肌が粟立つような恐怖を表には出すまいとしたものの、ラウドラチャクリンがその名を口にした瞬間、少し怖じ気づいた様に私は周りを見回していた。

誰も聞いていないと確かめる様に。

「……かの王国の者は不思議の力を持ち、不老不死を得たという……古くからこの辺りの諸国に囁かれるウワサだな。新興の大国クアーナなどはその所在を得んとして年に幾人もの偵察者、探索者を送り出しているとか。もっともその多くがこの険しい山々に吞まれ、生きては還らぬと聞くが」

私の態度には構わぬふうに、いつもの声の調子でラウドラチャクリンはそう続ける。

それとも言外にはのめかしたのだろうか、普通の人々には決して見つけられはせぬ、と。

大国の命を請けた剛の者にすら見つけられぬものが、お前如き娘に見つけられる訳が無い、と取れなくもないその口調にハツとした。

知っていると言うのだろうか、彼は。

私の望みを？

何故？

それとも私の……思い過ごしだろうか。

「そうだね、そんな伝説のような国があれば平穩に暮らせるかもしれないな。……だがこの力は人々、何の力も持たぬ者達とは相容れぬものだ。脅威ですら有るらしいから……いずれはこの辺りからわたしのような力を持つ者は居なくなるだろうね。そして昔語りの中にその姿を留めるのみとなるのかな……君のユグドラセアのように自分の事情をあまり探られたくはなくて気がそぞろになりかけていた私に、そうラウドラチャクリンは言葉をつなぐ。

少しばかり……寂しげな声だとその時思った。

いつもフードを目深く被り、口数も私の知る限りではあまり多くない男性の筈なのに、今は随分と饒舌だわ。

何かを伝えたいの？……私に？

そう思い付き見つめ返したが、私の問うような眼差しに彼は答えず腰掛けていた倒木から立ち上がり歩み去ろうとする。

けれど、ふと思い付いたと言う様に振り返り、その瞳が私を見つめた。

「……何処か怪我でもしたら遠慮なくわたしの所へ来れば良い」

「ありがとう、そうするわ」

拒絶ではない私の口調に安堵したかの様に彼は去り、見ている間に軽やかな身のこなしで馬上の人となった。

他の者達も順次馬に跨がり始める。

ようやく私も遅れては大変だとばかり借り物の馬に近付くと、待っていたかのように馬に乗るのを助けてくれながら……ファドラーンが何かを訊ねて来た。

「何……?」

良く聞き取れなくて問い返した私にフアドラーンは、言いにくそうにしかも小さな声で繰り返す。

「……ラウが気になるの?」

はじめは彼が何のことを言っているのか判らなかった。

馬に跨がると目線も高くなるから、いつもは見上げてばかりのフアドラーンを見下ろすような形になる。

初めて見る少し上気した少年のような頬とその瞳。

意外な表情だったけれど、何か……彼の気持ちの動きが何となく理解できた私はそれに応じて妙に赤らんでしまった自分の頬を見られたくなくて、少し顔を彼から逸らした。

私の中では浮ついたところのない真面目な青年というイメージが定着しつつあった彼が、なぜ今このタイミングでこんな表情を見せるの。

「?あるわ。けれど……誤解しないでね? あんな力を持つ人を見たのは初めてだったからよ。それに時々、私は彼が怖い。ご免なさい、貴男の弟さんなのに……」

申し訳ない気持ちでそう付け足して、ようやくフアドラーンの方を見返す。頬は少し赤いけれど、誤解の余地がないように言葉は選んだつもりだった。

「い、いやいいんだ。奴は時々……ぶっきらぼうになるからかな?」
妙に上ずった声でフアドラーンは答え、それでもいつも通りの身のこなしで自分の馬へと跨がった。自分では気付いていないのだろうが、まるで私の国で昔一度だけ見た事のある……王室の近衛の若い将校のようだわ。

背筋をピンと伸ばした……惚れ惚れするような男ぶり。

もはや彼等がただの商人だなどとは、私は信じていなかった。

しかし人目を避ける必要からの、或いは偽る為の茶番なのなら、それらに気付いた事は態度に表すまいと、私は当分の間彼等の偽装に騙されたままにしておく事に決めたの。

それに彼等が何者で何の為にこんな偽装をしているのかは、依然として私には判っていないのだし。

何より私自身が最初から彼等を騙し続けているのだから。

自分達の偽装を守る為なら、私のような厄介者には関わらずに居た方が安全で、且つ確実なのに。

それでも彼等は私を助けてくれた。

……だから、もう少し一緒に行動しようと思ったただけだわ。

それにラウドラチャクリンやファドラーンの素性も……何となく気になるじゃない。

011 波紋

少しばかり足早にアルマンスール家の隊商は、その日の目的地である小さな町へと急いだ。

その町へ入って最初に向かったのはイクシールの王国兵の詰め所だという建物。

しかし、小さなその詰め所には五、六人の兵が常駐しているだけ。以前から頻繁に盗賊が出ると判っている地域だというのに、その規模の小ささには拍子抜けしてしまう程だわ。

ファドラーンが一行を代表して……表向き一家の長男として……彼等に賊の報告をし、捕らえた者達を幾人かその場に残して来た旨を告げる。

しかし取り調べの為の人員は、更に次の町へ行かねば手配出来ない、というあまり緊迫感の無い彼等の対応に、事情に疎い私にもようやくこの辺りで盗賊がのさばる理由が判ったような気がした。

そりゃ勿論、彼等にも言い分はあるらしかったのだが。

まだ昨日も別の隊商が襲われており、そちらの対応に人員を割いているから……と彼等は言葉を濁す。

隊商が襲われる前に盗賊の類いを捕らえる、もしくは取り締まる気が無いと言うのだろうか、つまりは。

自らの命が惜しいのかそれともただの怠慢か、私はそう勝手な推測をしつつファドラーンの陰に潜む様に立ち、夕日に照らされてゆく町の様子などを観察していた。

昼時を過ぎた辺りからそよぎはじめた風が随分強くなり、時々マントのフードがずり落ちそうになる。

どうやらこの辺りの風土の特徴らしい。

旅に出てから今迄の経験であまりこの顔立ちと髪の色が人目に付

いてはいけないと痛い程学んでいた私は、長身で体格の良いフアドラインの後ろに何気なく立つと、上手い事にとっても目立たない事に気付いていた。

そして時々、更に人目が多い所ではウカアルマンスール家の誰彼かがその脇に付き、私を隠してくれている事が有るのにも……。

正直言って、彼等に隠し事をしたままの現状がだんだん辛くなってきた。

商人という役柄からすれば当然なのだが、意外と弁の立つフアドラインの説得とその言葉の中のわずかな脅しに、一応詰め所の責任者であるらしい小太りで初老の王国兵はなんとか、というよりはしぶと言った顔で街道警備の為の大隊の出動を要請する為の伝令を出してくれる事になった。

詰所内で一番若い者が次の朝早馬で出ると決まる。

その決定を受けてようやく、アルマンスール家の隊商もその町の宿に落ち着く事が出来たのだけだ。

「ね、ねえ……早くさっきの盗賊を捕らえる為の兵隊を連れて来て貰わなくてはならないのではありませんか？彼等は縛られたままあそこ……森の中に放置されているのよ？」

あたりは既に黄昏の色を示しはじめているし、地元の地理には詳しい筈の彼等王国兵の対応には実に釈然としないものを感じ、宿の談話室の片隅で私はそう尋ねずには居られなかった。

夜になれば森の木立の中とは言え冷え込むだろうし、辺境の森の事だもの、どんな獣が出てくるか知れたものではないと心配になっていた。

自分達を襲った盗賊達だというのに。

「おやおや、優しいお嬢さんだね。だが大丈夫だよ、とくに彼等は逃げおおせた仲間の手によってか、自力かで脱出している事だろう。彼等への縛めはさほどきつくはしていなかった筈だ」

私の言葉に驚くでも無く、侮る風も無くファドラーンはそう応じてサブリーダーのミシエイルを見た。

視線を受けた彼も同じテーブルの向い側に座って、夕食の後の杯を傾けつつにやりと笑みを返してみせる。

その隣ではラウドラチャクリンがいつものように無口なまま、やはり酒杯を傾けていたわ。

「……だって、逃げ延びた彼等が仕返しに来たら？」

「来ないとは思うが……その時は当然、手加減はしないよ」

私が怖じ気づいている……と取ったのかファドラーンは至って穏やかな口調で、しかしきっぱりと言い切った。

迷いの無いその口調に、私は今日の昼間に見たばかりの彼等の手際を思い浮かべる。

確かにその言葉が確かな実績というのか、経験に裏打ちされたものだと言うのは理解できるわ。

でも私が気にしている事とは少し違うの。

ミシエイルが見兼ねた様に、苦笑しつつ口を開く。

「逃げおおせた事がただの幸運ではないという事を……彼等も縄の締め甘さで……我々の意図を理解しているでしょう。わざと逃がしてやっているのだとね。あのまま、夜をあそこで迎えれば確かに獣の餌食……そして本当に王国の兵に捕らえられてしまえば、自分達と共謀して甘い汁を吸っていたこの町の兵ともども処断される……とね」

「この町の？」

「？以前からそう囁かれている。だが彼等のような雑魚は放っておいても大した事は無いんだ。……ここらで大捕り物になっ

に時間を取られたり、我々……アルマンスールの名が変に町の人々の記憶に残っても困るからね」

思いがけない話に驚いたふうの私に、ミシェイルの説明を補う様にファドラーンが続けた。

けれど、私は彼等の説明に引っかかるものを感じてしまった。

「……自分達が安全ならいいの？他の旅人の事は考えないの？生き残りの盗賊はまた別の人を襲うかもしれないじゃない」

「自衛の為の手段なら幾つも有る。時間も金もかかるものだが、命を守る為には相応の代償だろう。我々は……この国の世直しの旅をしている訳じゃないんだ。それをすべきなのはこの王国の主たる王とその軍隊か、治安維持機構だろう。……もっとも大して機能しているとは言えんがね、代替わりしたばかりの若い国王だから無理も無い。まずは中央を治めるので手いっぱいだろう」

むきになった私を宥めるような口調でファドラーンは続ける。

私に向けられたものでは無い、幾らかの皮肉を含んだ言葉の意味は理解出来たわ。

しかし、自分達の安全のみを確保すれば良い、ととれる彼等の言葉にやはり釈然としないの。

012 接触

そのまま私は食事を済ませ、口をつぐんだまま彼等とのテーブルを離れた。

あらかじめ、心付けで宿の女主人に湯殿を使わせてもらう事にしていたからだけれど。

久しぶりの入浴に温かなさっぱりした気持ちで共用の寝室へと戻る。

扉を開け室内を見回すと、自分のベッドに腰掛けて何かの書き付けをチェックしているらしいフアドラーンが居ただけだった。

室内に足を踏み入れ、自分の荷の片づけをしながらも2人黙ったままと言うの妙に気不味くて、ようやく私から口を開いた。

「ラウ殿は……また厩なの？」

「……いや、外で水垢離を取ってる」

一緒に行動するようになって、私にもこの隊商の皆の大体の行動パターンが判るようになっていたが、心なしか硬い声とその内容に思わずフアドラーンを見つめた。

「そんな……こんなに冷え込んでいるのに？」

私がさっき湯を使わせてもらったのも身ぎれいにしたいのと同時に、冷えた体を温めたかったからだだったのに。

「大丈夫だよ、俺達はもっと寒くても平気なんだ。それにあいつは……気が滅入るとああ言う無茶をするんだ、時々ね」

「……気が滅入る？」

案じた声を出した私に少しだけ声は優しくなったが、しかし真面目な表情で彼は私を見つめていた。

「君が……正義感の強い、芯のまつすぐな女性だという事は判つて
る。けれど我々と同行している間だけでいいんだ、さっきのような
言は慎んでくれないか？」

突然そう切り出されて私の表情が強張るのに気が付いたのかしら、
緊張したように少しだけ彼の瞳が揺らぐ。

「思った事を信念として口に出来る勇氣も俺は好きだが……さっき
も言ったように、我々は全ての人々に尽くす為に在るんじゃない。
それだけの力も無いしね。初めは小さな事に見えても、迂闊に手出
しすればいずれは多くの責任で身動き出来なくなってしまうだろう。
それを避けたくて、こんな形で動いているんだ。君の正義感は、ラ
ウには堪えるんだよ。こんな世の中の状態に対処したくても手を出
せない、自分の……或いは我々の無力さを声高になじられるような
気持ちだろう……特に今夜はね」

手にしていた書き付けをサイドテーブルへと置いて、努めて落ち
着いた声でそう話す彼に、私は見えない枷で胸を締め付けられたよ
うな気がした。

私の……自分の言動が知らずに誰かを傷つけている、そんな自覚
は今迄に無かった訳ではないわ、確かに。

しかし、やるせない気持ちと同時に反論が口をついた。

「い、一般論でしょう？何故彼が気に病む必要があるの」

「君も見ただろう？彼や、ああいう力を持つ者は我々よりも感受性
が強いらしいんだ。……人の苦しみを我が事のように感じてしまう時
もあるらしい。だから氣心の知れない者の言葉に傷付く事も多々あ
るんだ。……済まないとは思ふ。君には腑に落ちない話だとは思
うが、今少し心に留めておいてくれないか？」

確かに腑に落ちない、納得しかねる話だわ。

だが……真剣な表情で私を見つめる彼からは、苛立ちや怒りなど

の負の感情は感じられなかった。

ただ弟の事を案じている様子が見て取れ、私だって意地を張る必要も無いのだと素直に思えたのだ。

尤も、もし彼が高飛車に私を非難するような態度だったら、私も応じて喧嘩腰になっていただろうけれど。

「……判ったわ、言葉には気をつけます」

「ありがとう」

素直にそう答えた私に、女のヒステリーを覚悟してでも居たのかファドラーンは安堵する様に肩の力を抜いて、リラックスしたような風情を見せる。

その様子に、私は思わず訊ねてしまっていた。

……いいえ、付け足したというべきかしら。

「あの……ファドラーン？ 貴男も……私の言った事で傷付いたの？ もしもそうなのなら……ごめんなさい。あなた方の事を良く知りもしないで批判的な事を言った私が悪かったわ。これからは気を付けるから……」

どんだん声が小さくなってしまいう私にようやくファドラーンは笑った。

明るくてよく通るその声に、なんだか私は救われたような気がしたわ。

「生憎と、あいつと違って俺は図太い男だから気にもしないよ。君の言う事にも一理認めない訳でもないんだ。だが……今の我々は名を揚げる為に旅をしている訳じゃないし、俺個人としてはラウの心理状態に気を遣ってやりたい。だから君が理解してくれて本当に嬉しいよ、……ありがとう」

そう言うと彼は今迄腰を下ろしていた自分のベッドから立ち上がり、部屋を横切ると私の前に立ち……右手を差し出して来た。

その行動を……握手を求められているのだと……単純に思った私

は、何気なく右手を差し出してそれに応えようとした。

だのに、その手を優しく手のひらに受けたファドラーンがしたのは私の想像していた事では無かったの。

身を屈め、手の甲に口付けを落とす彼を呆氣に取られて見つめていたわ。

暖かくて、柔らかな彼の唇が触れた手の甲から、痺れるような感覚が私の頭に届く。

おとぎ話の騎士が姫君にするような優雅なその仕草に、頬が上気して、心臓が飛び跳ねる程ドキドキしてしまった。どうしよう、改めて思った。

こんな得体の知れないひとに。……本当にどうしよう。

まだ知り合って何日も経っていない、名前（本名かどうか）も怪しい）しか知らないひとなのに……。

息苦しいような……特別な感情……が胸の内に生まれている事に自分でも戸惑ってしまった。半年以上も同じ館で起居していたあの人物には、そんな想いすら抱けなかったというのに。

そんな私の心の動きには気付いてはいないのだろう、ファドラーンは背筋を伸ばすと頬を染めてしまった私を見下ろし、本当に晴れやかな笑顔を見せてくれた。

その表情にまた一段と赤くなってしまいそうで。

「も、もう……今日は疲れたから……お、おやすみなさい！」

上擦った声で、私は彼に背を向けると、彼等とのベッドを仕切つてある衝立ての陰に隠れる様に飛び込んだ。

アルマンスール家の隊商と同行する前の一人で旅をしていた頃は、

宿を取っても安心して眠る事はなかなか出来なかった。

それは孤独故でもあり、この先への不安でもあったのだけれど……。

でも今は同室の誰かが居る。

それがよく知らない男性たちだというのに奇妙な安堵感があり、眠れぬ夜など無かったのだが、今夜はファドラーンの所作のせいで鼓動がやけに大きく感じられて……眠れないような気がする。

それでも、毛布に身を包み……心の中で明日はラウドラチャクリンにきちんと謝ろうと決めて……じきに程良い暖かさに誘われて眠ってしまった。

013 暴露(前書き)

013 暴露

次の朝、前の晩眠る時に決めた事をなんとか実行しようと思い、ラウドラチャクリンが一人で居る頃、処を掴まえようにも、何処に居て何をしているのか……。

見つけられないまま出発となってしまうた。

昼の間と云えば馬の上だし、常に隊商の誰かと一緒だったりして話しかけるチャンスはなかなか出来ず、ようやく声を掛ける事が出来たのは夕方、次にたどり着いた町の宿の厩だった。

「ラウ……あの、少し話をしてもいい？」

「どうかしたの？」

愛馬……ヴァージャというらしい……の首に手をのせて一人佇んでいたラウドラチャクリンは私の声に顔を上げた。

そして何気無いいつもの声と表情で返事をくれる。

前の晩ファドラーンに指摘されていなければ、傷付いたそぶりを見せない彼に、知らずとは言え無遠慮な言動で私は彼を重ねて傷つけてしまっていたかもしれない。

それに敏感に気付いていたのか、姿形は似ていないし、言動には妙なぎこちなさが感じられるものの、流石にファドラーンと彼は兄弟を名乗っているだけはあるなと思わせられて。

「イエライシャ？」

ちよつと気拙い思いで言い淀んだ私をラウドラチャクリンが促す。

「あの……昨夜……夕食の時の話で……私、皆の気持ちも考えないで勝手な事ばかり言って……あなたにも嫌な思いをさせたと思うの。」

ごめんなさい。それを言いたくて」

言おうと用意していた言葉を立て続けに口にした後、反応を伺う様にラウドラチャクリンを見上げる。

不思議そうな……というのか、おや？という表情の彼に、私の言いたかった事がきちんと伝わっているのかと不安になった。

「私の独り善がりな考えで、貴男を不快にさせるつもりは無かったの。……ご免なさい。これからは気をつけるわ」

「誰にでも独自の考え方があって当然だろう？……それに同行させてもらっているからって変に遠慮する必要も無いし、大丈夫だよ。……それとも、わたしはそんなに脆い人間に見えるのかな……？」

重ねて口を開いた私に、何の事か思い当たったのかラウドラチャクリンは優しい声で返事をくれた。

普段の落ち着き払って今ひとつ感情の読み取りにくい彼からは、想像出来ないくらいに優しい声でつい……ため息が出そうになった。

こんな声で囁かれたら……そうあの青い瞳の昏い底なしの恐怖に気付いて居なかったなら、礼儀正しく接してくれるファドラーンに惹かれるよりも前に、私はこの目の前の美しい男性に夢中になってしまっていたかもしれないわ。

そう考えて昨日のファドラーンが見せた不思議な表情を理解出来た。

多分ファドラーンは、今迄にこの『弟』に夢中になってしまった娘達を多く見て来たのだわ。

そして私がラウドラチャクリンに惹かれてしまうのではないかと危惧したのかしら。

けれど、ラウドラチャクリンの瞳の深さ……その昏さに気付けないような娘達と私を一緒にしたのね、と心の隅で少し悔しい気持ち

になった。

「でも……昨夜だって、あんなに冷え込んでいた夜だったのに外で水垢離を取るなんて、……無茶よ。風邪をひくか身体を壊すわ?」

そう重ねた私の言葉に彼はにやりと笑みを浮かべた。

人の悪い笑み。でも本当の所はわざとそう見せているような気がするの。

「ファドラーンに何か吹き込まれたね? あいつは心配性で……わたしが他意も無く何かするのをも何か深い訳があると、思い込んでいるふうがあるからね。水垢離の件は……昨日は賊の襲撃やら何やら騒がしかったうえに、血なまぐさい日だったから、単純に浄めたかっただけだよ。血の匂いなど何時迄も纏っていたくはないだろう?」

肩をすくめ一度は馬に向き直ったラウドラチャクリンだったが、ふと振り返って言葉を続けた。

「ファドラーンは……君の同行を認めたのが自分だから、という気負いが大きいようだね。もしも奴が君に厳しい事を言ったのなら……わたしの方こそ申し訳ない事をしたね、許してほしい」

「とんでもないわ? 彼は、私が自分を見つめ直す為のチャンスを与えたの。同行を許して下さった事も、今回の事も、感謝こそすれ……貴方にも謝罪を頂く謂れの無い事だわ」

自らのプライドにこだわらない……潔いとさえ言えるラウドラチャクリンの言葉に、慌てて言葉を紡ぎながらようやく思い当たった。善意からの彼等の行為にずいぶん自分が図に乗ってしまったのだと。

私が黙ってしまったのを横目で見て、ラウドラチャクリンはもう

一度こちらへと向き直った。

「君が今日……妙にわたしの方を伺っているから、どうしたのかと思っていた。てっきり君が我々に隠している事を明かしてくれる気になったのかと当たりを付けていたんだが……？ 第三王妃とは言え、地元の人々から見れば最高に良い条件の、いわゆる玉の輿から逃げ出して姿を晦ましたのだから……相当な理由があると思っていたのだが、……シュヴァーゼの未来の王妃さま？」

探るようにも感じられるラウドラチャクリンの言葉。

すうっと……肝が冷え、足下が覚束無いような気がして、よろめきそうになった。

013 暴露（後書き）

視点がイエライシャ嬢視点のままですが・・・。
後もう少し、です。

「……シュヴァーゼの未来の王妃さま？」

まさか、この期に及んでその名を聞くとは思っても居なくて、油断していたのね。

「知って……いた……の？もしかしたら私が、追われているかもしれないって事も？」

声がかすれてしまうのは緊張の所為かしら。

「……わたしはね。隊の中にはシュヴァーゼ藩王家に詳しい者も居るから……気付いている者も居るかもしれないが、リーダーであるファドラーンが同行を許可した上は余計な事は言わんよ」

ラウドラチャクリンのこの言葉で私はサブリーダーのミシエイルさんを思い浮かべていた。

確かに、彼はよく私を隠す盾として立っていてくれる事があったわ。

ふざけているのでも、脅すようでもない、いつも通りの穏やかなラウドラチャクリンの声に思わず聞き返していた。

「じゃあ……ファドラーン……も？」

なんとか絞り出した声も、情けない事に語尾が震えている。

しかし、彼は私の問いにははっきりした答えを返してはくれなかった。むしろ彼も首を傾げているよう。

「奴は……どうかな、かなり世俗っぽい噂には疎いんだろうな。気付いていないかもしれない、本当はそれほど鈍い男ではないんだが」

何だかいまいちフォローになっていない、他人行儀なラウドラチャクリンの物言いに引つかかるものを感じながら、ファドラーンを騙しているという現実に変更して心が痛んだ。

私の心を読んだかの様にラウドラチャクリンが言葉を続ける。

「君が訳ありなのは初めから承知の上だよ、我々はね。昨日ファドが言っていたように、あまり表に出たくないのは君と同じだし、君を人質のように扱ってシュヴァーゼの藩王に何か要求しようなんて事も思っては居ないよ」

面白がっているような口調に、流石に睨み付けてしまう。

けれど彼は急に真面目な顔付きになった。

「ファドラーンが何も知らなかったとしても、奴は自分自身のモラルに従って君をこの隊に加えたんだ。だから君が今までの事を必要以上に気に病む必要は無いだろう……が、聞かせてくれないか？何故藩王の妃になる前に逃げ出したりしたのか。噂では恋人と駆け落ちしたのだの……随分勝手な事が言われているようだが……本当の所は？」

「私達親子はシュヴァーゼ藩王家の……あの方の館に半年以上客として、父と姉と共に滞在していたのよ。最初あの方は姉をお望みになったのだけれど、姉には既にお披露目も済ませた婚約者がユグドラセアに居たの。それを知ったあの男は私を見ながら言ったのよ……その顔立ちと髪の色が同じなら構わんだろう……って。」

あの時の背筋が寒くなる程の嫌悪感を思い出して、視線をおとした。怖くて声が震えてしまうのを……どうしても止められない。

「私を姉の身代わりに……？冗談じゃないわ、宮殿中の女性全てに手を付けているような……あんな太って醜悪な男。父上様も商売上の付き合いは兎も角、彼と血縁を結ぶ気はさらさら無くて……私に通行証や身分証、それに通貨屋の口座証すら用意してくれたの。出

来るならこつそりユグドラセアに戻って、親類に匿ってもらう様にと。そう言って私を逃がして下さったの」

「では……何故ユグドラセアに戻らなかった？報酬次第では本国へ連れて行ってくれる船だってあっただろう？」

バーラートのシュヴァーゼ領は海に面した港町で、ユグドラセアや他の国々との交易で栄えている。その港に集まる諸国の珍しい品物がシュヴァーゼの繁栄の源だった。

そこから船に乗れば確かに故国へは帰る事が出来る……。

案ずるような、それでいて咎める口調に、ラウドラチャクリンの顔に視線を戻した。

青い瞳には確かに同情ともとれる表情が浮かんでいるのだけれど……。

その言葉に私は皮肉な微笑みを浮かべて、彼を見上げた。

「それは父と同じ殿方の意見ね。縁談から逃げて来た女なんて……国に戻っても厄介者として扱われるだけよ？あらぬ噂を立てられるだけ。……父の親類はお金やいろんなものに汚い人たちばかりだから、何故金持ちの王妃になれるのにそうしなかった……って私を責めるわ。だから逃がしてくれた父上様には感謝しているけど……戻らなくてもいい方法を探そうと思ったのよ」

「……それでフィルダウスを……か？」

消えかかった私の語尾にラウドラチャクリンの声が重なり、驚いて彼を見つめ直した。

やはりこの人は全てを察していたのだ、だとしたら今更隠しても意味は無いだろうと覚悟を決めた。

それに、この人の口調には伝説に縊ろうとしていた私を侮るような気配も無いのが印象的だわ。

「ええ、そうね……そんな事も考えたわ。伝えられているように何でも出来る人たちのなら……私を助けてくれるかもしれないって思いもしたわ。でもね、本気でそんなありもしない伝説を探すつもりじゃなかったの。何か……確かな目的が無ければ、バーラートの汚い街角の、あの混沌とした世界に吞まれてしまいそうで、怖かったのね。だから……当てる無い旅だなんて思いたくなくて……伝説に惹かれる様に、こっちの方へと流れて来たのよ」

開き直ったかの様に全てを口にし終えると、不思議に落ち着いていた。そして、視線を向けたラウドラチャクリンも何か不思議な表情を見せている。

空を見つめるように視線を彷徨わせ、独り言の様に私の言葉を繰り返して。

「ありもしない伝説……か、そんな探し方もあるのだな」

「そんなに……変かしら？」

そう聞き返すとこれまでとは何処か違う、むしろ初めて見るような優しい笑みで彼は首を振った

「……いや。いつか、君からここでの話をファドに話してやってくれないか？ どうやら……奴はまだ気付いてないような気がするからね」

「ええ、判ったわ。貴方は……まだ私の同行を認めてくれるのね？」

「言ったろう？ 君が訳ありなのは承知の上だよ」

心配げに訊ねた私にラウドラチャクリンは、変わらず優しい笑みで答えをくれる。

その笑みが、彼が身内だと認めた人間にしか見せないものだを知ったのはその後……本当に随分経ってからだった。

015 疑義

それから数日……通過する街々が日々大きくなってゆくを見て、この王国……イクシールの中心部へと近付きつつあるのを実感していた私にファドラーンが言った。

「今夜泊まる街はこの国でも第二の都市なんだ。首都のツァイデアル迄は後二日だが……見物したければ一日ゆっくりして行かないか？」

予定の行程をこなそうと規則正しい歩調で歩む馬の背から、のんびりした口調で話す相手を私は軽く横目で睨んでみせる。

「……私を物見遊山の御気楽な旅行者だと決めつけているのね。首都で二日居ると言ったのは貴方でしょ？首都のツァイデアルを案内して下されば、私は充分よ。それに……ラウは早くルクアディナルファに行きたがっておられるのでしょうか？私の身勝手な理由で行程を変更させる気はないわよ？」

そう言って、少し後ろで同じく馬に揺られたままのラウドラチャクリンを伺って見せた。彼は私達の会話に気付いていないのだろう、隣に並んだ男と世間話のような風情で言葉を交わしている。

ファドラーンが妙な顔つきになって私を見ているのに気付いたのは、そのラウドラチャクリンを見ていた瞳をファドラーンに戻した時だった。

「……妬いた？」

探るようでくすぐったいファドラーンの視線に、少しばかりからかってみたくなって……咄嗟にだけれどにっこりととびきりの笑顔を向けてみる。

「なっ……！べ、別にっ」

頬を上気させつつも慌てていつもの表情に戻ったファドラーンは、

それでもちらちらと……時折私の方へと視線を向けてくる。

ラウドラチャクリンに私の隠し事を看破された夜に染めた髪が、マントのフードから覗いているのを感じて自分でも何となくその違和感にため息をついてしまった。

あの夜、入浴のついでに思い切って染めて……ずっと黒っぽく色が変わった私の髪を見たときの、何とも言えない残念そうな表情になったファドラーンの反応が面白かったのを思い出した。

……彼が髪の色だけで私に惹かれていたのなら、悔しいけれど。それでもこの隊商の皆の反応、対応は以前と変わらなかった。その乱れの無い行動が却って彼等の素性を臭わせる。

只の商人では無い、そんなことはとっくに判ってる。

……では一体？

剣の扱いに慣れ、集団でも乱れの無いその動き。何処かの私兵か、軍……？

その考えに至ってぎくりとする一方、それも今ひとつ違うような気がした。

仮にこの隊の指揮官、と言うならファドラーンかその弟を名乗るラウドラチャクリンなのだろうが、2人には私の記憶にあるような、或いは想像しているような軍人らしさは無い。

戦闘経験が無い訳ではないのは先日の野盗の襲撃で判ってはいるけれど、正規の軍人ではないのかしら。

馬の背に揺られながらつらつらとそんな事ばかりを考えている間に、その日の目的地であるイクシル第二の都市ジリに到着した。

定宿にしていると言う古い構えの中流の宿に入ったのは日が沈んで大分経った頃で、食堂も兼ねる社交室では食事をする者よりも酒の入った杯を掲げる者の方が多く見受けられる。

早速商家としての手配に掛かるファドラーンとミシェイルに感心しつつ、勧められて私は他の仲間達と先に食事を済ませることにした。

結局、このジリの街では、この一晚と次の日の午前中滞在する事になったらしい。

この地で受け渡しの手配のある荷が、まだ届いていなかったのだとか。

宿で商談の相手待つかと言うラウドラチャクリンを残し、次の日ファドラーンは私をジリの街の観光に連れ出してくれた。

本当は商談の相手と内容にとっても興味があつたのだけれど、あまり首を突っ込んで迷惑になってもいけないし、とファドラーンの誘いに乗る事したの。

このイクシールという王国は現在の私の故国の様な統一された様式の宗教を持たず、地域、部族、その他季節に拠って違う神を奉るのだと言う。

一見古風な、そして生活に密着した形態の世界観の中で生活している国のようなね。

観光のついででも兼ねて、この地の数ある寺院の中の一つに向かうとファドラーンは言った。

ちよつと彼等には不似合いな気がして、そう言うとな彼はにやりと笑う。

「商人たる者、金儲けには敏感にならなきゃならん。とは親父の言だが、ここイクシールには金儲けの神様ってのがあつたんだよ」

その言葉につられて大分私も笑ってしまったが、その寺院の門を潜る時には2人ともが神妙な表情を装って、一般の参拝者へと紛れ込んだ。

堂に入った仕草で礼拝をするファドラーンに倣い、見よう見まねでその場をしのぐ。

その後はその寺院の境内にある茶店で少し休憩を取る事にしたのだけだ。

「おや、ファド！久しぶりだなあ、何だようやく嫁さん貰ったのか？」

知り合いらしいその主人は砕けた態度で、いかにも下町のおやじさんと言った風情。

ただ、話し好きなのか好奇心が強いのか、私を見つめる視線がかなりくすぐったい。

「お前さんにや勿体ない別嬪さんだなあ」

「おいおいガーシュ……勘弁してくれよ。彼女はルクア迄同行するお客なんだ。あっちへ届ける約束なんだよ」

「なあんだ、旅行者か。随分と珍しいじゃないか、あんた達が客を請けるなんて」

妙に赤い顔で否定するファドラインに、からかっていたのだと判るガーシュの返事。

「……まあね。美人だから」

そっけなくそれに応じたファドラインの態度は少しぎこちなくて、ちよつと居心地が悪い。

けれどその後に続く冗談混じりの会話に、一緒になってひとしきり笑いあった。

「そう言えば、あんたの弟さん何て名前だったっけか？」

暫く世間話をした後、ガーシュの何気ない質問について私が口を開きそうになったのを、素早くファドラインが遮る。

「どうしてだい？……なにかあったのか？」

笑顔は変わらなかったが、今までとは違って慎重に言葉を選んでいるのは私にも判る。

「いや……な、大分前になるがクアーナの商人か何かに……イクシルとルクアの間で信用出来る堅い商売をしている商人を教えてくださいと言われてなあ。あんたんちなら間違いなろうと……他の二、三軒と一緒に名前を挙げたんだ。そしたら店主の名をと訊ねられて……あんたの名前はすぐ出て来たんだが、確か一緒にやってたのは弟さんだったよなあ」と

頭をひねるガーシュにフアドラーンの代わりに口を開いた。わざとふざけたような軽い感じで。

「結局は名前を思い出せなくて、言わなかったのね？」

「……そうなんだよ。兄弟なのにあんまり似ていないって評判の所だろうって聞かれたんだが」

面目なさそうに店主は顔をしかめた。客の名前は覚えていて当然の筈のこの商売なのに……と、その表情が言う。

「大した事じゃないさ、ガーシュ。それにウチの親父はクアーナ人はあまり好きじゃないから、奴ら相手の商売ならご免だよ」

「それならいいんだ、……それにしても……」

まだ首を捻っているふうの彼にフアドラーンが付け足した。

「今度来る時は弟も連れて来るよ。それ迄には名前を思い出ししておいてくれよ？」

「……おいおい、教えておいてくれよ」

「冗談。薄情な店主だからな、自分で思い出せよ」

ふざけ半分、それでも結局店主には弟の名を告げないままフアドラーンは彼の店を後にした。

その後も如何にも客を観光案内に連れ歩いている、と言う感じで何軒かの店を案内してくれたが、店に入る時、そして出る時……と、何気ないふうを装いいつも通りをいく人々を観察しているのには私だって気付いていた。

この人は何に気をつけて警戒しているのだろう、と当のフアドラ

ーシンの傍らで考えてみた。

明らかに先程ガーシユの店での会話以来だわ。

でも、あの時の会話に出て来た具体的な名は只一つしかない。

016 確信

……クアーナ。

ルクアディナルファの向こう側、高地の山脈を越えた先にある新興の国だと言うことしか私は知らないの。

バーラートにいる間に付けられていた教師も大した事は教えてくれなかったし、多くを知ろうとすれば妃は政治には関わらないのが慣例だと洩られもした。

王を戴かず、幾人かの有力な指導者達に導かれているという、私にとっては体制にも名前にも今ひとつ馴染みの無い国だわ。

しかも、その国とアルマンスール家の間にどんな繋がりがあるというのかしら？

否、その名を耳にしてから目に見えて用心深くなっているということ、良好な関係ではない、ということだろうか。

……敵として？

しかし、それは余りに大きな敵ではないのかしら。

一介の商人として相對するべき者ではないだろうと思える。

では何を背負っているというの？

ふと以前、ラウドラチャクリンが何気なく口にした言葉が脳裏をよぎった。

『新興の国であるクアーナはフィルダウスの所在を得んと、年に幾人もの偵察者、探索者を送り出しているとか。もっともその多くがこの険しい山々に吞まれ…生きては還らぬと聞くが』

不意にバラバラだったパズルのピースが組み合わさった気がした。符号がしっくりと当て嵌まる様に、これ迄の彼等の行動、言葉に納得がいてしまう。

そして問いが、隣を歩く背の高い男に対する疑問が浮かぶ。

ただそれが人込みで口にしても良い話しでは無い……とだけは流石に自制心が働いたわ。その問いをそのまま胸にしまって私達は宿に戻った。

私が彼の素性に気が付いた事にはファドラーンは気付いているのか否か、そして、私の秘め事も彼は未だに知らぬままなの。

早く言わなくちゃ……と思っではいるのだが、何となくタイミン
グが掴めなかった。

ラウドラチャクリンの時は向こうから訊ねてくれたから、驚きはしたものの話すのは却って気が楽だった。

しかし、今回は自分から彼に伝えなくてはならないのだ。その違いに改めて大きな壁を感じてしまう。

大きく息を吸い、自分にしっかりしなさいと、活を入れる。

べっ……べつに愛を告白しに行くんじゃないのよ？

ただ、これ以上彼に対して隠しておきたくない事を明らかにするだけだわ。

それに、きつとファドラーンは私の告白に怒ったりはしない。

今まで隠していた事ですこしは軽蔑されるかもしれないけれど、それでも何時迄も隠し事をしたままで居るよりは良いわ、と自分に言い聞かせた。

「……あの、ファド？ 昼から出発すると言う事は……今夜は野宿になるの？」

「ああ、言ってなかったね。此所から首都迄は野宿する所も無いくらい町が多いんだ。此所と違って大きな宿では無いから、相変わらず同室で我慢して貰わないといけないんだが……どうかしたの？」

宿に戻り、出発のため荷を整えようと部屋の前で別れる時、何気なくを装ってそう彼に訊ねた。

午後からの出立と言うのはイレギュラーな気がしていたからで、もしも途中で野宿を予定しているのなら私としては都合がよいような気がしたのだ。

少しでも目立たないように彼と話す時間が取ればよかったのだから。

「い、いいえ……別に。只……貴方に聞いておいてほしい事があるの、今夜の宿で少し……時間をくれる？」

いつも通りの優しい返事と、そのままの口調で問われ、我ながら情けない事に声が上擦った。

そんな私の態度をどう解釈したのか、ちょっと神秘的な表情をして無言でうなづいたフアドラーに、私は無意識に腰を低くして頭を下げる……ユグドラセア風の淑女の挨拶……をして部屋へと引き取った。

しかし、どうにも落ち着かなくてすぐに荷を纏め、出発の為に皆がたむろしているロビーへと顔を出す。サブリーダーのミシエイルとラウドラチャクリンが、出発前の荷のチェックか、打ち合わせの為だろうか少し厳しい表情で立っていた。

それでも私に気付いたミシエイルがにっこりと微笑み、応じてラウドラチャクリンも厳しい表情を少しだけ引っ込めると私の方へと視線を向けた。

「どうでした？ジリの街は」

ミシエイルの問いに観光客らしく、見たままの印象を語る。

バーラートの混沌とした街から見れば、大分落ち着いた、整った街の様子だとか、人々の様子も。

そしてガーシュの店での事を話そうか、どうしようかと束の間逡巡した。

それを話してしまえば、私が彼等の事を把握したと、彼等が何者で何の為に活動しているのか……（恐らくはラウやファドライン以下彼等はフィルダウスの民なのではないかしら。そして自分達の国を守る為にクアーナの探索者を狩り出す任にあたっているのでは？）と告げるのに等しい、と気付いた。

自分達の秘密に気付いた者を彼等がどうするのか、そこ迄考えていなかった私は、不意に自分の身の危険を案じて口をつぐんでしまった。

心の中では彼等が私に危害を加える筈が無いと思いながらも、不安は去らなかったの。

「首都のツァイデアルもこんな感じの街なのかしら？」

素知らぬ風でそう話題を振るとミシエイルが口を開いた。

「規模は違いますが……雰囲気はこんなものでしょうかね？」

「そうだな、もう少し各階層の地域差が出るくらいだな」

「^{カースト}階層？」

話を振られたラウドラチャクリンが穏やかな表情で口にした知らない言葉に、ついそう聞き返していた。

「ファドは何も説明しなかったのか？この国はバーラートよりももう少し少ないものの……はつきりとした身分制度が在るんだよ。もうずっと昔からの事だが……部族単位、職の業種単位毎にそういうしがらみに縛られているのさ」

言外に今日は何をしていたの？とラウドラチャクリンに仄めかさ

れ、何だか少しからかわれたのだと悟って頬が赤くなった。

「商売繁盛の寺院があるからって、連れて行ってもらったのよ。ガーシュって人のお店に行って、それからこの街の名産品のお店とか……」

「おやおや……?」

「完璧デートコースですね」

ふざけた様に眉を動かしたラウドラチャクリンと、にやりと口を開いたミシエイルに、どう言い返そうかと肩を怒らせた所へフアドラインがやって来た。

どうやら外で馬の積み荷を確認していたらしく、手にはいつもの書き付けの束を持っている。

「外の準備は整っていますよ、おや……何かあったんですか? そうだ、イエライシャ、ガーシュの店での事は話した?」

「え? いいえ。……何か変わった事が在ったかしら?」

つい、そう何気ない口調で返事をしてしまった。

「デートコースじゃなかったんですか?」

ミシエイルがからかうのにフアドラインは、ちよつと慌てながらも何かしら意味在りげな目配せで応じた。

「後で話すよ」

それを受けて、何を思ったのかミシエイルも少し真面目な表情を見せる。

そしてその様子に、私は自分の直感が正しかったのだと確信を深めずには居られなかった。

017 告白

「どういう……こと？」

「ちょうど部屋に空きがあると、この宿の女将が用意してくれたんだよ。今までは随分気を使わせてしまったからね、今夜くらいは遠慮しなくてもいいよ」

タイミングが良すぎるこの事態に、ラウドラチャクリン一人だけがのんびりした風情だ。確かにフアドラーンは午後の出発の時、何かをラウドラチャクリンに耳打ちしていたけれど、こんな事は想像してもいなかったらしい。

私と同じように、慌てたような困惑した表情で「弟」を見つめている。

確かに大切な用件を伝えたいと思っているわ。

でも、その用件はラウドラチャクリンも知っている内容なのだから、わざわざ別室を用意する必要は無い筈なのよ。

ましてや娘一人だけの個室に男を招き入れようと言うのだから……通常ならどんな噂を立てられるか知れたものではない。ふしだらだとか、もつと……口にするのも憚られるような事を言われるかもしれないこのシチュエーションもしかし、この隊商の人々なら大丈夫だと、変な所で確信があった。

下世話なふうには受け取りはしない、その裏に在るもっと深遠なものを理解してくれる、そういう人々だと……私は無意識のうちに確信していた。

でも、やっぱり、戸惑ってしまうわ。

そんな事態を楽しんでも居るのか、言葉巧みなラウドラチャクリンに追い立てられるようにして、夕食を済ませた私とファドラーンは皆の居る部屋から個室へと移動する羽目になっていた。

「……えっと、改まってどうかしたのか？ イエライシャ」

かなり居心地の悪そうなファドラーン。

彼もこの状況に緊張しているのだと悟り、急に落ち着きを無くしてしまった。

「あの、私……貴方に謝らなくちゃならないの、ごめんなさい」

何から切り出せば良いのか判らなくて、先にそれだけを言い、頭を下げるのが精一杯で。

「何の事を言っているのか……俺には判らないよ」

案の定、困ったふうの彼を見上げる。

それでもどう話を切り出せばいいのか自分でも迷い、再び視線を下げると胸の前で組んだ指に力を入れてしまった。まるで懺悔をする時のようだ、血の気の引いたそのほの白い指を見下ろして心の中で思い当たる。

それくらい、今の私は動揺している。

「私……逃げ出して来たの、シュヴァーゼ藩王家の藩王から。彼の三番目の妃になる筈の娘が姿を消した話は聞いた事……無い？ それを貴方に隠していたのが……心苦しくて……」

「？まさかそれが君だと……？」

どうやら全く気付いていなかったらしい彼のそのリアクションに驚いたが、それでも表情は変えず神妙なまま、うなづいて見せた。

「私の家族も歓迎していない結婚話だったし……何より私が……彼を好きになれなかったのよ。父が勧めてくれたように、逃れるように国に戻って親族の重荷になるだけならば……いつそバーラートの

人々の中に紛れてしまった方が良いような気がしたの。」

そう、あの時はそれが出来ると思っていた。

「理解してもらえるかしら、王宮からバーラートの町中の雑踏を見ているなら……このままこの人混みの渦に紛れてしまえば私の存在すら無くしてしまえるのではないかしら……思えて来て。私がいなくなっても父と藩王の立場にはあまり影響は無いはずなの、あくまで商売上の利害のみの関係を通じたかったのよ、父は」

「シュヴァーゼの、あの藩王の……まあ、いろんな噂は知ってるよ。君が彼の元を逃げ出したのは賢明だとは思うけれど、逃げ出せるだけの立場だったのが幸いだったね。それで……イクシールの国境迄たった一人で？」

齒切れの悪い物言いに、私が逃げ出して来た理由を彼が理解してくれたのだと判る。

「？ええ、バーラートに居た間にもいろんな人の噂話やこの当りの国の伝説を聞いて……探してみようって思い立ったのよ、伝説の王国とやらを」

「まさか……フィルダウス？」

信じられない、そんな狼狽えた口調のファドラーンにっこり微笑んだ。

「でも……そうとでも考えなければ旅になんて出られなかったわ？在る筈の無い……無いと判っているものでもいいから……それでも何か目標を持たなかったら、とっくに私は……生きる事すら諦めていたかもしれないのよ？そして流れ流れて……着いた先であなた方と出会ったの」

言いたかった事を言ってしまうってから、ファドラーンを見つめる。心なしか彼のまなざしは厳しいものだった。

「君と我々が出会ったのは、全くの偶然だと思っていたが……よりによってフィルダウスとはね」

ため息を一つ、深い戸惑いと共に吐き出すと、彼は変わらぬ複雑な表情で私を見つめて続けた。

「本当に戻らないつもりなのか、故郷の家族の元に……？心配しておられるのだろうか？」

「戻りたくない……と言ったら嘘になるわ。けれど……戻れないというのが現実なのよ。私がシュヴァーゼの藩王を少しでも愛せれば、若しくはあの状況に甘んじる事が出来れば良かったのでしょうけれど……。それに……ラウにも言ったのだけれど、私の父の一族は……私に対して優しい人たちじゃないのよ」

そう言っ肩をすくめてみせた私に、少し上の空のような口調でファドラーンが口を開いた。

「……君が訳ありなのは知っているよ、この隊の誰もがね。話してくれないのなら、それはそれでしょうがないとも思っていたから、俺に話してくれたのは正直言って嬉しい。それにしても……このまマルクアディナルファ迄旅を続けて……そのフィルダウスという国を捜すつもりなの？」

ファドラーンの探るような、確かめるような口調に私はゆっくりとうなづいていた。

「取り敢えずの目標よ。ありもしない伝説でも良いの、私には当面の目標……支えが必要なのももの。ラウはそれについては何も言わなかったわ。彼の意見はね。……貴方としてはどうなの？」

そう、私はそれが気になるのだ。

「俺の意見？それに……ラウがなんだって？」

けれど彼は今頃気付いたような慌てた声で聞き返してくる。

その時のファドラーンの表情が如何にも少年のようで、つい笑顔になってしまった。

「彼は最初から私の素性も、目的も気付いていたみたいね。……私

が逃げ出して来た女だって。そして目的地についてもよ。ほんとうに鋭い人よね、それに多分……ミシェイルさんもだわ」

「やっぱり……か。何か隠していると思ったが、ラウの奴」

少しどころか、かなり悔しそうなので心配になって付け足した。

「彼に言われたのよ？話したくなったら、私から貴方に言ってくれて。……それに私も聞きたいの、貴方達が私をどうするつもりなのか。それに、私は……もしかしたらシュヴァーゼの藩王に追われているかもしれないのよ？」

「……どういことだい？」

開き直った私に、慎重な口調でファドラーンが探りを入れて来る。「私の目的地はフィルダウスよ。あなた方はその……関係者なのでしょう？伝説の王国を捜す者を……阻むか排除するのが目的なのではないの？」

言い切った私を見つめる目つきが鋭くなり、その数瞬後、今度は笑顔になった。

予想していなかったその晴れやかな笑顔に、私の頬が赤くなるのが自分でも判ってどぎまぎしてしまふ。

「悪意や、……侵略の意図を持たない者には何の危害も加えない。それが我々の基本ルールみたいなのなんだ、勿論甘い考えだと言う向きも無い訳じゃないが。君の探究心も好奇心から出たものものよだから……誰かに我々の事を漏らそうとしない限りは、安全というのか……自由を保障出来るよ。ラウはそれを言わなかったんだね？」

「違うの、あなた方がそうなんじゃないかと気が付いたのは……今

日だもの」

にこやかな笑顔でそう言われ、かなり拍子抜けしたような表情を浮かべていたであろう私に、ファドラーンは言葉を続けた。

「それについては、隠しても半端なやり方ではいずれ判ってしまうだろうから、俺としては敢えて……隠しては居なかったんだ。それとも……俺は……気付いて欲しかったのかもしれないな」

最期の言葉を口にした時の彼は最早笑顔ではなかった。かなり真剣な……真摯な表情。

「どう……言う意味？」

「君が俺達の正体に気付いたのなら……それを口実に、君をフィルドウスへと攫って行けるかもしれない。俺は……」

言い淀み、口をつぐむ。

私も……彼の言葉の意味を瞬間……理解出来なくて戸惑う。

その間に、彼が私の方へと踏み出した。

そのまま私の肩に両腕を廻して、力を込める。抵抗するとか、抗議の声を上げるとか、そんな事を考える前に、私は彼の胸に抱き締められてしまっていた。

「俺は……君のことがとても気になるんだ、むしろ……好きなんだと思う。たった一人で危険を冒してでも旅に出たなんて、訳ありだっというのは……恋人の所にでも行くつもりなのかと思ってた。だから……君の心が自由で、束縛されていないのなら、俺の事を見てはくれないだろうか？」

ファドラーンの広くて逞しい胸に抱きすくめられて、高鳴っているのが自分の心臓ではないと気付くのに少し時間がかかった。もっとも私だって彼に劣らずドキドキしていたのだけれど。

「はじめは髪の色が珍しくて綺麗だから……気になるんだと思って

た。けれど、まっすぐに勇気のある……そんな女の子だと知ってからは、もう止められなくなっていて……。ときどき君がラウを目で追ってるのも知ってるけれど、どうやら……諦められそうに無いな。あいつが相手でもね」

緊張しながら私を抱きしめているファドラーンの胸に逆に頬を埋め、少し上擦ったその告白を聞きながら、彼の背中へと腕を廻した。

この人はこの人なりのコンプレックスとも闘っているのだと知り、伝説の国の民なのだろうとは思うものの、私達と少しも変わらないその素顔に妙に安堵した。

「イエライシャ……？」

不安げな声が降って来る。自信の無さそうなその声に上を向いて、笑顔を見せた。

多分、今の私に出来る精一杯の微笑み。

暖かな想いをくれる人に出会えた高揚感に頬はきっと上気してしまっているはずだわ。

でも今はもっと重要な問題があるのを忘れてもいられない。

「あなたの気持ちは、とても嬉しいの。でも……さっきも言ったわ？ 私はシュヴァーゼ絡みで……貴方がたに迷惑をかけてしまうかもしれないもの……だから……」

「それに関しては俺達が力になれると思う。俺達のコネを……かなり当てにしてくれてもいいんだよ？」

だから、ごめんなさい。

そう言おうと思ったのに、それすら見越したようなファドラーンの言葉に遮られてしまって、言い逃れの口実を咄嗟には思い付けなかった。

だから、正直に、本当に思っている事だけを伝える。

「ありがとう、ファド。私……多分私も貴方が好き……なんだと思うわ。だけど……もう少して良いの、私が自分自身を見つめる為の時間をくれる？ 私は自分が何をしたくて、何が出来るのかを知りたいの」

そう、いつも私はそう思っていた。その場限りのつまらない口実を見つけて無理に彼を拒むのではなく、私に納得のいくまで待つて欲しい。

そんなわがままな私の申し出にすら、ファドラーンは笑顔を浮かべたままだった。

「判った、待つよ。それでも……助けが必要な時には遠慮しなくていい」

「ありがとう」

嬉しそうな笑顔で優しい返事をくれたファドラーンを見上げて、微笑みを返す。

ゆっくりと身体を離して……手をも離そうとした彼に、私は無意識の内に名残惜しそうな表情を見せたのかもしれない。

「……口付けても……いい？」

見つめられ伺うような彼の言葉に、微かにうなづいて同意を示しながらも……その堅苦しい程の礼儀正しさが可笑しくて頬が緩む。それに自分でも気付いているのかしら、向かい合いまっすぐ立っている私に、その長身を屈めて優しく……触れるだけのよう……口付けをくれる。

「次は……私から返すから。そうしたら……私を何処にでも攫って行ってもいいわ」

「……待ってる」

緊張したあまり上擦って、少し早口な私の言葉にもう一度、今度は額に優しいキスをくれたファドラーンはにっこり笑ってそう言う
と部屋を出て行った。

ぽつんと部屋に取り残された私は、それでも不思議に寂しいとは思わなくなっていた。

たった一人で……不安で眠れないなんてことも、もうきつと無いだろう。

017 告白（後書き）

うまく区切れませんでした。
長めです。

今夜の宿で時間をくれ、と何時になく真剣な面持ちで告げたイエライシャ。

彼女がどんな話を持ち出すのか、正直言って見当は付かなかった。しかし俺も彼女に話しておきたい事はあったから、承諾のしるしに黙ってうなづいた。

次の街へと向かう道すがら、彼女の希望に添えるようにと俺は彼女が告げた言葉をラウドラチャクリンにも伝える。別に自慢してる訳じゃない、一緒に隊を取りまとめている都合上、問題なく夕刻からの時間を確保する為だ。

一方ラウドラチャクリンは怪訝な表情を見せるでもなく、大した事じゃないとでも言うような視線を向けて来た。

むしろ……俺を黙って観察しているような気すらする。

何か、絶対、おもしろがっているに違いない。

宿についてすぐは何かと気忙しい。

馬や荷物の整理などでごった返す中ラウドラチャクリンと宿の女将とが何やら相談しているのには気がついたが、まさか余分の部屋を確保する為だったとは食事が済むまで思い当たらなかった。

やはり俺は大分舞い上がっていたのだろうか。

「大事な話があるんだろう？」

部屋を割り振った後、狼狽えた俺に意味ありげな表情で彼は言う。そして、その視線に追い立てられるように、俺たちは彼女の部屋へと向かう羽目になってしまった。

部屋に二人きりと言うシチュエーションが今までに無かった筈は

無いのに、俺とイエライシャは明らかに緊張している。

当惑していた俺に、けれど、口火を切ったのはイエライシャが先だった。

俺たちに出逢うまでの、彼女の事情。

それは彼女の身の上話のようなものだった。確かに訳ありだろうとは思っていたイエライシャだがここに来る迄の間に随分と思いき荷を背負っていたらしい。

「戻りたいけれど、戻れない」

苦しい笑みとともにそう言ったイエライシャに、心の隙を見出した、と思ったのは気のせいだけではないと思う。

その間隙を突くと言うと聞こえは悪いかもしれないが、俺が彼女に言いたかった事を伝えるには良いタイミングだと思えたのは確かだ。

くじけそうな勇気をなんとかかき集めてようやく口にした言葉。相手に好意を伝える為のソレを、自分から口に出したのは多分初めてなんじゃないかと思う。

もちろん気持ちを伝える為に抱き寄せたりした事も。

ラウドラチャクリンを眼で追っている事の多かった彼女だったから、拒絶されると思っていた。強く抱きしめ返してくれるなんて思っても居なかった。

そして思いもかけず前向きな返事を受け取る事が出来た俺は、浮き浮きした気分で俺とラウドラチャクリンとの共同の部屋へ戻る道を急いでいた。

もっともほんの一つ部屋を隔てただけの所なのだが。

……勿論もっと彼女と一緒に居たいと思う気持ちも強かったが、あれ以上見つめ合っていたら自分の理性を保ち続けてはいられなかったとも思う。それだけイエライシャは俺から見て可愛らしく、魅力的で保護本能を刺激する存在だったのだ。

別に、紳士ぶっている訳じゃない。

昔は色街の妓女を泣かせまくったというウワサの（本当の所はそんなんじゃない無かったらしいのだが）ラウドラチャクリン程では無いが、俺だって……まあそれなりに女を知ってはいるし、幾つかの恋愛も経験していた。

それでも自分の国に連れて行きたいとまで思ったのは、イエライシャが初めてだと思うのだ。

だから彼女がフィルダウスの土を踏む事が出来る様に、そしてそれ以前に、誰にも追われる事のない身になれるようにと渡りを付ける事が、いつの間にか今の俺にとってしなければならぬ最優先課題になっていた。

そしてその為には自分の上司を説得するのが一番の早道だと俺は思ったわけだ。

父親は確かにフィルダウスの有力貴族の一人だが、上司たるラウドラチャクリンは更にその上に居る。

何と言っても彼は次代のフィルダウス国王として冊立された世継ぎの王子なのだから。

叔父である現王を継いで即位する迄はと、親友の息子である俺を自分直属の近衛の隊長として取り立て、自らの信念と方針で自分の王国を守る為に活動する道を選んだラウドラチャクリン。

彼に従う俺達は無言の信頼と忠誠を誓っていた。

とはいえ、部屋の扉を開けた時の俺の顔はかなりにやけたものだったと思う。

それに応じて一足先にこの部屋の主となっていた彼からも声が掛かる。

「随分と早かったな。何だか良い事が在ったようだが……まさかとは思うが……もう押し倒して来たんじゃないだろうな？」

「ベッド迄の距離を時間で測るんですか？、……貴方が？」

「おやおや、そう来たか」

やはり待ち受けていたな、と突っ込んだ質問も覚悟していたが、追求するよりもからかう様なラウドラチャクリンの言葉にそう反撃してみる。

彼が随分と経験豊富らしいとはもっぱらのウワサなのだが、苦笑するラウドラチャクリンの腰掛けているベッドに並ぶ隣のベッドへと腰を降ろすと、まっすぐに彼を見つめた。

「単刀直入にお聞きしますが、俺が彼女をフィルダウスに連れて行きたいと……勿伴侶として……考えたとして、彼女には何が足りないと思いますか？」

昔から、回りくどい事は抜きで本題を尋ねる方が好きだった。

それをよく知っている筈のラウドラチャクリンも、流石に今回は絶句したらしい。

かなりの間が空いて……それでも俺は息を詰めてラウドラチャクリンが言葉を紡ぐのを待っていた。

「何が足りない……か。お前はどう思っているんだ？」

ゆっくりと視線を彷徨わせていた彼は次に俺を見つめて、そう質問して来た。

「俺は、今の彼女で十分ですが」

「ならそれでいいんじゃないか？他のどんな事でわたしや叔父上や……上帝を説得出来ると言うのか、わたしはその方が聞きたいね」
真面目な顔でそう肩をすくめると、次にはにやりと笑って見せた。

「それで駄目だと言われたら……言ってやるが良い、我々に新しい血を与えてくれる者だと」

「……それは」

今度絶句したのは俺の方だった。

「言い過ぎじゃないですか？上帝に向かってそれを言う勇氣は……俺にはありませんよ」

「ならば諦めるのか？かまわんさ、叔父上も地上の女性を娶った方だ、お前に反対する訳には行くまいよ。ましてや王国にとってメリットのある者をしか受け入れないと言う姿勢自体が、既にわたしの主義ではないのだからな」

……尤も新しい血というだけでも充分なメリットだがな。そう表情で彼は語った。

仮にも上帝はフィルダウスの守護神だ。初代国王の母一族を保護しフィルダウスを拓いた、いわば建国の祖でも在る。

流石に弱気な声になると、ラウドラチャクリンが畳み掛けてくる。勿論俺にだって彼の言い分も判らない訳じゃない。

「新しい血……ですか。」

一人ごちると、ラウドラチャクリンの視線が注がれる。

「わたしとお前にしたところで、臣下の間柄として対しているが……厳密にはかなり近親の血縁になる筈だ。あの狭い国土の中で長い間近親婚を繰り返して来たのだから、当たり前なのだが」

「それは……たしか……俺の曾々祖父の姉妹が貴方の祖母にあたるってやつでしたよね」

「そんなところだったかな。わたしと叔父上は……一世代昔の遺物だからな、お前の父上の方がわたしよりも若いのだから」

幾らか自嘲的な、見慣れた彼の笑みに昔の事を思い出した。

……そうだった。

まだほんの子供だった頃、俺は自分の屋敷近くの荘園の中で初めて彼に会ったのだ。

父の知り合いだとしてか名乗らなかった彼は、生意気に見上げていただろうガキを自分の馬の鞍の前に引き上げて、屋敷迄の案内を俺に頼んだ。

その頃体調を崩して臥せていた俺の母を見舞う為に。

わざわざ単身で臣下の屋敷を訊ねてくるという、王族にしては碎けた方だと後で耳にして初めて、彼が王位継承権第一位の王子チャクラヴァルティン殿下だと知った。

俺にとっては大分昔の、思い出だ。

以来随分と時が過ぎたが、彼は少しも変わらない。

……外見だけなら。

「貴方は……どうなんです？俺と……イエライシャとの事を認めて下さるんですか？」

昔の事を少しだけ思い浮かべながら、目の前の上司の意向を探る。「お前が良いと思った事を否定する権利はわたしには無いよ。初めからお前の意志でこういう事態になったのだし。人の恋路を邪魔する気は毛頭ないからね」

特別表情を変えるでも無く、静かな口調でラウはつづける。

「彼女に、自分の世界を捨ててお前について来る意志があるのなら……わたしは受け入れて然るべきだと思うが？もちろん上帝にも問われれば、そう答えるだろうね」

「……ありがとうございます」

彼の暗黙の了解にちよつと胸が熱くなる。

立ち上がると、ラウドラチャクリンの前に改めて膝まづき、そのまま頭を垂れた。

こんな恭しい礼を取るのは、初めて彼に忠誠を誓った時以来だった。

「まあ……後はお前さんの両親を説得するのが肝心だろうな。そして彼女の身辺整理だが……この地からルクアディナルファへ着くまでの間に片付けられる所からこなししていくしかあるまいな。彼女の扱いについてはわたしに一つ案がある……ジャヤルの藩王にも協力させるが、お前にも働いてもらうからな」

「……努力します」

改まった恭しい礼に照れてでも居るのか、ラウドラチャクリンの声は苦笑混じりだった。

翌朝、俺達はいつも通りに荷を整えて出発した。

俺とラウドラチャクリン、そしてイエライシャもお互いにな変わった素振りは全く見せなかった。

何気なくいつもの会話を交わす俺と彼女に、特別変わった視線を注ぐ者も無く、いつも通りの隊商の旅だ。

今夜辿り着くはずの町、イクシールの首都ツァイデアルが当面の目的地だと言う事を除けば。

……そしてそのツァイデアルには俺の両親が居る。

その事について考えると妙に緊張してしまう。

いや別に、すぐイエライシャを決めた相手として紹介する訳じゃないし、初めからそういう待遇を彼女にするつもりは無かった。

彼女からの返事を待つという受け身の立場のせいもあるが、取り敢えずルクアディナルファ迄の客として紹介するつもりだったからだ。

もっとも、誰かが余計なお節介を焼くかもしれないという懸念も無い訳ではない。

そんな俺の考えなぞ関係なく一行は支障なく行程をこなし、日も

落ちかけた頃、ツァイデアルの一軒の商家へと到着した。一般向けの商売は終わった時間なので、看板が掲げてある表の店側には戸締まりがされ、灯りも落とされているのだが同じ並びにある厩側への大きな扉が開かれ、迎え火が灯されていた。

今日、この時間に着くとの先遣りは特別出してはいない。

知らせなくても判っている、それが昔からの俺達の流儀だった。

馬と荷馬、そして安堵の表情を浮かべた人々が次々とざわめきと共にその扉をくぐる。

さほど広くはないその中庭は、たちまち人馬でごった返す騒ぎになった。

首都の中心部に入る前に、郊外で別の管轄で活動する仲間が営む馬屋に立ち寄り、荷の空いた馬と騎乗用の馬を何頭か預けて来たと言うのにだ。

これ以上隊商や商売の規模が大きくなれば、かえって人目につきすぎてしまうな、とさすがに危惧する。

その騒ぎにすぐ、アルマンスール家の当主イスナード……俺の親父……が姿を見せた。

渡り廊下から中庭へと降りて来た彼は、安堵の表情で皆に歓迎の言葉を掛け、同じ様に俺とラウドラチャクリンにも声を掛けようとして、俺の隣に立つ見慣れぬ女性に気付いたようだった。

「……ファド、その御婦人は？」

戸惑ったような声に、隣のラウドラチャクリンがやりと口の端を上げるのが目に入る。

「俺が請け負ったお客です。……ルクアディナルファ迄の。詳しい話は中でもよろしいですか？」

彼の視線がずっと動いて……他の者達の間で動揺が無いのを見て

取ると、黙ってうなづき、俺たちを中へと招き入れた。

018 高揚（後書き）

ようやくファドラーン視点に戻って参りました。

でも、次からはまたイエライシャ嬢視点に・・・。

19 誰何（前書き）

再び娘視点・・・あれ？

19 誰何

「……ファド、そのご婦人は？」

困惑の混じった誰何の声。

そして一瞬かなり鋭い瞳で見つめられ、射すくめるとはこの事ね、
と思い付いた。

かなり立派な体格をしてはいるが、初老の域にあると見受けられる
ファドラインとラウドラチャクリンの父親らしき人物は、人混み
の中自分の息子2人に背後を守られるような形で立つ私にそんな眼
差しを向けて来た。

明らかに部外者を警戒している目付きだわ。

仕方ないじゃない、自らに言い聞かせる。

私以上に大きな秘密と大きな敵を抱えているのだから、彼等は。

ファドラインと彼との間で少しの言葉のやり取りの後、私達は屋
敷の中へと招き入れられる事になった。

中庭のざわめきを背後に聞きながら長い年月を経た建物の回廊を
巡り、通された部屋は一階の別の庭に面した応接室のようなところ
だった。

家族の寛ぎの為の場ではなく、あくまで外部からの人間をもてな
す為の部屋。

カーテンを引いていない室内から、まだ夕暮れの光が残る庭に植
え込まれている何種類かの植物の姿が見て取れる。

この屋敷の主であるファドラインの父を先頭に、私、ファドラー
ン、そしてラウドラチャクリンとがこの部屋へと踏み込んでいた。

「客だ」と明言したファドラインの言葉を受けてか、ファドラー
ンの父は私に上座にあるソファを示してくれる。

無言でその座を示され、「有難う」とだけ答えて私はそのソファに腰をおろした。

上等で座り心地の良いそれは、長い間の馬上で強張ってしまっていた身体には柔らか過ぎて……だらしなく見られない様にと、慌てて背筋をピンと伸ばしてみる。

そんな事に気を取られているうちに、他の三人も思い思いの座を占め、相手の出方を伺う様に視線を交差させていた。

しばしの沈黙の後、それを破ったのは意外にもラウドラチャクリンだったわ。

「彼女の名前はセシリア・イエライシャ・グレンフォード嬢。ユグドラセアの貴族の出で、ルクアディナルファ迄行く途中だそうだ。我々とは……バーラートとイクシールの国境の宿場でたまたま出会って……お困りのようだったので、同行を申し出たんだ。そうだな、ファドラーン？」

そう大雑把に事態を説明するとファドラーンへと話を振った。

「……そうです。俺の責任で」

多くは語らず、彼はそれだけを言うのと心なしか胸を反らして姿勢を正した。

視線はまっすぐ父親に向けられている。

「俺たちが次にルクアへ出発する迄の二日間は、こちらの屋敷に滞在して頂くと思っていますが……よろしいでしょうか？」

続けてそうファドラーンに問われた父親は、何故だか瞬間視線をラウドラチャクリンに向けた。

問いたげな、それともラウの反応を伺うようなその態度に、親子だと謳っている彼等の関係に何かしら違和感を感じる。

しかし、ラウはその問うような視線を何食わぬ顔で無視したの。それによって、つまり、決断を下すのは父親の役目だと暗に示唆した事になるのね。

その態度をうけてようやく自分で決める事にしたのか、彼は、私を向いて口を開いた。

「客室は空いているから構わんですが、町の宿程行き届いた対応は出来ません。それでもよろしいですか？」

「もちろん……構いません。宜しければご厄介になりたいと思いますわ」

今の自分に出来る事はラウドラチャクリンが紹介してくれた通りの貴族の娘を演じ切る事だと自分に言い聞かせ、なるべく鷹揚に微笑んでそう言葉を紡ぐ。

結局ファドラーンの父親は客の滞在を渋々ながら認めてくれる事にしたようで、私はファドラーンに先導されて二階にあるという客室へと向かった。

多くはない荷物のお大半も彼が運んでくれていて、しなくてもいいと言ったのに本格的なお客さま扱いに少し居心地が悪くなってしまった。

ファドラーンと離れるのが不安だったから、この屋敷への滞在を勧めてくれた彼らの言葉に甘えてしまったのだとは、流石に言えないじゃない。

「荷物を客室に入れたら降りておいで、食事を用意してあるよ」
客室の前まで来た所で後ろからラウドラチャクリンの声が聞こえた。

扉の幾つか先が彼の部屋らしい。既に旅装を解いたラウドラチャクリンはそのまま階下へと降りて行く。

「貴方の部屋もこの階にあるの？ファド」
尋ねると彼は客室の扉を開きながら振り向き、微笑む。

「……あ？ラウの隣だよ」
と廊下の角を曲がった先を示す。

「年に何日もいないんだけど、何となくキープしてあるんだよ。ラ

ウと同じで寝る為のベッド以外はほとんど何にもない、殺風景な部屋なんだけれどね。隊商の他の仲間は……この屋敷の大部屋か、外に借りてる住居に住んでるんだ」

「ずっと旅ばかりで……落ち着く事も出来ないの？そんな生活ばかりで……辛くない？」

笑ってそう言う彼に、立ち入った事だと自覚しながらつい口を開いてしまった。

「まあ皆も同じだし、俺はもう慣れたよ。何処かで落ち着きたいと思った事も無い訳じゃないけれど、まだその時期ではないような気もしていたしね」

心配そうにそう見上げた私にファドラーンはそう言って、相変わらずのからりとした笑顔を見せると室内へと促した。

客室は一間だけのもので、造りのしっかりしたクローゼットとこじんまりしたソファとテーブル、衝立てで仕切られたその奥には大きなベッドが見渡せる。

荷物をクローゼットの前に下ろしたファドラーンは、その室内をぐるりと見回して言った。

「あと何か……足りないものがあれば遠慮なく言ってくれ。本格的な浴室は下にあるんだが……この部屋にはグスルハネが設えてあるから、それも自由にしてくれて良いよ」

そう言ってクローゼットの向こう側の細長い扉を示した。

グスルハネとは簡易的なシャワールームの事だわ。

うっかり聞き流しそうになって考え込んでしまった。

シュヴァーゼの藩王の館にすら、それを備えた部屋は数える程しか無かったのよ。

バーラートはこの地よりも蒸し暑い気候で、ここよりもさらに必要性の高い設備であろうと言うのに、だ。

建物の外観とは違う贅沢な設備に、よほど私は意外そうな顔をしていたのかしら、ファドラーンは笑いを堪えているみたい。

「この住人は……ってもラウが我俣なんでね、一部屋に設えるのも何箇所かに作るのも……配管の都合上同じだけのコストだったのさ。それなら皆が便利な方がいいだろう？」

「何だか……変わった話ね」

「そうかな」

真剣にいぶかしむ表情を見せるファドラーンに、逆に笑いが込み上げて来てしまう。

クスクス笑いを続けながら、自分が手にしていた荷物もクローゼットの前に下ろす。

屈めていた上体を起こした所で彼に軽く抱きしめられ、咄嗟にどうしたらいいのか判らなくて、身体を強張らせてしまった。

020 夕食

「どう……したの？」

努めてさり気ない口調で訊ねファドラーンの腕をほどうとしたが、彼の腕はなかなか離してくれそうもない。

少し強引な彼の態度がけれどそんなに嫌じゃないのに気が付いて、抗議を諦めると、おずおずとその胸に頭を預けてみる。

衣服越しではあったけれど、彼の胸は少しばかり堅い感じで：見た事は無いそこがかなりの筋肉質なのだろうか、熱くなってしまう頬を自覚しながら推測してしまった。

そして、見ている間にその胸が大きく上下する。

「ごめん、ちょっとしたおまじないだよ。俺の為のね」

大きく息を吐いてそう言うとうとうやく私を自由にしてくれて、ちよつと掠めるように唇を頬に落として行く。

手にしていたこの部屋の鍵を私に握らせると、尚も問いたげな私の視線に、部屋の外を示しながらファドラーンは言った。

「さあ、食事に行こう。俺達の両親が待ってる」

両親……父親ならばさつき会ったわ、つまり今度は彼の母親にも会うと言う事ね。

そこまで考えて、次に緊張してしまったのは私の方だった。

階段を降り、ファドラーンに案内された部屋は先に通された応接室の隣で、普段はあまり使われていない部屋だという。けれど今日の様に隊商が戻った日や、人が集まる時には宴会も出来る様にして

あるらしく、バーラートからこのツァイデアルまで一緒だった隊商の主立った者達が既に集まっていた。

皆が座れるように並べたテーブルに沢山の椅子が並んでいる中、ファドラーンは自分とラウドラチャクリンとの間に私の為の席を確保してくれた。今さらながらの緊張でどこにもその席に着くと、待つ迄もなくトレイに乗せられた料理がそれぞれに運ばれて来る。

一通りの料理が並び、主であるファドラーンの父の隣の席に年配の女性が……彼女は先程までは他の女中達と一緒に食卓の支度を差配していたのだが……座った所で、ファドラーンの父が口を開いた。

「……まずは無事に戻った者達に労いの杯を与える、ご苦労だったな。そして次の出立まではゆくりと過ごしてくれ。お客人もおいでのこと故、堅い挨拶は控えるぞ、存分に楽しんでくれ」

短い彼の言葉に、隊商の者達は皆一様に頭を下げて感謝の意を表すと、食事をはじめた。

その様子を観察しながら、いつもの食前の祈りを済ませた私も用意された料理に手を付ける。

これまでの旅の間にイクシル風だと教えられた、落ち着いた味付けの料理だった。

香辛料を強く利かせたバーラート風の料理に比べて、かなりシンプルに、素材の味を生かしたこちらの味付けの方が私には嬉しい。

それに旅の間のような時間を掛けられない状況の料理に比して、丁寧に時間をかけて煮込まれたその心遣いが何ともいえず余計に暖かく感じられる。

手近においてあった酒の壺を手に取り、自分のグラスとラウドラチャクリンのそれとを満たすファドラーン。

しかも私のグラスにもそれを注ぎ、お酒は飲めない、というのか得意では無い私の抗議ににやりと微笑んで。

「いいから、少しは味わって御覧」

そして耳元にそっと囁く。

「この酒だけはフィルダウスのものなんだよ」

「料理はここ……イクシール風にしてあるのだが、こればかりは馴染み深いものが好いらしくてね。皆これを喜んでくれるよ」

驚いた表情でまじまじと手にしたグラスを見つめた私に、低めた声で左側の席に座ったラウドラチャクリンが付け加える。

「どうやら彼は、私が彼等の素性に気付いた事をすら把握しているらしい。」

「……いいの？」

「何が？」

口をついて出た疑問にファドラーンが聞き返して来た。

「私にそんな事まで教えて……」

いいんだよ、と彼の笑いが代わりに答えている。

ラウドラチャクリンも気にするふうも無い様子で食事を続け、けれどグラスを空ける回数は多くて、今迄の旅の途中で見たよりもかなりペースが速い。

うわ、本当はお酒に強いんだ、と呆れ顔で彼を見ていた私はふと視線を感じて、ファドの父親の隣に座った年配の婦人と思いつき目が合ってしまった。

店の主人の隣に席を占める女性といえ、その奥方だろう。

……つまり、ファドラーンとラウドラチャクリンの母上という事だわ。

目が合った次の瞬間彼女は穏やかににっこりと微笑んでくれ、私もぎこちないのは否めないとしても、精一杯の微笑みを返した。

それにしても、食事の席は終止和やかなもので、かなり気心の知れた者達ばかりなのだろうと思われる。

やがて食事に満足したのか、そこに居座って何人かが酒杯片手に談笑を始め、そしてしばらくすると更に何人かが姿を消した。

静かに部屋を出てゆく彼等を不思議そうに見つめていると、ラウドラチャクリンが口を開いた。

「彼等はこの外に住まいを持つ者か、多分……外の待ち人の処へ行くんだろうよ」

「あなたは？」

それが恋人なのかそうじゃない人の事を指すのか判らないけれど、そう逆に彼に問い掛けてみる。

「残念ながら……行く当てが無いんだよ、わたしには」

にやりと、人の悪い笑みを浮かべた彼にさりとかわされた。ラウドラチャクリンはかなり量の酒を飲んだはずなのにちっとも顔に出ていない。まあ……それでもいつもよりは碎けた感じなのだけれど。

私の右側のファドラーンは何故だか少し緊張しているようだわ。

なんで彼が緊張するの？……明らかに部外者のはずの私なら兎も角、ここは自分の家なのでしょう？

「……ラウドラチャクリン、ラウ？」

不意に隣のラウドラチャクリンに父親が声を掛け、応じるかの様に彼が席を立つと、自分のグラスを持ったままその父親の隣へと移

動する。

2人はそのまま小さな声で何やら話しはじめてしまったが、決して私の方を伺うでもない彼等に何を話題にしているのか判別も着かず、かと言って隣のファドラーンといつまでも話していて注目されるのも何だか不本意なような気がして、私も席を立つ事にした。

「食事はお口に合いましたかしら？」

ドアを出た所で、続くように背後から声を掛けられた。

振り向いた先には、先程までこの屋敷の主人の隣に座っていた婦人が微笑みと共に立っている。

「あ、ええ、御持て成し頂いてありがとうございます。……ご挨拶もまだでしたのに」

「いいえ、準備が慌ただしかったので、こちらも失礼してしまって……不作法をお赦し下さいね。私はファドラーンの母のルツィエラと申します」

にこやかに微笑んで自己紹介をする彼女の物腰は、やはりいいのか、中流の商家の奥方には似つかわしくない程に優雅だわ。

只者ならぬ雰囲気を感じて、私も慌ててユグドラセア風の正式な礼を執る。

「セシリア・イエライシャ・グレンフォードと申します。……イエライシャとお呼び下さい。私の我儘でこちらの隊商のみなさんやご子息方にご迷惑をお掛けしてしまって、申し訳ないのですが……」

「息子達が貴方のお役に立てたのなら光栄ですわ。困っている女性を見遇いして来たのなら今頃私が彼等を搾り上げている所ですもの」
どう説明したものか言葉に詰まったのを、ルツィエラはすんなりと流してくれる。

ほっそりとして儚げな風情の婦人なのに太っ腹なその対応に、この家の主であるあの初老の男性がこの婦人や家人にとっても寛容な人物なのだろうと辺りを付ける。

そうでなくては、このような物言いが許されるはずは無いわ。

どう取り繕っても結局は、この国も、私の故国であるユグドラセアも、男性に拠って動かされる社会であったのだから。

それとも、フィルダウスと言う国ではそれが当たり前なのかしら。

「貴女にこれを使って頂こうと思って……ご用意させて頂きましたの。有り合わせで申し訳ないのですけれど」

そう言って彼女は先程通された応接室から、衣類と思われるものを取り出して来ると有無を言わず私に手渡した。肌に柔らかく触れるそれが、かなり上等の素材で作られた寝間着だと察して、慌ててルツィエラを見つめる。

「無理を言ってご厄介になっている上に、このようにして頂いては申し訳ないのですが……」

淡い女性らしい色のそれを見つめて困ったような声を出すと、ルツィエラは優しい表情で言葉を続けた。

「今までの宿でのように、旅着を来たまま眠るおつもり？」

「……それは」

「旅の途中だし……男性との同室で用心した……だけではないのでしょうか？ せめて、ここに居る間くらいは自分の家と同じ様に考えて、御寛ぎ下さいね」

凶星を指されて言い淀んだ私に畳み掛ける様に、あるいは母親の口調で諭すように……だろうか、そう言う彼女はすたすたと歩き出した。

途中で振り返って、付いて来いと促す。

「ここがこの屋敷のメインの浴室です。貴女の部屋とラウ、そして私達の部屋にもグスルハネは設えてあるのですけれど……こちらの方がゆっくり出来ると思うわ。今日はもう混んでいるようだから、明日一番に貴女の番を取って置いてあげますね。」

幾つか廊下を曲がった所で、ルツィエラはそういつて壁を指差して振り向いた。大きくくり抜かれた扉の向こうに浴室があるらしく、何処と無く湯の湿った気配がする。

そしてそこに入る手前の壁には掲示板のようなものが貼付けられ、何枚かの札が掛かっている。

それに書き込まれている名がこの屋敷の住人達であるのによく気が付いた。何番目かにはフアドラーンの名も読み取れる。

「この札で順番を決めるのですわ。ここでは若干の例外はあるものの皆平等が原則なので」

「……ラウ殿は？」

その名が無いので尋ねると彼女は少し困ったふうに微笑む。

「例外があるって申し上げましたでしょう？彼が一番の困ったちゃんなのですよ。特別扱いと言う訳でもないのですが……少しばかり気難しい所があつてねえ」

「あの方が……？」

ちよつと旅の間に抱いた印象とは違う事を言われたような気がして、意外な表情をしてしまった私を見つめ、ルツィエラは微笑む。

「悪い子じゃないんですけれどね」

そう言うのと二階に上がる階段まで案内してくれ、お休みの挨拶をして去って行った。

しばらくその背中を見送ってから私も階段を上がり、自分にあてがわれた客室へと戻る。この階に部屋を持つ人たちは皆まだ宴席に居るのか、それとも外へ出かけたのか、或いは初めから私とほんの数人しかいないのか、人の気配が無く妙にしんとしていて何となく寂しい。

これから湯を使う事を考えて部屋の鍵をおろすと、衣類を脱ぎながらグスルハネへと向かった。

連日の旅の疲れとさつき少しだけ味わったお酒のせいだろう……とても身体が気怠く感じられていたのだけれど、グスルハネの熱い湯が心地よくてかなりはつきりと物を考える事が出来るようになった。

とはいえやはり疲れているのは確かなので簡単に身を淨めるとグスルハネを出す。

「ふう……」

肌に触れる室温に我知らずため息がこぼれた。

そして早速先程ルツィエラに貰った柔らかな寝間着の袖に腕を通してみる。

大きくて上質なベッド、お布団はふかふかなのにその下のマットレスが固めでちょうど良い、に身を横たえると本当に久しぶりに寛いだ気分になれる。

そしてそのまま、夢も見ないような深い眠りへと沈んでしまった。

021 目覚め

実に久しぶりの、本当に良く眠れた、という充足感で目を覚ましたのはどれだけ振りの事だろう。

閉められている鎧戸からの微かな明かりが夜明けである事を告げている。

その微かな光がうつすらと照らし出す見慣れない室内の天井を焦点の合わぬ瞳で見つめながら、追われる罪人のように父や姉の元を離れてから二か月近くになるのだと、改めて計算して気付いた。

思い返してみれば、出会った当初からシュヴァーゼの藩王は何とも言えない舐めるような目付きで私たち姉妹を見ていたのだわ。

あの国に在ってはユグドラセアの民は明らかな異国者で、衆目を集めてしまうのは仕方の無い事だと思っただけだのだけれど……。

脂ぎった藩王の視線は時に悪寒を催すもので、姉と私は何時も一緒に居るように心掛けていたわ。

残して来た父と姉のことが気掛かりで、そしてこれからの自分がどうなるのかも判らなくて、心細さからだろうか……涙が溢れていたのに気付いたのは寝返りを打った枕の冷たさでだった。

何時に無く気弱な自分に驚くよりも何だか腹が立ってしまい、勢い良く上掛けを撥ね除けるとベッドから降り、肌触りの良かった寝間着を脱いだ。

いつもの服に着替え、顔を、というよりは涙の跡を洗うと部屋の窓を開け放つ。

肌を刺すように冷たい朝の空気を胸一杯に吸い込み、代わりに夕

べ何処からか私の中に入り込んでしまった弱気を無理矢理吐き出すように深呼吸を幾度か繰り返した。

そしてバーラートでの纏わり付くような熱気のこもった、何処か湿った空気とは大違いなこの国の空気の方が私としては好きだな、と感じてしまった。

けしてあの土地にいやな思い出があるからじゃないわ。

……この時ようやくこの窓が街路に面している事に気付いた。
まだ活気づく前の町並みはしんとしていて、人通りも殆ど無い。

人目があまり無いとは言え、ここに居る事をあまり人に見られな
い方が良いのではと考え付いて、慌てているようには見えないよう
にそつと鎧戸を閉めると、今度は廊下に面した部屋の扉の前に立っ
た。

今日の予定は何も聞いていないので何をしていいのか判らなかつ
たけれど、部屋でじっとして居るのも何となく私の性格ではないし、
と少し迷いながらも深呼吸をしてドアのノブに手をかける。

「……え？」

「……おはよう……」

手前に開いた扉の向こう側に立って居たのは、驚いたような顔の
ファドラーンだった。

それでも次の瞬間にははにかんだような微かな笑みで朝の挨拶を
口にする彼に、束の間状況が飲み込めなかった私は、かなりぎよっ
とした表情を見せてしまったらしい。

「丁度ドアをノックしようとしたら君が……出て来たんだ。中を伺
っていた訳じゃないよ」

面白そうに笑顔でそう言い訳をするファドラーンに、無防備な表情を見られてしまったのだと悟る。次の瞬間頬がかぁッと上気するのが自分でも判って……。

「あ、あのっ……今日の予定を聞いていなかったから、それで……貴方かラウを捜そうと思って」

何だか私の方こそ言い訳をしているみたいだと思ったが、上擦った声になるのを止められないまま下を向いてそう口にしてしまった。

「ラウドラチャクリンならもう……随分前に出掛けたよ。俺も今日の午前中はここでの用事があって、外には出られそうも無いんだ。この街を案内するって約束していたのは午後からになりそうなんだけれど、それとも……早くから出掛けたいのなら誰か頼んでおこうか？」

申し訳無さそうなファドラーンの口調にちよつと言葉に詰まって、困ったような表情で彼を見上げてしまう。

しまった、逆効果だと思ったのも束の間で、その表情を不満の意思表示だと受け取ったのか「じゃあミシエイルに頼んでこようか」と私に背を向けかけた彼の背中に慌てて縋り付いてしまった。

「ま、待って。違うのよ!」

「……何が？」

訝し気な声の上から降って来る。

駄目よ、今顔を上げたら至近距離だわ。まだ赤いはずの表情を見られたく無くて俯いたまま言葉を続ける。

「早くから出掛けたいなんて言っていないわ……私は貴方の用事が済

んでからでも構わないのよ？」

「……本当に？」

それでも心配そうに覗き込んで来たファドに、こくこくとうなづいてしまった。

「貴方達のお仕事の邪魔をするつもりは無いって、ずっと言ってるでしょ。それに……」

「それに？」

「……何でもないわ」

私は貴方にこの街を案内して欲しいの。

その言葉をかろうじて飲み込んだのに、ファドラインにはそのニユアンスは伝わってしまったみたい。

途端に明るい笑顔で聞き返されて、ついそっぽを向いてしまう。

「そう？じゃあ……取り敢えず食事に行こう。お腹空いてるだろ？」

心なしかほっとしたような明るい声でそう言うと、ファドラインはまだ彼の背中を捕まえていたままの私の右手を如何にも自然に……当然とでも言うような仕草で握りしめて階段へと向かう。

私の手を握りしめるその温かくて大きめの手に、何故だか喉元まで出かかった抗議の言葉を飲み込んでしまった。

それが自分でも判らないの、どうして？。

黙ったままでエスコートされるように階段を下りた所で、ようやくファドラインは手を離してくれた。

手のひらが離れたその場所から温もりが逃げ、余計に彼の手の温かさが惜しまれてしまう。

その手をもう片方の手で包み込みながら、ファドラインに続いて食堂（といっても昨夜の広間だったが）へと扉をくぐる。

既に食事を済ませたのか、隊商で一緒になっている顔見知りの男達が幾人か私やファドラインに挨拶をして部屋を出ていく所だった。さらに彼等はそれぞれ少しだけ、ファドと言葉を交わしていく。

途切れ途切れに耳に入るその聞き慣れない単語から推測すれば、地名のようだから今日の予定なのかしら。

その隙間から室内を見回すと、他にも数人が食事をしており、昨夜と同じ席にファドラーンの父親が座っていた。

彼は既に朝食を済ませたようでお茶のカップを片手に、そして何かの書類をもう片手に持ったまま、関心はその書類の上に在るらしかった。

「おはようございます。父さん」

「ああ、おはよう」

元氣なファドラーンの声にちよつとだけ顔を上げて息子を見遣り、彼はその後ろに立つ私に気付いたようだ。

「おはようございます」

先手必勝とばかりに、にっこりと微笑みで彼の鋭い視線を受け止め、ユグドラセア風の淑女の挨拶を、ファドラーン曰く優雅に腰を落とす仕草が印象的なのだそうだが……披露する。

022 地図

正式な挨拶を座ったまま受ける訳にも行かなくて、ファドラーンの父も立ち上がり軽く上体を傾けて返礼すると、初めの一瞥とは随分違う柔らかな表情で口を開いた。

「御客人も……昨夜は良く御休み頂けたかな？」

「ええ、とても。上等なお部屋と、奥方のお心遣いに感謝いたしますわ」

昨夜の初対面の鋭い第一声からは想像も出来ない位思いがけずも優しい言葉だったが、それを意外に思った事は顔に出さず、昨夜の衣装の礼を口にする。

「それは良かった。さあお座りなさい、それで……朝食の後の予定はどうなっているのですか？」

「……それは後でご子息と相談するつもりで居るのですけれど」

ファドラーンに招かれるまま彼の父の隣の席へと腰を下ろし、はじめて近くに接するファドラーンの父に緊張を隠せない。

しかし当の本人は随分と柔らかな口調で尋ねてくれる。

「今日の午前中はこいつから旅の報告を受けねばなんので……この街を見物なさりたいのであれば、他の誰かに案内させましょうか？」

「午前中は私もゆっくり過ごしたいと思っていましたから、どうぞ御気遣い無く。ただ、この街の地理を大体は頭に入れておきたいので……手ごろな地図をお持ちでしたら貸していただけますか？」

それぞれ席に落ち着いたのを確認してから、厨房の女性が私とファドラーンの2人に朝食を運んで来てくれる。

その間に説明をしてくれていたファドラーンの父親の声に申し訳

無さそうな気配が潜んでいるのを嗅ぎ付けた私は、それに付け込む
というと聞こえが悪いのだけれど、さり気なくそうおねだりをして
みた。

少し眉を動かしたファドの父は、次には再びにつこりとしてうな
づいた。

「判りました。後ほどお部屋へ届けさせましょう」

「ありがとうございます」

すこしほっとした様に礼を言うのと、いやいや、と鷹揚に彼はうな
づいて、席を立った。

「では一足先に失礼する。ファド、部屋で待っているぞ」

「……はい」

水を差された、とでも言うような少しトーンの落ちた返事を返す
ファドラインにおや、と視線を向けると肩をすくめた彼は言う。

「早く来いってことだよ。結構せっかちなんだから」

折角君と2人で食事なのに、と付け足す。

「仕事の邪魔をする気はないって言ったわよ？ お父様をあまりお待
たせしない方が賢明ね」

これ以上ファドラインが羽を伸ばし過ぎないようにと牽制して、
取り敢えず目の前の朝食に取りかかった。

なるべく言葉も少なめにして、彼の方が早く食べ終わるようにと
自分の進み具合を調整する。

故国での正式な晚餐の席では一緒に会食する他の客たちとペース
を合わせる必要があり、それをマナーとして身に付けざるを得なか
った。

そのお陰で自分の食事の進み具合を調整するのは容易い。

想定通りに私より早く食事を終えたファドラインが手持ち無沙汰
な仕草を見せた時を見計らい、彼を食事の席から立ち上がらせた。

「私はもう少しお茶を頂いてから……部屋に戻るわ。それに厨房の貴方のお母さまにご挨拶をして、さっきのスープのレシピを教えて頂けるかどうか聞いておきたいの」

とても美味しかったから、とにっこり笑顔を向けられては彼も仕事に向かわざるを得ないわよね。

しぶしぶ背を向けようとした彼に「お昼からは楽しみにしているから、お仕事がんばってね」と駄目を押す。

「じゃあ、後で」

その言葉ににっこりとして部屋を出ていったファドラーンを見送ると、それまで優雅に味わっている……ように見せていたお茶のカップを皿に戻し、そそくさと席を立つと厨房へと向かった。

「おはようございます。良く御休みになられましたか？」

「おかげさまでゆっくり休ませて頂けました、ありがとうございます」

厨房を覗き込んできよろきよろとしていた私が自分の視界にファドラーンの母ルツィエラを見付けるのと、彼女が私に向かって口を開いたのはほぼ同時だったろうと思う。

先に声をかけられて一通りの挨拶を交わすと、ルツィエラは少し意味ありげな笑顔を見せていた。

「あの2人をなかなか上手にあしらって居たわね。イスナードのあんな顔見るのは久しぶりよ、いつもはラウにやんわりやられているのだけね」

そういつて、如何にも見物だったとばかりクスクス笑う。

「御覧になっていたのですか？……ご免なさい、あしらうなんてつもりは無かったですけれど……」

自分の夫がこんな小娘に軽くいなされているのが面白いのかしら、と不思議に思うけれど彼女は気にするふうも無い。

「気になさらないでね、言葉のやり取りを楽しむのが好きなのよ彼も、ラウもね。主人も貴女がどんな方か知リたかったのだと思うわ。皆が違和感なく同行を認めた女性なんて初めてだもの」

「……初めて？」

さらりと口にされた言葉にどう反応するべきなのか、咄嗟には思いつけなかった。

「ええ、そうなの。短距離のお客を請けた事は有ったけれど、この屋敷に泊めた事は無いのよ。それに女性としては貴女が最初ね。」

「それではやはりご迷惑だったのではないでしょうか……？ 街の宿を紹介して頂ければ済む事だったのだし」

「フアドラーンが先にあなたを誘ったのだから、問題は無いでしょう？ こちらの都合も悪くないのなら、ラウだって反対はしないわ」
思わぬ話にうろたえてしまっていると、ルツィエラは淀み無い口調でそう答えて、あまつさえにっこりと笑顔で励ましてくれた。

けれど私は何だか罪悪感が拭えないままで、あまりにも深刻そうな表情をしていたのだろうか。

「気にしないでいいのよ？ 貴女がそんな風に沈んでしまっていたら皆が心配するわ。ミシエイルや他の者達も……何だか貴女の事を気にしてるみたいだから」

人気者ね？ と微笑まれては流石に何時迄も落ち込んでは居られない。

けれど、逆に隊商の他のメンバーも薄々は私の素性を、というのか事情を察知していたのだと知って、改めて彼等の優しさが身に滲みてしまった。

だからこそ自分の立場が心苦しい。

シュヴァーゼの藩王はプライドだけは高い男で、何人目かの花嫁

に逃げられたなどは口外はすまいものの、場合に拠っては何らかの口実をつけて私を追わせているかも知れないのなもの。

手配の可能性は考えたく無くて無視してしまったけれど、追われているかも知れない者を同行させるというのは、相当に高いリスクを覚悟しなければならぬ筈だわ。

「……どうして皆……そんなに優しく出来るんですか？私……本当は皆さんに迷惑を掛けるだけかも……」

「大丈夫よ。貴女の心配事はじきに片が付くわ。だから、落ち着いて先の事を考えましょう？」

「貴女もご存じだったのですか？」

自分の母親くらいの歳の女性に労られ、早くに亡くした母を思い出してしまって、思わず情けない声を出してしまった。

「夕べね。ラウがこっそりと教えてくれたわ、貴女の決断と勇気を尊重したからこそ此所まで連れて来たって。皆もラウに倣っただけよ。彼等の決めた事に貴女がよくよしていちゃだめよ」

「でも、私の事なんてご迷惑にしかない筈です。貴方がたは……」

にこやかな彼女の言葉は嬉しかったものの、思い余って口にしてしまった言葉に少しだけルツィエラの表情が動いた。

にこやかな笑顔が少しだけ陰を帯びる……がすぐにその表情は元通りになって、むしろ前よりも楽しそうな表情になった。

「随分鋭いのね、皆が興味を持つ訳だわ。……だからこそ、大丈夫よ。ラウもファドもそう答えるわ、もちろんイスナード……此所の主もね」

……だからこそ？

その意味も理解出来なくて戸惑うばかりの私に彼女は変わらぬ笑顔のまま、ついと動いた両手が肩にまわされる。

そのままポンポンと両肩を軽く叩かれ、肩の力が抜けていくよう

な、そんな感覚に不思議と心が落ち着いた。

「ラウ程ではないけれど、少しは気休め程度にね」

再び視線を合わせてにっこりと彼女は微笑む。

このひとの最大の武器は不思議な力ではなく、この微笑みなのだと悟る。

「あまり疲れも取れていないみたいね。もう少し、お部屋でゆっくりして居ると良いわ。もしも……気が向いたらお昼の少し前に此所へいらっしゃいな、貴女がさつきファドに言っていたスーパのレシピを教えて差し上げるわ」

あれはラウの好きな味なのよ、とルツィエラは少し含みの有る言い方をした。

もしかして、彼女は私がラウドラチャクリンを気にしているのだと勘違いしていたのかもしれない。

けれどその思い違いを訂正する、その行為自体が自分も彼等に何らかの思惑があるのだと告白するようなものだと思えて、敢えて何も言わず……頭を下げるとその場を後にした。

けれど厨房を出て階段に辿り着く前に今度はファドランの父の使いに、と言っても隊商で顔も名も知っている男だが、に呼び止められる。

「イエライシャさん、旦那様から地図を預かってきました。この首都の周りだけのものですが、これでいいですか？」

「……ああ、ナーフィーさん、有り難うございます。それで……ついでも悪いのですけれど、地図の上での此所の場所も教えて下さいますか？」

「そうですね、そこから始めましょうか」

自分のいる位置すら知らないのに地図を手に入れても仕方がない。うなづいた彼は広げたその地図に指を走らせ、この屋敷の大体の

位置を指し示す。

私がそれを目で追っているのを確認すると、そこから右……東だ……に大きな区画を指し示して言った。

「ここがこの国の王の住まいです。アルハヨート宮と呼ばれています。四方に大きなミナレット……尖塔……があるので目印にはちょうど良いでしょう。それからこちら」

と地図の反対側の方角へと大きく指を滑らせる。

「描かれては居ませんが、西の方にマチャプチャレが見えますから、宮殿と共に覚えておいて下さい。これで迷いませんよ」

マチャプチャレ……バーラートからの道中に教えてもらった山の名前だわ。

魚が水をはねる時の尻尾の形に似ているからと水が撥ねる時の名を付けられたと言う、なんだか可愛い名前だが、本物は天を突く程に壮大な権高い峰だったわ。

このアルマンスールの屋敷がある通りの名を見つけ、ナーフィーに笑顔で礼を言った。

「覚えておきますね、ありがとうございます。」

「……いいえ」

少し照れたようにはにかんだ笑みを返して彼が行ってしまうと、私も自分に宛てがわれた部屋へ戻り、低いテーブルの上に地図を広げる。

さっきの彼に教えられた通りにして方角を確かめると、通りの名と大きな街路の形をおおまかに頭に入れようとにらめっこを始めた。

023 危惧

「もうじき昼食の時間だそうですよ」

朝から俺と親父が籠っている書斎の扉が軽くノックされ、聞き覚えのある声がそう告げる。

何も答えなくても扉が開いて、早朝から外出していたラウドラチャクリンが入って来た。

そう伝えてくれとルツィエラに捕まった……と苦笑する彼に、申し訳無さそうな表情で親父が視線を向ける。

「ファド、報告は済んだのか？」

親父の仕事机の上に広げた書類を見遣ってから俺の方を向いてその口を開いたラウドラチャクリンに、ようやく親父は意を決したかのように重い口を開いた。

昨夜からずっと訊ねたくて堪らなかった事柄だろう。

「ヴァルさま……あの娘御をどうなさるおつもりなのです？かなり派手に我々の痕跡を残しておると言うのに、どう片を付けると……」
「大丈夫だよ、イスナード。ジャヤルの主に話を通るように手配して来たから、後は彼が幕を引いてくれるはずだ。元々彼はシュヴァーゼの王を煙たがっていたから良い口実だろうし、彼が派手に動けばこちらは霞んでしまうだろうよ」

すこしばかり荒い口調なのは事態の成り行きを案じての事だろうが……何より目の前の主君の安全に殊の外気を使っている親父らしい態度だ。

それを軽い口調でさらりと受け流して、にやりと笑うヴァル……チャクラヴァルティンはいつもの事ながら飄々としたものだ。

「シュヴァーゼの王が、数多い妻妾の一人にユグドラセアの貴族の娘を加えようとして……失敗した話はどうか随分有名になっているようだ。逃げ出した娘が此所に居る事には今の時点で気付いているものは居ないようだし、このまま彼女にはルクアディナルファに行って貰おう」

「しかし、いずれ明らかになる事でしよう、それは。その時には？」
かなり食い下がる親父に、ラウドラチャクリンはちら……と一瞬こちらに視線を向ける。

「彼女次第だよ。元々彼女はシュヴァーゼの王から身を隠す為に出奔したのだが、そのままある場所を捜す気になったのだと言っていた」

「場所……ですか？」

「そうだ。この辺りで囁かれる伝説の王国とやらをね」

またしてもあっさりとした口調の彼に、親父は今度こそ本当に血の気をなくした。

思わず……だろう、机に身を乗り出す。

「まさか……偶然そんな娘と貴方が出会ったと言うんですか？ 本当に、どこかの探索者では？」

「イスナード……お前頭堅過ぎるぞ。ルツィエラに聞いてみるが良い、奥方の方が正確に現実を把握している」

「ヴァルさまっ！」

なおも言い募る親父に言い聞かせるように、変わらぬ穏やかさでヴァルが言葉を続ける。

「ユグドラセアの娘については、本人が望むのならばフィルダウスへと招いても良いと思っていますよ。身元引き受けの保証人にはフアドラインが立候補してくれるだろうし」

意味ありげな彼の言葉に、親父の視線が改めて俺に突き刺さる。
自分の息子の存在をたった今思い出したような顔だ。

それにしても、その拍子抜けしたような表情は勘弁してくれ。

「御身様のお側に置くのだと思いましたのに。正妃か愛妾かはこだわりませんが……ようやく身を固めて下さるのかと……陛下もお喜びでしょう」

「おやおや、お前も早くわたしを国に連れ戻したいクチらしいな」肩をすくめる彼に、アンタはまだ運命の相手に出会ってないだけでしょ、と心の中で突っ込みを入れてみる。

自由に居る為に独り身なんだよ、と口癖のように繰り返す彼だが、それが本当はただの建前だと俺は知っている。

いつも馬の世話とかを口実に一人で居るのを好むのも、何かを感じしようとするかのように……知覚の全てを大気に委ね……その何かを求めるように常に感覚を研ぎすましているからだという事を。

それはひどく無防備になる一瞬でもあり、無謀とも言える危険な行為だと言うのに。

危険を覚悟してそこまで捜す程どんな深い事情や思い入れがあるのかは知らないし、聞いた事も無い。

……がもしも彼がそれをついに見つけた時、きっと俺には判る、と変に自信があった。

そして彼がそれを望んでいるのなら、手に入れる為の手伝いをするのは俺だとも、勝手に決めてもいた。

「取り敢えず、ルツイエラからの伝言は伝えたよ？」

「あ、じゃあイエライシャを呼んで来なきゃ」

これ以上の追求はご免だと、部屋を出ようとした彼に続いて俺も部屋を出ようとした。

「彼女なら母上と一緒にだったよ」

「……え？」

振り向いてそうラウドラチャクリンが言う。

瞬間事態が飲み込めなかった俺に、待ったを掛けるように後ろから親父の声が掛かった。

「……ファドラーン、もう少し説明が欲しいんだがな」

「あ？はいはい。判りました」

なんとなく堅い声だが仕方ないか。

少なくとも俺の色恋沙汰をフィルダウスの国内に限って黙認して来た親父には説明する義務があるだろう……と腹をくくる。

それにしてもヴァル……ラウドラチャクリン！

ちよつとバラすの早過ぎないか？

……せめて彼女が本当の返事をくれる迄隠しておいてくれても良いだろう？

既に間口から姿を消してしまった上司にそう恨み言をつぶやきながら、もう一度きちんと扉を閉めると、室内の父親へと向き直った。
「どちらが先にその気になったのかは知らんが、彼女はお前達の素性を何処まで把握しているんだ？」

さっきの反応から推しても、開口一番に反対するかと思った親父だったが、理性的な発言だった。

取り敢えず今の所は。

「残念ながら……まだ俺達は本当の誓いを交わした訳ではないんですが、惚れ込んだのは俺が先ですかね。何だか今まで周りに居なかったタイプだったんで。彼女はヴァルさまになびく素振りがなくて、それで興味を持ったのかな。はじめてみましたよ、そんな女性」

俺がいつも一緒に居るラウドラチャクリンに外見上の……いや、それだけでも言えないが……コンプレックスを抱いているのを薄々気付いているのだろう、親父は少し眉を動かした。

「なるほど？しかし私が知りたいのはだな……」

「判ってますよ。彼女が先に気付いたんです、俺達の背後をね。まあ、ヒントは幾つか出してあったんですが結論を出すのは……割と早かったと思いますよ。ただ、ラウや皆の本当の身分とかは判っていないでしょうね。俺としては気付かれたのを口実に口説き落とそうと思ってるんですが……他にも何人か彼女に気のある奴が居るみたいなんで、競争率は高いかな。ちょっと厳しいかもしれないですね」

あっさりとした物言いの裏を読んでいるのだろう、親父は厳しい表情を崩さなかった。

「執着しているのかと思ったらそうでもない……ように見せる時程、お前がしつこいってのは儂だって知っている。が、正直な所あまり賛成は出来ん。他国者だからと言うのではないが……あの娘の身寄りが健在で、尚且つトラブルを抱えている……それが儂に取っての不安要素だ」

「そう言うだろうと思っていましたよ。しかし、彼女の問題が解決すれば良い訳でしょう？まあ……家族が居ると言うのはネックですが、今回はヴァルさまが随分協力的なので何とかなるでしょう」

「あの方は面白がっているだけだよ。ルクアに戻れば心配事だらけだ……楽しめるうちに楽しんでおくのが彼の主義だからな。ついでに上帝をイライラさせるのも好きだから、おまえがしっかりと手綱を取っておかねば。フィルダウスの為にも」

「……心配事って……祭祀王様はやはり相当御悪いのでしょうか？」
影を帯びた俺の低い声に、親父は渋々といった顔でうなづく。

ルクアディナルファの主、聖職者であり最高権力者である祭祀王が長い病の床に在るのは周知の事実だが、此所しばらくは安定していた筈だ。

だからこそ彼の身を案じていたラウドラチャクリンがバーラートまでの旅に出る気になったのだ。

ジャヤルの王とも協議を重ねる必要のある交渉事が山積しており、思ったよりも時間のかかる旅になってしまったのは否めないが。

「多分……既に星を見る者、未来を視る者、そして気配を探る者などが召集されているだろう。いつ王が崩御されてもその転生の者を探索出来るようにな。ヴァルさまもそれには気付いておられような」

「……でしょうね」

神妙な顔でうなづいた俺をもう一度眺めて、親父は一つため息をついた。

「奥手だと思っていたお前がいつか……何処かの令嬢を連れて来るだろうとは思っておったが、随分遠国の民を選んだものだ。まあ……彼女の身の整理がきちんと付けられるようならば、お前の選択に文句は言わん事にする。これが如何に譲歩した返事かは判っておろうな」

親父の言葉に少しばかり頬が緩みそうになったのを目敏く察したのか、容赦のない次の言葉に正直……げんなりしてしまった。

「だが、お前は仮にも次代国王の推薦に拠る近衛の長だ、状況は樂觀出来るものではないのだから色恋に迷って任務をおろそかにするような無様を晒すでないぞ？失態を晒すは父として、近衛の統括責任者としての儂が許さぬからな」

「……はい、了解しています」

殊の外厳しい言葉だが、無理も無いと納得して返事を返す、溜め息混じりではあったが。

親父が継承しているアルマンスールの家門はラウドラチャクリンの父上だった前王に深い縁があると言う。

今ですら現王ではなく次代国王に忠誠を捧げていると大っぴらに揶揄される事もあるくらいだ。

勿論それを否定するつもりは無いが。

何食わぬ顔で食卓の用意された部屋へと父親と共に入り、先に座っていたラウドラチャクリンが軽く手を挙げて寄越すのを目の端に捕らえて、そのひとつ隣へと座を占める。

なおも俺がきよろきよろしていたのが面白かったのか、ラウドラチャクリンの笑いを含んだ声が疑問に答えてくれた。

「彼女なら今厨房に居るよ。どうやら……ルツィエラを手伝ってくれているらしいね」

なかなかやるね、と続いた言葉にどちらの女性に向けたものなのか……を計りかねて見つめると奴は再びにやりと笑みを浮かべて、だんまりを決め込んでしまった。

そうしている間にも昼食が運ばれて来、俺の前にトレイを置いた女性の顔を見上げてちよつとどころかなり驚いた。

肩より少し下の長さの髪を後ろで括り、如何にも動きやすそうなシンプルなドレス姿の彼女は……他の厨房の女性達から借りたのかお揃いのエプロンで給仕役をこなしている。

「イエライシャ……何をしていたの？」

「あら、朝言わなかったかしら。教えて頂きたいレシピがあるって……？折角だから実践で教えて頂いたのよ。たぶん、もう覚えられたと思うわ」

驚いている俺に彼女は余裕の表情で答えをくれた。

「随分慣れた感じだね。ユグドラセアの貴族女性はあまり厨房には立ち入らないかと思っていたよ？」

「長い間バーラートに居たでしょう？自分達の故郷の食事が懐かしくなる時もあったのよ、お陰で料理の腕は上がったわ。私も姉もね」

感心したふうのラウドラチャクリンの言葉にイエライシャの頬が微妙に緩む。

一度厨房へと戻った彼女は、自分の分の昼食を乗せたトレイを俺の隣の席に置くと、エプロンを外して席に着いた。

食事を前にして、卓の上に軽く肘をつくと両手を組み合わせて額を寄せ、旅の間に何度も見かけた食前の祈りを捧げる。

祈りを終えて、視線が合うと、熱心な信仰者と言うよりは身に付いてしまった習慣のようなのだと彼女は笑った。

「私たちの屋敷の女中頭が、行儀作法にはとても五月蠅かったのよ。子供の頃にさんざん仕込まれたわ」

俺の視線に気付いて、その頃には既に母親が病の床にあったので……と、懐かしそうに子供の頃の話をする彼女に微かな不安を感じた。

自分が覚悟を決めたなら何処へでも攫って行っていい……そう確かにイエライシャは言ったが、断ち切る事が出来るのだろうか……。過去の自分とそして家族という存在を。

024 同行

昼食の後、約束していた外出の為に厩に面した中庭でファドラーンを待っていた私は、ラウドラチャクリンとファドラーンの2人がそろって屋敷から出て来たのを見て、正直複雑な気分になった。

仲良し兄弟なのは良いわよ？けれどデートにも父兄同伴ですか？……ってゆーか何処の箱入りお坊っちゃんですか貴方は。

自分でも良く訳の判らない突っ込みを胸の内に入れ、それでもやもやした感情を持て余しながら2人がその視界に私を捉えるのを見守った。

2人の表情は……相変わらず何を考えているのか読み取りにくいラウドラチャクリンと、少しばかり仏頂面のファドラーン。

けれど私を見つけたのだろうか、その曇った表情がさっと、一瞬で笑顔に変わる。

それがまぶしく感じられ、ああ……私はこの人の事を相当気に入っているのだと改めて自覚してしまった。

ラウドラチャクリンは相変わらずで、視線を私に向け口の端を軽く上げて見せるとそのまま馬屋へと入って行ってしまう。

隣に来て立ち止まったファドラーンに視線で問いかけると、少しばかり複雑な口調で返事があった。

「あいつとは途中まで一緒に行く事になると思うんだけど、あまり気にしないでくれるかな？」

「何を気にするって言うのよ？」

「うん……まあ、いろいろとね」

歯切れの悪い返事をいぶかしみつつも馬に鞍を置き、ラウドラチャクリンは彼の愛馬ヴァージャで、私とファドラーンは相乗りで彼の馬に跨がった。

夕食前には戻る予定だし、そんなに遠出をするつもりも無いのだろうと見当を付けると、2人の乗った馬が店の前の通りを抜けて大通りに出た所で、ごそごそと地図を取り出す。

お昼前にイスナード殿から借りた地図を忘れずに持って来たのよ。

きよろきよると辺りの建物を見回して……その隙間から覗く王宮のミナレットを見付けると、手元の地図を回転させて方角を合わせる。

「これで良いかしら？何処まで行くの、ファド？」

「あ、うん……と、こっちを経由して王宮へ行こうかと思ってる。

王宮の前のバザールが一番大きいからね」

地図の上を少し迷うように彼の指が動き、最終的には王宮へと行き着いた。

途中でファドラーンの指が……動揺したかのように……迷った辺りの行程が掴めなくて聞きただそうとして、斜め後ろへと首を廻し、至近距離で彼の頬に自分の鼻を当ててしまいそうになった。

しまった、相乗りだったって事をすっかり忘れていたわ。

背後から私を覆うかのような彼の体温を感じているのに、それに違和感を抱けないくらいに彼が常に身近に居ると言う事が当たり前になってしまっていたのだ。

「……何？今ここで返事をくれるの？」

「……ちっ違うわよっ。ちよっとうっかりしてただけなの」

何だか嬉しそうなファドラーンの言葉に……売り言葉に何とやら……力強く否定してしまってから過去の発言を思い返す。

確かに私が以前口にした言葉だけど、本当になんて大胆な事を言ってしまったのだろうと、気恥ずかしさに今さらながら真っ赤になるのを止められないわ。

「なあんだ、残念」

しれっと肩をすくめるフアドラーンを赤いままの頬で睨み付けると、背後から畳み掛けるようにラウドラチャクリンの声がする。

「……そこで仲良くわたしに当て付けるんなら、わたしは別の道を行く事にするが?」

「何それっ!」

この状況を明らかに面白がって居そうなラウドラチャクリンの言葉について語気が荒いのは、照れてしまっているからだちょっと心では把握している。

けれど素直になれないまま態度に出てしまうの。

自分の事を意地っ張りだと思っては居なかったが……でもまだフアドラーンの言う「本当の返事」は返せない。

まだ……自分自身にすらこの先の自分というヴィジョンを思い描いてやる事が出来ずに居るのに、どうやって返事が出来ると言うのだろうか。

「ラウ……お前が一人できちんとケサルの所へ行って、用事を済ませて来てくれるんなら別行動は大歓迎なんだがね」

「あそこは色々と煩わしいんだ。出来れば行きたく無いんだが……」
ちよっと困ったような溜め息混じりのフアドラーンの言葉に、珍しく嫌そうな表情でラウドラチャクリンが返事を返す。

「仕方ないだろう。彼はあそこからはあまり出歩きたがらないし、お前さんをご指名なんだから……こっちの仕事が滞るのも困るから付き合っているんだよ? そうでなければ昼間とは言え御婦人を連れてあんな所へは行きたく無いな」

「……そんな所へわたしを放り込むのは平気なのか?」

ため息をついて恨めしそうにフアドラーンを見遣るラウドラチャクリンは、まるで駄々を捏ねているようにも見える。

「ケサルの所の者達は何時だってあんたを大歓迎してくれるんだから、良いんじゃないのか」

言い募るラウドラチャクリンにあっさりと言葉を切り返して、フアドラーンは再び馬を進めはじめた。

諦めたのか黙ってラウドラチャクリンもその後が続く。

暫く規則正しい馬の揺れに身を任せ、単調な歩速と2人乗りの気易さから……一人乗りでうたた寝なんて落馬したいと言ってるようなものだし……少しばかり眠くなりかけた所でフアドラーンに肩を突つかれ、周りの街の雰囲気少し、奇妙であるのに気付いた。

昼の光で視ると、少しばかり色のあせた装飾の施された看板の掛かった建物はきちんと戸締まりがされ、留守のようにも見える。

けれどこの通りの店が殆どそんな感じで店じまいされた状態であるのを見て、流石に気が付いた。

この辺りの店は他の通りの昼間に商いをする店とは違い、夜に開くのだ。

つまり……娼館とか、夜の商売を主とする一角なのだ。

「昼間でも、一人でこの辺りには近寄らないこと。理由は言わなくても判るね？ 君に無用なトラブルに巻き込まれて欲しくは無いからね」

耳元で念を押すようなフアドラーンの言葉に神妙にうなづきながらも、耳元をかすめた彼の吐息にちよつと鼓動が早くなってしまうのは、黙っておく。

「でも、この辺りなの？ ラウが用事のある人って」

「ケサルは……ここら辺りでは結構ランクの高い娼館の主人なんだ。昔なじみと言うのか……喧嘩友達ってやつかな」

真っ昼間という時間を考慮してもかなり如何わしい場所への立ち入りに、無意識に植え付けられてしまっている信仰上の潔癖感からか、私の声はかなり堅い口調だったろうと思う。

けれどそんなそんな口調にはお構い無しでフアドラーンは再び黙々と馬を歩ませ、勿論いくらか仏頂面のラウドラチャクリンがそれ

に続くのだが、じきに構えの大きな建物の前に馬を止めた。

確かにそこは今まで通り過ぎて来た建物とはかなり違うしつかりとした造りで、高級感すら漂っている。

夜の帳が降りる頃にはひととき華やかに明かりが灯され、着飾った美しい女性達が客をもてなすのだろうか。

そんな事を考えながら建物を見上げていると、二階の端の窓に人影らしき動きを見つけた。

……どうやらずっと開け放たれていたらしいその窓からひよいと一瞬だけ人の顔が覗き、又再び室内へと隠れてしまったのだ。

「いま誰かが二階に居たわ？」

「だろうね。……じきに出迎えがくるよ」

ファドラーンに手助けされて馬から降り、見たものを告げる。

しぶしぶといったラウドラチャクリンの返事に何となくおかしくなって、唇に吾知らず微笑みが浮かんでしまう。

「イエライシャ……面白がってるね？」

「貴方のそんな顔見たの初めてかも知れないのだもの……いけなかった？」

「まあ……君の好きにすれば良い」

諦めたような声音でラウドラチャクリンはそう答えると馬から降りて、少しばかり重たい音で開いた扉の方へと向き直った。

「よう、相変わらずの仏頂面だな。お供連れとは大層な身分だ……おや、美しいご婦人も一緒とは増々良いねえ」

開けられた扉から出て来たのは、細身ながらがっしりとした体格の男性だった。

ケサルというのは彼の事なのかしら、歳の頃はファドラーンの父親とさほど変わらないような印象だわ。

しかし軽口を叩きながらも、男性特有の、女を品定めする時の目付きで私に近寄ろうとして来る。

まっすぐそんな視線で見つめられ、女衞と呼ばれる類いの男に一度ひどい目に遭わされかけた事を思い出してしまい……私は身が竦んで動けなくなってしまう。

「……口を慎め、彼女は我々の客だ。今日はファドがこの町を案内する事になってる、恐がらせてどうするんだ？」

途端にラウドラチャクリンが男に制止を掛けてくれたが、口調からするとどうやらこの娼館の主ははふざけていただけらしい。

ようやくそれが理解できてなんとか緊張を解こうと大きく息をし、そのせいで少しよろめいてしまった。

けれど、隣りに居たファドラインがすかさず支えてくれる。

「ありがとう。少し前の事を思い出して動揺しちゃったみたい……ごめんなさい」

「謝る事じゃない。それに……君の嫌な思い出に配慮出来なかった俺が悪い」

心なしかファドラインの声が堅いのは、今のこの人……ケサル……の行動を歓迎していないから？

怒っては居ないみたいだが堅い表情になってしまった彼は、私の腰の辺りに手を回したままでケサルの方へと向き直った。

「この女性は一応俺の保護下に有るので、もしも傷付けるような事が有れば、俺と手合わせ頂く事になりますよ？」

「お前さんとか？そりゃ面白いが……お前のは爺さんの太刀筋そのまんまだから、長い勝負になるだろうなア。老骨には響く、辞退しておくよ」

にやりと笑ってケサルはそう言うのと、もう一度こちらへと視線を向けて来た。

自然と身構えた私に今度彼が見せたのは、意外にも優しい笑みだった。

少し……ラウドラチャクリンが以前見せてくれた笑顔に似ている………と思ってしまうのはどうしてだろう。

「その娘が例のバーラートからの客か？今日は名前は聞かん事にするよ、事が片付いたら改めて紹介してくれ」

今度はもう少し友好的に行こう、と彼はまた笑うとラウドラチャクリンに向き直った。

「さて、用件に掛かろうか。少しばかり長引くかもしれんが……なに、疲れたらイシャーナが労ってくれるさ」

そういつて館の中へと入ってゆく。

仕方無さそうな顔でその後に続いたラウドラチャクリンが振り返り、何か言いたげに口を開きかけたが……結局何も言わずに片手を挙げただけで扉の奥へと消えて行った。

「何か言いたかったのかしら」

「……まあ……見当は付いてるよ。さ、行こう」

好奇心一杯の顔で見つめてみたがファドラーンは答えてくれる気はなかったらしい。

さっさと私を馬に上げると、いつもの颯爽とした身のこなしで背後へと跨がってしまう。そうなると問いつめようにも言葉を交わすのすら……至近距離過ぎて……どうにも上擦ってしまう。

なんとなくうやむやにされたと言う印象のまま、私達は今日のいわゆる観光へと出発したのだった。

言葉には出さず、背中でラウドラチャクリンが伝えたのは……今夜は帰して貰えないかも知れない……と言う、口にするには時と場所を選ぶ言葉だった。

ついでに相手も選ぶよな、と、自分の前に座り明確な答えを得られなかった事で少々ふて腐れているイエライシャの後頭部を見つめる。

時々うなじが覗くその首筋にそそられてしまい、密着出来るからと言う、安易で下心丸出しの理由で2人乗りにしたのを痛く後悔して……明日も一緒に出掛けるのなら馬は別々にしようと真剣に考えた。

そのまま少しばかり重苦しく感じられる沈黙を伴って、俺達の馬は程なく王宮の正門前へと到着する。

道の幅はかなり広いもののだが、両側にずらりと軒を並べる商店や人々のにぎわいで狭く感じられる程だ。

天気の良い昼下がり、人出は最高だろう。

知り合いの店に馬を預かってもらい、この界限の商品などを見ながら散策する事にした。ようやくイエライシャの機嫌も戻ったように、表情もかなり柔らいでいる。

「あさってから旅に必要なものを手に入れておかなくてもいいの？」

特に買い物をする訳でもなく何軒かの店を冷やかした後で、並んで歩いていたらイエライシャはそう訊ねて来た。

「いつも必要な物資の調達は国境前の町でするんだよ。ルクアディナルファからの注文品やらかさばるものも多いし、なるべく身軽な方が動きやすいからね」

その言葉をどう受け取ったのか少しばかり神妙な表情でうなづいた彼女に、立ち入り過ぎだとは自覚していたもののつい言葉が続けてしまった。

「それでもイクシールとルクアディナルファの国境から暫くは……日中でもかなり厳しい寒さで有名な土地柄だ。君の防寒用の衣服とか……身に付けるもので質の良いものはここで手に入れた方がいいと思う。一応質や種類を見ておいて、帰ったら母さんと相談するといいよ」

「……そうするわ」

ちよつと頬を赤らめて返事をするのが妙にかわいい。

「じゃあ行こうか？」

早速手近な衣料品を扱う店に入って、いろいろと見て廻った。

女性の衣類なんて正直あまり詳しくは無い。肌に直接纏う物なら尚更だ。

対応に出て来た店の女主人とイエライシャが何やらそういった物について話しはじめたので、男の俺は居心地があまり良く無い。

如何にも手持ち無沙汰という風情で暫く他の商品を物色していると、ようやく話が済んだのかイエライシャが戻って来た。

「どうだった？」

「ありがたい、随分待たせたでしょう？……でも聞いておいて良かったわ、ルクアやこの辺りの女性の衣装はバーラートとも随分違うようなの。私の国とはもっと大違いよ」

少しばかり驚いているらしい彼女は、次には上目遣いで見上げて

来る。

「貴方は知ってたの？」

「……まさか。自分の国の女性の服すら詳しく無いのに。ただ、気候が大分違うから……念のためにと買ったんだよ。母さんも気にしていたみたいだったし」

母を引き合いに出すと、何とか納得してくれたらしい。

実際……この辺りの女性の肌着を脱がせるといふような色っぽい行為に及んだ事が無いから、さっぱり判らないのだ。

「次は俺の用事。付き合ってくれるだろう？」

何種類かの衣類を頭の中の買い物リストに加えたのか、少しばかりうわのそらな彼女の手を引いて……それに抗議する気配すらない……いくつかの区画を通り過ぎた。

この辺りは細工物を得意とする店が多く、先程の通りとは客層もかなり違う。

それに気付いたのかイエライシャもきよろきよと周りを見回している。

「このあたりは貴金属の加工業者が多い辺りなんだ。受け取る必要のある物があってね……それが済んだらもう今日は帰るよ。暗くなると物騒だ」

納得したふうの彼女を連れて細い路地を幾つか曲がり、馴染みの店へと足を踏み入れた。

いつ来ても相変わらず薄暗い店の中は、なんとも胡散臭い雰囲気漂わせている。

「おや、こないだ来ていた伝言の予定より早いね。明日辺りかと思っていたよ。」

店のカウンターの奥から店主の親父はちらと……一瞬だけイエライシャに視線を注ぎ、いつもと変わらぬ口調で口を開く。

それでも言葉のわりには慌てたふうも無く、背後の戸棚から布で幾重にも包まれた荷物を取り出した。

黙ったままそれをカウンターの上に置くと、ランプの明かりを強くして、中身を守るかのように重ねて巻き付けられていた布を丁寧にはぎ取ってゆく。

やがてその中から現れたものは、眩い光を放つ大粒の宝石を贅沢にあしらった薬入れだった。

更に石が室内の明かりを受けて輝くのにも負けない程に丁寧で繊細な細工がその周りを取り巻いている。

「注文通りだろう？それだけの宝石を惜し気もなく使っちゃおうってんだから……石に負けるような細工じゃあ駄目だってんでウチの職人が二人掛かりで丹精したんだ。……どうだい？」

「ああ、これなら大丈夫だろう。石の向きも揃えたんだな？」

当然のように尋ねると店主は胸を張って答えた。

「勿論さ、それが出来てなきゃこの石を使う意味が無いんだろう？」

「……確かに」

それを手に取って、光に透かしながら光の当たる方向を変えてみる。

明るく輝く堇色の石のその色がある一点から視ると、一斉に無色透明な光を放つのを確認する。

同じように動かしてイエライシャにも確かめさせると、彼女はかなり驚いたふうに声を上げた。

「どうして？真上から見ると綺麗な堇色の青い石なの……に……こちら

側から見るとまるっきり透明じゃない？」

「それがこの石の特徴なんだ。バーラートの一地方の特産の石でね、堇青石、コーディアライト……と呼ばれている。昔、霧や天候のよくない航海の時には、この石で作った薄い板を使って太陽の位置を確認して船を操っていた……なんて部族も有ったそうさ。羅針盤の石……とも言うんだそうだよ」

「そんな石も有るのね……初めて知ったわ。貴方達はこんな珍しくて高価なものも商うの？」

「状況により……だよ。こう言ったものは利益が大きいものの、客を選ぶから……親父はあまり好まないが、ご婦人には受けがいいしね。きっかけを作るにはいいんだ。現にこれもジャヤルの藩王からルクアディナルファの大貴族の奥方への贈り物なんだよ」

そんじょそこらの石や細工では、目の肥えた人物の歡心を買う事は難しい。

薬入れを再び包み直してもらいながら、ついでのように懷から拳大の大きさの包みを取り出すと店主の前で広げた。

隣から覗き込んでいたらしいイエライシャが、瞬間息をのむのを感じる。

鳩の血の色……と表現される赤い石がその視線を受け止めて一際輝いている。

うっとりしたように囁いた彼女の声に改めてこういった石の……威力を認識した。

「凄い……わね。こんなに透明なそれを見るのは初めてよ」

「大きさもね。これはまだ加工は決まっていらないんだが……持ち歩くのも物騒だから預けておくよ」

正直に言うなら、これはここいらの職人達を手なづけておく為の餌のようなものだ。

ラウドラチャクリンから預かったそれを思いきり良く店主の前に置く、薬入れの包みを受け取り、イエライシャとともに店を出た。

026 家族

イエライシヤの買い物と俺の用事、それぞれを済ませアルマンズールの屋敷に戻ったのは随分と薄暗くなってからだった。

廻りをぐるりと剣高い山脈に囲まれたこの盆地の王国では、日暮れがとても早いのだ。

いつものように店側の明かりは落とされ、馬屋へ通じる木戸には控えめな明かりが灯されている。

「先に部屋へ戻って……じきに食事だろうから、着替えておいで」

中庭でそう言ってイエライシヤを降ろすと、うなづいた彼女が屋敷の中へと入って行くのを確認してから厩へと馬を連れて入った。

その場に残った俺は、いつも通りに馬の鞍や装備を外すとその下の地肌を軽く布で拭いてやる。

毛並みに沿って布を動かしてマッサージするように今日の疲れを労ってやると、馬も耳を倒して心なしか気持ち良さそうだ。

仕切りの中へと馬を入れ、餌を与えてから小屋の中を見回すと、案の定ラウドラチャクリンの乗馬は戻って来ていない。

あのまま彼はケサルに捕まったままかな、とつい苦笑する。

両親や仲間達は事情を理解しているから気にもしないのだが、当然の事ながら何も知らないはずのイエライシヤは奴の外泊にどう反応するのだろうか。

行き先は何と言っても夜の歓楽街だ。その反応を見るのが怖いよな……それとも見てみたいのか、自分でもよく判らない好奇心のようなものを自覚していた。

尤も当のラウドラチャクリンはあの館で難しい顔をして、娼婦ではなく、ケサルとの話し合いに夜を費やすのだろうか。

馬小屋を出ると、細工屋で受け取った荷物を隊商の荷をしまつてある倉庫の貴重品入れに納めて鍵をかけ、夕食の香りに釣られて厨房付近へと足を向けた。

ついでに今夜の入浴の順番取りをするのを忘れていた事に気付いて浴室のある棟へと向かう。

「……おや？」

そこで最初の札が客人のものになっている事に驚いたが、そういえば母さんが今日の一番風呂はイエライシャに使って貰うって言うてたな……と思い出して、その後に続く何人かの札の後に自分の名前の札を掲げた。

様子見がてら食堂に向かおうとして、まだ昼間の外出着のままがかさばる外套を羽織ったままだった己の姿に気が付いた。慌てて二階の自分の部屋へと戻り、寛いだふうの部屋着に着替える。

それからイエライシャの客室の前まで行って、深呼吸を一つ。

先に部屋へ戻っているはずのイエライシャを夕食に誘うだけだろ？と自分に言い訳してるのがかなり情けないのだが、用事もないのに女性の部屋を訪ねる程の図々しさは俺は持ち合わせていないのだ。けれどもかなり根性入れてからノックした部屋はどうやら誰も居ないらしく、応答が無い。

別に約束していた訳でもないのに、すっぱかされたような気分であたたび階下の食堂へと降りて行く羽目になった。

「随分おそくなったのね、馬の世話なら私も手伝ったのに」

案の定、目当てのイエライシャは厨房で母や女性たちの手伝いをしてくれていたらしい。殆ど支度の済んだ食卓に就いた俺の隣へ腰を下ろしながら、親父が現れるのを待つ間にそう口を開いた。

「有難う、でもそれだけじゃなかったから……良いんだよ」

不思議そうな顔の彼女に「さっきの荷物や整理がまだなんだ」と言い訳する。

その言い訳に納得したのかどうかは判らなかったが、次に彼女が尋ねて来るであろう事柄は予想が付いていた。

「ラウはまだ戻ってこないの？」

「そういえば、まだのようだね。でも……遅くなるとは聞いているから……大丈夫だよ」

心配そうな彼女の口調に笑顔でしれっと返事を返しつつ、タイミング良く部屋に入って来た親父と目が合った。

素早くその瞳が室内を一巡して、状況を把握したらしい彼の何食わぬ落ち着いた声が夕食の挨拶を告げる。

いつも通りの風景に何となくほっとしながら食事を大方済ませ、未練がましく酒杯を握ったままの俺はイエライシャの方を見つめていた。

とはいえ今日はラウドラチャクリンが居ないので殆ど素面も同然で……彼が居るとどうしても引きずられて俺も量を過ぎすぎらいが有るのだ……かなり落ち着いて彼女を観察していた。

「そう言えば、ミシエイルさんが居ないわね」

静かに食事をしていたイエライシャはしかし、何気ない口調でそう口にする。

「彼は今朝、一足先に国境の町に向けて出発したんだよ。俺たちとはその町、クム・ウタールで落ち合う事になっているんだ」

「何かあったの？」

「いや、クム・ウタールの手前の村に彼の家族が居るんだ。だから先に行つて、ついでに家族で過ごしてもらおうと思つてね」

「やっぱり彼に案内を頼まなくて良かったわ。でも、なんだかみんな、とても優しいのね」

心配そうに聞き返されたのでつい個人的な事情まで口にしてしまったが、ふわりと柔らかな微笑みを見せてくれたイエライシャに自分でも判る程頬が赤くなる。

「仲間だからね、家族の事も大事にしたいんだよ。それにこれは俺達の上司の方針でも有るんだ」

「上司？」

「喋り過ぎた、ごめん。今はこれ以上は言えないな」

「ああ……そうなのね。ごめんなさい、私は気にしないから」

何となく口にしてしまってから、ハッとしたように俺が謝る。

口をつぐんだ俺に、どことなく申し訳無さそうにイエライシャも黙り込んでしまい少しばかりその沈黙が心に痛い。

「……優しい方なのね、その方は」

しばらくしてぼつりと彼女は言い、笑顔を見せる。

「かもしれないな、だから俺達はその方に忠誠を捧げて行ける。彼が背負う重荷を少しでも軽くしてあげられたら……」と思っては居るんだが、なにせ不肖の部下なんでね」

俺達の上司、つまりはラウドラチャクリンが皆の家族に気を配るのは、今の彼には存在しないそう言った類いの存在に対する彼なりのコンプレックスだが。

肩をすくめてそう答えると、更に破顔したイエライシャを浴室へと促した。

「一番乗りだからって遠慮しないで、ゆっくりしてくるといいよ」
少しばかり気恥ずかしそうな彼女をそう言って送り出すと、俺はもう少し酒杯を傾ける事にして関心をそちらに向けた。

027 束縛と拒絶

昨日と同じように窓からの微かな明かりに起こされた私は、すぐに起き出すでもなくのんびりとベッドの中で昨夜の事を思い出していた。

昨夜のゆったりとした入浴のおかげだろうか、昨日の朝とは違う、緊張も抑圧感も無いさわやかな目覚めだった。

そんななか思いを巡らせたのは一足先にこの屋敷を離れたというミシエイルの事。

彼の家族って、両親と兄弟？

それとも妻と子供とか？

どんな人たちなのだろう、やはりフィルダウスの民なのだろうか。

この街まで一緒に旅をして来た隊商の人達は殆どが独身のようにだった。

皆、とても親切で礼儀正しく、親身に世話をしてくれるのだが、親兄弟の話をしてくれた人は居なかった。

多分家族についてはつきりしているのはファドラーンくらいのもので、ミシエイルに彼の家族の事を訊ねたら、彼は答えてくれるのだろうか。

とりとめも無い事を想像しながらも記憶はその後のファドラーンの言葉に留まる。

「彼が背負う重荷を少しでも……」

そう言っていた彼の優しい瞳に、ファドラーンが上司に当たる人物に忠誠以上に暖かな思いを抱いているのを確信する。

そして、この商家がフィルダウスの何かの組織の末端に過ぎない

のかもしれないとも改めて思い当たっていた。

部下や目下の者への心配りを十分にすると言うことは、並大抵の事ではないのを身をもって知っている。

そして、ただそれが出来るからと言うだけでは目下の者は感謝や尊敬はしてくれても、慕ってはくれないのも。

きつとファドラーン達の上司と言う人は、相当大らかな人なのか、余程の人格者なのではないかしら。

だから私のような何処の誰とも判らない者が彼等の秘密に気付いても、そつとしておいてくれるのかもしれない。

勝手に、そう都合のいい結論を付けるとようやく着替えを済ませ、今度は小走りに厨房へと向かった。

今朝もファドラーンの母達の手伝いをしようと決めていたのだつたわ。

別に彼等の仲間入りがしたい訳じゃないの。

只、この自分への親切なもてなしに何か報いたいと思ってしまったからに過ぎないのだけれど。

それに厨房のルツィエラさん以下数人の女性達は、私を特別扱いする訳でなくごく普通に接してくれる。

「……おはようございます」

「あら、おはよう。今日も手伝って下さるの？」

そうっと厨房のドアを開けて中を伺うと、既に他の女性達はそれぞれに立ち働いている。

その中からルツィエラさんが顔を上げてにっこりとほほえんでくれた。

「お邪魔でなければ」

「嬉しいわ、有難う」

控えめに続けた言葉に、彼女が一段と明るい笑顔を見せてくれて

かなりほっとした。

心得たように予備のエプロンを借りて食堂のテーブルの上にグラスやカトラリーを並べはじめると、一番乗りらしい男が入って来た。やはり此所までの隊商の旅で顔見知りになっていた男性達の一入だ。

「あ、おはようございます、またお手伝いですか？ イエライシャさん」

「おはよう、ヨシユア。ここなら私にも出来る事はあると思って。食事なさるのなら頂いてきましようか？」

早起き、と言うにはどこことなく疲れた表情の男にそう尋ねると、申し訳無さそうに彼は答える。

「準備が出来ているのならお願いします。夜中からラウの使い……で書類を運んでいたので、昼まで休もうと思ってね」

「夜中から？……ってあそこまで？」

ラウドラチャクリンの使いと言う所でつい耳が鋭くなってしまったらしい、しかも彼が行ったのは所謂……歓楽街……だ。

そこで書類だなんて、不似合いにも程があるわ。

「ああ、行き先をご存じなんですね。結構賑やかな所でしょう？ 徹夜するには持ってこいですよ」

「書類を持って？」

ちよつと誤魔化そうとでもしたらしいヨシユアに更に突っ込んでみた。

「ラウ……はね。今もあそこの主と一緒に徹夜組でしょう」
自分の失言を悔いつつもようやく彼は認めた。

歓楽街で夜を過ごす男……と言う浮わついた見せ掛けの影で彼等は何をしているの？

「お仕事なのね？」

「……まあ、そんなところです」

あまり深くは詮索しないぞと言う感じで言葉を向けると、彼はそれにっこりと応じてくれた。

その話はそこで打ち切り、厨房に戻って出来たての食事をヨシユアに運んで行くと、他にもちらほらと朝食を摂りに顔を出す者が増え、彼との話はそれきりになってしまった。

最後の方になってからようやくファドラーンとその父親、イスナードと言う名らしい……が現れ一緒に食事を始めたのが、どこことなく彼等も疲れと言うのか、心配事とでも言うようなものの影をまとうていて声を掛けるのも躊躇われる。

それでも食事を終える頃のファドラーンはいつもの表情に戻っていて、何となく居たたまれなくて厨房に引っ込んでいた私に彼の方から声を掛けに来てくれた。

あらかたの家族が食事を済ませたので、他に持ち場や用事のある女性達は既に厨房を出ていて、そこは私とファドラーンの2人きりのようなものだった。

「今朝は2人とも元気が無いから、心配したわ？」

「それは嬉しいね、夕べは親父と飲み過ぎたみたいだね。でもほら、元気だよ」

「でも、夕べ夜中にラウからの使いで動いていたって、ヨシユアが言っていたわ。その事でなにか問題か心配事でも有ったのかと思っただの」

彼等が私に心配を掛けないようにと装っているのだと察知してしまつて、ついそう口にしてしまいファドラーンが何時に無く真面目な表情になるのに気付いた。

「イエライシャ」

「きゃっ、ちよつとファド？」

ずい、と近付いて来た彼に手近な壁に押し付けられる。

ファドラーンの両手が私の両肩をしっかりと掴んでいて痛い程だわ。

しかしその手の力はすぐに抜け、気が付けば肩口に彼の額を受け止める姿勢で壁へと動きを封じられてしまった。

「君は本当に勘がいいのか、耳聡いだけなのか判らないな。だけど必要以上にあいつの事を気にしちゃう駄目だ」

「ど……うして」

「あいつが、君に変な気を起こしたら困る」

首筋に彼の吐息を感じて必要以上に声がうわずる。

真意を隠しておどけたようにふるまう彼に胸がドキドキして、目の前にある彼の広い肩に両手を廻したのは多分無意識からだったわ。

「やだ、やきもち焼きさん。そうじゃなくて、私は貴方達、皆の事が心配なのよ。隠さないで」

仕返しのように耳元で囁くと、彼が苦笑したのを気配で感じる。

「やっぱり、今すぐ君をフィルダウスへと攫って行こうかな。夜の

……星は無いけど、穏やかな風の吹く静かな国だよ」

「星が無いって……どういうこと？」

「行けば判るよ、来ない？」

戯れ言のように彼が口にした言葉の意味を理解しかねて問い返すが、重ねての勧誘に誤魔化されてしまった。

「……考えておくわ、でもルクアディナルファに行ってからね」

私が彼等の事情に気が付いているとしても、まだ、詳しく教えてくれるつもりは無いのね、と少しばかり悔しくて、素直に返事が出来ずに混ぜっ返してしまった。

はぐらかすような答えにファドラーンは気を悪くする風もない。にっこりと笑って私の頬に触れるような触れないような、いつもの掠めるだけの口付けを落とすと身体を離し、私に自由を返してく

れた。

「俺達のやってる事が、きわどい綱渡りだってことが理解できてるのなら尚更……これ以上、君は関わってはいけないんだ。その方が、何かあった時に君の身を守る事になるんだよ？」

「そんな言い訳で納得出来る訳が無いでしょ？ 私には何も出来ないって、決めつけるような言い方はしないで。私は、自分に出来る事を捜しているのよ？」

聞き分けの無い子供を諭すような優しい彼の口調とその内容に、何かが喉の奥から込み上げて来る。

それが怒りなのか悲しみなのか、よく判別も付かぬまま硬い声で言い返してしまっていた。

だって彼が口にした事に従ってしまったら、私は何の為に家族の元を離れ、放浪と言っても良いようなこの旅に出たのか。

それすらも無駄になってしまう、そんな気がしたから。

「イエライシャ」

「勝手な事ばかり言わないで！ 前には……気付いて欲しかったなんて言ったくせに、今度は危ないから関わるなですって？ そんなの……そんなに器用な事、私に出来る訳無いじゃない。私は貴方にとって都合のいい人形じゃないわ。言いなりになんてならないんだから！」

宥めようともいうのかファドラインが私の左肩に右手を伸ばしたのを振り払う。

感情の昂りのあまりにこぼれ出した涙を見られたくなくて、気が付いたら厨房を飛び出していた。

途中の廊下から中庭の景色がちらりと見え、見慣れた長い黒髪の男が馬とともに立っていたのを見たような気がした。

でも、それを確かめる気にもなれず、自分に宛てがわれている客室へと早足に戻ると、大きな音がするのにもかまわず力を込めて扉を閉め、拒絶の意をも込めて……ドアに鍵を掛けた。

それから溜め息と共に何とも表現のしようの無い、重い気分でその日の午前中を過ごした。

私とファドラーンの、それなりに激しかったであろう言い合いに誰も気付かないはずは無いとは思っているわ。

でもそれに対する気まずい思いよりもまだ今は、自分達に都合の良いように私を扱おうとしたファドラーンへの怒りの方が大きかった。

それでも、ただ部屋に居るといつてもじっとはしていられなくてベッドに腰掛けたり、目立たないように街路の方を覗いて人通りを観察したりと、とにかく落ち着けない。

昼食の時間の少し前、昨日ならば厨房を手伝いに行っていた頃になってドアにノックがあった。

昨日借りていたこの街の地図と睨めっこをしていたので返事をしないままでいたら、ドア越しで少しばかりくぐもった、それでも穏やかな声が名前を告げる。

「ラウドラチャクリンだ。居るんだろうイエライシャ？ 少しばかり話があるんだが」

いつもと変わらぬその声色に八つ当たりするのは明らかにお門違いなのだが、何となく返事を躊躇っていると「ルツイエラ……母さんの用事なんだが」と告げられ、流石に無視出来なくて、返事の代わりにドアを開けた。

でも、いつものように顔を上げて彼を見上げる事が出来ない。

視線を合わせるのも気恥ずかしくて、俯き加減に向き合ったラウドラチャクリンは、本当に何気ない仕草で私の頬に手を沿わせる。

目元の辺りに彼の指先の感触を感じ、驚いて顔を上げるとにっこりと優しい微笑み。

「良かった……泣いていた訳では無さそうだね。さっきの君の気配が尋常では無かったから、案じてしまったよ」

「子供じゃないわ、もう。泣いてばかりでは何も解決しないって、ちゃんと判っているもの」

咎めるふうの無いラウドラチャクリンについて甘えてしまいそうで、頬を染めつつも自分を引き締めようと背筋を伸ばして改めて彼と向かい合った。

「子供ではないかもしれないが、大人でも無いな。さっきの騒ぎを聞く限りではね。ファドを擁護するつもりは無いが、奴は君の安全を優先したかったんだ。言葉が足りないのはいつもの事だ、あいつは言葉で人を丸め込めるような器用な男じゃないから」

知っている筈だろう？と同意を求められれば確かにその通りで、額かざるを得ない。

「お母さまのご用事なのでしょう？だから……ドアを開けてあげたのよ？」

素直になれないままそう尋ねてしまったのは、まだ私には納得が出来ないからだ。

それをラウドラチャクリンも承知してくれているのか、我ながら

可愛く無い問いかけにも相好を崩して微笑んでいる。

生意気な口を利く女にどうしてそんなに微笑んでいられるのが判らなくて、却って、自分がただ駄々を捏ねている本当の子供のようないきがしてしまう。

「そうだったね。ルツィエラが出発前に君の身の回りのものをチェックしたいから、食事の後で彼女の部屋へ来て欲しいって言っていたよ。階段を上がってすぐ左側のドアが両親の部屋だから」

「判ったわ」

「ああ、それと……食事は此所へ運ばせようか？」

部屋の位置を指で指し示した彼にうなづいて見せると、付け足しのようにそう訊ねられた。

まだ気まずいのならば、という彼等なりの心遣いだったらしいのだが、それを喜んで受けてしまったら、私は本当に子供だと言われなくても仕方がない事になるわ。

「いいえ、皆と一緒に食堂で頂くわ？まるでお仕置きを受けた子供みたいに一人で部屋で食べるのなんてご免よ」

虚勢だと自分でも承知しているが、胸を張ってそう答える。

本当はファドラーンや他の皆にどんな顔をして会えば良いのか判らないくらい戸惑っているのに。

なんて意地っ張りな奴なのだろう、私って。

「そう言う所にも敬意を表するよ、わたしはね。ではもう少ししたら迎えに来るよ、支度しておいで」

見透かしたようなラウドラチャクリンの言葉につい睨んでしまったが、にこやかな彼の表情は変わらなかった。

027 束縛と拒絶（後書き）

フアドラーン視点を維持出来ない・・・。
ヘタレっぷり全開です、兄。

028 改めて外出

昼食の場にラウドラチャクリンとともに現れたイエライシャは、廻りの者達とも何事も無かったように言葉を交わして食事を済ませた。

ルツイエラに声を掛けられて部屋を出て行ったのはそのすぐ後だ。

「彼女の荷物のチェックをするんだそうだよ」

何となくその後を目で追っていると、尋ねても居ないのにラウドラチャクリンがそう言う。

それを聞き流しつつ午後からの予定を立て直そうと頭の中を探る。当初の予定だったイエライシャとの外出は無いだろうと、確証はないものの……そう思えたからだ。

そんな俺を立ち上がりつつ見下ろしたラウドラチャクリンは、何処と無く含みのある言葉で口を開いた。

「昼からの予定なら空けておいた方が賢明だな。どうせ必要なものはクム・ウタールで調達するんだし」

「あなたはこれからどうするんです？」

見上げると、穏やかな、それで居てまだ何か隠しているような瞳が軽くウインクをして寄越した。

「徹夜明けなんだよ、少しは休ませて貰わないと」

心持ち情けない声で……わたしももう歳だしね、とさりと続けられては憎まれ口の一つも叩きたくなると言うものだ。

「一番無茶をする人がそれを言っちゃ、お仕舞いでしょ」

「ははは、まあ……良いから、お前も今日はのんびり過ごす事だな。ラウル峠を越える為にも英気を養っておかねば」

「……そうします」

素直にそう答えると満足したのか彼も部屋を出て行き、残った俺はそれでも何となく厩に向かっていた。

馬という動物が好きだと言うよりは、大切な移動手段としての彼等を労る気持ちの方が大きい。

取り敢えず俺の馬とイエライシャが明日乗る予定の馬の装備をあらかた点検する。

鞍を固定する為の革が緩んでいないか、金具は痛んでいないか。

鐙の細かい金具すら見直して錆を落とす。作業をしている俺の隣で、外に連れ出してもらええると思っただろうか、人待ち顔で落ち着かない馬達の気配に、つい笑顔がこぼれた。

朝の出来事で少しばかり強張っていた心がようやく少しだけほぐれ、馬の頬や耳の後ろといった柔らかい場所を撫でてやる。

それだけでは物足りないとかばかりに、馬は前足で床に敷き詰めてある干し草をかき回す。

その様子に込み上げた笑いがいつの間にか笑い声になっていたら、自分では気付いていなかったのが我ながら間抜けだった。

「……随分楽しそうなのね」

かなり無防備だったろうと思う俺の背中にそんな声がかけられて。その声の主は、怒り任せに当分俺を無視するだろうと思っていただけに、驚いて振り返る。

目に入ったイエライシャは、まだ幾分納得がいかないと言う表情だった。

俺のすぐ傍までやって来ると、居心地悪そうにそれでもようやく

言葉を紡ぎ出す。

「今まで私の荷物を見て頂いていたのだけれど、出来れば此所で手に入れておいた方が良いものが幾つかあるの」

そこまでを何とか口にして、少しばかり躊躇う。

「それで……えっと……あの、出来れば一緒に行って欲しいんだけれど。まださすがに私ではこの街は不案内だし。でも貴方にも用事があるのなら……一人でいくから、馬を貸して下さる？」

「母さんが何か言ったのか？何も俺でなくとも街での買い物に出られる奴なら他にも居るだろう？」

つい、冷たい響きが入ってしまったような気がしたが案の定、その言葉にイエライシャは頬を紅潮させて俯いてしまった。

「他の人は皆用事があるみたいだし、ラウと一緒に行ってあげようかって言ってくれたけれど、彼は……夕べ殆ど休んでいないのでしょう？頼めないわ。だから」

「君を一人で行かせたりしたら、俺はルツイエラにお仕置き喰らっちまうだろうな」

俺の問い掛けにそう答えた彼女に渋々ながらという風情を装って、本当はかなり嬉々としてだが……返事を返す。

しかし同時に、彼女が断るのを計算に入れた上で同行を申し出たラウドラチャクリンの真意を計りかねてもいた。

「別に、無理に来てって頼んでいる訳ではないわ。何とか方向も判るし」

俺の言葉から拒絶だと判断したのかイエライシャはそう続けた。心もとなさそうなのは隠し切れてないが。

「駄目だと言ってる訳じゃないだろう？行き先は何処？」

「地図を描いて下さったわ、ここで別に書いてもらったメモを見せれば揃えてくれるだろうって」

「判った。馬の準備は出来ているから、すぐに出かけられるよ」
イエライシャの差し出した紙を覗き込んで場所を確認すると、錆で汚れた手を洗いながらそう答える。

けれど、彼女はまだ躊躇いがちに立ちすくんだままで。

「どうしたの、イエライシャ？」

「……いいの？」

「何が？」

戸惑ったような問いにどうしたのかと問いかけると、かなり細かい声でそう返事があった。

素知らぬ振りで訊ねかえす。

「……怒っていると思っていたわ、朝の事で」

「怒ってないよ。むしろ言葉を間違えたと、思ってる」

「間違えた？」

意外そうに聞き返すイエライシャの前に立ち、見下ろして彼女の視線を捕まえる。

我ながらぎこちない表情をしているだろうとは思うが、それでも柔らかいものになるよう、言葉も、努力はした。

「そう、あんな言い方では君が反発しても仕方が無かったんだ。だから言い方を間違えた俺が悪いんだ、嫌な思いをさせて悪かった。すまない」

「本当にそう思っているの？」

心持ち頭を下げて言葉をつないだ俺。

居丈高に優越感を主張するのではなく、俺の反応を伺っている、そんな雰囲気の彼女の返事にきちんとした説明が出来るかどうか、気持ち伝わるかちょっと不安だったが。

「君が傷付くかもしれない、とはあの時の俺には配慮出来なかったんだ」

「どうしてかって聞いてもいいの？」

「いくら君がラウドラチャクリンを気にしていたからって、つまりないジェラシーで言葉の選択を誤った……なんて本当は恥ずかしくて言えないんだけど」

「……言ってるじゃない」

ふと、彼女の言葉に余裕が生まれた。

表情もかなりやわらいだものになり、俺もようやく詰めていた息を吐いた。

「私の安全の為に皆が気を配ってくれているのを知っては居たわ。けれど面と向かって立ち入るなど言われてしまって、でもそれを受け入れてしまったら、自分が己の身を守る為に利己的になってしまふような気がして悔しかったの。感情的になった事は、申し訳ないと思っているわ」

「俺たちが君を拒絶している訳ではないのは、判ってくれているよね？」

心配になってついそう口にしてしまったが、きつちりと淡い金色の瞳に睨み上げられてしまった。

けれどその彼女の暖かい瞳の色に見とれてしまう。

髪の色から惹かれ始めていた筈なのに、少し暗い色に染めている今の方が綺麗に見える。

この色の方が今まで髪の輝きに隠れてしまっていた瞳の色を引き立ててくれているからだ、ようやくそれに気付いてどうしようもなく嬉しくなる。

きつく睨まれているのに微笑んだままの俺に、イエライシャは諦

めたようなため息をついた。

「それは判っているわ、大丈夫。でも、だからこそ、貴方のあの態度には腹が立ったのよ。理不尽だとは思わないの？」

「判っているよ。あの言い方じゃ君は腹が立つばかりだったって言うのね。だからさっき言っただろう？言葉の選択を誤ったと。けれど判って欲しい、ここから目的地までの間には様々な監視の目がある」

「それで……？」

再び微かながら固い雰囲気を漂わせる彼女の返事。

けれどそれに圧されるわけにはいなくて、そのまま言葉を続けた。

「外部の者から見ても、君と俺たちがあまり親し気にしては、君が自分の国に戻った後でも安全ではないかもしれないから、と思っただ。他国の者であっても、欲しい情報を持つ可能性のある者には容赦しないんだよ、特にクアーナは。あつてはならないことだけれど彼等は君や君の家族に手を出すかもしれない。それが心配なんだ」

「どうして？私が国に戻るなんて事が……あると思うの？」

故国に戻ると言う選択肢を目の前に突き付けられて、明らかな動揺がその声にも現れる。

「無いとは言い切れないんじゃないかな。君の家族の居る国だ、懐かしく無い訳が無いだろう？それに俺の国にしても、別に楽園と言う訳でもないし。国民も殆どが普通の人間だ。正直に言えば、本当の姿を見て君が失望しないとも限らない」

「自信が無いのね？」

「そうだな、無いな。俺自身にも、自分の国についても。この先の

事も判らないしね。だから俺は、今自分に出来る事を精一杯こなそうと思うだけだ。少なくともそれが俺の評価になる訳だし」

少しばかり義務的な言葉に、まだ居心地悪そうにしている彼女をこの場で納得させるのは難しいと判断して、既に点検の済んだ鞍を馬の背に装着しはじめた。

「取り敢えず出かけよう。日の暮れるのは早いんだよ？知っているだろう」

まだ幾分か納得いかない顔の彼女を鞍に押し上げると、外套を身に付けもう一頭の馬に跨がった。

2人乗りじゃないので訝し気に視線を送って来たイエライシャににっこりと答える。

「明日からの為に馬を休ませてやりたいんだ。まさか一人では馬に乗れないとか、一緒に良かったとか……言わないよな？」

「言わないわよ」

ムキになって突っかかってくるのを期待したのに、気の抜けたような返事が返って来た。

動いて良いと、馬への合図のように鞍の後ろに体重を掛けて、動き出した馬から振り返ってみる。

後からついて来る彼女にちらりと目をやって、一瞬だけ視線が合ったものの……すぐに反らされてしまい、多分、自分がまたしても何処かで言葉を誤った可能性があるのに気付いた。

> i 8 7 8 9 — 1 3 3 2 <

028 改めて外出（後書き）

へたれっぷりが加速して行くファドラーン。
名誉挽回出来るのか？

イエライシャ、イメージ画像を追加してみました。

029 心の距離

ファドラーンはいつもと変わらない調子で軽口を叩きつつ、先に立って馬を進めて行く。

けれど私は今までの彼との間に育んで来たはずの、愛情とか言うものとは違う次元での……信頼関係とでも言うのだろうか、それが全て引っくり返されてしまったような気がしていた。

自惚れていた訳でもなく、それでも自分は外の世界を目指すのだと思っていたのに。

だのに彼等は、ファドラーンは、私がいつかは故国に戻るのだと思っていたなんて。

拒絶しては居ない……と彼は言うが、信じてくれないのは、拒絶と同意なのではないかしら。

あくまで彼等にとって私は通りすがりの旅人であり、それ以上の存在には成り得ないのでは、とさえ思えてくる。

そんな風に考えてしまうと、いくら彼が親しげに接してくれてもよそよそしく応じてしまう自分の態度を改める事が出来なかった。

それでも用事を済ませて屋敷に帰るまで、いいえ、帰ってからも彼の態度は変わらなかった。如何にも普通に接してくれる。

でも私が彼に返す態度は、あくまで只の客と商人、それに相応しい態度。

用事を済ませて戻ったアルマンスールの屋敷の人たちや隊商の他のメンバーとは、その夜もいつものような態度で接する事が出来た。ただ、私とファドラーンとの間に流れているぎこちない空気には気が付いているらしく、それでも敢えて誰もその事を話題にするも

のは居なかった。

……大人だなあ……と感心してしまう自分は、彼等からすれば子供のように精神的に幼く見えているのだろうなと考えて、正直かなり悲しくなったが。

明日は隊商がルクアディナルファへと向けて出発すると言う事もあり、厨房もかなり慌ただしい。

戻った時間が少し遅かったので料理の仕込みには間に合わなかったものの、私も料理の盛り付けや配膳は手伝わせてもらった。

厨房ではこれまでに馴染みになった料理に加えて、かなり手の込んだ下ごしらえのされた大鍋の料理が取り分けられるのを待っている。

それらを大皿に盛り付けて食堂に運び込み、樽から出したばかりの酒をカラフェに移してテーブルの各所に配置する。

イクシール風にカトラリーを並べるのも昨日より手早く出来るようになり、些細な進歩だけれど嬉しくなって、つい笑顔になっていた。

「もうお座りなさいな、皆もじきに揃うわ」

笑顔でルツイエラにそう声を掛けられて、困ったように室内を見回してしまった。

瞬間何処に座ろうか迷ったのだ。

当然のように、いつも私を挟む形でラウドラチャクリンとファドが座っていた椅子が三つ、そのまま空けられている。

皆そこに私が座るのを当然と考えてくれているらしい。

如何にも自然に残るその席に、渋々ながら腰を下ろして待っているとファドラインとラウドラチャクリン、そしてその父親が揃って入って来た。

今まで何か話し合いでもしていたのだろうか、父親のイスナードは僅かながら眉間に不機嫌の跡を残している。

その彼が上座に就き、2人の息子が何食わぬ顔で私の両脇に座ると、ルツィエラがカラフェを手に取り夫のグラスを満たした。

そのグラスを手に取り立ち上がったイスナードは先程までの不機嫌な顔を引っ込めると、夕食の挨拶を口にする。

「明日からはまた隊商の旅故、今宵は皆心行くまで楽しんでくれ。心づくしの料理と酒だ……明日に響かぬ程度に堪能しようではないか」

商家の主らしく釘を刺すのも忘れないイスナードの挨拶に、笑いがさざ波のようにテーブルを渡る。

私の右隣に座を占めたフアドラインがラウドラチャクリンと自分のグラスにも酒を注ぎ、私のグラスをも満たそうとするのを何とか押し止めて、彼を見上げた。

「私はいいわ、結構よ。明日からの旅の初日に二日酔いだなんて締まらないし」

「でも折角だし、少しは飲まない？」

明日からはこの酒は飲めないんだけど、というフアドラインのニユアンスにもにっこり微笑んで、それでも私は首を縦には振らなかった。

少しがっかりしたような表情で彼は自分のグラスへと手を伸ばすと、こちらの様子を窺っていたらしいラウドラチャクリンに杯を掲げてみせる。

……乾杯の意を込めたものだろうか、後は一気にそのグラスを空にしてしまった。

ファドラーンもかなりお酒には強いらしいのは知ってはいたが、食前酒としては量を過ぎていてのではないかと流石に心配になる。じっとファドラーンを見つめていて、頬に気配を感じて振り返ると、ラウドラチャクリンが面白そうに私達を見つめているのと目が合ってしまった。

何か言うかな、と身構えたが至って涼しい顔のラウドラチャクリンは、にっこりと微笑んだだけで、相変わらず整った顔立ちのその微笑みについ頬を赤らめてしまった。

その後も彼は時々私に話しかけてくれる。

反対側のファドラーンとは殆ど会話らしいものもなく口をつぐんだままなので、私が一人で黙っているのが目立たないようにという配慮なのは明らかね。

当たり障りの無い会話を交わしながら食事を終えると、部屋へ戻る前にラウドラチャクリンの気遣いに礼を言おうと口を開きかけたのに、逆に口を開いた彼の言葉で言いたかった事を封じられてしまった。

しかも彼は他の者には聞き取れないように小さな声で、耳元に言葉を送り込んでくる。

「明日は朝食のすぐ後に出発だから、荷物を纏めてから朝食において。……迎えに行くよ」

明日の朝ばかりは厨房の手伝いまで気を使わなくて良いよ……と囁かれて、内容には関係なく又しても頬が赤くなるのを押さえられなかった。

ファドラーンはそれを黙ったまま見つめていたのだけれど、流石にその視線を見つめ返す事は今の私には出来なかった。

そのまま部屋へと戻り今日の買い物を荷の中へとまとめ、明日の朝の出発の準備を済ませる。

グスルハネでの簡単な湯あみで気分もさっぱりとさせると、明日からの旅に備えて早々にベッドへと潜り込んだ。

「どんな言葉を使ったのかは知らんが、また彼女を怒らせたようだな」

部屋を出て行くイエライシャの後ろ姿を見つめていたら、そうラウドラチャクリンに冷やかされる。

流石に言い返す元氣も無く、不機嫌な顔で彼を睨んでみせた。さほど明るくはない食堂の明かりでも見て取れるだろうと言うのは承知の上だ。

食事の間、彼とイエライシャの何気ないやり取りが俺の不機嫌に拍車を掛けていた。

それが只のジェラシーだと自覚はしているが、何かをラウドラチャクリンに囁かれて頬を染めていたイエライシャに、そして何となく思わせぶりの態度を取るラウドラチャクリンにも、妙に納得のいかない気持ちで居たのだ。

「粗忽で不器用な男なんで……何が彼女の氣に障ったのかも判っちゃ居ないんですがね」

「わたしに八つ当たりならお門違いだよ、あのまま黙って食事をするつもりだったのか？ 気まずい食事の席なぞわたしはご免だからな、せめて会話くらい普通に出来るように歩み寄っても良いだろう」

自虐的な言葉を口にする俺の、不機嫌の多くを理解していたらしい彼の言葉につい苦笑いが込み上げる。

「安心しましたよ、貴方が彼女に食指を動かす氣になったのかと…

…余分な心配をする所だった」

「お前……油断していると、そうなるかもしれないよ？彼女が頬を染めるのを見てると、初々しくていいし、ね」

何とか余裕のある様子を繕おうとしていたのに、彼の更なる発言で流石にその仮面も外れそうになってしまう。

悪戯心たっぷりに微笑むラウドラチャクリンはそこまで見透かしていたのだろう、少しばかり改まった表情に戻って、グラスへとその視線をもどした。

「一時の軽い気持ちでなく……本当に連れて行きたい相手なのなら、きちんと捕まえておかなけりゃ」

少し前の親父との話し合いのこともあり、彼のその言葉に返事が出来なくて、自分のグラスを見つめ続けていた。

夕食前の俺と親父そしてラウドラチャクリンとの話し合いは概ねがイエライシャの今後の事だった。

勿論他の打ち合わせもありはしたが、一番長い話題だったのは間違いない。

親父は相変わらず気乗りがしないと言う態度で、俺の説得はおろか、ラウドラチャクリンの言葉でさえあまり真面目に聞いていないようだ。

けれどその間のラウドラチャクリンの言葉はかなり好意的なもので、俺としてはかなり心強かったのだが。

結局、最後はイエライシャが自分の世界と決別でき、そしてフィルドダウスの守護者の許可を得られるのならば全てを認めようというものに落ち着いていた。

初めの頃に俺との間で合意に達した事以上に進展する事は無かったのだ。……こっちはこっちで難関だよなぁと思う。

例えば次代国王の推挙があり、身元保証人としての俺の存在があっ

たとしても、何の属性も無い、つまりはメリットの無い者を簡単に迎え入れる事が出来る程、フィルダウスの懐は大きくはない。

勿論俺としてもそれが排他的だからと言う訳ではなく、この国の成り立ちからしても、そして現在の状態からしても慎重にならざるを得ないからだと言うのは理解してはいるのだが。

やはり狭き門……という印象を拭う事は出来なかった。

そして俺はと言えば、彼女を怒らせてばかり居る粗忽な男らしいから、彼女からの所謂……いい返事……を受け取る事が出来るのかさえ怪しい雲行きだった。

030 焦思（後書き）

短すぎなヘタレターン・・・すみません。
ヘタレに拍車が掛かり中で、くよくよしちやっています。

031 再び旅路へ

出発の朝はとても良い天気だった。

雲もなく澄み渡った空に、登りはじめた太陽の輝きがまぶしくてつい目を眇めてしまう。

乾期だと言う季節柄、ここまでの旅の間には殆ど雨に降られた事が無かったわ。

唯一の例外と言えばバーラートを出て、少ししてから遭遇したスコールくらいのもの。

前の晩に一方的に約束された通り、朝食に迎えに来てくれたラウドラチャクリンにエスコートされて、一緒に食堂へと降りて行った。荷物は荷造りが済んでいるのを確認したラウドラチャクリンが、後で他の者が運んでくれるからと言うので部屋の扉の前に出したままにしてある。

途中で少し遅れて食堂に入って来たファドラーンは、私がラウドラチャクリンと一緒に居るのを見てちよっぴり変な顔をしたけれど、気にしない事にして普通に挨拶の言葉を掛けてみた。

彼もそれには普通に返事をくれたので、我ながら情けないくらいにほっとしてしまったのは秘密。

ラウドラチャクリンに気取られたら、またあのいつもの微笑みでからかわれてしまうわ。

昨夜の食事時のようにぎこちない沈黙を作って廻りに心配をかけるように、気をつけながら当たり障りの無い会話をファドラーンとも交わすよう心掛ける。

そんな気を使う食事を済ませ、促されて中庭へと出ると、早くに食事を済ませた者達から順次馬を出して……少し慌ててしまった。

どうしようかと見回していると、さっきから姿が見えなかったファドラインが私の荷物を持って屋敷から出て来たのに気が付く。

そのままそれを空いていた馬の両脇に括り着けてくれ、それから私の方をじっと見つめて来た。

勿論黙っている訳にもいなくて、彼の方へと歩み寄ると声が小さくならないように気をつけながら礼を口にした。

「荷物をありがとう、ファド。……どうかした？」

彼がじつと顔を見つめてくるので流石に気恥ずかしい。

「いいや、大した事じゃないんだが……今までに高い山とかに登山した事はある？あと、何か……身体を動かす事やスポーツは嗜んでいた？」

そして突然そう訊ねられて、脈絡の無いその問いに、なんと答えたものか迷ってしまった。

「どちらもない……わね。私の国では……女性には特に……そう言う趣味を持つ事に寛容ではなかったから」

「……判った。ここから暫くは大丈夫だとは思うが……もしも気分が悪くなったり頭痛がするようなら隠さずに教えてくれ。たまに高地にあがると具合の悪くなる者が居るんでね」

「……わかったわ」

かなり真剣にそう念を押されたので、つられて神妙な表情でうなづいて返した。

すると久しぶりににっこりと微笑むファドラインの笑顔を正面から見つめてしまい、どうしようと我ながら慌ててしまう程に赤くなってしまった。

隣でこのやり取りを見ていたのだろう、ラウドラチャクリンがに

やにやっているのが何とも小憎らしい。

けれど何か言い返そうかと、彼に向き直った所でアルマンスールの主人が中庭へと姿を現した。

その後ろには何か……小振りな荷物を抱えた奥方の姿も見える。

「準備も整ったようだな。油断する事の無いよう……無事の旅を祈るぞ」

大げさな物言いではなく、相変わらず簡潔で嫌みの無い彼の表現にはいつもながら感心する。

隊商の皆もそうなのだが、このアルマンスールの人たちからはさもしい程の商魂と言うものが感じられなくて、あまりに清廉すぎるその雰囲気困惑してしまう。

故国でも、シュヴァーゼの地でも、私や父の廻りに居た商人は儲け至上主義とでも言うのだから、その気配が如実に感じられる者達ばかりだったから。

ファドラーン以下隊商の皆が頭を下げて、主人の言葉に応えるのを見ながら私も挨拶をするために2人の前へと進み出た。

そして、いつもの仕草で軽く頭を下げる。

「短い間でしたが、手厚いもてなしを有り難うございました。お二人のお心づかいにはとても感謝しています」

「この先の峠越えは慣れぬ者には厳しい道行きですから……気を付けてお行きなされ」

「はい、そう致します」

相変わらず柔らかな物言いのアルマンスールの主人とそう言葉を交わすと、次には隣に控えていたその奥方ルツィエラと視線を合わせる。

応じて進み出た彼女は相変わらず余裕の微笑みで、手にしていた

包みを私の前で開いてみせた。

その中から出て来たのは、色は地味であり目立たない物だけれど、上質の素材で作られたろうと思われる外套だった。

暖かそうなのにかさばる風もない、しなやかな手触り。

私の予定としては、もっと寒くなると言われている国境の手前の街、クム・ウタールで調達しようと思っていた物の類いだわ。

「私が昔……とある方から頂いた物なのですが、宜しければ貴方に使って頂きたいの。お持ち下さいな」

「……お気持ちは有り難いのですが、頂く訳には……」

「貰っておくと良い。どのみち峠越えには必需品だし、それは良い品だからきつと君の役に立つよ」

申し訳なくてそう断りの言葉が続けようとしたが、続いて隣から口を開いたラウドラチャクリンの珍しく強いすすめの言葉に断るきっかけを失ってしまった。

隣に居たフアドラーンも何やら神妙な顔つきになり、母親を見つめている。

「……良いんですか？母さん」

確認のようなその言葉にルツィエラはにっこりと微笑む。

「あら、大丈夫よ。ラウだって……良いって言ってるでしょ？それに今度はイスナードに私好みの物を買って戴くから良いのよ。だから受け取って頂きたいの」

ちゃっかりとした彼女の言い分に、幾分か困惑した表情のアルマ家の主人にチラと視線を走らせると、やはり彼はラウドラチャクリンと……視線を交わしている。

2人の間の視線のやり取りにはいつも不思議な雰囲気があるわ。でもこれ以上固辞して相手にも気まずい思いをさせたくないし、と観念してようやく彼女からの外套を受け取ると、フアドラーンは初めて笑顔を母親に向け、明るい声でその礼を言った。

「ありがとう……母さん」

何かとても嬉しそうなその声色はいつも以上に元気で、本当に嬉しいのは誰なのか判らなくなってしまうわ。

「……ありがとうございます。大切にしますね」

「きっとそれが貴女の役に立つ時が来るわ、あと……ファドとラウを信用してね」

手渡されたその外套を抱きしめて、そうルツイエラに頭を下げると、肩を抱くように身を寄せて来た彼女がそう耳元で囁いた。

視線を合わせてもその言葉への説明は無く、にっこりといつもの微笑みに促されるようにして馬へと跨がる。

馬に乗る為にいつものようにファドラインが腕を貸して補助をしてくれ、それに礼を言いつつも、でも心の中ではルツイエラの言葉が引っかかっていた。

いつもと同じ明るい表情、仕草のファドラインだけれど彼の本心が判らなくなっていた私には素直に彼との言葉のやり取りすら出来なくなっている。

ぎこちない私の対応にすら、ファドラインはなんとか笑顔で接していると言うのに。

「行ってきます。お二人ともお元気で」

「……気を付けて」

先頭に立ってファドラインが両親にそう改まった言葉をかけるのを少し不思議に思ったが、考えてみれば両親はここイクシールの店を、そして二人の息子はルクアディナルファの店を担当していると聞いていた。

こんな商用の旅でもなければ親子が顔を会わせる事は殆ど無いのだ。

年に何回ぐらいなのだろう……会えるのは。

妙にしんみりしてしまった私とは違い、イスナードは軽く片手を挙げて息子に応じる。

隣ではルツィエラが流石に母親の表情で皆を見送ってくれていた。

032 クム・ウタール

国境の街、と呼ばれているクム・ウタールは、正確にはイクシールからルクアディナルファへと抜ける最後の街だった。

ここから先、街道沿いのその次の街はもうルクアディナルファの領だという。

国境の街と言う物が存在しない理由は、丁度その場所には関所ではなく難所と呼ばれる峠があるからだ、と教えられたのはツァイデアルのアルマンスール家だった。

地図を見比べていた時に、隣でラウドラチャクリンと荷物の事で話し合いをしていたファドランがそう教えてくれたのだと思い出して、少し胸が痛む。

風が少し強くなったように装って、ルツィエラに貰った外套の胸元を合わせては痛むそこを押さえてみたが、心の痛みに効き目のあろうはずも無い。

旅の日程をこなすにつれ風景も変わり、風が吹かない日は無くなった。

ルツィエラから貰った外套は暖かく、冷たい風から私を護り早速役に立ってくれている。

森や林と言った大きな木立は姿を消し、高地らしいごつごつした岩肌と、時折馬の肩まであるかないかの藪のような物が、道とおぼしき踏みならされた跡の脇に姿を見せるくらいの単調で殺風景な道行きだ。

遠くに見える集落は石を積み上げた風よけと背を低く押さえた裾広がりの建物の集まりで、更にその向こうには農地だろうか、開墾された若々しい緑の広がりが見える。

「こんな寂しい土地でも人は住むのね」

独り言のように呟いたつもりだったが、耳聡いラウドラチャクリンには聞こえたようだった。

さり気ない手綱捌きで隣へと馬を寄せてくる。

「あれは…この辺りの高地で作れるように改良された麦の一種だよ。集落毎に共同で農業と放牧をしているんだ。じきに来る雨期の前には収穫してしまうだろうね…あの麦は」

「雨期って…もうじきなの？毎日雨なの？」

「太陽がどんな色をしていたか忘れてしまうくらいね。もうあと半月も経たないうちに…旅の出来ない季節になる」

おどけたような言い方でも、交易を主とする商人らしさを滲ませる。

「それまでにはルクアディナルファの首都についている予定なのね？」

「かなり…：前には着いているよ」

「その前に今日の目的地だよ」

何時の間に側に来ていたのか、ファドラーンがそう言って前方を指し示して見せる。

その先には今まで見ていた集落よりも大きな、町と呼べる程の建物の群れが見えていた。

「ミシエイルさんとはここで合流するのでしょうか…：？」

「明日の朝、出発する頃には合流して来る事になっているよ」

ファドラーンの答えに、今夜のミシエイルは家族との夜をどう過ごすのだろう、と考えた。

彼もまた家族と離れ、暫くは会えなくなるのだもの。

ましてや旅には不向きな雨期が来るとあれば尚更だわ。

だんだんと近付いてくるクム・ウタールの町は、眺め渡す限りで

はこれまでに通り過ぎて来た村と良く似ていた。

外周を取り巻くよう麦の畑が耕され、その所々に家畜を飼っているのだろう囲いが見える。

けれど方角に拠っては、この辺りではあまり見た事のない背の高い木々が家々を囲むように茂っている。

「防風林って言うんだよ」とは隣に居たファドラーンの説明だ。

「それなら私の国にもあったわよ。でも……いつも思うんだけど、こんなに風が強く倒れたりはしないの？」

「さあ……見た事は無いが……時々はあるんじゃないかな。風の強い季節は長いからね」

曖昧な説明。

彼もこの辺りに住んだ事は無いらしいと勝手に憶測してみた。

街の中に入ってみると牧歌的な風景はすぐに途切れ、幾つかの店が軒を連ねる商店街のような区画が代わりに続いていた。

街の中程にある広場には、幾つかの簡易テントのような物が設置されて、市場だろうか生活に必要な物が多く並んでいる。

ここが国境の手前の街だと、この風情で納得させられたような気もするわ。

「何を調達するの？」

「食料や防寒用の毛布や……峠越えに必要な物資。峠を挟んで二日は野宿になるから」

「全く何も無い空の下で眠るの？」

風の強い地域の気候を考えながらファドラーンに問う。これは相当厳しい夜を覚悟しなければならぬかしら、と考えていた。

「風よけになる物は何とかあるよ、皆が使うルートだから滅茶苦茶厳しい道じゃないし、きちんとしたテントを張るしね。雨期の前は今は夜の冷え込みも……多分君が考えている程厳しくはない」

旅慣れている彼等の言葉に幾分か安心しつつ、今夜の宿らしい古

い建物に着いた。

先程の市場からさほど離れていない場所にあるその宿へ馬と荷物を預けると、フアド達は早速出掛けると言う。

取り立てて何か必要な物がある訳ではない私は、このまま宿で休んでいるか彼等について行こうか少しの間迷った。

「……どうやらイエライシャには一緒に来てもらった方が良さそうだ。廻りをきよろきよろしないで……そのまま自然な感じでわたし達に付いておいで」

けれど脇を通り過ぎる瞬間低いラウドラチャクリンの声が耳元でそう告げた時、何か、彼等が異常を感じ取ったのだと咄嗟に理解した。

どう言う訳かラウドラチャクリンも外套のフードをすっぽりとかぶり、表情を、或いは顔をだろうか隠しているふうだ。

何人かのメンバーを宿に残して、ラウドラチャクリンとフアドラインそして私と他数名が買い物の名目で宿を出た。

途中で更に二手に別れた私達は、とりとめの無い事を話しながら、まだ人の流れが残る市場内を歩き回る。

そして時々人混みの中で、見覚えはないものの印象に残る顔を何度も見かけるのによろやく、気が付いた。

……たしか宿に入る直前にすれ違った男達のうちの一人だわ。

何故覚えていたのかは判らないが、何となく目元の辺りと顎の髭囲気に違和感を覚えたせいかも知れなかった。

この辺りで見慣れた人々の顔つきよりも幾分謎めいて、表情が解りにくいと言うよりは、何を考えているのか判りにくい。

「彼等をあまり見つめないように。あれでも……地元の民に紛れているつもりなんだから」

隣で商品を物色していたファドラーンが笑顔で品物を私へと差し出しながら、その表情とは縁のない事を口にする。

「彼等って？」

「初めて見たんだね。彼等がクアーナの民だよ」

さらりと、自然な笑顔でそう告げるファドラーンをじっと見つめてしまった。

なるべく表情を変えないように努力はしたけれど、成功したかどうかは……自信が無い。

フアドラーンは普通に商人が客を案内するように振る舞い、私は明らかに廻りの人々とは違う顔立ちを隠しては居なかったのも、何処まで行っても私達が彼等クアーナ人の監視から外れる事は無かった。

彼等が私の顔立ち故に私達を監視しているのか、アルマンスール家の隊商だからなのかは判らなかつたけれど。

いつの間にか近くに居た他の仲間達が姿を消し、私とフアドラーンだけになつてもクアーナ人の監視は続いていて、いくら鈍感な私でも流石に見当が付いてしまった。

「私を彼等の囹にしたでしょ」

「……助かったよ。餌が良いから食い付きも良くてね」

相変わらず品定めをしているような風情でフアドラーンに囁いたが、にっこりとそう微笑まれてしまつては文句も言えなくて、あきらめの溜め息をつく以外には無かつた。

そして、もうしばらくして気が付くとバラバラになっていた筈の者達も戻つて来ている。

皆それぞれの用事を済ませて来たのだろう、手に荷物を持っている者が殆どだ。

「……そろそろ戻ろうか」

尤も、涼しい顔でそう言つたラウドラチャクリンは手ぶらのままだったが。

宿に戻ると、アルマ家の得意客からの使いだという者が待っている、とその主が声を掛けて来た。

目立たないように見回せば、既に宿の廻りにはクアーナ人も居なくなっている。

私達が宿に戻るのを確認すると、彼等は何処へとも無く姿を消していったみたい。

もっとも何処から監視は続けているのだろうか。

「ようやく来たね、同席してくれるかい？ イェライシャ」

ラウドラチャクリンに促されるまま社交室へと足を踏み入れる。

……といってもフロントからはひと続きの間で客の入り具合はすぐ判るわ。

そして、私の先に立つラウドラチャクリンには、案内される前から目的が判っているらしい。

その先、最奥のテーブルには、如何にもバーラート風の顔立ちにかの地の衣装を纏った男が座っている。

寛いでいるように見えるその男の、この地域の気候にはあまり対応していないその衣装は何処にいてもとても目立つものだったが、彼等のある種意地や地位を誇示する為のものであるらしいとは以前に学んでいた。

私の故国ユグドラセアを訪れるバーラートの民も、皆様にそれぞれの一族が属する紋様を織り込んだ民族衣装で身を包んでいたから。

でも、ちょっと待って。

私はバーラートからは逃げ出して来た、といっても良い程の事情を抱えているのに、無防備なままその国の人に会っても良いのかしら？

シュヴァーゼの藩王が私を手配していたら……？

犯罪者か、逃亡した奴隷のように……？

疑問一杯の顔でファドラインとラウドラチャクリンを見遣ったが、二人の表情には不安そうなものは何も見当たらない。

「随分お待たせしましたか？」

ファドラーンの声に応じて立ち上がった男は軽く会釈をする。
彼の豪華な衣装や装飾品から推して貴族なのだろう身分からすれば、目下の筈の商人にそんな丁寧な挨拶をするなんてどうして？

その人は私の疑問になんておかまい無しのように、特に表情の変化も見せず皆に席を勧め、近くに控えていた自分の部下に飲み物の指図をした。

そして彼は席に着いた私を見つめる。

斜め向かいぐらゐに座ったので彼の視線が明らかに私を注視している事はすぐに判ったけれど、特別な敵意もなく、また侮るような素振りもなかった。

そして手配されているのでは、という私の懸念とはかけ離れて悠然とした相手の寛いだ雰囲気、どうやら大丈夫そうだと思いはじめてもいた。

手元に運ばれた酒杯を片手に、彼は口を開く。

「噂のご婦人とはこの方でしたか。異国の美女と聞いて我が主も大層興味を持ったようですが……第一夫人に睨まれてましてね……面白かったですよ。第一夫人から手を回した貴方がたの狙い通りですね」

「私に関わりのある事なのですか？」

ついそう口を挟んでしまうと、彼は少しばかり意外そうな表情を見せた。

「私はバーラートのジャヤル藩王家に仕える者です。今回は藩王並びに御相談役からの伝言をアルマンスールのご子息にお伝えするようにと遣わされたのですが……。御存知ではなかったのですか？ 貴方はいつときシュヴァーゼの主人によって手配されていたのですよ、契約違反の名目で」

「契約……違反ですって？」

「そう、貴女の父上とシュヴァーゼの藩王との間では商売上の協力を条件に貴女を第三王妃にする約束だった……それは知っておいででしょう？」

「そう同意を求められてうなづいた私に、彼の瞳は笑っては居なかった。」

「けれど貴女は姿を消して……それを侮辱だと怒った藩王は貴女の家族をも一時拘束していたのです」

034 消息

「……まさか」

思わず声がうわずる。

ああ、この彼は私を何も考えていない軽薄な女だと思っているのだ。

だから特に意識するでも無い、取るに足らぬ者を見る無関心な視線で見つめていただけだったのだわ。

「我々はあなた方が思うよりも遥かに誇りを大切にします。虚仮にされたと……彼は思ったのでしょうか、特に彼は自分の名誉に関して貪欲なので」

「それで家族は……私の父や姉は今どうしているのですか？」

その事しか考えられなかった。

大丈夫だからと、私を送り出してくれた父はそうなる事を知っていたのだろうか。

けれど彼は私の質問に答えるのではなく、私の両隣に座ったアルマンスールの兄弟2人を見つめていた。

「あなた方が時々ひどく情に深いとは聞いていましたが……今回はあまりにもお人好しに過ぎますね」

「他の事情もあってね……けれど君達にとって悪い話ではなかったのだし、むしろ今後の利益としては大きなものだろう？」

まるで対等の者のような口調のラウドラチャクリンに、使者は何の違和感も抱いては居ないらしい。

同意の印に頷いて、更に話を続ける。

「勿論です。こんな事でシュヴァーゼのあの下衆を下せるとは思っ

てはおりませなんだで……我が主は貴方がたには更なる優遇を約束出来る時まで仰せです」

「それは有り難いね、彼にはまだ考えがあるようだから……次に会った時に相談したい事もあるし」

思わせぶりな使者の台詞に、返すラウドラチャクリンの返事も何やらいわくあげだわ。

でも私が知りたいのは今はその事ではないの。

じりじりしながら右隣に座っているラウドラチャクリンの話の切れ目を待っていると、使者が再びこちらを向いた。

「元々貴女のお父上は、バーラートにおけるユグドラセア貴族の中の商取り引きで抜け駆けを計っていたので……あまり評判の良くないシュヴァーゼの藩王と組む事にしたようですね。けれど藩王は両者の利益以外にも目を付けて、二人の娘のどちらかを自分の後宮に入れようと画策し始めた」

「商売相手を選ばないと……見本だね」

さらりと付け足したラウドラチャクリンを、私はつい睨んでしまった。

「慌てたのでしょね貴女の父上も。そして妃になる筈だった娘が姿を消し、怒った藩王は娘を手配し、残る父娘を拘束してしまった、と。とはいえ相手は他国の貴族ですし、現在のバーラートにおいては大きな貿易相手国でもありますから……我々がそれに気付かず、またラウドラチャクリン殿の知らせが遅れていれば大事になる所でした」

「大事って……？」

「ユグドラセアにとってバーラートに軍隊を派遣する為の良い口実になるところだった、という意味だ」

ラウドラチャクリンと使者の会話が理解出来ていなかった私には、

ファドラーンの説明でも話が大き過ぎてついて行けなかったわ。

さぞきょんとした間抜け顔をしていた事だろう。

「貴族の1人や2人が拘束されたからって……」

そんな事で国同士が衝突するなんて考えられなかった。

私が理解出来ないなので重ねてファドラーンは口を開く。

「三段論法という奴だよ。自国の貴族を手ひどく扱ったということは、ユグドラセアの貴族を侮っているのか、ならば實力を見せてやるぞってね」

「だって海の方こうの国よ？ 軍隊を派遣するにももの凄い費用だわ。時間だってかかるし」

「確かに遠いね。けれどその相手の国には……計り知れない程の埋蔵量を持つ鉱山や、莫大な富を生み出す珍しい文化、貴重な香辛料……そして……自分達の都合の良いように働かせる事が出来る奴隷とするべき人間が居るとしたら？」

「……つまり私達の些細な諍いは只の口実というわけね？」

ようやく状況を理解したと、彼は形だけの笑顔で続けた。

「悲しいかな……それが現実の国同士の状況だ」

「それを知らせて頂けたお陰で……我が主はシュヴァーゼの藩王を出し抜き、彼を逆に拘束したのですよ。以前からラウドラチャクリン殿の助言で組織していた小藩王の連合議会での決定という切り札を使って。もしユグドラセア側からの抗議があれば、既に藩王の処罰は行われ……捕らえられていた貴族も無事。更に賠償か制裁をとの要求があっても、シュヴァーゼの領内からの税とその藩王家の財産で対応出来ると見込んでね。バーラートでも屈指の家柄を誇った家系ですから、蓄財もかなりのものなのです。この対応がもし遅れていれば……自国の貴族を救出するとの大義名分を掲げたユグドラセアの軍を拒む事すら、我々は出来なかったでしょう」

そう言って使者は改めてファドラインとラウドラチャクリンの2人に頭を下げた。

それが彼なりの敬意を表しての仕草だとは、この話を聞いてしまった今なら容易に理解出来る。

「では私の家族は……」

「現在はジャヤル王家の客として、我が藩王の城に滞在しておられます。お2人ともお元気で、ただ貴女のご無事を案じておいでです」その言葉に力が抜け、知らずに力が入っていた肩が落ちるのが自分でもよく分かった。　　ようやく口にした言葉も震えてしまい、ファドラインが私の左肩に手を掛けて励ましてくれなければ泣き出してしまいそうだった。

「ああ……無事だったのですね、良かった。……父はまさか自分達まで拘束されるとは考えては居なかったのだと思います。ただ私が姿を消して……藩王の行状に批判が集まれば彼が私を諦めるだろうと……考えていたので」

「君たちのユグドラセアであればそうなたかもしれないね。けれどバーラートではそんな批判なぞ起きてはならないものなんだ。藩王に口出し出来る者は居ない。……だからこそ、他国に付け入る隙を与えない為に……藩王同士で相互に監視し、また逆に協力出来る組織が必要だったんだよ」

そう言葉をつなぐラウドラチャクリンも初めの皮肉った言葉遣いではなく、諭すような口調になっていた。

「そしてそれが早速役に立ちました。提唱者である我が主の評価も更に高いものになりましたし……」

「あとは、そう、同じように足元を掬われないように……自領内の管理をも抜け目なく行う事だな」

使者に対してラウドラチャクリンはよどみなく次の段階を指示する。

けして気が抜けない難しい世界を知り尽くしている、そんな印象

のラウドラチャクリンが本当は何者なのかと、安堵する心の隅っこで再び疑問が湧き出していた。

「ジャヤルの主はラウドラチャクリン殿……貴方に、自領内に留まり……相談役として御仕え頂きたいと重ねてのご要望です。現相談役のエンウェル殿も御身がおいで下されば退任なさると明言なさっておいでで……」

相談役と言う役職が、時には宰相職にも匹敵する権力を持つ事は以前にシュヴァーゼで学んでいたわ。

その任に相応しいとジャヤルの王に見込まれる程の存在なのだ、彼は。

「その話は既に済んだはずだよ。わたしは気楽な商人の方が性に合っているんだ。根無し草のような男を抱き込もうとしても無駄だよ、どんな餌をぶら下げてもね。あと、エンウェル殿には自信を持て、とわたしが言っていたと伝えておくれ」

柔らかい笑みでそう言い切られて、使者は仕方なしに口をつぐんだ。

彼等の間ではこれまでも何度となくこの話題は繰り返されて来たのだろう、どちらかというとしぶしぶ引き下がる、そんな感じだわ。

「餌って……?」

ただ話の中にあつた疑問をつい口にしてしまった私の問いに、使者は自嘲的な笑みを浮かべる。

「藩王の5人の姫君の内只お一人、未婚の末姫の婿君にと。……掌中の珠の如くとりわけ大切になさっておられる姫なので……かの姫の夫となりし者は、王位継承も可能であろうと言われております」

「うわ……ラウ……逆玉の興?」

「……イエライシャ……勘弁してくれ」

思わず口にした言葉に、流石にがっくりしたらしいラウドラチャクリンが呆れ顔で肩を落とすのが人間臭くて、先程までの得体の知れなさが薄らいで行く。

しかも隣でファドラーンまでもが肩を振るわせて笑いを堪えているのが伝わって来た。

「ご免なさい、何か……自分が安心したものだから、口が過ぎたわ。……ラウ怒った？」

「……いいや。君が元氣になったのなら良しとするよ」

何とか笑顔を浮かべた彼がそう答えをくれたので、ほっとした表情になった私にジャヤルの使者が改めて尋ねて来た。

「これで貴女がもはや逃亡生活を送る必要は無くなりました。ご家族は……貴女がお戻りになるのを望んでおられるのですが……どうなさいますか？ここからラル峠を越えてルクアディナルファへと入ってしまえば……戻る事は容易ではありません。」

……戻れるのだ、家族の元へ。

「お望みであれば、ジャヤルの領へとご案内致しますが」
何だかそう言われてしまうとこれまでの覚悟が揺らいだ。

もう……戻らない、戻れないつもりで旅に出たのに。

身を守る為に髪を切り、あまつさえ染めて人目を誤魔化しながら彷徨って来た。

いつの間にか守られながらではあったものの何とかここまでやって来たのに。

ふと見上げたファドラーンが安堵したような、それでも何処と無くぼんやりした笑顔を浮かべているのに気が付く。

「それでもまだ……戻りません。やりかけた事があるの、それを途中で放り出しては行けないわ。……それに私はこの旅を逃亡だなん

て思っては居ないの」

結局、ようやく口から出たのはそんな言葉だった。

ジャヤルの使者は呆れたような表情を浮かべ、ラウドラチャクリンとファドラーンは別段驚くふうも無かった。

「成る程、判りました。ではその時はお渡しするようにと主から言付かっておりましたので。ご確認下さい」

諦めたような口調でそう言うと、彼は懷から小さな包みを出して来た。

受け取って中を改めれば、正式な身元保証の書類が入っている。

それもジャヤルの主の直筆と思われるもので、金泥で押された印鑑が派手はでしくも重みを添えている。

そしてさらに、ルクアディナルファへと渡るのにあれば有利だなと思っていた紹介状も用意してあった。

相手はルクアディナルファ王の側近とされる侍従長ナムリとなっている。

これだけのものを用意するのにはかなりの金額とコネがなければならぬ筈で、慌てて使者を見上げると彼も心得た顔で返事を……問うても居ないのに……口にした。

「こちらにおいでのアルマンスール家からの依頼です。いずれ入国には必要ですから」

「私が諦めないだろうって判っていたの？……それに何時の間に？」

「多分わたしが見込んだ者ならそう言うだろうと……見当を付けていた。だから手配しておいたのだが……役に立てば何よりだ」

振り向いて問い掛けた私にラウドラチャクリンはさらりとそう応える。

わたしが見込んだ……その言葉に正直かなり動揺した。

それだけではなく、頬が赤くなるのも自覚してしまう。

見回すとジャヤルの使者も、そしてファドラーンでさえもがラウドラチャクリンを見つめている。

ただファドラーンの瞳に浮かんでいたその表情が何なのか、読み取れなくて、一瞬迷った。

だってそれは、羨望の眼差しだったから。

自分には無いものを持つ者に向ける視線とでも言うのだろうか、同時にそれを、そんな視線を向ける事を自らに戒め続ける意志が束の間緩んだのだとも受け取れる。

けれど、私の知っているファドラーンは決して誰かを羨んだりする性質の男性では無かったわ。

ましてや相手は表向き自分の弟なのよ。……そう、表向きは。

「この書類で君の当面の身元保証人はジャヤルの藩王と言う事になる。ルクアディナルファへ入国してからこの……ナムリという人物に会うまではね。それからは彼の庇護下に入って……貰わねばならないが。ナムリが我々の考えに理解を示してくれば君は晴れて自由だよ、但し単独行動は慎んで貰わなければならないがね」

この2人の保護者に迷惑を掛けない為にもね。

そう言っただラウドラチャクリンは私に釘を刺す。

「これに掛かった費用もきちんと精算させて頂くから、覚えておいてね」

「……それは困ったな。この件では我々が得る利益の方が大きいんだ、相対的にね……だから、精算なんてしたらこっちが困るな」

他の事で口を開けば彼等の素性を問いつめてしまいうので、少しばかりふざけたニュアンスも込めてそうラウドラチャクリンに注文を付けた。

それを知ってか知らずか彼は笑顔でふざけて返してくる。

確かにこの旅で掛かった費用は、最後に精算するという当初からの約束があり、その間の旅費や雑費と言う類いのものはアルマンスール家が負担してくれていた。

「あら、大丈夫よ？ 貸しにしといてあげるから」

そう笑顔で言葉を投げ合いながら、その向こうで何を考えているのか、複雑な表情のファドラインが気になって仕方なかった。

035 再会

「ミシエイルさんとはこの町で合流するって言っていたのに……待っていないでもいいの？」

翌朝、朝食も早々に済ませたアルマンスールの隊商がクム・ウタールの町を出発したのは、かなり早朝だった。

折り返しバーラートの主の元へ報告に戻ると言うジャヤルの使者が見送る中、私達はいつものように普通の隊商を装って宿を出る。

そして、私はその使者に一通の手紙を預けることにした。

父と姉に対する、これまでの消息とこれからの事を走り書きのよう綴ったもの。

私が無事である事、偶然が重なって親切な人たちと同行している事、そして、これからのこと。

ただその先の事は自分でもはっきりとしたものではなく、希望的観測、或いは樂觀主義の夢想の域を出ない。

誰の目に触れるとも知れない物だけにはっきりとは書く事の出来ないそれは、時々私の胸に重荷のようにのしかかってくる。

同じようにはっきりとしない自分のこの先の展望、進むべき道が同じように靄に包まれているように思えてしまうから。

前方に見える一際高い山に向かって一行が馬を進める中、痺れを切らしたように口を開いたのは町が随分小さく見えるようになった頃だった。

それまでの物思いを振り切る為でもあり、気さくに応じてくれるミシエイルなら何かこの気持ちを紛らわせてくれるような気がして、早く会いたいと思っていたからかもしれない。

けれどラウドラチャクリンもフアドラーンもその言葉に特に応える気はなかったらしく、沈黙に報いられた私は幾分膨れっ面で馬を進めていく事になってしまった。

それでも暫くして大きな藪を通り過ぎた辺りで改めて振り返ると、隊の中程にミシエイルは居たの。

……彼がいつ何処でこの隊商に加わったのか私には判らなかったわ。

さっきの藪に隠れていたのかしらと考えるものの、馬に乗った人が隠れていられる程大きなものではなかったわ。

そしてついさっきまで考えていた通り、数日ぶりに会うミシエイルに声を掛けたいと思ったが、隊列を崩してまで彼の側に近寄るのも躊躇われて、結局休憩する為に馬をおりるまで誰かと話しさえしなかった。

ましてや休憩の間にもミシエイルと他の皆は改まった再会の挨拶をする訳でもなく、普通に日常の会話を交わしている。まるで初めから彼がこの隊に居たみたい。

「もしかしてこれは彼の家族の為……？」

「……そうだ。クム・ウタールであれだけクアーナ人が外部の者を見張る以上……近くに家族の居るミシエイルはあの町には却って接点が無い方が良くはないかと考えてね」

だから皆は取り立てて彼の不在に関心を寄せては居ないのだと……否、敢えて関心を向けないようにする事で外部からの違和感を無くそうとしていたのだわ。

ラウドラチャクリンは私の質問にそう笑顔で答えてくれた。

理由は判らないが、何か嬉しそうですらある。

隣に居たフアドラーンは黙ったままで、夕べから妙に寡黙になっ
てしまっていた彼が不安だった。

途中合流のミシエイルはそれでも隊の雰囲気を感じ取って

いたらしい。

今まで感じた事の無い不安な雰囲気の旅に、私自身も寡黙にならざるを得なかったのだけれど、彼の明るく接してくれる態度には随分救われる。

夕方近くになって馬を止めたのは街道筋から少し外れたところでおあつらえ向きに風よけになる石積みがある場所だった。

慣れた感じで野営の準備を始めた彼等に、いつもこの辺りで野宿しているのだと見当を付ける。

私も何か手伝おうと思ったのだけれど、慣れない者が下手に手出しをするのも却って邪魔のような気がして、石積みの隅に腰を降ろすと彼等の仕事振りを眺める事にした。

けれど只眺めていた訳ではなくて、次には手伝えるように手順や誰が何を担当しているか、も頭に入れる事にする。

「何か……元気が無いね、イエライシャ。ここまでの旅は辛かった？」

「……疲れている訳じゃないの、もう……何があつたか誰かからは聞いているでしょう、ミシェイル？」

当たり障りの無い言葉を選んで来た彼にそう答えてしまったのは、そんな腫れ物に触るかの如き皆の対応にいい加減うんざりしていたからかもしれない。

それでも表情まで不機嫌にはならないよう、何とか笑顔で彼を見上げる。

案の定、戸惑いが浮かんでいる彼の表情には少しばかり苦笑してしまったわ。

近くで焚かれている料理用のたき火が大きくなり、手際良く夕食が暖められてゆく。

その様子を私と並んで見つめながらミシエイルは少し迷ったふうにして口を開いた。

「少しは聞いたけれど……君がこんなにしょげているとは思わなかったな。私としては拍子抜けした気分だったよ」

「どういう事？」

「合流したら君が私や私の家族の事をいろいろ訊ねてくるだろうから……どんな風に説明しようかと思ってね。家に居る間中自分の家族をどう……表現しようかと思ってずっと観察していたんだよ。そうしたら……いつも一緒に居る訳ではないけれど大体は判っている、思っていたその家族の事を意外と自分は見えていなかったんだって事に気が付いてね。改めて自分と家族との関わりを見直そうと思ったんだ……」

「貴方と家族の関わり……？」

私を見つめて来たミシエイルを見返すと、私の顔に夜の風が当たる。

彼が冷たい夜風から私を守る為にそちら側に立っていたのだとようやく気付いて、本当にこの人たちはなんて優しいのだろうと、その優しさが却って今の私には痛い程悲しくて、苦しくなった。

「そう、だからきっかけをくれた君にはお礼を言わなりゃと思っていたのに……いざ会ってみたら何だか妙な雰囲気になってるし」肩をすくめてミシエイルは参ったという仕草を試みせる。

「妙ね……。そうかもしれないわ」

彼のこの表現には苦笑いするしか無いわね。

「仲間だからといってファドを擁護する訳ではないが……私達が自分達の安全以上に、自分達に関わる廻りの者達の身の安全に心を砕いているのは知っている？」

既に私が彼等の事に気付いているのを前提とした言い方に、最早知らない振りをしなくてもいいのだと、認めてもらえたような気がしてハッとしてしまった。

何となく気持ちだけではなく背筋が引き締まるような、そんな緊張感。

そして、この人達につまらない隠し事をしてはいけないような心持ちになった。

「ええ、知っているわ。初めにファドと言い合いになったのもそれが原因だったけれど……今の私が納得出来ないのはその事ではないのよ」

「納得出来ない……何に？」

ミシエイルには意外な言葉だったのか、聞き返されてしまう。

「ファドは……私がいずれは故国へ帰るものと考えているようなの。何だかその時……私の事を拒絶されたような気がしたのよ」

「俺から見ても……ファドラインは君の事を本気で好きなんだと思っているよ、そして……君も彼に同じ想いを抱いているのかな？ともね。それとも、だから……かな、余計に腹が立った？」

「そんなじゃなくて」

何だか茶化されたような気がして否定の言葉を唇にのせる。

「それともファドラインに愛想を尽かして……ラウに乗り換える気になった？」

心配げに……そして探るようなミシエイルの言葉に束の間絶句する。

そして彼のその言葉を笑って流そうか、怒って否定するべきなのか逡巡して、溜め息とともに、うまく言葉に出来るかどうか判らないものの口に出してみた。

「ファドもそれを案じているみたいね。ラウが私の事をずいぶん評価してくれているのは判っているし、嬉しいとは思っているわ。けれど私では彼を……ラウの心を支えられないって判るから……初めから恋愛とかの対象には成り得ないのよ。……わかる？」

「もう少し……説明が欲しい」

考え込むような表情のミシエイルに促され、思い切って言葉を続けた。

「フアドもラウも、タイプは違うけれど行動力もあって頼りになるし、礼儀正しくて私は2人とも大好きよ。ラウにすぐ傍でにつきりされたら恥ずかしいくらい真っ赤になってしまおうけれど……でも駄目なの」

「そこが私には判らないな。ラウは今までに見てきた中で……随分君の事を気に掛けているようなのに」

……つまり今までは他の女性には目もくれなかったって事？

「じゃあ、私を構っても安全だって……彼も気付いているのかしらね。プライドの高い男の人って本当はそんな女には関わりたくないんじゃないかしら……自分の弱い所を見抜かれるのって嫌でしょう？」

「弱い所？」

思ってもいなかった、と、ミシエイルの返事が語る。

「あのひとはとても綺麗でとても賢くて……私が、以前の……身勝手で、身の程知らずで、馬鹿な娘のままだったら……きつと夢中になっていたわ。バーラートで貴方達に会う前の一人旅を経験していなかったら……多分ね。でもそんな馬鹿娘のままの私だったら、彼は今のようには私の事を気にもしてくれなかったわよ」

そう区切って、1つ深呼吸をする。

「それに私は未だに彼の瞳を見つめ返す事が出来ないの。……あの深さが怖すぎて」

私が何を言いたいのか、いまひとつ掴めていない風なミシエイルの顔にようやく作り笑いでない微笑みを向けた。

「私は自分がどんなに考えの足りない……弱い心の持ち主かを思い

知ったの、貴方達に会う前のあの旅で。一見親切そうな男に騙されて……ほんとうに娼館へ放り込まれそうにもなったし。偶然だったのか見兼ねた誰かが手を貸してくれたのかも判らないけれど……寸前で逃げ出す事が出来たのは幸運だったわ。だから本当はもう男の人には近付きたくないって思っていたのに、結局は此所に居るし……」

声が震え、笑顔のまま泣きそうになった。

あの時、出来得るならば自分1人の力で旅を続けようと、人には頼るまいと、決めた筈だったのに。

「でもいろいろ学んだから、随分判って来たと思うのよ。私が一緒に居たい人は頼りになる人なんだって。安心して心を預けられる人……って意味よ？そう言う意味ではラウは駄目なの。彼を見ていると何だかとても心配になるから……自分が平静で居られなくなる……のは情けなくてつらいわ」

「彼に恋しているから、平静で居られなくなるんじゃないの？」
何かにこだわっているのか、まだその考えを捨てていないらしいミシエイルに今度は穏やかな声で応じる事が出来た。

「ちがうわ、意地悪ね。私は彼のあの瞳が本当に怖くて……堪らない時がある位なのに。ラウに必要なのはあのひとが抱えている何か……私の言葉では言い表せないような……大きな不安のようなものを癒してくれるひとだと思うわ。そんなひとを見付けて……そのひとを守る事で自分も守られる……そんなふうでしか彼のあの昏い瞳は癒されないと思うの」

「うん……昔よく似た事を私の妻が言っていたな……有難う」
考え込んでいたミシエイルはふと、思い出したようにそう言っ、礼を付け足して来た。

「何が？」

「自分の選んだひとが……とてもしっかりした観察眼を持った人だったって、再認識出来た」

「……ごちそうさま」

「まだ夕食前だろう？」

ひとしきりふざけて笑い合っていたら、たき火の方からファドが夕食に招いてくれていた。私達の話が切れるのを待っていたみたいだわ。

「イエライシャ……君から見て彼には何が足りないと思うの？」

「彼自身はどんな風に考えているのか知らないけれど、ラウへの劣等感をふっ切る事かしら。彼だって一人前の大人なんだし」

ファドの方へと足を向けた私にミシェイルはそう訊ね、その答えににやりと笑みが返って来た。

「どうやらミシェイルも同じ意見らしい……と察した私は少しだけ勇気づけられたような気がして、笑顔でファドラインとラウドラチヤクリンの待ったき火へと向かった。」

036 金色の雫

ミシエイルがイエライシャの隣に居座ったのを見るともなしに意識しながら、俺は夜の準備をしていた。

夕食の支度をするグループと野営の為の風よけのテントを用意するグループ、そして数人がひっそりとこの辺りの安全を確認する為に見回りに出る。

俺はテントを、そしてラウドラチャクリンは見回りの方へと廻った。

……多分ラウは、この野営地の廻りに侵入者があれば判るような、彼なりの術を仕掛けに行ったのだろう。

そして、風を孕むと暴れて扱いにくくなるテントの布地と格闘するのはもっぱら俺の管轄だった。

横風にはためく帆布を自分の属性を使って難なく捌き、歪みの無いテントへと仕上げる。

手が空いたのかサボりかと、作業の合間にふと顔を上げてミシエイルの居る場所がイエライシャの風上なのに気が付いた。

これから風が更に強くなるのを考えると奴の意図が読める。

その配慮に感謝して奴の行動に文句を付けない事にした。それでも少しだけ属性を行使して、その付近の風が強くないようにと付近の空気を調整する。

話の内容までは判らないが、2人の間では会話が弾んでいるらしい。不器用な俺が寡黙になる分ミシエイルがそれを補ってやっているのだらうと思いつつも少し……悔しい。

そして同時に数日前の事を思い出していた。

「彼女が頬を染めるのを見ると、初々しくていい」

確かにそうラウドラチャクリンは口にしたが、俺はてっきり彼が

俺をからかったのだと思っていた。

「私が見込んだ者ならそう言うだろうと……思っていた」

そして昨夜、イエライシャが自分の意志で旅の継続を決めた時、ラウドラチャクリンは滅多にお目にかかれないくらいの満足げな笑みを浮かべてそうも言った。

……彼は彼女の何を見込んだと言うのだろう。ただの仲間として？それとも……女性としての存在を？

危惧していただけに考えたくない事を考えてしまう。

そして奴の笑みに簡単に頬を染めてしまいうイエライシャを見ているのが辛くて、そして口を開いたら言わなくてもいい事を言ってしまう。流石に大人げないと思うので態度までは変えられないが、それでも少しだけラウドラチャクリンとイエライシャとの間に距離を取る。

今までにラウドラチャクリン本人にその気があるかと無かろうと、彼の近くに居て、彼を気にしなかった女は殆ど居ないと聞いていた。実際……彼に付いて歩くようになってから、明らかな秋眸を感じない日はないと言ってもいいくらいだ。

けれどラウドラチャクリンの方から本気で近付いた女性なんて見た事が無かったから、彼がどんなタイプが好みなのかもはっきりとは知らなかった。だから彼が夢中になるような女性ならば一度は見ておかなければ、位の好奇心だけだったのに。

ラウドラチャクリンが外見から入る奴じゃないのは知っていたが、もしも、イエライシャが彼の好みだったら？

……そして彼女が彼を選んでしまったら？

ラウドラチャクリンの瞳が怖いと彼女は言ったが……何処が怖いのだろう……にこやかに談笑している時の表情からはそんな気配は伺う事が出来なかった。

夕食の支度もほぼ完了した頃、見回りに出ていたラウドラチャクリンとヨシユアが戻って来る。

あと2人が別のルートを確認に出ているが、じきに戻りそうな気配だと……空気を読んで、風よけで話を続けていたイエライシャとミシエイルに声を掛ける。

大した話でもなかったのかすぐに2人は火の傍にやって来て、イエライシャはいつも通りに俺の左隣へ、そしてその隣にはそのままミシエイルが座り込んだ。いつもならラウドラチャクリンが座るはずの場所だったが、当のラウドラチャクリンも何も言わずにそのミシエイルの更に隣へと腰を降ろした。

皆如何にも自然にふるまっていて、変な顔をしている俺だけが取り残されたような感じすらする。

「家族は……どうしていた？」

「いつも通り、元気でしたよ。私としては意外な発見もあって……楽しみが増えたんですが」

普通の世間話のようにラウドラチャクリンがそうミシエイルに訊ね、普段なら家族の事を訊ねられると畏まって答えていた彼が、何か嬉しそうな笑顔でそう返事をするのが意外だった。

家族と言う存在を、それを持たないラウにアピールするのが辛くて、皆あまりその手の話はしなかったのに。

「そうか、何よりだな」

それ以上家族の話は出なかったがそう答えたラウドラチャクリンも意外に嬉しそうだったのが印象的で、この変化が何処から来たものなのだろう、と考えるとやはりイエライシャへと辿り着いてしまう。

隣のその彼女に食事の皿を渡しながら、ついそんな事を考えていた。

「どうかしたの？」

「……ああ、ミシェイルの印象が変わった……と思って」

ぼんやりしていただろう俺がそう答える。

「良い事があったみたいよ？」

とびきりの笑顔でそう彼女が答えたので、先程の話題はそれだったのかと思ひ当たる。そして彼女のその笑顔を間近で見るのが久しぶりだって事にも。

目を逸らそうとしたが……出来なくて……至近距離でイエライシヤの金色の瞳を覗き込んでしまった。

そして確か昔、親父が管理していた荘園の酒蔵で、古い酒樽から出された逸品物の古酒がこんな色だったのを思い出していた。

親父の酒蔵では年に一度、古酒の品質を確認する為にテスト用の樽を検査するのだ。

跡継ぎとして、俺も覚えておかなくちゃならない事の一つだからと連れて行かれた酒蔵は、殆どが地下に埋もれたような造りの湿気と温度にこだわった建物だった。

親父の蔵には評価の高いものが多く、特に年代物の酒はあと数年したら献上品として王家に上納されるものだと言われた。

透明なグラスに注がれたそれは綺麗に透き通っていて、淡い金色の輝きはまだガキだった俺には価値の判らないもののはずだった。けれどその誘惑の輝きには勝てなくて、普通ならテイステイングした酒は吐き出してしまうものなのだが、俺はそれをしなかった。

子供の味覚にはきつく苦いとしか感じないはずの酒精も、輝きの前には何の障害でもなかった。

そして他の事に気を奪われていた大人達の目を盗んでそのグラスを空にしてしまい、フワフワとした浮遊感にぼんやりとして、その

後の事は実は覚えていない。

目が覚めたのは次の日だった。

頭が痛くて、気分も悪くて、何が起きたのか判らなかった。

親父や他の者達は特に怒りはしなかったが、母親のルツイエラは困った顔をしていたっけ。そんな事があって以来とおきの良い酒に出会っても、無意識の内にあの時味わった古酒と比べて居る自分を自覚している。

「フアドラーン……どうかしたの？」

心配そうなイエライシャの声に我に返ると、俺を見つめ続けたのか彼女はもう少しだけこちらへと顔を近づけて来た。

「少し……昔の事を思い出していたんだ。俺がまだ……子供だった頃の」

「貴方の子供の頃？」

「まあ……ね」

そう素直に口にしてしまったから、正直困った。

深く考えずに口に出してしまった言葉に、あまり突っ込まれても困るので視線をそらす。けれど追求してくるかと思っていた彼女はそれ以上の関心を示さず、食事に専念する事にしたようで、俺は少しばかり拍子抜けした気分だった。

037 異変

……本当はとても興味があつたわ。

半分上の空のように無防備だった彼が口を滑らせたのだと、その後の狼狽えようで見えてすぐに判ったもの。

ファドラーンが子供だった頃の話なんて、普段ならば話してはくれない、けして話題にはならない事だわ。

けれどそれをしつこく訊ねて……事実ではない……当たり障りの無い作り話をされるのはすごく嫌だった。

話してくれる気がないのなら、聞かない。

だから尋ねない。

……拗ねている訳じゃないわ。

ミシエイルに家族の事を尋ねなかったのとは逆の理由だった。

彼なら訊ねれば、きっと正直に答えてくれるだろう。

けれどそれを私が知る事で彼等にいつか迷惑が掛かるかもしれないのなら、知らないままで居た方がいい、そう素直に思えたのに。

軽く流す風のファドラーンの答えに相づちだけを返して、食事を続けた。

反対側の隣ではミシエイルとラウドラチャクリンが、ルクアディナルファの首都クティナンまでの日程を改めて確認し合っているのが耳に入ってくる。

アルマンスールの屋敷を出てからここまで十日掛かっている。

明日峠を越えたら首都までは十日の道のりだと言う話だった。

あと十日。

そして何日首都に滞在するのかは判らないものの、その間に私は

自分の道を見付ける事が出来るのかしら。

いいえ、見つけなければならぬはずなのに。

今はその事のほうが私にとっては重大な関心事のはずだった。

夕食の後は皆そそくさと片づけを済ませると、降ろしてあった馬の荷をテントに運んで寝仕度を始めた。

強くなった風を遮るように地の厚い生地で覆われた簡易テントの中、交代で見張りに立つ者が入り口の近くに場所を取り、皆が睡眠を取る為に横になる。

奥の方の一角に荷物で壁を作るようにしてファドラーンは私のスペースを確保してくれていた。その壁のすぐ外にはファドラーンとラウドラチャクリンがそれぞれ場所を占める。

お休みの挨拶をしてそれぞれの場所に横たわっていても、やはり自分の今後の事が頭から離れなくて、なかなか寝付かれなかった。

自分に出来る事を見つけられるのか、それとも、故国に戻らざるを得ないのか。

何故急にそればかりが気になりはじめたのか、自分でも判らなかつた。

ただ、早く結論を出さなくちゃ、という焦りだけが先走っていたのかもしれない。

一晩中そんな事ばかりをとりとめ無く思ううちに皆が起き出しはじめ、外はまだ暗いと言うのに出発の準備を始めた。

朝食はかなり簡単に済ませる。

皆先を急ぐふうなのが気になるが訊ねられずに居ると、傍にミシエイルが立っていた。

「出来れば早いうちに峠を越えてしまいたいんでね……けれど、もしも、体調が思わしくなくと思ったら、遠慮なんてしないで、すぐファドや廻りの皆に言うんだよ」

「うん……そうするわ。有難うミシエイル」

「どういたしました」

見計らっていたかのようにそう言ってくれた彼に笑顔で答えると、相変わらずにこやかな微笑みに見守られて馬へと跨がる。

けれど難所として聞き及ぶラワル峠を通い慣れた彼等の心理的余裕は、私には良い方には作用しなかった。

どう言う訳か、旅慣れた彼等のお荷物、足手まといになっては大変だわ、としか考えられなくなっていたのだ。

必然言葉も少なくなり、景色を楽しむ余裕も無くなっていた。

ラワル峠とは、峠と呼ばれているものの、剣だかい山々の裾野を縫うようにルクアディナルファへと続く谷間の道の一部だった。

殆どが谷間の旅で、ラワルはそのルートのうちで一番標高が高いことからいつの間にか「峠」と呼び習わされていたのだと、道々ミシェイルが教えてくれていた。

ラワルを越えてルクアへ入る最初の平野、ティンリ高原は天気が良ければとても良い眺めだとも。

……後になって冷静に考えてみれば、慣れない者が急に高度の高い山地の旅を始め、大分馴染んで高地に順応していたようにも見えた体調も、峠越えの為に更に高度を上げた土地へは対応出来なかったのだろう。

既にこの時の私は所謂、高山病の初期段階にあったのだ、とは後で推測出来ただけけれど。

気を逸らそうとしても逃れられない鈍い頭痛。

そしてひどくはないものの気持ちが悪くて、外套のフードで風を避けながら冴えない顔色と不調さえも隠した。

その日の昼食は何とか少しだけ摂って、残りは目立たないように処分してしまった。

幸い馬を軽く休ませる為の休憩を兼ねた時間でもあったので、皆が集まって一緒に食事すると言うものではなく、各自馬の側で食べたりとバラバラだった。

だから少しばかりふらつく身体を馬に預けていても、たいして誰もいぶかしんだりはしなかった、と思っていた。

……どうしてこんなにふらふらするのも、自分では判らなかったのだけだ。

そしてイクシールの首都を出てからの私は、馬に乗るのに人……ファドラーン……の手を煩わせないようにと何とか自分で馬に跨がれるように練習してもいた。

私にと宛てがわれた馬が大人しいのをいいことに、目に付いた頭一つ分くらい大きな石の近くまで馬を連れて行き、その上から少しだけ近くなった馬の鞍へと飛び乗る、いいえ……正確にはよじ登るの。

それを自立と考えているのか、初めは心配そうに見ていたファドラーン達も私がそのやり方で何とか乗れるようになると、本当にこけた時の為に見守ってくれるだけになった。

纏らない考えと、いつからか覚えていた吐き気とでままたらない身体をそれでも何とか鞍の上に押し上げると、馬を促して隊商の列に連なる。

後は指図するまでもなく、馬は仲間との流れに乗るように歩み始めた。

天気の良い昼下がり、乾いた空気と厳しい日の光がティンリ高原を照らし出していて、普段の生活の中では決して見られない壮大な自然を身近に見せてくれていたのだが、私は鞍頭だけを見つめて、だんだんとひどくなるような頭痛に耐えていた。

「イエライシャ……気分でも悪いのか？」

突然、その声をかけられて弾かれたように顔を上げると、伺うようにラウドラチャクリンが覗き込んでいた。

ファドラーンは隊のリーダーとして最前に、そしてラウドラチャクリンは隊列の一番後ろに居たはずなのに。

中程に位置している私の所までわざわざ馬を急がせてくれたのだ。

「後ろから見えていて気になったから」

心配そうな彼に私はにっこりと笑みを返した。

「夕べあんまり眠れなかったのよ……ほら、下が岩場だから。食事したらそのぶん眠くなったみたい……大丈夫よ？」

それでも顔色を読み取られないようにとまた俯いて、表情すら隠してしまった。

だから、ラウドラチャクリンがミシエイルや私の廻りの人たちに何か合図したらしいのには気が付かなかった。

そしてそのまま彼の馬が後ろへ下がるのではなく、隊列の前へと移動したのにも。

自分の苦痛に気を取られ、回りの事は全て意識から締め出されていた。

そして何時の間にラウル峠を越えたのかも判らず、その後の記憶すら殆ど無くなっていった。

「……イシャ、イエライシャ？」

聞き覚えのある声に気が付いて、何とか痛む頭を持ち上げる。

ゆっくりと廻りを見回すと馬は既に歩みを止め、世界は夕暮れの色が濃くなっていた。

既に馬から降りたらしいファドラーンの顔が心配げに私を見上げている。

その表情があまりにも心配そうで、どこか辛そうに思えて、私は何か言葉をかけようと思って口を開いた。

だのに、耳に聞こえたのはかすれた喘ぎ声のようなものだけで、自分がどうなってしまったのか判らないまま身じろぎして、バランスを崩した身体を支える事すら出来ず……鞍から落ちた……と思った。

何度目かの呼びかけにようやく顔を上げ、答えようとでもしたのか口を開く。

けれど、ぐらりと身体は傾いて……イエライシャは鞍からずり落ちる。

その身体を受け止めながら、俺は表現のしよりの無い苛立ちのよなものを覚えていた。

誰にとって？

決まっている、自分にだ。

更に何かを言おうと彼女の唇が動いたが声になる事はなく、かすれた息が痛んだ気管を抜ける音……が聞こえただけだった。

「熱は？」

「殆ど上がっていません」

むしろ抱きしめていても体温を感じられないくらい冷えている。

自分達にしてみれば見慣れた高山病の症状だが、初めて経験したイエライシャには不安な症状のはずだ。感情の無い声でラウドラチヤクリンに短く訊ねられたが、声が硬くなってしまうのは止められなかった。

「……わたしに怒るのならお門違いだぞ？」

「判ってます」

そう答える声までもが硬くてそれをどう判断したのか、ミシエイルが慌てたように話に割り込んで来た。

「それよりも、簡易テントの準備がもうじき出来るから……休ませてやらないと。熱が上がってないのなら下がり過ぎてしまわないよう、暖めないと回復が遅れるぞ」

「……ああ、判っている」

そう答えて、支えていたイエライシャの身体を横抱きに抱き直すと、形の出来上がりつつあるテントへと向かった。

あの時はどうなるかと皆ハラハラしていたんだぞ？と後でミシエイルは結構真面目な顔でそう言った。

ファドラーン……お前の気配が尋常じゃない上に、ヴァル様まで火に油を注ぐような妙な事を言うし……帯剣していたお前がもしも剣に手を掛けるような事があれば、お前は反逆罪でその場で処分だぞ？

仮にも親衛隊の長が自分の主に剣を向けたとあっては、主たるヴァル様の恥、そしてお前の一族も……事に拠っては只では済まないだろうに。

私はイスナード様の困った顔は見たくないんだからな。と、心底ほっとしたような表情で言われてしまったのはこちらとしては申し訳の無い気分になる。

けれどあの時の俺は何よりも自分に腹が立っていた。

何が、自分がなにげに口にしたどんな言葉がイエライシャを苛立たせたのか、謝りも確認もしないで放っておいたのは俺だ。

そのせいで気まずいままの俺たちがぎこちないのを見兼ねてラウドラチャクリンとミシエイルが彼女の傍に居てくれた。

彼女がそれで俺を見限っても、俺は本当なら文句も言えない立場のはずだ。

それなのに、今度はイエライシャの傍に居てくれた2人にお門違いの嫉妬を覚えていたとは……情けなくて自分が嫌になる。

その挙げ句に彼女から距離を取って、彼女の体調の変化に気付いてやれなかった。

隊列の後ろから異常に気付いたラウドラチャクリンが知らせてくれなければ、俺はくずおれるイエライシャが他の男に抱きとめられる現場を遠くから目撃する事になっただろう。

もしもそうなら俺は自分がどんな行動を取っただろうかと、少しばかり背筋が寒くなった。

実際は幸いにも傍に居て、その力の無い身体を受け止めながらも、恐怖に戦っていたのだが。

ラウドラチャクリンがイエライシャの変化に気付いた時、既に隊商はラワルの頂を目前にしていた。

高山病になった時の一番の対処法は早急に高度を下げる事だが、ここから引き返していても元の町クム・ウタールは遠い上に、我々の行程も遅れてしまう。

馬の上でイエライシャは既に半分意識がなかったので、それ以上の苦痛を感じる事も無いと判断して俺達は峠越えを優先させることにした。

彼女の様子を看る為に俺とラウドラチャクリンが彼女を挟んで脇に付き、ミシエイルが隊の先頭に立つと峠を越える。

そして、後は馬には悪いが一気に高度を下げる為に馬速を早めた。
……それに自分の為に隊を戻したと知ったらイエライシャはきつとひどく怒るだろうことも……想像に難くない。

そう考えながらイエライシャの馬の手綱を取り、暗くなるギリギリの所まで距離を稼いで野営出来る場所へと辿り着いたのだ。

いつも通りの慣れた手順で簡易テントが張られ、中にイエライシャの為のスペースを確保すると彼女の身体をそっと横たえる。

こぼれる浅い呼吸が如何にも苦しそうで、それを只見ているだけと言うのはもどかしくて、つらい。

「悪いが、もう一度身体を起こして背中を見せてくれ」

そう隣で付き添っていたラウドラチャクリンに指示されて、無言

のままその指示に従う。　ラウドラチャクリンが摩るような仕草でイエライシャの背を撫で、所々で手を止めた。

「少し肺をやられているようだが……これくらいなら癒せるな」

そう独り言のように口にする、再び彼女を上向きに寝かせるようにと仕草で指示して、更に俺の表情を伺うような仕草を見せた。

「胸を触るが……いいな？」

「治療の為でしょう……仕方無いじゃないですか。それに俺の許可ならいらんでしょう」

ふて腐れたような俺の返事に、いつものようににやりと口の端を上げる。

「……後で彼女に謝っておいてくれ」

「なんで俺が……」

「仲直りするんだろう？　口実がなくても出来る奴になら……こんな事は言わないよ」

そう言う、初めから俺の返事なぞ期待してはいないとばかりにイエライシャの身に付けたままの外套の胸元をはだけさせ、素早く衣服の胸元を開いてゆく。

そして肌着の上から、妙齡の女性らしく形の崩れていない両胸に両手をかざした。

触る……とは言ったものの、触れるか触れないかのぎりぎりの位置にいるその手が遠慮しているのは明らかで、その遠慮が彼女に向けたものなのか俺へのものかははっきりとはしない。

本当は直に触れていた方が効果も有るし、癒し手にとっても負担が少ないのだと言う事を俺も知っていたが。

それでも。

触れていい……とは言えなかった。

身体の内側を癒すので見た目の変化は余り無いものの、浅く、間隔の狭かったぜいぜいとした呼吸が次第に整った間隔に変化してゆ

き、かすれる呼吸音もやわらいできた。

肌の色が明るくなってくるのが判ると、心配で詰めていた息をようやく俺も吐き出す事が出来た。

最後に大きな呼吸をしてイエライシャの胸が大きく波打ち、彼女がようやく眠りに入っただのを確認するとラウドラチャクリンも両手を引っ込める。

彼女に見とれたままの俺に再びにやりとしてみせるが、流石に疲れた影は隠せないようだ。

「後は任せるが……体温が戻らないようならばお前が暖め役だからな」

瞬間……俺の顔が真っ赤になったので、如何にも楽しそうに奴は声を上げて笑った。

外で夕食の支度や馬の世話をしている者がほとんどで、テントの中に居たのは数人だけだったが、皆がラウドラチャクリンの笑い声にびっくりしているのが手に取るように判る。

それくらいラウドラチャクリンが声を出して笑うのは珍しかった。

「食事は届けさせよう。看護は任せたよ」

そう言い残して彼が居なくなると、俺はイエライシャの衣服の乱れを直してやり、眠っている表情をずっと見つめていた。

039 温もりと距離

自分を包む優しい暖かさの中で私は目を覚ました。

待って……？私は馬に乗ってたはずだわ。

どういう訳か息が出来ないくらい苦しくて、寒くて、そしてファドラーンが心配そうな表情で私を見ていて……。

そう自分の記憶を辿りながらも、薄闇の中自分を包む温もりの心地良さに縋り付くように更に身を寄せて、ようやくそれが誰かの胸である事に気が付いた。

規則正しい鼓動と、寝息だろうか呼吸に合わせて胸が動く。

自分の置かれた状況が判らない中、恐る恐る見上げて、その胸の主がファドラーンである事をようやく確認した。

一気に頬が熱くなって、鼓動すら速く大きくなってしまったような気がする。

それを気取られるのが恥ずかしくてそっと身体を離そうとしたが、眠っていると思っていた彼の腕は思いの外強い力で私の肩に廻されていて、離れるどころか逆に抱き寄せられてしまった。

「……おはよう、イエライシャ」

廻りで眠っている仲間に聞かれないよう潜めた声が耳元に注ぎ込まれ、その感覚に粟立つように鳥肌が立つ。

「おはよう……狸寝入りなんてずるいわ」

「昨日の君はとても冷えていて…放っておく訳にはいかなかったんだ」

視線を合わせて抗議するとそう返事があり、私をきつく捕まえていた腕から力が抜ける。離れたければ好きにしてい、そんな気

配だったがまだその温もりを手放すのは惜しい気がして、私は彼に抱かれたままになっていた。

全身をくるむように彼の温もりが私を暖めていてくれる。

昨日まではなんとなく私達の間には距離が有ったのに、今はそれがない。

このまま心の距離もなくしてしまえたらいいのに、ふとそう……思った。

「私……どうなっちゃったのかしら……昨日？」

それでも問わない訳にはいなくて、曖昧な微笑みを浮かべてフアドラーンへと訊ねた。

「かなり典型的な高山病。空気が薄くなったせいで頭痛と吐き気、そして平衡感覚の喪失……さらに進行すれば肺の内部を損傷して死に至る……って奴だ。呼吸が苦しかっただろう？」

「高山病って……私は船酔いのようなものだと言っていたわ」

恐る恐る訊ねると、そうフアドラーンの言葉が返ってきた。

感情を押し殺しているような平坦で低い声に、怒っているのだと思った。

具合が悪くなったら言うようにと、はじめから言われていたのだから。

そして、それを怠ったのは私なのだし。

「莫迦……なことを。高地で気圧が低くなれば危険は幾らでもある。もしもラウが居なければ君は今頃どうなっていたか……」

「あの人が私を癒してくれたのね」

少しばかり他人事のように言いながら、けれど私は昨日の苦しさを思い出していた。

そして臍げに記憶に残るフアドラーンの表情も。

不安そうに歪んだ眉と引き結んだ厳しい口元。

朦朧としていた筈なのに、彼のその表情だけは覚えていたわ。

「ごめんなさい……異常があれば言うようになって貴方もミシエイルもずっと言っていたのに……。貴方にあんな顔させるつもりは無かったの……。それが言いたかったのに、あの時は声が出なかった……。のが……。こわかった……」

喉を通り抜けてゆくだけの空気と伝えたくても言えない言葉。

……思い出すと胸が痛くて……。涙が出た。

「……言えないくらい距離をあけていたのは俺だよ？ 謝らなけりやならないのは君じゃない」

そうファドの声が降ってきてもう一度胸元へと抱き寄せられると、素直にその胸に頭を預けた。

涙が止まるまでのかなりの時間をそのままで過ごして、再び私は眠ってしまっていたらしい。

微かなざわめきに目を醒ました時にはテント越しにも明るい光が感じられ、すっかり夜が明けてしまっているのが判った。

隣に居てくれたファドラインも姿が見えない。

……それどころかテントの中には誰も居なかった。私達を廻りから仕切っていた荷物も殆どが運び出されていて、外のざわめきが出発の為の準備だと気が付いた。

皆に気を使わせてしまったのが申し訳なくて慌てて身体を起こすと、流石にまだ脱力感拭えないけれど昨日の息苦しさは無い。

多分馬から降りた時のまま寝かされていたのだろう、外套すら身に付けたままで横たわっていたのを身繕いしようとして、胸元のボタンが幾つか外されているのに気が付いた。

……自分で外した覚えは無い。……じゃあ一体？

そのまま硬直していた所へフアドラインが入ってきた。手には持ち手のついた金属製のカップが一つ。

「起き上がれる？薬を貰ってきたよ」

言葉を切ったフアドラインは胸元を押さえたままの私に気付いたらしい。

隣に来て座り込んだ彼の気配に目を上げると、何と言っているのか迷っているその表情を見上げる事になった。

「夕べ……私に何かした？」

かすれて震えてしまったその声に、一瞬フアドラインが瞳を閉じる。

見つめたままで居るとその表情に微かに笑みのようなものが兆して、込み上げてきた笑いを押し殺そうとしていたのだと、悟った。

「わ、笑う事無いじゃない」

「そういう事に気が回るってことは大分回復したんだね。それにしても……俺達を信じていないな？意識の無い女の子に悪戯なんてしないよ、服の前を開けたのは……治療の為だ」

「じゃあ……」

尚も言い募ろうとした私の前でフアドは自分の両胸に両手を当てて見せた。

そしてきょとんとしていただろう私にかなり真剣な表情で説明を始める。

「ここが大体肺のある位置だ、出来れば直接触れていた方が治療師には都合がいいんだが……未婚の女性の素肌に触れる訳には行かないからね。流石にあいつも遠慮したんだよ、肌着の上から直接は触れずに治療したんだ」

そう言われても、やはり素肌に近い所までを2人に見られていたと知って、頬が真っ赤になったのを感じる。

「君の……呼吸が苦しかったのは君の肺に機能障害が出始めていたからなんだ。それが悪化すると肺水腫といって……死に至る病になる。重症になっても治せない事は無いが、大の男でも高熱を出して意識不明になる程だ。幸い君の症状は軽いものだったから……ラウでも癒せたんだよ、もっとひどくなっていたら彼でも命がけの治療になる」

「命がけて……」

「他人を癒すのは、とても気力体力の要るものなんだ……現に奴もさっきまでひっくり返って寝ていたよ」

「そんな……」

思いがけない言葉に私が動揺の色を見せると、ファドラーンは少しばかり困ったような顔で。

「大丈夫、もう回復しているから心配要らない」と何だか素っ気ない。

「もしかして……ファド……ラウに嫉妬してる？」

「別に……」

「嘘」

「……」

誤魔化そうとしたファドラーンに、つい強い口調で否定の言葉をぶつけてしまい、それをどう受け止めたのか黙ってしまった彼を見つめた。

「どうして……貴方の方から私との距離を作ったの？怒ったままの私がラウと仲良くしていたから？ううん、そんな事よりも……どうして私が自分の国に戻ると……戻るだろうと思えるの？貴方は私を……帰したいの？私が居なくなってもいいのね？」

初めの質問を口にしてしまって、後はもう止まらなくなった。

本当にずっと聞きたかった事までを一気に口にしてしまい、流石にうろたえた彼を真剣な面持ちで見つめる。

答えが欲しくて。

040 宿題と答え

……私が居なくなってもいいのね？

その問いかけにようやく、彼女が俺の言葉の何処に引っかかったのかを理解した。

初めてイエライシャと口論になったあの日、アルマンスール家の馬屋で自分の失言を何とか取り繕おうと必死になっていた。

中途半端な知識のまま彼女が俺たちに関わり続ける事のリスクを知って欲しかったから、例え話のつもりだった。

あの時も今も、彼女を側から離したいなんてカケラも思っては居ないのだ。

その証拠にイエライシャが他の男と談笑しているだけでも落ち着かない……のに。

けれどそういう想い全てをどう表現すればいいのか、言ってしまうてもいいのか、躊躇する自分が居るのも確かだった。

それに、俺自身が彼女からの返事を待つと言った自分の言葉に縛られていたのかもしれない。

「……一度にあんまり沢山聞かないでくれ」

溜め息とともにそう返事を返すのがやっとで、緊張していた身体から力を抜いてテントの床へと座りなおした。

改めて、真剣な顔の彼女と向かい合って座る形になり、それはそれで緊張しない訳じゃないが、じっと彼女の顔を見つめる。

「……何から答えて欲しい？」

「どれからでもいいわ。でも全部に答えが欲しいの」

真剣な表情のままの彼女に、欲張りだな、と言うと怒るだろうか。

「俺は君が好きだと言った、それは今も変わらない。そして……君が君の国に帰るなんて事は考えたくもない。出来る事ならば君には側に居て欲しいからね。けれど、その前に君の自由を大切にしたいかったんだ」

「私の……自由？」

「そう、俺はこのとおり言葉の足りない男で……いつも君を怒らせているような気がする。だからいつ君が俺に愛想を尽かすとも限らない、それも君の自由だからね。それにこの隊の男達の半数以上は独身で、君のように美しくて気だてのいい女性に無関心で居られる奴は少ない」

「ラウを含めて……と言いたいよね？」

俺の言いたい事に見当が付いたと、怒ったようなイエライシャの表情が語っている。

「……別に奴だけとは言っていないけどね。だから君が誰を選ぼうと選ぶまいと自由だってことだ。皆は君が最初に関心を示したのが俺だから……結果が出るまでは遠慮しているのに過ぎないし、俺がリタイアしたら立候補したいと思っている奴は多いと思うよ」

「だから私との距離を取ったの？リタイアしたと表明する為に？」

「違う。君の自由を尊重しただけだ、俺を選ばないという……自由をね」

自嘲的になっているであろう俺の表情をどう受け取ったのか、彼女が視線を床へと落とすのをじっと見つめる。

「どうして私が貴方を選ばないなんて考えられるの？それで……平気なの？」

「それが君の選択ならば仕方が無い。俺は……随分至らない男だろ

う？」

「貴方がコンプレックスを抱いている誰かに比べてって言いたいのなら、そうだわ。だけど彼は……私が彼に恋心を抱く事が無いから、それを承知しているから私に優しいのよ……それも判らないの？」

思いがけない言葉とともに、真正面から彼女の視線を受け止める。
「何故……？」

「私ではラウなんて手に負えないわ。あんな厄介そうな男の人を……選べる女性なんて、本当に自分と言うものを確立したひとか、何にも判っていない……雲のようにふわふわした……それでも許容範囲の広いひとぐらいのものだと思うわ。私は……以前にも言ったわ？ 彼が怖いって……あの人には私は恋愛感情を抱けないのよ」

尊敬は出来るけれど、と苦笑してそう付け足したイエライシャを俺は黙って見ているしか出来なかった。彼女の表情が今にも泣き出しそうに思えたから。

「君は……君の価値観を満足させる事の出来る未来を模索しているんだ……それには俺は……俺達は口出し出来ないよ？ 自由という言葉は……俺にとってはとても重い言葉なんだ」

そう言葉を続けた時俯いていたイエライシャが顔を上げて、口を開いた。

「E t r e l i b r e , C ' e s t ? t r e c o n d a m n
? ? ? t r e l i b r e」

「……何？」

呪文のように口にされたその言葉に、いや言語には聞き覚えがあったものの意味までは汲み取れなかった。

「ようやく思い当たったわ……この意味に」

そう言った彼女の顔は何だかすっきりとしていて、さっきまでの俺達の間にあった悲壮感などかけられない。

その潔いと言える程の変化に正直取り残されたような気すらしてくる。

「ありがとう、ファド……貴方のお陰で宿題が一つ片付いたような気分だわ。貴方も私も……自由というこの言葉に縛られていたのね」

にっこりした彼女はそれでも、少しばかり目元に滲んでいた涙、先程までの感情の高ぶりの余韻のような……を拭うと、俺に向かって右手を差し出した。

「仲直りの握手。私は貴方を、貴方は私を見誤っていたのなら……もう一度ここから始めたいわ」

差し出された手を見つめて俺が躊躇っているとイエライシャはそういった。

「出会った所から？」

「……うん」

「難しい注文だね……」

「どうして？」

「出会った時……あの時……もう俺は君が好きだった。一目惚れって言葉は陳腐過ぎて使いたくないんだけど、そんな感じ」

初めて見かけた時の、マントのフードを真深くかぶり高飛車な口調だった彼女、は周囲を威圧する為の精一杯の虚勢だった。

その影に居たのは自分の居場所を捜してもがく頼りなげな少女。それに気が付いてしまっていたから、目が離せなかった。

差し出されたままの彼女の手を取り、握手の代わりにその手の甲に口付けをする。

目を上げると真っ赤になったイエライシャがいて。

旅に出てすぐの頃、同じように口付けた時の表情と重なる。

「俺は……ずっと君からの返事を待っているよ？」

続けたその言葉、あの時の自分の大胆さを思い出したのか更に真っ赤になった彼女に、その額へともう一度口付けを落とす。

「額に口付けるのは……俺達の間では……相手に永遠を誓う……そう言う意味がある。だから……他の奴には許すなよ？」

俺の勝手な想いだけだ。

赤い顔のままぎこちなくうなづいたイエライシャに、もっと触れていたい気持ちを押さえて持って来ていたカップを手渡す。

今日をしのぐ為に強壮剤を処方したもので、微かな苦みに文句を言う彼女がそれでもその中身をカラにするのを確認してから、立ち上がるのを助ける。

初めの数歩はよろめいたものの、何とか歩けるのを確認するとゆっくりと彼女をテントの外へと連れ出した。

後日……イエライシャが口にした言葉を何とか思い出してラウドラチャクリンに告げると、少し考えて、彼はまたも大きな声で笑った。

俺がその意味を判っていないのが更に面白かったらしい。

「かなり古い言葉だよ。格言と言うよりは哲学者の蘊蓄だ」

「……意味は？」

「自由とは……自由であるべく呪われている事である」

絶対イスナードと気が合うぞ彼女、と言って笑うラウドラチャクリン。

それでようやく思い出した、あれは親父の専門分野の言語だったんだ。

041 気付くこと

「っ……まぶし……」

ファドラーンに手を引かれてと言うよりは、半ば支えられるようにして簡易テントから出ると、既に太陽は高い所へと登っていた。

ここ暫くは確かに恵まれた好天だったが、今日はそれよりも更に一際太陽がまぶしく見えるみたい。

午前中だからなのかまだいつもの風は動いていないけれど、普段ならとうに出発している時間だわ。

それでも私達が出てきたのが合図だったのか何人かが背後でテントの解体を始め、私は手慣れた手つきで片付けられてゆくそれを少し呆気にとられながら見つめていた。

「ゆっくり休ませてあげられなくて悪いね……今夜はきちんとした宿に入れるから、もう少し我慢してくれるかい？」

そう声をかけられて振り向くと、いつも通りの笑顔のラウドラチャクリンが居た。

確かにいつも通りのようなのだけれど、その微笑みの影に私を癒してくれた疲れの余韻、のようなものが感じられる気がして。

申し訳なくて彼に頭を下げていた。

「ありがとう……ラウ。私なんかの為に……」

「なんか、は余分だよ。皆君の事を心配していたんだ……回復出来て良かったよ」

後ろに立っていたファドラーンを見ながら彼はやりとする。

その如何にも意味在りげなラウドラチャクリンの微笑みに、すこしばかりふて腐れたような表情を見せて対するファドラーンを見ると、どっちが年長なのか正直判らない。

そして私は自分がラウドラチャクリンの「若い」外見に惑わされていのだと、ようやく思い当たったの。

世の噂に曰く……『フィルダウスの民は不思議の力を持ち、……不老不死を得たる』と言うではないの。

殆どは普通の人間だとファドラーンは言った。

感情の動きや他の人を思いやる事の出来る優しさも、確かに私達と何の変わりも有りはしないわ。

でもそれだけであんな伝説のような噂が一人歩きするものかしら。

不老不死というのが大げさな表現だとしても、何かそれに匹敵する程の何かが有るのでは、と思えた。

大国だと言われるクアーナが探索者を送り出そうとする程の。

ふと顔を上げると、ラウドラチャクリンが私を見詰めているのと目が合う。

彼にこの疑問をぶつけたとしても今はまだ答えてはくれないのだろうな、と思い付き何となく肩をすくめると、いつもの彼の優しい微笑みが肯定の意のようだ。

「イエライシャ！」

そんなラウドラチャクリンの背後からファドラーンが呼んでいる。視線を向けると荷物を積んだ馬の脇で待っている彼が目に入った。他の者も荷造りを終えて馬の様子を見たり、既に跨がっている者も居る。

それに笑みを返すと、彼の待つ馬の方へと歩きはじめた。

今日はもう彼の手助けを拒む理由も、その気もない。

つまらない意地を張る必要は無いのだ。

それが今は何より嬉しかった。

042 シェカル

「出発したのが遅かったのに……いつも通りの速度でいいの？」

昨日のように俺とラウドラチャクリンの2人に挟まれた形で馬に乗っていたイエライシャが、そう訊ねたのは昼食の為に馬を止めた時だった。

彼女を鞍から降ろす為に差し出した手に縋りながら、密着した身体を離す。それはここ暫く無かった素直な態度で、俺はそれに面食らう程だ。

「夕べは君の症状を柔らげる為に大分下って距離を稼いだからね……大丈夫なんだよ。今日の予定地はそんなに遠くはないし」

「ええっ……と、ティンリ高原の……」

「シェカル。この辺りでは一番大きな町だ、今夜はここで宿を取るから身体を温めて休むといい」

「うん、判ったわ……そうする」

しおらしい程の素直さは可愛いのだが、素の彼女ではない事を知っているだけに俺としては複雑だ。

一緒に食事を済ませ、いつもより長めの休憩を取った。

イエライシャの体調もだが、ラウドラチャクリンにもきちんと休んでもらわねけりゃならないからな。

それから再び彼女を馬上へと導いてその隣へと馬を並べる。あまり食は進まないようだが、水分摂取だけはしっかり摂るように気を付けた。

隊商の先頭にはずっとサブリーダーのミシエイルが立ってくれている。

最後尾を守っていたラウドラチャクリンが隊の中程で俺達の隣に

居るので、その代わりはヨシユアに任せることにした。

ラウドラチャクリンは一見平静を装ってはいるものの昨夜の癒しが負担になっていない訳が無いので、イエライシャの付き添いと言う名目で気を使わなくても良い場所に居てもらう事になっていたのだ。そう言い張ったのは俺だが、ラウドラチャクリンが素直に従ったのが意外といえは意外だった。

彼の代わりに最後尾を任せたヨシユアは、ラウドラチャクリンに似て勘が鋭く、気が回るので重宝している存在だ。

尤も先日は、イエライシャに口を滑らせると言う少しばかり……うっかりをやってくれたが。

それでも太刀筋がいいので、俺の鍛練の相方としては欠かせない。勿論ラウドラチャクリンとも手合わせする事もあるのだが、傍流が入って揺らぐその剣先が俺はかなり苦手だった。

なにげに耳に挟んだ話では彼の剣の師匠は俺の爺さんと同じ人物だったのだが、体術の師匠が他に居て、その人物の影響だという。

そういえばその体術の師匠とやらの名を俺は知らない。

その流派自体今のフィルダウスには残っていない。

聞いてもラウドラチャクリンは答えないかもしれないが。見送った者達との過去を思い出すのが彼にとっては苦痛らしいとは聞いていたから、俺も訊ねないようにしていたのだ。

朝、イエライシャを連れてテントから出た時に意味ありげな微笑みを見せ、健在ぶりをアピールしていた彼だったが、流石に今日は馬に跨がっている間もあまり口を開かない。

何らかの考え事に集中しているのか、それとも彼なりのダメージがあるのだろうか。

隣のイエライシャの様子と併せて気に掛けながら、つらつらとそんな事を考えている間に大分日が翳りはじめ、その頃になってようやく今日の目的地が見え始めてきた。

平地の街道筋がまっすぐにその町に向かっている。

町の目印とも言える西と東に設えられた高い物見の塔がその町の名を語っていた。

日に輝く町、シェカルと。

この町の中央には小高い山があり、それを取り巻くように町が出来上がっている。

言うまでもなく山に近い奥まった区画の方がより古い地域で、この辺りの伝統を重んじる有力で古い家系の者達の住まいだ。外縁に近いほど新しい住民の住まいになる。

そう言えば元々物見の塔は東西南北の四方にあったらしいのだが、過去にあった戦乱で二つが失われたと聞いた事があった。

俺たちが定宿にしている宿はそんな旧市街と新市街の境目にあり、情報を集めたりするにも何かと都合のいい立地条件となっている。宿を経営しているのは旧市街の有力者だが、けして新参者を拒まず、常に外界の事に気を配ろうとする姿勢が好ましい人物で、ラウドラチャクリンとは対立する事も幾度かあったが基本的には友好的な関係が続いていると言えた。

もっとも彼は我々の素性を、祭祀王の腹心だと思っているらしいのだが。

そしてシェカルの中央の小山には、規模はかなりのものになるだろうと思われる古い寺院がある。

その造りがルクアディナルファの首都の王城を小規模に模したものであろう事は一目瞭然だ。

遠くからでも、その寺院の中央の屋根を覆う金色の金属板の輝きが目まぶしい。

もう日暮れだと言うのに。

ルクア祭祀王の直轄ではないので詳しくは知らないが、この辺り

では町同様に一番大きな寺院だ。

そう言った事をイエライシャに……差し障りのない程度に……説明しながら俺達の一行は町に入り、じきに宿へと辿り着いた。

いつもなら、目に付く事は何でも訊ねてくるイエライシャだが、流石に今日はその元氣は無いようだ。

古い構えのその宿にいつものように部屋を確保すると、そそくさと皆食事を済ませる。

難所として名高い峠を越えて来た旅人が一様に見せるであろう、疲労の色は当然俺たちも纏っているのだろうし。

宿を任されている女将にイエライシャの湯の手配を頼み、俺とラウドラチャクリンもそれぞれに湯を使うことにした。

それほど身分の高い者が逗留する宿ではないので、浴室といっても手狭なものなのだが。

イエライシャの異国の顔立ちと良家の子女だと説明していたラウドラチャクリンに、この宿の女将は一番良い部屋と特別の待遇を約束していた。食事を終えた彼女を、急遽浴室用に仕立てた小部屋へと女給と共に自ら案内に現れたその女将は、同時に宿の所有者からの伝言を俺達に伝えてきた。

ご丁寧に俺達の到着と人員構成までを主へと報告しているらしい。彼女の抜かりない手配に感心するが、同時にこちらでも気が抜けないうと緊張を余儀なくされる。

「アルマンスール家の隊商の無事なご帰還をお祝い申し上げ、旅の土産話などもお伺いいたしたく、主が明日の朝こちらへ参ります。ぜひお時間を頂きたいと」

「わざわざお越し下さるとは光栄です。先を急ぐ旅故あまりゆつくりとは出来ませんが……御当主とは是非お話をしたいと思っていますので」

優雅に口上を伝える女将に、かなり心にも無い言葉で相手の機嫌

を取りつつ、考えた。

……あの目端の利く主の事だ、目的は単に俺達ではなくここ迄の情報と同行している異国の娘にある事は確実だろう。

余程の用事がなければ、地元の名士がただの商人に会う為に旧市街から出てくるとは考えにくい。

けれど正式な身分証も紹介状も確保してあるのだから、彼等が何か言う事があっても何の問題も無い筈だ。

そう思いつつ、傍らで同じように身を屈めて挨拶を返していたラウドラチャクリンに目をやる。

丁度、彼はその女将からのあからさまな夜の誘いを軽く躲していた所だった。

そこそこに美しく、まだまだ女盛りを主張している女将はこの主の何人目かの愛人だとは有名な話だが、どうやらかなり自由も許されているらしい。

このアルマンスールの隊商の男達の殆どは、過去に何度か彼女の積極的なアプローチを頂いている。

かくいう俺もかつてその誘いを、かなり際どい所で断ったクチだ。まだ若かった事もあり、しどろもどろで……経験の無い若造……を演技するのはそれなりに面白かったが。

幸いこの隊でまだ彼女に籠絡された奴は居ない。

既にイエライシヤは女給達に伴われて立ち去っており、この場面を見られなくて幸いだったと内心ヒヤヒヤしながら、未練たっぷりに見送る女将から遠ざかり浴室へと向かった。

隣を歩くラウドラチャクリンはある手のあからさまなお誘いになり嫌いで、愛想笑いの必要がなくなると途端に不機嫌丸出しの仏頂面になるのが実は面白い。

「お前は……今夜部屋へ戻らなくてもいいからな」

「……は？」

入浴を済ませてござっぱりとした俺に、後ろからかけられたラウドラチャクリンの言葉。その意味を理解出来ずにかなり間の抜けた声で応じてしまった。

浴室の……個室とは申し訳程度の衝立ての向こうで、冷水を浴びていたラウドラチャクリンの手が止まる。

「イエライシャの部屋の護衛だよ。他の奴に割り振ってもいいのか？」

「良い訳無いでしょうっ……て、護衛が必要だと考えているんですか？」

「念のために。なぜここの主が異国の者に興味を持ったのかが判らん」

「……判りました」

「扉の前じゃ目立つからな、中で待機しているよ」

しぶしぶ引き受けた俺に、更に追い打ちをかける一言が。

流石に何か言い返そうと振り向くと、衝立ての向こうから出てきたラウが真後ろに居た。

水垢離の時に愛用している裾の長い白衣から水をしたたらせている。

「真面目に……何かあってからでは遅いからな、わたしがそういう手拔かりを嫌うのは承知の上だろう？それに……お前は彼女の暖め役だろうが」

水に濡れた前髪を掻き上げつつ口にした、前半の真面目な口調に騙された。明らかに楽しんでいるらしい後半の口調にがっくりと肩の力が抜ける。

「俺たちをけしかけて……何が楽しいんですか」

「認めてやっているのが嬉しくないのか？ さっさと陥しに行っても構わんだろう」

「俺は、きちんとした手順を踏んで彼女を迎えたいんです。まだ…確実に見通しが立っていない以上迂闊な事は出来ませんし、したくもありませんよ」

溜め息を交えて問い掛けた俺にさらりとしたラウドラチャクリンの答え。

欲しいものはさっさと手に入れてしまえ…：唆すようなその言葉について一段と改まった口調でそう断言してしまう。

「石頭…：親父譲りか？」

「何言ってるんですか、貴方だって…：多分、一番大切な相手が出来たら俺みたいにするだろうって、俺は思ってますがね」

「……」

……やった。黙らせてやった。

ようやく口を閉じたラウドラチャクリンを見下ろして、身支度を調えると浴室を後にした。

上辺は軽い振りをしていても彼が…：親父以上に硬苦しいのを知っているのはこの隊の皆も同様だ。

けしかけられている…：とは感じていたものの、いつもならお硬いはずの彼が何故こんなタイミングでこんな事を口にするのかは判らなかった。

一度自分の荷物を入れた部屋へ戻ると、護衛の名にふさわしい装備を整える。

夜をしのぐ為の衣装と、剣と、それに付随する剣帯。

この旅の間ほとんど装着する事のなかったその重さはいつも以上の手応えで俺に緊張をもたらししてくれる。

そして……更に緊張しながらイエライシャの部屋へと向かった。

久しぶりの本格的な入浴だったわ。たっぷりのお湯と泡立ちのよい石鹸、そしていい香りのする香油に身体の芯迄解されるみたい。随分と長い間こんな贅沢とは無縁の旅をしていたのだと改めて実感してしまったわ。

だからと言って今の旅が嫌なのかと問われると、即座に是とは言えないわね。

旅をしている間は、現実の、嫌な事を考えなくても良いからなのかも知れないけれど。

宿の女給達ははじめのうちは静かで……多少習慣の違いに拠る差異はあったものの行き届いた奉仕にバーラートのシュヴァーゼでの日々を思い出す。そして同時にかの地のあるじだった藩王の醜く弛んだ姿も脳裏に蘇り、迂闊にも暖まったはずの身体が一瞬粟立ってしまった。

「どうか……なさいましたか？もう少し湯を温めましょうか？」

その素肌の変化と微かな身震いに目敏く気付いた女給の1人がそう訊ねてくれる。

「ええ、お願いね。夕べはとても冷えてしまったの……峠越えがそんなに大変だとは思わなかったわ」

まだ温め足りないのだと解釈してくれた彼女の勘違いにさりげなく便乗して、少しばかり我俣な貴族娘を演じる。

内情は兎も角……世間の人が誤解している程度に頭が軽くておしやべりで我俣……な娘だ。

何気ないおしゃべりを装ってそう話を振ると、もう1人が話に乗ってきた。

「でも良うございましたね、大した支障もない峠越えのようで。バ―ラートから来た者でも高山病で肺までやられて……生きて戻れなかった者も多いあの峠を、この通りご無事で越えていらしたのだもの」

「まあ、では私は随分と幸運なのね」

驚いたように言葉を返しながら私自身を嘲笑ってしまいそうになる。

本当はちつとも無事でなんて無かったのに。

私の事を何より気に掛けてくれるファドラーンと、癒し手としての力を持つラウドラチャクリンが居なければ多分私はここには居なかっただろう。

「……アルマ家の隊商とご一緒だったのが幸いしたのかも知れませんがね。あの方達はとてもしつかりした商売をなさると評判ですもの。ここまでの行程などで……貴女の身体が高度に順応出来るよう調整したのかも」

「ああ、そうかもね。慌てた日程を組むと身体が慣れなくて大変だつて……聞いた事あるわ」

更にもう1人が同調してそう相づちをうつ。

「でも、あのアルマンズールのご子息と一緒に旅が出来るなんて羨ましいですわ」

「……そうかしら」

少し慎重に返事を返したが、最初に話に乗ってきた女給が力の入った声で続けた。

「貴族様や身分の高い方から見れば……なんて事の無い男性かも知れませんが、この宿を定宿にしている方達の中では一番人気の方達なんですよ」

「ご子息たちも、隊商に加わっている他の男性もね。……この女将さんもいつも誰かには色目を使っているのに、ちつとも靡かないってこぼしていたわ」

「今日は弟さんの方にアタックしていたわよ、あっさり躲されたみたいだけど。かなり前にはあの兄のほうに迫ってかなりいいとこまで持ち込んだのに……途中で逃げられたって言ってたけどね」

いつもの事だという感じで、特に咎める風もなく女給達が言葉のやり取りをしている。

……兄って……フアドラーン？少し……さざ波のように何かが胸の中に広がり……動揺してしまった。

小さく溜め息を漏らし、諦めにも似た気持ちでその感情を認める。嫉妬と言う名の、その負の感情。そして、この宿の女将の姿を思い出してみる。

歳の頃は30代前半かしら、すらりとしていると言うよりは心持ちふくよかで背の高さは私とあまり違わなかったわ。黒い髪と、同じく黒い瞳が色白の肌に良く映える、いわゆる……美人の部類に入る女性。

私よりも世の中の事、更には男性の事も多くを知っているだろう彼女でもフアドラーンやラウドラチャクリンを手に入れる事は出来なかったらしい。

「隊商を組んであちこちする間に、各地で相手を作る男の方が普通なのに……何だかつまんないわ」

「……やだ。あんたもアルマ家の誰かを狙ってる口？」

「いいじゃない。首都の商家だもの、ここよりはましな暮らしが出来るかもしれないし」

「さあ、噂話ならもう結構よ？お湯から上がるわ、支度は整ってて？」

ここまで来ると仕事の合間のおしゃべりの域になる。笑い声に釣られて心持ち手も留守になってきたようなので、この話は打ち切る事にした。

何だか聞かなくてもいい事まで聞いてしまったような気がするし。

心持ち不機嫌そうなのは、彼女達のいわゆる男の品定めに私が屈したとでも思わせておけばいい。

身体を拭いてもらい、夜着として使っているドレスに袖を通すと、湯冷めしないようにと用意していたショールを羽織る。そしてさほど遠くない自分の部屋へと案内してもらう。

二間続きのその部屋はこの宿では上等の部類になるらしく、綺麗に整えられた大きめのベッドのある寝室と、手前の部屋にはくつろげるソファと低いテーブルとが用意してある。ここの女将は何度も部屋の狭さを申し訳無さそうに謝っていたが、今までの私は大きな部屋でも他に2人の同居人が居たのだから広すぎるくらいだわ。

……むしろ寂しいとすら感じてしまったのに。

明日の朝の身支度を手伝いに参上すると言ってくれた女給達を断り、部屋の扉に鍵をかけた。

運び込んでいる私の荷物は元々が大量ではないし、それに何日も逗留する訳でもないで荷物をほどもししないで纏めておいてある。

寝室の一角に置かれたそれを軽く眺め渡すと、明日の朝身に付ける為の衣類を出し、そのままベッドへと向かおうとした。

……その足を止めたのは小さなノックの音が聞こえたから。

遠慮がちに叩かれた扉をそっと開けると、見慣れた背の高い来訪者が立っていた。

「ファドラーン……どうしたの？」

「少しいいか？」

伺うように素早く辺りを見回している彼に何故だか自分も慌ててしまい、深く考えもしないで彼を部屋へと招き入れる。

「何かあったの？」

緊張していると感じ取れるその気配に重ねて訊ねるものの、彼は返事をくれる素振りもなく、そのまま室内を改め窓の外まで確認しているその背中を見つめた。

そして微かな金属音に彼が剣を帯びているのに気が付いた。

確か……今までの宿ではこんな事はなかったわ。

「ねえ！ファド」

流石に不安になって、口調をきつくしても彼は振り向いてもくれない。

こちらを振り向くのなら拒否しているような気配で、寢室を改め終わって居間の方へと戻ってきたファドラインをその境の扉の前で待ち受ける事にした。

話してくれる気がないのなら話すように仕向けるまでよ？

丁度……二つの部屋を仕切る扉を挟んで向かい合うように立つ。

ようやく捕らえた彼の表情にも何だか緊張が漲っていて、私も不安で居たたまれない。

「一応確認しておこうと思ったただけだから、そんな顔しないで……もう寝る所だったんだろう？」

緊張をほぐそうとするように、ようやくファドラインが口を開いてくれた。それにうなづくと、彼は自分の身体を扉の脇に寄せて寝室へと促す。

「早く休んだ方がいいだろう。……お休み」

「貴方は……どうするつもりなの？」

彼が帰るのなら見送らなくちゃ、とこの部屋の今の主としての義務を思い浮かべながら訊ねたのに、彼の返事は無くて。返事の代わりに腰に帯びていた剣帯を外しはじめたファドラインの、その考えが判らなくて……慌ててしまった。

「こっちの部屋へ泊まる。ここでは油断しない方がいいだろうと、ラウが心配してね」

室内に目を走らせてみれば、目に付いたのは大きめのソファ。そ

して彼もそのソファへと外したばかりの剣を立てかける。

「こ……ここで？それに……油断って何があったの？」

不安げな声を出してしまった私にようやくファドラーンの顔が柔らかにほころぶ。微かな金属音を立ててテーブルの上に剣帯が置かれた。

「この宿の所有者が……あの女将を愛人として囲っているこの地の有力者なんだが……君に関心を見せているようなんだ。用心するのに越した事は無いし、君の容態も気になるしね。……という訳でラウに部屋を追い出されてきたんだ」

だから今夜はここに泊めてくれ、とさっきまでの緊張感は何処へやらにこやかに言われてしまい、何だか気が抜けた。

044 秋波

平静を装いつつなんとか用件を切り出した時、イエライシャは傍目にも判る程がつくりと肩を落とした。

安心したとか言うのではなく呆れた、というニュアンスのその仕草に俺も肩の力を抜く。

「……何よそれ、納得出来ないわ」

けれどその後になんと言葉を続けられて、否定されたのだと思い慌ててイエライシャを見つめた。

「何にも危険な事はないと思うんだけど……念のためだよ、俺はこっちの部屋に居るから、君は寝室に鍵をかけてくれて構わないし」

「……それじゃ護衛にならないわ。何かあった時に部屋へ入れなかったら、意味が無いじゃない」

うろたえた俺の言葉に、ドアを破るつもり？と彼女はにべも無い。困ったな……どう言い訳付けよう。

「確実な危険が無いというのなら……ラウが単にお節介なのかしら、それとも貴方は……お膳立てしてもらわないと女1人口説けないの？」

「……なわけないだろ」

流石に慥然として答えると彼女がにっこり。

「そうよね、そういえば……ここの女将さんともかなり良い所まで行きかけたんですって？」

「……それはっ！」

「女給達がウワサしていたわ。彼女……今日はラウをひっかけ損ねたって」

隙をつかれた、とはこの事だ。隠す事も出来ずに顔に出てしまっ

た……と思う。

心持ち彼女の表情も厳しいもので、うろたえつつもドキドキした。怒った顔もかなり綺麗で。

しかし彼女が知ってしまったのなら隠しても無駄だし、第一俺としては隠し事は出来ればしたくない。

「さっきも言っただろう……ここの女将はこの宿の所有者の愛人で、他にも何人か男がいるって有名な女性なんだよ。通常ならそんな女を囲っておく主の気が知れないが、情報収集の腕は大したものですね。ケサルなどは真面目に彼女をスカウトしようと考えたらしいしね。それにしても……俺が彼女にベッドルームの隅っこまで追いつめられたのもう5、6年も前の話だ、君のジェラシーは嬉しいけれど」

真面目な顔でそう説明して、どんな顔するかと見つめていたイエライシャは……一瞬変な顔をして……ぷっと、まさに吹き出しつつ笑いはじめた。

「隅っこって……やだっ、格好わるい、それにジェラシーなんてしてないわよ」

「さっきの態度は典型的なジェラシーだと思うんだけどね……。それに仕様が無いだろう……その当時の俺の設定は中堅商家の長男で初めての隊商に、いろんな事が未経験って振りをする事になっていたんだから」

あの時の事を思い出すと、何とも言えない居心地の悪さが甦ってくる。

「実際あの時は焦ったんだ、格好わるくても……目の前の熟女から逃げないとヤバイことになるのは目に見えていたし、一応俺にだって理想の女性像ってのはあるんだよ？」

まだクスクス笑いを続けている彼女に溜め息混じりにそう告げると、脱力した勢いでソファに身体を沈めた。この部屋の主はまだ座

る事を勧めてくれた訳ではないが、このままここに居座る事にすればいい。

「……理想の女性って？」

「知りたい？」

「うん」

先程の不機嫌は何処へやら、ソファへ近寄ってきた好奇心一杯の表情を焦らしてみたくなる。

「やっぱり秘密にしとく……君は笑い倒してくれそうだ」

「ひどっ……そんな事しないわ！教えてくれてもいいじゃない」

「じゃあ、交換条件……君の理想は？」

思わせぶりに溜め息について、勿体ぶってから言葉をつないだ。
多分返事は簡単に予想がつく。

「……やだ、言えない」

ほらね。

「フエアじゃない。俺は……俺だって好きなひとの事なら何だって知りたいよ？」

溜め息とともにそう口にすると、彼女は面白い程真っ赤になってしまう。

焦らすつもりが焦らされていたような気がして、左手を伸ばすと届く距離に近付いてきた無防備な身体を絡め取った。小さな悲鳴を胸の内に抱き込んで、くぐもった抗議の声に気付かない振りをする。

猫が喉を鳴らすように、小さな笑いを漏らしつつ抱きしめたイエライシヤはあったかくていい匂いがする。

丁度抱きしめて胸に収まるくらいの、あったかくて柔らかい身体。迂闊な事をする気は無いと、ラウドラチャクリンには言ったが、あっさり前言撤回してしまいそうな気分だ。

それでも、まだ、だめだと自分の身体に言い聞かせて、抱き込んでいた腕の力を抜いた。

嫌なら、いつでも彼女が逃げ出す事が出来るように。けれど……そうはならないような確信めいたものもあって、幾らか大人の余裕を取り繕う。

今朝のイエライシャは目覚めて隣に居た俺に驚きはしたものの、俺の腕を拒みはしなかったから。

「未経験の振りをしていたって事は、本当は……経験豊富な訳？」

腕を引かれバランスを崩した私は、気が付けばファドラーンの腕の中に抱きしめられたまま、ソファに沈み込んでしまっていた。

怒りは湧いてはこなかったけれど、恐る恐る彼にそう問い掛けたのは何故かしら。

見上げたファドラーンは優しい笑みで、もう力はこもっていないけれどそれでも私を離す気はないらしいその腕の中から彼の表情を伺う。

「……かなりマナー違反な質問だ。自覚しているの？」

「貴方のこれは……この振る舞いはどうなの？それに、だって気になる……じゃない、私は……」

諭すように優しい声に、緊張して赤い顔のまま口ごもった。

そう、私は殆ど経験なんて無いの。

恋愛もそしてそれ以上の事も。

故国に居た頃は地元の社交界へは顔を出す事もあったが、何分田舎の集まりとあって、ささやかなものでしかなかった。

そこで会う事の出来る貴族の子弟なぞ限られた数で、しかも御世辞にも魅力的とは言えない人々だったもの。

目下の者しかいない領内で威張り散らすのに慣れた、高慢で高飛車な態度には度々うんざりさせられたわ。

たまに都の社交界へ行った貴族の女友達から、その華やかさや催し事の仰々しさ、そしてそこで出会った若者との少しばかり艶っぽ

い出来事などを聞きかじる程度の生活。

そんな風に恋をする（誰と？）……なんて夢の又夢で……いつかは親の決めた縁談で嫁いで行く程度だと、諦めにも似た目でそれらを見つめていた。

その日常の生活からの脱出を計って、父の商用の旅に同行して異国へと渡ったのに。

確かに異国での暮らしは目新しい事がいっぱい、旅行者として……通り過ぎる者として……そこでの生活を楽しんでもみた。

けれどそのバーラートで突然王妃に担ぎ上げられる事になって、一月程の間、王妃としての心得と花嫁としての教育を嫌々受けさせられたのだったわ。

私が処女（当たり前じゃない！）である事を前提にした、新妻としての心得も。

半分はユグドラシアに居た頃に聞きかじった知識とも合致するものだったが、半分はまったく知らない世界だった。

いわゆる……バーラート風の妻のたしなみ……閨で妻が夫の為にしてあげなければならぬ様々な事柄だとかしきたり、その為の知識など。

今になって考えればそれは、妻としてではなく、後宮と言う閉ざされた世界で暮らす為だけの知識だったような気がするけれど。

そして……日に日に出来上がってゆく鮮やかな婚札用の民族衣装を空ろな瞳で見つめながら、嘆きの内にこのままの日々を送るのか、父や姉と決別してでも出奔すべきかを思い悩んでいた頃までを思い出してしまう。

そしてふと、気付いてしまった。

国に居てもバーラートに居ても結局私には自由は無かったのだと。

伝統や習慣と言う名の衣に包まれた束縛に、それに本気で逆らおうとした事すらなかった。

ファドラーンが重いと言った「自由」を私は初めから手に入れようともしないで、諦めていたのではないのかしら。

「怒っているの？……イエライシャ」

黙り込んでしまった私の沈黙をそう解釈したのか、少しばかり心配そうなファドラーンの声が伺う。

視線を合わせた彼の瞳は室内のランプの明かりでも判る程に翳りを漂わせていた。

その翳りが不安や心配と言った類いのものでは無い事は、流石に今の私には理解出来る。

彼の身の内に宿った、欲望の翳り。

このひとが私を望んでくれているというしるし。

他に自分が何を望んでいたと言うの？

自由にはほど遠かった私が自由に相手を選んだ、それだけの事だ。両手を伸ばし不安げに見下ろしてくる男の首へと廻すと、自分の方へと引き寄せた。

「私は……私にとっては貴方が……初めて好きになったひとになるかも知れないのに？」

自分が口に行っている言葉の意味に頬が染まり、かろうじて小さな声でそれを言い終える。

じっと見つめていたファドの瞳が、私の言葉を理解したのか一瞬見開かれる。

ドキドキしつつ、どう反応が返ってくるのかと思って見つめていた私に、ようやく彼は優しい声色で言葉をくれた。

「いまのは……君からの返事だと思ってもいいの？」

「……かもって言ったわよ？」

でもまだ素直にはなれないみたい。ごめんね。

「意地悪……」

気を持たせていると流石に自分でも自覚のある仕草に、彼は怒る訳でもなく、がつくりとうなだれた。

……彼の、肩の辺りまであるその明るい茶色の髪が私の首筋に触れて少しくすぐったい。その毛先の幾らかを指先に絡めとって意外と柔らかい毛質なのに驚いた。

癖の無い真っすぐな髪だったから、もっと剛いのかなと思っていたのに。

「……柔らかい毛質だったのね、意外」

「お陰で雨の日は大変だよ。雨期になったら外出したくない」
大分気の抜けた声で返事が降ってくる。

その言葉に私にくすくす笑っていると、次にはファドラーンの吐息を首筋に感じた。

彼の唇を感じるだけのキスとそれをなぞるように舌先が這う。

寝間着代わりに愛用しているこのドレスは、淡い緑の色で胴回りが緩やかなうえに襟ぐりも大きめに開いていて、彼の唇が首筋に微かな刺激を与えつつその襟ぐりぎりぎりの胸元に移って行く。

その刺激に背筋どころか全身がぞくりとして、つい大きな吐息を次いでしまった。

「……気持ちいい？」

「……馬鹿、っ……」

楽しそうなファドラーンの口調に言い返そうとしたのに、今度は

唇を塞がれてしまった。

拒もうとするよりも先に彼の侵入を許してしまい、どうして良いのか判らずに身体を強張らせる。

とてもじゃないけれど、いつか読んだ恋物語のように恋人からのキスを瞳を閉じて待つなんていう余裕な状況ではないわ。

驚きで見開いたままの視界に、ファドの閉じた瞳と少しばかり歪められた眉とが真近に映る。

触れあったままの唇と、私の中を探るような彼の動きに息も出来ない。

それでも……ここで拒まなかったらどうなるのだろう……なんて考えてしまったのは初めて経験した口付けの、この不思議な感覚のせい？

046 吐息

046 吐息

軽くついばむだけのつもりだったイエライシャの唇はあまりにも無防備で、俺はそれだけでは済ませられなくなってしまった。

きちんと整った歯並びをなぞり、そして……多分……初めてのこの行為にどう応えていいのか判らないでいるその柔らかな舌を絡めとって吸い上げる。

彼女の味わいに没頭しそうになる俺と拒もうとしない彼女。

それが俺を受け入れているからではなく、この感覚に戸惑っているからなのだと潤んで少し焦点の合わない瞳から容易に推測出来た。

「……マナー違反なのはやっぱ俺だな、すまない」

ようやく唇を離してそう言葉にしてみるが、イエライシャの反応が無くて、どうしようかと思った。

刺激が強過ぎたのかとそのまま見守る。

彼女はまだ焦点の合わない瞳をしばたいて、それからぎこちなく腕を持ち上げると前髪を掻き上げる。

小さな溜め息が漏れ、その無意識の艶かしさにこの目の前のごちそうを何とか諦めようとしていた俺の感覚が戻ってしまう。

身体を中心に血液が集まり、それ以外の場所の感覚がなくなってしまう。

頭ですらもはや満足に思考する事が出来なくなる。

欲しくて仕方の無い相手を目の前に、いや、今はこの腕に抱きしめていて、そんな状態にならない奴の方がおかしいだろう。

只の言い訳かな、これは？

まだ返事をくれていない彼女にこれ以上手を出す事は俺の中ではルール違反どころか犯罪だろうと、思っては居るのだが。

「イエライシャ……？」

余りに反応がないので流石に心配になって呼び掛けてみると、ようやく彼女の瞳が俺を捉える。

ゆっくりと瞬きした彼女を見つめていると恥ずかしそうに身じろぎして、ようやく俺の腕から身を離れた。

俺は引き止めたくても自分の理性に自信が無くて、その姿を目で追うだけ。

今身体を動かしたら、駄目だと判っていても俺は彼女を追ってしまっただろうから。

そうなたらもうきつと俺は自分の欲望を抑えられなくなる。

だから俺はソファに深く腰掛けたまま、立ち上がって乱れたドレスを繕うイエライシャを見上げるだけに留めようとかなりの自制心を働かせる事になった。

「もう……お休み。明日の朝は来客がある筈だから、君も疲れた顔で人には会いたくはないだろう？」

「……ええ、おやすみなさい」

あまり感情の無い声でそう返事をするとな頬を赤く染めたままの彼女は一瞬だけ俺に視線を注ぎ、寝室へと姿を消した。

俺はそれを黙って見送る。

その後はかなり夜が更けてしまうまで仮眠すらとれなかった。

ようやくまどろんだのは明け方近くで、それも僅かな時間だった。峠越えで疲れているはずの身体なのに気持ちが高ぶり過ぎていて、理性だけでは御しきれない。

朝……東の空が白み、微かに人々の起き出す気配がこの部屋へも伝わってくる。

この宿の従業員だろうか、早朝からの厨房の仕込みなど、宿はとにかく朝が早い。

ソファに身を預けたままそれらのざわめきに耳を貸していたが、俺もそろそろこの部屋から出た方がいいかなと随分ガチガチになっていた筋肉をほぐしつつ立ち上がった。

テーブルの上に放り出していた剣帯を腰に巻きなおし、ソファに立てかけていた剣を差しなおす。

寢室のイエライシャに声を掛けてから部屋を出ようかどうしようか、と考えた所へ廊下に面したドアへと微かなノックがあった。

そのドアの前まで静かに歩み寄り、様子を伺う。

「……わたしだよ」

ラウドラチャクリンの辺りを憚っているのだろう押さえた声に、彼が俺の忍耐を何処まで理解しているのかと疑問すら覚える。

静かに扉を開けると、彼はするりと音もなく部屋へと入り込んできた。

「もう、馬を見てきたんですか？」

「……ああ、元気だったよ」

早朝の外気の気配をまとう彼にそう訊ねると、にっこりと返事が返ってきた。

でもまだ彼の捜し物は見つかってはいないらしい。

以前は時と場所も構わず意識を解放して知覚を拡大させる事もあった。

度々だったので、そのあまりの無防備さに見兼ねた俺が文句を言

った事もある。

護りきれなかったらどうするんですかと詰め寄った俺に、彼は今とちっとも変わらない涼しい顔で。

「大丈夫。お前には全幅の信頼を置いているのだからね……わたしは」

その頃何があったのか、彼は少しばかり憔悴していたとは後で誰かから聞いた。

求める何かを何とか早く探し当てたいと躍起になっていたのかもしれないが、それでも俺が苦情を呈してからはそう言った事は控えるようになった。

その代わりだろうか早朝や深夜に彼が捜し物をするようになったのは。

今のように商人を装って隊商を組むようになってからは、旅の間それを欠かした事はまず無い。

「その様子だと……夕べは何事もなかったようだな。ご苦労」

「何の目的があってこんな風に仕組んだのかは知りませんが、満足のいく説明をしてもらいたいですね」

正直我慢の限界かもしれない。いろんな事に。

……かなり不機嫌な俺の声に、ラウドラチャクリンはおや？とばかりに見上げてくる。

「今日のこの後の展開次第ではお前とイエライシヤとが喧嘩する事になりかねないからね、それを回避させられればと思ったただだが」

「……どういふことです」

「判らないのならいいよ」

あっさりとそう言い切った彼は俺の背後、寝室のドアを伺っていた。

「そろそろお姫さまもお目覚めのようだな、邪魔者は消えるが……朝食の後の来客を忘れるなよ」

「わかっていますよ」

相変わらず不機嫌な俺の表情を鼻で笑った彼は、来た時と同様に
するりと部屋から出て行く。

一人取り残された俺はそのまま立ち去る訳にもいなくて、イエ
ライシャが身支度を終えて寝室から出てくるのを待った。

「……おはよう」

「おはよう、ファド……さっき誰かの話し声がしていたわ？」

ぎこちない返事のイエライシャが室内を見回すのを微笑みを浮か
べて見守る。

……いや、にやけた顔つきだと言われてしまえばそれまでなの
だ。

「ああ、ラウが様子を見にきていたんだ。君の荷物は？」

「まとめてあるわ、いつでも出られるように」

「じゃあ、朝食に行こうか。じきにお客も来るだろうし」

そう促すと、イエライシャとともに部屋を出た。

047 会見

食堂には既に隊商のメンバーのうち半数程が集まっていた。

……更に他の者達は既に食事を済ませて出発の準備に取りかかっている、とはファドラーンとすれ違った時のヨシユアの報告だった。ミシエイルも既に食事を済ませて馬の支度に行っているとも。

お客が来ると言うのに出発の準備に取りかかっているとは、あまり長い話をするつもりが無いと言う事なのね。

昨夜私が入浴の為に皆と離れた間に来た知らせのようで、そのお客と言うのがどう言う人物なのか、私は何も知らされていなかった。ともあれ宿の女将のお化粧に昨日よりも気合いが入っている事や、女給達にも微かな緊張感が漂っている事からすると、かなりな身分の人物なのだろうと想像は付くのだけれど。

でも何故そんな人物が、一介の隊商の為にわざわざ自ら出向いてくるのかしら。

そんな疑問を抱きつつ私とファドはテーブルに付いた。

ファドラーンの隣には先にあらかたの食事を済ませたラウドラチヤクリンが居る。

「おはよう、イエライシャ。夕べは良く眠れた？」

「……ええ、なんとか」

一度具合を悪くした身体は十分な睡眠を求めている、昨夜のファドとの間の出来事で心が昂っていたわりには眠れた方だとは思いう。思うけれど、昨夜のお膳立てをした張本人からの、如何にもいつも通りの朝の挨拶にどう応えていいのか迷ってしまった。

相手もそれを承知の上なのだろう、余裕の笑みで座っているのが少しばかり悔しい。

席に着いた私達に素早く食卓を用意してくれる女給達に礼を言つて、食事に取りかかる。あまり食欲は無かったけれど、旅の途中だからと頑張ってみる。

量としては大したものではないのだけれど、もう十分頂いたと判断してカトラリーを空いた皿に戻すと、見計らったようにフアドラーンが飲み物をグラスに注いで勧めてくれた。

思い返してみれば昨日の朝からだ、それに気が付いた。

「どうして急に勧めてくれるの？出来れば……制限しておきたいのだけれど」

水分の摂り過ぎによる生理現象を警戒していたので、旅の間私は自身に戒めていたのだ。

「気候が乾燥しているからあまりその心配はいらないよ。それに……水分をきちんと摂っていないと高山病にかかりやすくなるんだ。ツァイデアルを出てから昨日まであまり……その事には気を配っていなかったから、君が調子を崩した時に思い出してね。至らなくて悪いね」

私はフアドラーンがそう済まなそうに説明してくれるのを黙って聞いていた。

自己管理も出来ないなんて、自分をかなり情けなく思ってしまう。

「君が知らなくて当たり前の事ばかりだから、あまり気にしないで。ここから首都のクティナンまでは緩やかだけでもう少し高度が上がらから、念のために心に留めておいてくれればいいんだよ」

優しい口調のフアドラーンに小さくうなづいて、彼の手渡してくれたグラスに唇を付ける。

爽やかな香りのする果物で軽く味を付けてあるその水は喉越しが良くて、注がれていたグラスに半分ばかりの量を飲み干すのにさほどの時間はかからなかった。

「おいでになりました」

後ろでそう声がして、少しばかりざわめいていた室内が静かになる。

私がグラスをテーブルに戻すと幾人かの女給が静かに食事の後片付けをしてゆき、綺麗に整えなおされたテーブルへと1人の男性がやってきた。

後ろには数人、部下だろうか体格のいい男達を従えている。

「彼の相手はわたしとファドがするから、君は挨拶だけしてくれれば良い。あと、彼が何か……失礼な事を言ったとしても気にする必要は無いからね」

相手を認めた印に私達が椅子から立ち上がった時、ラウドラチャクリンの声がそう耳元をかすめる。

失礼な事って何よ？と、ラウドラチャクリンに問い返そうにも、客人は既に目の前に来ていた。

肩より下に伸ばした灰色の髪を後ろへすっきりと撫で付けた中年の男性だが、細身でバランスの良い身のこなしは彼が自分の体調管理を怠っていない事の現れだろう、と先程の自分と比べて皮肉に考えてしまった。

歳はそう、私の父よりも少し年上かなと推測してみる。

年は上だが、ラウドラチャクリンとたいして背の高さは違わない。とても上等な生地 of 衣装を纏っているが、彼から感じる威厳のような威圧感はどういった身にまとうものからではなく、それを着こなしている本人から感じられていた。

「お久しぶりです、ティサ・ゴパルラル卿。お健やかそうで何よりですが……わざわざおいで下さるとは実に光栄です」

初めにファドラーンが口を開いた。

軽く上体を屈めて相手への敬意を表する。

身分の違う者どうしの挨拶の常として身分の低い者から高い者へ

と、相手の機嫌を伺うように声を掛けるのはこの辺りの習慣だと聞いていた。

私の国でも大概はそうだったような気がするが、宮廷や……王族の前では声を掛けられるまで口を開いてはいけないという暗黙のルールがあるのも知っているわ。

たとえ大切な用事があったとしても、自分よりも身分が上である相手がそれについて話すのを望まなければ議論する事も出来ないのだ。

只、相手にとって気に入らないというだけで、長い事ずっと放置されている大事な問題が多くある事を地方貴族は不満に思っていた。その多くが地方の民に関わるものであったから。

「実に久しぶりだな、君たちも元気そうで何よりだ」

ファドラーンの言葉に鷹揚にうなづいた男……ティサ卿……は何気ない振りでぐると廻りを見回して、宿の女将にもその視線を向ける。

応じて彼女以下宿の者達、そしてティサ卿本人が連れて来ていた部下が皆この部屋を静かに退出して行った。

部屋に残ったのは私とファドラーン、そしてラウドラチャクリンとティサ卿の四人。

「……なに、君たちが面白いお客人を伴っておられると言うのでね、是非一度お目にかかりたいと思ったのだよ。不思議なタイミングだが、お互いに名を知っておいた方が有益かと」

少しだけ肩の力を抜いた、砕けた話し方。

親密ではないにしても、それなりにアルマンスールとは長い付き合いがある間柄だと解釈してもいいのかしら。

「そう仰るだろうと思っていましたよ。こちらはユグドラセアの貴

族令嬢……セシリア・グレンフォード嬢。……父上がシュヴァーゼの藩王との取り引きをなさっていたので、バーラートに滞在しておられたのが見聞を広めたいとのご意向で。運良くジャヤル藩王の後ろ楯を頂いてここ……ルクアディナルファへと足を伸ばしたところですよ」

ティサ卿の言葉を受けてラウドラチャクリンが私を紹介してくれる。

「そしてセシリア嬢……こちらの方はここシェカルの統治評議会の一員、ティサ・ゴパルラル卿。時々我々のお得意さまになる方だよ、この辺りの貴族の中では一番目端の利く方でもある」

「初めてお目にかかります。セシリアと御呼び下さい」

私がそれに合わせてユグドラセア風の腰を屈める挨拶をして、につこりと微笑みを付け足す。

何故ラウドラチャクリンが私をいつもの名ではなく、ファーストネームで紹介してくれたのかが理解出来なかったものの、ここでそれを問う訳にもいかない。

そしてティサ卿の肩書きに、ようやくその威圧感も納得出来た。

「シュヴァーゼの傾国の美女……との噂は聞いておるよ。……かねてより目障りな相手をこんな所から崩して行けるとはジャヤルの主が羨ましいね。しかも更に自分の手駒としてルクアディナルファ王の元へと送り込もうとは……したたかで実に抜け目が無い」

「……わ、私は！」

彼の物の言い方に込められたもの凄く嫌な含みを否定しようとして口を開いた私は、左の肩に手を掛けられて振り向いた。

驚きよりも怒りの表情だったと思う私の視界にファドラインの姿が映る。

彼も不機嫌そうな表情を浮かべていて、少しそれに勇気づけられた。

そして、ラウドラチャクリンの先程の言葉を思い出して、不満な

がらも口を閉ざして成り行きを見守る事にした。

「流石に卿でも言葉が過ぎましよう？確かにジャヤルの主よりの後ろ楯は頂きましたが、入国の為ですし……紹介されている相手はナムリ侍従長殿ですよ」

やんわりとたしなめるようにラウドラチャクリンが口を開くと、ティサ卿は判っているぞとばかりに鼻を鳴らして応じる。

そして彼の視線は、私の髪の色や肌を無遠慮に眺めていて。

そういえばクム・ウタールに着く以前から私は髪を染め直しては居なかったので、かなり元の色に近い金髪になっていたのを忘れていた。

「同じ事ではないのかね？ルクアの現祭祀王の元で国の勢力を二分しておるのはナムリ殿と政治補佐のカルザン卿であろう。……侍従というものは王の私生活をも管理する役職故、彼に異国の娘を紹介するとあれば、皆考える事は同じだろう」

「現在の状況下で御身までもがそのように考えて下さるのであれば……私の目論みも成功したと考えるとよろしいのでしょうね」

私としては聞き捨てならないティサ卿の発言に対して、何処までも穏やかにラウドラチャクリンがそう言葉をつなぐ。

その、自分の見立てが誤っていたと指摘されたも同然の言葉にティサ卿は驚いたような表情を隠せなかった。

「本当の所はそうではない……と言いたいのかね？種明かしはしてくれるのだろうか、ラウドラチャクリン？」

「お望みとあらば……但し他言無用にお願いしますよ？この令嬢の名誉の問題ですのぞ」

「無論だ」

おもむろにうなづいたティサ卿にラウドラチャクリンもようやく笑顔を見せた。

「感謝しますよ、貴方にはお話ししても差し支えが無いと思います

しね。……まず基本的にこの茶番はこの令嬢の自由を確保する為のものです。ジャヤルの藩王からこの令嬢を遠ざけて……最終的には故国へ戻るなり自由にして良いと、第一王妃の協力を取り付ける際の彼女の条件なのですよ」

「成る程。後宮でのライバルを増やしたくないと言う訳かね？ ついでに友好国の王に押し付けようとは……流石に女性らしいえげつなさだな」

「貴方は彼女が苦手でしたね」

含み笑いをかみ殺したラウドラチャクリンは、面白そうに肩をすくめる彼を見つめている。

「そんな生易しいものではないよ、あそこまで聡い女性は嫌いでね。実にやりにくい」

しかし言葉とは裏腹に卿の表情は活き活きとしていて本当の所がどうなのか知りたくなってしまう。

ラウドラチャクリンは変わらぬ口調で、私の方をちらりと見ながら、言葉を続けた。

「セシリア嬢も当初からルクアディナルファ行きを……目的は違いますが……希望しておられましたので、こう言った形で手配したのですよ。クアーナの者も貴方と同じように考えてくれるのならばそれ以上の政治的な背景を詮索されずに済みますから。クアーナも、ユグドラセアを初めとするあの辺りの国々を警戒していますから……出来る限り刺激したくないのです」

「それは祭祀王の意向かね？」

「取り敢えずはわたしの一存に過ぎません。ですが彼も健勝であれば同意下さるでしょう。現在とはとてもそんな状況ではありませんが、まあ、ナムリ殿は話の分かる方ですし……この令嬢を観光客として歓迎し、滞在を許可下さいましょう」

「どのみちそれしかあるまい。そして祭祀王のご高齢と健康状態を鑑みた上で、いずれその娘御はお役御免と言う訳だな。まあ……よく考えたものだが……ラウ、私も君に伝える事があって来たのだよ」

「……？」

納得がいったのか、ティサ卿はようやくラウドラチャクリンが意図していた結論へと辿り着いたらしい。

そして彼の来訪の本来の用件を切り出してきた。

しかしその用件とやらを既に察知していたのかラウドラチャクリンは先程とは違う硬い表情を見せていた。

その厳しい表情に、悪い知らせなのだと私にも容易に判断出来る。

「ここの寺院の最高位の僧侶がクティナンにむけて出発した、2日前の事だ。……すでに国中の高僧に招集が掛かっていると見ていいだろう。この意味が分かるな？」

「……勿論です。情報を有り難うございます」

「何……君が王の元を離れた時点では安定しておられたのだが、ここ暫くで大分弱られたらしい。君達を手間どらせるつもりは無かったのだよ……これ以上邪魔をする気もないから出発してくれたまえ」

「……お心遣い感謝いたします」

「道中の無事を祈る。もしもご崩御されたならば……いずれ首都で会おう」

その言葉にラウドラチャクリンは返事をしなかった。

只、頭を下げて諒解の意を示しただけ。

ファドラーンも同じように頭を下げて挨拶すると、ラウドラチャクリンに続いて部屋を出て行こうとした。

私もそれに続こうとした所へ、不意にティサ卿の声が掛かる。

「セシリア嬢……？」

「何でしょうか？」

呼び止められて見上げた卿の表情こそは優し気だったが、その瞳に見覚えたものがあり、彼に向けていた私の笑顔が引きつりそうに

なる。

「もしもこの国に留まるつもりになられたら、私に連絡を下され。この地に留まれるよう御協力は惜しみませんし……不自由はさせますまいぞ」

「……ご配慮感謝致しますわ」

下心丸出しの申し出を受けるつもりは無かったが、ここで無用な争いは避けたかった。

彼は自分の利害もあるものの、アルマンスール家には好意的だと思えたから。

当たり障りの無い挨拶だけを返すと、ティサ卿の視線を背後に感じつつも足早にファドラーンの後を追う。

ゆっくりと歩いてくれていた彼の隣に追い付くと、黙ったまま宿の外へ馬屋までを一緒に歩いた。

良く晴れた絶好の旅日和なのに心は何故だか波立っていて、何と言っているのか判らないその感情に表情まで強張ってしまうのを止められなかった。

048 真相、あるいは

「イエライシャ、君の荷物は馬に積んでおいたからね」

優しい言葉に顔を上げると、ミシエイルがやはりいつも通りの笑顔で立っていた。

ファドラーンとラウドラチャクリンに続いて宿を出たものの、思っても居なかった展開に頭が付いてゆけなくて、かなりぼうっとしていたみたい。

「……ありがとう」

それでも返事はぶっきらぼうなまま、強張った表情も元には戻せなかった。

ミシエイルはそんな私の態度に訝しむふうも無い。

……つまり知っていたと言う事なのだろうか、この隊商以外の廻りの人々が私を……ルクアディナルファの王に貢がれてゆく女……だと見るかもしれないという事を。

そして先程の、ティサ卿との会見でその話題が出るかもしれない事も？

「怒っているの、イエライシャ？」

「……そうね、怒っている？ 納得出来ない？ ……うまくは言えないけれど……釈然としないって言うのが一番近いかしら。この事態は私が望んだものでも、予想していたものでも無くて……どう対処していいのかすら判らないの」

踏み台に出来る石積みが無いのでミシエイルに馬の鞍に登るのを手伝ってもらい、隊商の列に加わりながら心配そうに探る彼の問いにそう答えた。

フアドラーンは隊の先頭で指揮に立っていて、代わりにミシエールが私の側に居てくれているのらしい。

「怒ってもいいんだよ？偶然に出会ったとは言え……我々が、弱い女性を利用して自分達の利益を図った……と見られてもこの状況では反論の余地はないのだし。わたしとしては……さっきの話の途中で君が盛大に怒る事すら覚悟していたよ」

「貴方が自分達をそのように……あくまでバーラートのジャヤル藩王とルクアディナルファ王の間の使い走りだと……世間に印象づけたがっているのは理解しているわ、ラウドラチャクリン・アルマンスール殿」

後ろから、同じように馬に跨がったラウドラチャクリンが心持ち面白そうに口を挟んで来たので、ちょっぴり冷たい口調でそう応じた。

よそよそしくフルネームまで付けて呼んでみる。

「怒っている訳では無さそうだね。それともまた……逃げ出す算段でもしているの？」

「逃げたりなんてしないわ、もう。それに貴方が私や私の家族にして下さった事を考えれば……今ここから逃げ出して貴方達を困らせるなんて事は出来ないし、貴方は……ご自分の病の床にある古い友人をダシに使ってまで……私の為に知恵を使って下さったのだから」

「自分の古い友人をすら、自分の利益の為に担ぎ出せる……そんな冷たい男だよ」

最後の辺りはかすれるような声色になってしまったが、私の言いたい事を理解してくれたらしいラウドラチャクリンが自嘲的ともとれる言葉を並べながら苦い微笑みを浮かべている。

振り向いて彼のその表情を見つめつつ、自分の馬を彼の隣へと寄せた。

「このまま首都のクティナン迄行って、その侍従長という方に会っ

て……そのあと私はどうなるの？」

「わたしの目論見通りに行けば、先程の話の通り……君は自由の身になれる。」

意味がと言うよりは流れが読めなくて、きよんとしてしまった。

……結論だけ言われても判らないんですけど？

戸惑ったふうの私にだろうか、微かに微笑みのようなものを浮かべてラウドラチャクリンが説明を続けてくれる。

「王が健在で……今よりもっとお若い頃ならば、君のように若くて美しく……そして希有な外見を持つ女性をお側に置く事に大した問題は無かったろうね。祭祀を司る王の事ゆえ……世襲ではないし表向きの妻帯は許されぬが、友好国の王からの贈り物となれば側近も無礙に反対は出来ぬだろう」

「それは、王様がお若かったならばの話でしょう？」

「もしも、そう言った状況だったら、私の逃げ道なんて本当に無いのだけれど。」

「……そうだ。以前にも言わなかったかな？今の祭祀王は随分なご高齢のうえ、今は恐らく最後の病の床にあると。それにさっきティサ卿が言っていただろう、シェカルの寺院の僧侶が首都に向けて出発したとね。たぶん遠からずあるだろう出来事に対処したうえで、そのあとの権力闘争に生き残る為の算段をしに出掛けたのさ」

「そんな所へ私が行っても大丈夫なの？」

「心配しないで、ナムリ侍従長の所へ伺うだけでいい。彼はわたしの考える事なぞお見通しだろうからね、予測した通りに事を運べるだろう」

不安そうな私を励ますようにラウドラチャクリンはそう言って微笑んでくれたが、本当は笑えない心境ではなかったかと、申し訳なくなってしまうた。

フアドラインは言っていたわ、歳は離れているけれど祭祀王とラウドラチャクリンは気の合う友人だと。

その友人が死の病の床にあるのに、私のようなよそ者にも構ってくれるその懐の広さ、或いは優しさだろうか、が何だかやりきれなく哀しい。

初めから細かい説明まではしてくれるつもりは無かったのか、あらかたの説明を口にするとうラウドラチャクリンは黙ったまま考え込むような顔つきになり、同じように黙り込んだ私達はそのまま馬を進めた。

049 それぞれの立ち位置

隊商の先頭に立ち街道を辿りながら、隊の中程でミシエイルと馬を並べているイエライシャを伺ってみる。

先程まではその隣にラウドラチャクリンも居て、何やら話をしていたらしいが今は皆口をつぐんだままのようだ。

この前染めてから日が経っているので、だいぶん元の色に戻っていた彼女の髪が以前のように輝くのを俺は目を細めて見つめていた。さっきのティサ卿も彼女の髪の色や肌を不躰に見つめていて、何度邪魔にはいつてやろうと思った事か。

……どうやら俺はかなり嫉妬深い性質だったらしい。

不自然なくらい何度も振り返っていたからだろうか、昼食を兼ねた休みを終え、隊列を組み直そうとした時、ミシエイルに軽く肩を叩かれた。

「先頭は引き受けるよ、落ち着かないのはお前だけじゃないらしいし」

すれ違い様にそう言うと、返事も待たずに自分の馬を隊列の先頭へと向かわせる。

その背中を見送りながら無意識のうちに溜め息を一つ吐いてしまっていた。

……そんなに自分はあるからさまだったかと、情けなさに。

ラウドラチャクリンとはいえばヨシユアとともに隊列の最後尾に移動している。

それを確認すると、当然のような顔でイエライシャと並んで馬を進めた。

俺に気付いたイエライシャは少し不思議そうな顔をして見つめてくる。

「どうかしたの？」

「あ……うん……。聞きたい事があるんだけど……いい？」

少しばかり潜めた声が廻りを気にしているのだと主張していて、俺はもう少しで鎧がぶつかり合う寸前まで馬を近付ける。

「……何を聞きたいの？」

「貴方は知っていたの？ 私が……他の人たちからどういう風に見られてしまっているか」

「まあ……ね」

聞かれたくは無い問いだった。

正直に言えば、それには気付いて欲しくはなかったのだ。

俺がティサ卿に心の中で悪態をついたのはこれで何度目だろう。

「知らない訳じゃなかったけれど……言う必要は無いと思っていたんだ。俺達は本当に君をルクアディナルファ王の元へ送り込もうと思っていた訳じゃないし、最終的には君が自分のしたいように振舞えるようにするつもりだった。この返事では納得出来ない？」

「……本当に？」

「そうじゃなければ、俺は君にちよっかい出してないよ。もつとも初めはラウの考えが読めなくて……どうしようかと思っただけ事も無い訳じゃないが」

ふざけたように言う俺を、少しばかり細めた瞳で疑わしそうに見つめるイエライシャに笑いが堪えられない。

本当は……自分が側室同然の女だと思われていたのを知ったら……彼女はもつと怒るのではないかと心配していただけに、この穏やかな反応は意外と言えば意外だった。

そう考え付くと昨夜のラウドラチャクリンの俺たちをけしかける

ような言動も、反動を少なく押さえる為の奴なりの配慮……に見せかけた根回しだったのかもしれないとようやく思い当たる。

しかし出来れば事前に有る程度は説明が欲しい、とも思う。俺が察しの悪い奴だと知っているのなら尚更だ。

「どうしてティサ卿には私のファースト・ネームしか紹介しなかったの？」

シェカルを出た日の夜、次に着いた宿の部屋で寝仕度をしていたイエライシャが衝立ての向こうから顔を出して、そうラウドラチャクリンに問い掛けた。

いつもの夜の探索……俺はそう勝手に呼んでいる……から戻ったばかりのラウは夜の気配の沁み込んだ外套を脱ぎながら視線をイエライシャへと向ける。

この宿では、俺達はいつものように3人で部屋を使う事になっていた。

「大した意味は無いよ。わざわざセカンドネームまで教える必要は無いと思った迄だ。別れ際に自分の権力を誇示して……下心丸出しで君に取り入ろうとした男に、その名で呼ばれたいの？」

「……冗談でも嫌だわ」

「だろう？」

きっぱりとしたイエライシャの答えに、にやりと人の悪い笑顔を見せたラウドラチャクリンも寝仕度に掛かる。

上衣を押さえている幅の広いサッシュをするりとほどき、無造作に上衣を脱ぎ捨てた。

その下に着ていたのはいつもどおりの襟ぐりの大きく開いた薄手のシャツだった。

いつも首の詰まった衣装を好んで着るせいで、ラウドラチャクリ

ンの首筋のあたりはまるで女性のように色白だ。

「……やだ、淑女の前で何してんのよ」

男性の身支度に頬を赤らめたイエライシャは、文句をいいながらも再びそそくさと衝立ての向こうへと引っ込んでしまった。じきに衣擦れの音がしたので、彼女がベッドに入ったのだろうと当たりを付ける。

「イエライシャ……じきに首都に入れる。もう暫く……今の待遇で我慢してくれるかい？」

衝立て越しにそう声をかけると、しばらくの間があり、あきらめの気配を含んだ彼女の返事が返って来た。

「……努力するわ」

ナムリ殿に会い、そして最終的に結論が出るまでは、自分がジャルの王によって差し向けられたルクアディナルファ王の側女候補として見られてしまう。

その事実を容認するのは女性にとって屈辱的な事だと理解しているが、同時に彼等権力者の威を借りる事で確実に彼女の安全を守る事が出来るのだと言う事を理解してくれたら……とも思っていた。

「ありがとう、お休み」

「……おやすみなさい」

ほっとして返した挨拶に少し力の無い声でイエライシャは答え、それきり俺達も口をつぐんだ。

050 首都

「うわぁ……」

つい、そう声が漏れてしまうのを止める事が出来なかった。

市街地の中央より外れた位置に……城のような……大きな建物がそびえ立つのをかなり遠目で確認しながら、私達の一行はルクアデイナルファの首都クティナンを見渡す事の出来る小高い丘に行き着いていた。

隣に付いていてくれるミシエイルが指差しながら説明してくれる。

「一際大きく見える建物が祭祀王の居城だよ、特別な呼び名は無いな。何しろ「城」と言えばアレしかないからね」

私はそれを見つめながら暫くはなんて言っただけなのか判らなかった。

大きい……なんて物ではない。

なだらかな山の上に、その山そのものであるかのように建物が鎮座しているのだから。

ここからあの建物までは随分な距離だろうに、近くで見るとさぞ圧巻だろう。

山地の大国とは言えぬ国ながら、遠くバーラートにまで名が聞こえる王国の由縁はこれだったのかと、納得出来た。

ようやくそこから注意を外して、今度は周りを見回してみる。

すぐ目の前には扉の無い門のような木枠が見え、行き交う人々がそこをくぐって都市へと出入りしていく。

それをくぐった先には、背の低いこじんまりした建物がいく棟か見渡せる。

その『門』の両脇には、これまでの旅の間に見覚えた石積み

まりが人の背丈程の高さに作ってある。大小様々な石を積み上げて出来上がっているそれには何本もの木の枝が差し込まれ、細い枝の先端には細い布が結わえ付けられていた。

「あれも？オボ？なの？」

「そう、この西の門を守護させる為に」

オボとは村や街の入り口や道の辻などに置かれ、災いや穢れなどから村や住民を護る物なのだとか。

固有の宗教に由来する慣習に培われたある種の結界なのだと説明されているそれが、墓標のようにも見えて私は苦手だったが、ミシエイルは平気な顔でそう言う。

かつては美しい色彩で彩られていたのだろうその布が、午後からの緩やかな風にあおられ、そよぎはじめるのを見るときにもなしに見つめていた。

いくぶんぼんやりしていたその物想いを遮ったのはアルマンスールの名を呼び、首都へ入る為の手続きを要請してきた役人の声だった。

声のする方を見渡すと門の脇に数人の役人らしき者が立っている。こちらに注意を向けている者も居れば、他の通行人の荷を改め、書類とにらめっこしている者もいて、ここが都に入る審査の関所も兼ねているのだとようやく理解した。

先に目に入っていた建物が彼等の詰め所だったのだと、その時になって思い当たる。

アルマ家の名を呼んだ中年の役人とは顔なじみのようで、馬を降りたファドラーンがその男にこやかに対応しているのが何だか印象的だった。そして彼はいつも重要書類を入れている書類入れから何枚もの書類を取り出して、目の前の役人に示しはじめる。

その書類のうち何枚目かに目を通していた相手が、不意に顔を上げて隊商の顔ぶれを眺め渡した。

ぐるりと視線を巡らせて、その役人の視線が私を捉える。

いぶかしむようなその表情と、彼が手にしている書類から推察して私に関するものなのだろうと察すると溜め息が出るのを止められない。

強張ってしまう表情を何とか外套のフードで隠しつつ、それでもおどおどしているとは見られたくなくて、心持ち胸を張って馬の上から廻りを見回してみた。

隣に馬を並べているミシエイルの少しばかり心配そうな表情に気が付いてはいたが、それには素知らぬ振りで振舞う。

やがて何か言いたげな役人を軽くあしらったらしいファドラーンが他のメンバーに合図を出し、一行は首都の中心部へ向けて動き始めた。

最早先頭に行くファドラーンの統率の必要すらない筈なのに、きちんと整ったままの隊列で移動するのには流石に感心する。

それでも何処と無く安堵のような表情が皆の間に見受けられ、改めて実感していた。

ここがこの隊商の最終目的地なのだ…と。

建物の間から時々見え隠れする王城を気に掛けつつ、徐々にこの都市の中心部へと馬を進める。

町並みは整っているし、大通りに面している建物はこぎれいで、辺境の小国の首都としての体面を保つには十分だと思わせる。

建物の様式はこれまでに見て来た近隣の町々と大差ないものの、都市の中心部へと近付くにつれ建物の外観は立派になり門構えもかなり目を引く。

道行く人々の姿も様々で、ついきよろきよろと見回してしまった。

やはり近隣の町でよく見かけた農民風の衣装をまとった者や、彼等とは明らかに身分が違うのだろうと思われる豪華な衣装や装身具を身にまとった人々がある者は徒歩で数人、ある者は輿に揺られて大きな通りを行き来している。

その輿にしても馬や牛に引かせる物から、屈強な男数人に担がれた物までバリエーションが豊かで、ついつい目が奪われてしまうわ。馬に曳かれ、何処と無くバーラートで見慣れた極彩色の彫り物が施された輿に乗った婦人達が脇を通り過ぎるのを物珍し気に見送った所で、隣に馬を並べていたファドラーンがかなり必死に笑いを堪えているのに気付くと、流石に頬が赤くなった。

「……悪かったわね田舎者みたいで」

「誰もそこまでは言っていないよ？」

「……じゃあ、何故そんなに笑うのかしら」

廻りの仲間達がやはり微かに笑みを浮かべているのを承知の上でそう訊ねてしまった。

皆の浮かべている笑みが私の反応に対するものなのか、私とファドラーンのやり取りに関するものなのかは判らないのだけど。

いずれにしても面白がられているのに違いは無いわね。

むきになったように問いつめてしまいそうになった私を止めてくれたのは、後ろから馬を進めていたラウドラチャクリンだった。

「元気が良いのはいいが、この辺りは既に街の中心部だよ、貴族も多く通る道だ。バーラートから祭祀王猊下の元へとやって来た女性がとても威勢の良い方だと……前評判が立ってしまったては事がすすめにくくなるかもしれないよ？」

その言葉に思わず口をつぐんでしまった私を見遣って、ラウドラチャクリンさえもが楽しそうだ。

「意地の悪い事を言わないで。貴方の事だもの手抜かりは無いのだと思っていたわ？」

「その評価は光栄だが……油断はしない方がいい」

にこやかな微笑みでもってそう、いつも通りの含みのある言い方をしたラウドラチャクリンはけれど、ずっと前方を見つめている。何を見つめているのかとその視線を追うと、どっしりと前方に立ちはだかる王城がその先にあった。

気にならない訳が無いわね、友人が病に伏している場所だもの。

王と言う立場と商人としての身分の彼では足繁く通う事もままなるまいが、すぐにでも見舞いに駆け付けたい所なのでしょね。

黙り込んで自分の視線を追っていた私に気付いたのか、微笑みのままラウドラチャクリンは先をせかした。

「じきにわたし達の屋敷に着くよ。明日には王城の侍従長殿の所へ伺うから……すぐに君は自由の身になれる」

「明日って……そんなに急に伺うの？」

「……ああ、ゆっくりと旅の疲れを癒すのはそれからでも出来るからね」

「そうじゃ無くて、どうしてそんな急に行って……侍従長なんて言う身分の方に御会い出来るの？ふつうなら……取り次ぎとかで日数が掛かるだろうってことくらい私でも判るわよ？」

驚いた私の言葉を違うように解釈したらしい。

慌ただしい予定に抗議したと受け取ったのだろうラウドラチャクリンが、宥めるような言葉を唇にのせたのを遮る形で逆に質問する。

「いくら王様の友達だからって、そんな気軽に掛けて行って会えるなんて……変だわ」

その問い掛けにもラウドラチャクリンは涼しい顔だった。

「君が以前に言っただろう？私達がルクアの王とバーラートの王との間の使い走りだと……だから、いつでも連絡が取り合えるようなパイプが作ってあるんだよ」

「……………」

先に自分が口にしていた言葉であっさりと質問を躲されてしまった。

それが真相を知る者以外を納得させる為の茶番だと、更に私がそれを理解しているのを知っていながらのその彼の答えに、自然と私の表情は硬くなってしまった。

今更だけれど、拒絶されたのかもしれない。

ちらとそんな考えが頭をよぎる。

「……変な事考えない。只……もう少し周りを見回して御覧、いくら地元に戻って来たとはいってもここもまたわたし達にとっては戦場なんだよ」

私の考えることなぞお見通しだとばかりの言葉に、再び廻りの景色や人々に目を移す。

賑やかな人通り、色とりどりの衣装を身にまとった人々、先程まで私の視線と関心を奪っていたそれらのその奥にあるもの……？

「あっ……」

「いいこだ。気をつけなければいけないよ？」

思わず声を上げた私が『何』に気が付いたのか問いもしないで、優しい微笑みのままラウドラチャクリンはそう念を押すように囁いた。

私とは言えばかなり自己嫌悪に陥ってしまっていたのだが、ラウドラチャクリンがそれに気付いたかどうかは判らなかった。

改めて何気なく彼が口にした言葉を反芻してみる。

「ここもまたわたし達にとっては戦場なのだ」……と彼は言った。その意味がようやく理解出来たわ。

人混みにまぎれるようにして行き交うのは、明らかに以前教えら

れた人種だ。

何を考えているのか、掴み所の無い目付きに底知れなさを感じる……クアーナ人。

人種的に言えば彼等とルクアディナルファの民との間にはさほどの違いは無いはずなのに、なにかしらの違和感を感じさせる彼等。

私達にとりたてて関心を示す者は居ないようだが、道行く人々の間に必ず彼等は居た。

貴族階級の者達程派手な装いでなく、あくまで目立たないような衣装に身を包んだその立ち居振る舞い。

随分彼等はこの国の中へと入り込んでいるのだと勘付いてしまった私は、ふと視線が合った一人の通行人から咄嗟に視線を外しながら背筋に冷たいものを感じていた。

あれは、あの人を見たのは峠越えの前だったわ。

クム・ウタールの町で市場を冷やかしていた私達を見張っていたクアーナ人……だ。

051 帰還

ラウドラチャクリンと何やら言葉を交わしていたイエライシャが黙り込んでしまったのにはすぐ気が付いたが、その理由には思い当たらないまま……俺達は自分達の目的地を目指していた。

じきに大通りから少し外れた所にあるアルマンスール商会の看板を見つけ、やっと着いたという感慨に短い溜め息を漏らす。

今回の旅は思ったよりも長くなってしまっている。

予想外に随分といろいろな事があったので、戻ったら待っているであろうデスクワークに少しばかり嫌気が差して、思わず先程とは違う意味で再びため息が漏れた。

大通りから一本引っ込んだ通りに、看板のある店舗部分がある。

それを通り過ぎ、角を曲がった突き当たりが、裏庭兼厩に通じる木戸になっている。

いつも通り、俺達の到着にあわせて解放されているそれをくぐったのは午後遅く、間もなく夕闇が迫ろうと言う頃合いだった。

この隊商の全ての馬を納めるにはとても足りない広さの厩に、今夜ここに留まる予定の者達の馬を優先的に入れ、残りの馬はその外側に繋ぐ。

イエライシャが馬から降りるのを手伝い、ついでに彼女の荷物を降ろしていると賑やかな声に応じるかのように屋敷の扉が開き、見慣れた姿が現れた。

ラトー・イズイード、普段から留守がちな俺とラウの代わりに實質的にこのアルマンスールの店を取り仕切らせている中年の男だ。

自分達の馬の荷物を降ろしたり、鞍を外したりと賑やかな中を氣にとめるふうもなく、ゆったりとした彼独特の歩み方で俺達の所ま

でやってくる。

「お帰りなさいませ、お二人とも。ご無事なようで何よりですが……予定を過ぎてもお戻りではなかったので流石に案じておりましたよ」

言葉の割りにはさして案ずるふうもないその男の言葉に、ラウドラチャクリンが笑みを返す。

齒に衣を着せぬ彼の言動と立ち居振る舞いは、やんちゃな主の息子達に手を焼く監督役の使用人としてこの界限では通用しているものだ。

「ただいま、ラトー。留守番ご苦労だったな」

「フアドラーン様もご無事で何よりですわい、さぁ中へどうぞ。おや、そちらのお方は？」

劳いの言葉をかけると、ようやくラトーは俺の隣に立っていたイエライシャに気付いたようだ。

流石に彼女の異国の顔立ちを無遠慮に眺めるような事はしなかったが、明らかに興味を持ったという表情。

「バーラート経由の御客人だ。暫くはこちらに滞在して頂く事になると思うから、客室の準備を頼めるか？ 改めて後ほどお前やサヤにも紹介しよう」

「お二人がお客様をお連れになるとは珍しい事ですな、早速用意いたします。それまでは応接室の方でお待ち下され」

「俺が案内するよ」

ラウドラチャクリンにそう請われたラトーがうなづいて、客を導くような素振りを見せたのですかさず俺が名乗りを上げる。

瞬間俺に向けられたラトーとラウドラチャクリン、2人の視線が少しばかり痛い。

一方は訝し気に、そしてもう一方は予測通りとでも言うような、いつもの微笑み付きだ。

けれど街中に入って以来妙に黙ったままのイエライシャが気になってしまっていたから、敢えてそれを受け流す。

馬から降ろしたばかりのイエライシャの荷物を肩に担いで、まだ事態に対応し切っていないイエライシャに手招きすると、屋敷の中へと扉をくぐった。

051 帰還（後書き）

幕間な感じで、短くてすみません。

これを書いた時の自分、何考えてたのかな？？？？？

「何かあったの？」

夕暮れ前とはいえまだ明るさの残る庭から屋内に招き入れられ、薄暗く感じてしまった室内に瞳を慣れさせようと何度か瞬きしてみる。隣りに荷物を降ろしたファドラーンはそう言葉をかけて来た。

心持ち心配そうなその表情に、ちよっぴり頬があったかくなる。

「この街に入ってからこっち、君が妙に静かにしているのが気に掛かった。憧れと言うのとは違うのかもしれないが、君が望んだ街に着いたと言うのに……不自然に大人しいと心配になるよ？」

「失礼ね。それじゃあ私がいつも騒がしいみたいじゃないの」

「はは、ごめん。でも元気が無いような気がしたんだ。……本当に何かあったんじゃないのか？」

取り敢えずのように言い返してしまうと、彼はそう言いながら大きな窓へと歩み寄り、室内を暗くしていたカーテンを開けた。

途端に室内が明るくなったような気がして、つい溜め息を一つ。

「クム・ウタールで私達を見張っていたクアーナ人を見かけたの。この街に着いてすぐによ」

勧められた椅子に身体を預けながらぶっきらぼうに、それだけを口にするのがやっとだった。情けない事に怖いと思ってしまったのだ。

「ああ……俺も彼には気付いていたよ、ウチの隊の皆知っている。気付かれていないと思っているのは奴らだけだ」

「あの人は一体……？」

窓際に立ち、外の庭を見つめたままの特に驚くふうもないファド

ラインに、ラウドラチャクリンの言葉が奇妙な実感として感じられる。彼等は……そして私も……けしてここでも気は抜けないのだ、
と思い知らされたような気がしてしまう。

「クアーナの統治機関の……いわゆる探索者だよ。他の国がこのルクアディナルファに手を出そうとしているのではないかと……外国人の出入りには特に神経を尖らせているんだ」

「自分達だって外国人なのに……？」

「彼等の頭の中の地図では……このルクアディナルファは彼等の国の属国として描かれているらしいね。高山地帯や未だ手つかずのまの鉱山資源や……いろんなものを欲しがっているんだ」

「勝手な言い種ね。バーラートに対する私の国の思惑のように、この国を手に入れて……富を自分達だけが独占しようと言うの」

何に対しても判らない憤りのようなものを感じて、声が少しばかり低くなっていた。

家族とともに故国を離れバーラートへと移った頃の私にとって、世界はとても広く、珍しいもので一杯なまさに新天地だった。

そんな土地ですら国々の争いが陰ながら行われていたなんて、想像だにしていなかった。

外国との貿易で更に財を築こうとしていた父は、多分そういう事も知ってはいたのだろうが、娘達にそういう事は教えてはくれなかった。

もっとも、当の本人である私は、あの当時そんな話をされてもそれに付いて深く考える事が出来るような、周りを見回す事の出来るような娘じゃなかっただろうけれど。

「力を持つとどうしてもそう言う風になるらしいな。取り敢えずは自分達の国を豊かで潤ったものにする為に……近隣の属国からの資源を当て込もうと言う訳だ。自分達の過去の歴史の中でも他国の力

によって脅かされた不自由な時代があった筈なのに……こんどは自分達が力を持つとそれによって他の者を脅かす……歴史なんてそんな風に繰り返して行くしか無いんだろうか……」

珍しく力の抜けた言葉にフアドラーンを見遣ると、寂しそうな色をたたえた瞳に出会ってしまった。

初めて見る彼のその表情が思い詰めたもののように見え、どう返事を返せばいいのか困惑する。

「……貴方は本当は幾つなの？」

以前から気になっていた事だ。唐突なように見えるその質問に案の定フアドラーンも不思議そうな表情を見せる。

話をはぐらかそうとした訳ではなく、目の前の憂い顔の青年が本当は幾つになるのか真剣に知りたくなってしまった、それだけの事なのだけれど。

以前に彼の……弟……と名乗っているラウドラチャクリンの実年齢についても疑問を抱いたばかりだし、丁度いいタイミングのような気がしたのに。

……とはいえ推測はするものの手がかりは無いし、取り敢えず本人に訊ねてみる事にした。

勿論……正直に答えてくれるなんて思っては居なかったが。

「君よりは少しだけ年寄りだよ」

「……もう、その少しだけって言うのがどれくらいなのかを知りたいんじゃない」

案の定はぐらかすようなフアドラーンの返事に、すこしばかり唇を尖らせる。

「絶対二十四歳には見えないもの。……それぐらいは教えてくれてもいいじゃない」

……他の多くの事を知りたくても我慢しているのに。

言えなくて飲み込んだその言葉を彼はそれでも感じ取ってくれたみたい。いつも通りの優しい笑顔の上に、困ったような表情を浮か

べて、彼は私を見つめていた。

「悪いけれど……まだ教えてはあげられないな、君は怒るかもしれないけれど……」

恐る恐ると言うふうに取り出されたその返事に、彼としては精一杯無難な言葉を選んだ「答え」なのだと言得するしかなかった私は、何となく詰めていた息を吐いた。

仕方ない事なのは判るのよ？でも……やっぱり少し寂しいわ。

「フィルダウスの民が伝説の通りに不老不死だと言うのなら……もしも私が貴方に、その……えっと……」

どう表現していいのか迷う。

「私の方が先に……おばあさん……になってしまうの……？」

それ以上は言えなかった。

もしも意地っ張りな私が正直に自分の心を認めて、貴方に貴方の言う本当の返事をしたとして。

……もしも……一緒に暮らすようになって、貴方はずっと変わらないの？

フアドラーンは驚いた顔はしていなかった。

ずっと同じ優しい微笑みのままで。

「フィルダウスの民が不老不死だなんて言うのは正確じゃないな。

本来……不老不死なんてものは無いんだ。どうしてそんな噂が流れたのか……いろいろ考えたけどね」

肩を竦めて言葉が続ける。

「年をとらないのなら……自分が老いて死ぬ事が無いのならば子孫も要らない。子供もなければ親も無い。でも俺にはちゃんと両親が居るだろう？……確かに他の人に比べて年をとるのがゆっくりなんだとは思いますが……それでもいつかは死ぬよ。俺の両親だってそうだ。この隊の皆だってそうだし、……ミシエイルはいずれは俺たちとは離れて妻の所へ永住すると言っているくらいだよ。彼の属性

は水に関するものだったから……地上で耕作に関わりたかったんだ。それに彼は君たちと変わらないペースで年をとっているんだよ」

「ちょっと待って、属性って何よ。それに地上って……」

地上、そう確かに彼は言ったわ。

何かが引かかった。

「前に……言っていたわね、星は無いけれどって。つまり……」

「失言だったかな。……フィルダウスは……あの山脈の氷河の下にあるんだよ」

慌てるふうもなく、多分一番大切な秘密に私が気付いてしまったのにファドラーンは悠然と窓の外を指差す。

追うように見つめた先には、夕焼けを通り越した紫紺の夕闇の中、それでも存在を主張する山々の連なりが黒々とそびえていた。

知ってはいけない事を知ってしまったような気持ちになっていた私には、それら山々の黒い蔭が私を咎めているような気にすらなってしまうわ。

「いいの？ 教えちゃいけない事なんじゃないの？」

恐る恐る訊ねても、ファドラーンの表情は変わらないように見えた。

もう随分室内も暗くなって来ていたので、表情の細かい変化を読み取る事が難しくなっていたけれど。

「君が……自分で気付いたんだよ？ だいぶ暗くなって来たね、灯りを付けるよ」

私の考えている事なぞお見通しのように、ファドラーンは室内の壁際、マントルピースの上にあった燭台に近付く。

やはりフィルダウスの人は他人の心まで判ってしまうのかしら、

といくらかぼんやりと彼の手元を見つめ、ぽつと灯された明かりを見つめながら何がしかの違和感を感じていた。

これまでの隊商の旅の間一行の皆は、食事の支度や明かりを必要とする時には必ず火口を使って火をおこしていたわ。

それでもすぐに明かりが灯せる訳でもなく、幾度か石を打ち合わせる音がしていたものだ。

でも、今フアドラーンはそれを使ってはいなかった。

燭台の足下には火口らしきものが置いてあるがそれには手を触れてすらいなかったわ。

「驚かないの？」

問われて、見つめた先にはいつも通りの笑顔の彼。

「ちゃんと……驚いているわ」

……でもどう反応すればいいのか判らなかったのよ。

私の……派手なりアクション……を期待していたらしいフアドラーンは少しばかり残念そうに肩をすくめ、燭台を室内のテーブルの上に移動させた。

「……どうやってそんな事が出来るようになったの？」

「難しいよ、説明する事の方が。俺たちにとっては……呼吸するのと同じくらい自然な動作なんだから」

「……皆……そんな風に灯りを灯す事が出来るの？」

ついそう訊ねていたのは自分があまりにも何も出来ない存在だから。

「出来ない者も居る。属性の質が違々と出来る事も違ってくるんだ。俺の属性は大气に関わるもので……風の流れを感じたり、空気の乱れを調整したりもする。おのおの身に帯びた属性は違うから、それに合った役目を果たすんだよ。属性を全く持たない普通の民も勿

論居るし、だからといって差別される事はない。それをしたら……俺達はフィルダウスの存在意義そのものを失う事になると、俺は思っているんだ」

……判ったような判らないような彼の説明に取り敢えず頷く。
そして、ふと思いついたようにファドラーンは言葉を続けた。

「あと、寿命が長いのが属性って奴も要る。そんなに多くは居ないが……今のフィルダウスの国王もそうだ、王族はもっといろんな属性を操る事が出来るんだ」

それがフィルダウスの不老不死の噂の元かもしれないね、とファドラーンは複雑な表情を見せた。

「貴方の上司……という人はどんな属性を持っているの？」

「それも秘密だな。一応あれでも王族だから……多芸なのは確かだけれど……その分性格は不器用な人だね。付き合いくいって言う奴も居るけれど、結構お人好しなんで憎めない人なんだ」

以前も少しだけ触れた事のある人物に付いて尋ねると、教えられない……と言ったわりに彼は饒舌だった。

思い出しても居るのかにこやかな表情で。

「前にも思ったけれど、貴方は本当にその人の事が好きなのね」

そう追求してみると、少しばかり眉をひそめる。

「……やな所もあるぜ？でも何だか憎めなくてね。……で、気が付いたらこんな事をしていたって訳だ」

幾分あきらめの口調でおどけたように肩をすくめるファドラーン。
見慣れてしまったその仕草を見ながら、後はどんな事なら答えてくれるのかしらと考えをまとめようとした所へ、扉にノックの音が響く。

「失礼いたします。お部屋の準備が整いましたので……ご案内致しますよう」

「じゃあ、行こうか」

先程ラトーと呼ばれていた男の人のものではない、年配の女性らしき声が扉の向こうからそう告げる。荷物に手をかけながらファドラーンがそれに応じた。

相変わらず私が「本当に知りたい事」はうやむやにされたような状態のままなのだが、今のところは無理に追求しない方がいいのかもと考える事にして彼の後に付いて部屋を出た。

部屋を出た所で待っていたのは黒髪に黒い瞳の中年の女性で、私を見ても特に変わった視線を注ぐ訳でもなく穏やかな微笑みを浮かべていた。

「お帰りなさいませ、ファドラーン様。どうぞ……お客さまのお部屋へご案内致しますわ」

「ありがとうございます、サヤ。正式な紹介は後でするけれど……こちらはイエライシャ嬢。ユグドラセアからおいでだ。そしてイエライシャ、彼女はサヤ……この屋敷の管理を務めているよ。さっき会ったラトーとは夫婦だね、この二階に住み込みで勤めてくれているんだ」
柔らかな物腰で丁寧に頭を下げた彼女をファドラーンはそう紹介してくれた。

「暫くお世話になります、よろしく」

「こちらこそ、至らぬとは思いますが……なんなりとお申し付け下さい」

そうにこやかに彼女、サヤは私の挨拶に応えると、先導するように客室へと案内してくれた。

「この屋敷ではツァイデアルの屋敷程設備がしっかりしておりませんので……ラウ様のお部屋にしかグスルハネがありません。浴室は一階にございますが……じきに夕食ですから、後ほどご案内致しますね」

「……ありがとう」

開けられた客室の扉に、すかさず荷物を手にしたファドラーンが先に室内へと足を踏み入れる。それが安全を確認する為の彼の無意識の行動だと判って、つい微笑んでしまった。

「何か可笑しかった？」

怪訝そうな彼の表情が更に笑いを誘う。

「だって……自分の家なのにそこまで用心するなんて」

「……ああ、もうこれは身に付いてしまった習慣のようなものだよ」

指摘されて初めて気が付いたとでもいうように彼は自分の廻りを見回して、幾らかの苦笑いを見せる。つられて笑顔で応じながらも、推測してしまおう。

それだけ彼等のやっている事は危険な事なのかしら……と。

ぼんやりとそんな事を考えてしまっていて、彼に促されて室内へと入り荷物を降ろすと、ベッドへと腰を下ろした。ファドラーンはさっき応接室でやったのと同じように、火口を使わずに部屋の灯りを灯してくれた。

「俺も荷を片付けて、着替えてくるから……後で迎えにくるよ」
そう言ってファドラーンが姿を消したドアをじっと見つめる。

素材自体は上等のものを使っているのだろう古ぼけたドアに、この屋敷の歴史を想像してみた。

ずっと昔から……彼等はここで、自分達の国を護る為に息をひそめているのだろうか。

彼等の王国を捜そうとする人々の目を欺きながら……？

ふいに昼間のクアーナ人の姿が思い出され、彼の鋭い視線に身震いする。

あんな怖い瞳の男達と渡り合わねばならないの？

……いいえ、ラウドラチャクリンもファドラーンもそれだけの度

量を持って居るのだろうと確信出来るのだけれど、それでも不安と同時に心配になってしまう。

無意識に安全を確認するようになってしまう程気の抜けない生活をずっと送っている彼等に、どう接していけばいいのか、判らなくなっていた。

だって私は彼等を、彼等のペースを乱すだけの存在かもしれないじゃない。

少なくとも、ここまでの私はそうだったわ、只のお荷物でしかなかった。

「イエライシャ、準備は出来た？」

そんなくよくよした考えに迷い込んでいた私は、ファドラーンがドアをノックしてくれた音にハッと我に帰った。

ぱっと立ち上がったものの、まだコートも脱いでいなかった事に気付いて、その襟元に手をかけながらこのコートをくれた人の姿を思い出す。

……息子達を送り出す時に彼女が見せた、流石に不安そうな表情。そして別れ際に彼女が言った言葉も思い出した。

「……ファドとラウを信用してね」

そう言われた時は何の事を言っているのかさっぱりだったわ。

クム・ウタールでラウドラチャクリンの素早い手配に驚き、シエカルでは地元の有力者であるティサ卿の言葉に不愉快な思いをさせられもした。その瞬間的に抱いたラウドラチャクリン達への不信感を、既に彼女は察知していたのかと後で思い返して納得していたりもしたのだが……。

どうやら違ったのかもしれない。

待ちくたびれているファドラーンの表情を予想しながら、コート

を丁寧に畳むとクローゼットにしまい込み、隣に置いてあった姿見で髪のを直す。

服は今日の旅着のままだが、気にしない事にしてドアを開けた。

053 条件

既に夜の闇に閉ざされている廊下には一定の間隔で灯りが灯してあり、廊下で待っていてくれたファドラーンの表情も何とか何う事が出来る。

少しばかり待たせてしまったのでどんな顔をしているのかしらと思つて見上げたら、思いの外心配そうな表情を見つけてしまった。

「……ご、ごめんなさい」

「何が？」

「少しぼんやりしていたみたい、支度が遅くなつてしまったから……」

自分が貴方を焦らして、わざとそんな顔をさせたような気がしたからよ。

口には出せないけれど、そんな言葉は。

突然謝られて困惑していたらしいファドラーンの怪訝そうな言葉に、そう返事を返してしまった。

「大丈夫なのか？ 疲れているのなら食事はこちらへ運ばせるよ？」

「気持ち嬉しいけれど……そんなに過保護にしないで？」

何処までも優しい彼の言葉に、つい甘えてしまいそう意識して背筋を伸ばすと、彼を改めて見上げる。

「君を過保護にしなけりや……他の誰に優しくするっていうのさ」「クスクス笑つて楽しそうにそう言うファドラーンを困ったように見上げてしまった。

ここに来ようやく彼等のやっている事の危うさ、或いは際どさが実感として感じられた。

何の取り柄もなく、何も出来ない私はせめて彼等の邪魔はしないように気をつけようと、そう考えたばかりだというのに、彼の余裕に巻き込まれそうになる。

「そんなにやけていられるなんて、余裕よね」

ため息をつきながら、ふと漏らしてしまうとファドラーンは更につっこりする。

「まだこれ位の事で余裕が無くなるような奴じゃ、このグループには参加出来ないんだよ？それでも皆……役に立つ奴ばかりを集めてあるんだから。心配しないで……さあ行こう」

肩に軽く腕を廻され、促されるようにして食堂へと降りてゆくと、その入り口では先程会った2人、ラトーとサヤが待っていていた。改めて、この屋敷の事を任されているという2人にはファドラーンから私の表向きの立場の紹介がなされ、頭を下げた2人に私も頭を軽く下げる。

本来ならば貴族として紹介された以上、使用人に対して頭を下げる必要は無いのだが、敢えてそれをした私にラトーはにこやかな笑みで応えてくれた。

「ここに住み込みなのは俺とラウとあの2人、そして男ばかり三人だね。後は店の方の通いで……五人かな。住み込みのうちの2人はミシエイルとヨシユアだよ」

「他の人たちは？」

「一応この周辺での買い付けや、商談の為の人員として動いている。この屋敷じゃ手狭なんで他の奴は寮として借りた建物か、それぞれ好きな所に住んでるんだ」

その方が便利だし、まあ色々と自由も利くしね、と片目を瞑ってみせる。

室内へ入ると先にテーブルへ着いていたラウドラチャクリンの隣へと案内し、椅子を引いて席を勧めてくれる。

故国では当たり前のようにされていたその行動を、バーラートを出てから初めて見た事に気付いたのは食事の前の祈りの為に両手を組んだ時だった。

「……ファド……今の？」

「確か間違っっては居なかったと思ったけれど……？ 貴婦人には当然払ってしかるべき敬意だろう」

「どうして……貴方がこれを知っているのよ」

当然と言う風情でそうファドランが答えて、カラフェの淡い金色の酒を一つ隣のラウドラチャクリンのグラスへと注ぎ込むのを問いつめる。

私の反応を楽しんでいるような、にやりと何処と無くラウドラチャクリンに似た微笑みを浮かべた彼の代わりに隣のラウドラチャクリンが口を開いた。

「かつてフィルダウスには……君と同じユグドラセアの民も居たんだよ。ほんの僅かだったとは言え、彼等はフィルダウスの民として暮らしていたんだ。彼等は自分達の故国の風習などを教えてくれていたから……幾らかは今も上流貴族の風習として、フィルダウスにも根付いているんだ。そう考えるとかつて居た……というのはおかしな表現だね、我々の中に彼等の血が生きている……と言うべきかな」

「どうやってその人達はフィルダウスへと辿り着いたの？」

今でさえ、ユグドラセアとこの大陸との間の交流はあまり盛んとは言えないのに。

「それは私にも判らないな、でもフィルダウスの民は常に世界の何処かを旅しているから……君の国へ行った者も居たのかもしれないね」

「……そうなの？」

酒杯を傾けつつそう話してくれたラウドラチャクリンの言葉に相づちを打ち、フィルダウスへと迎えられた人はどんな人なのだろう…と考えていた。

どんな力を持つ人なら彼等の王国へと迎えてくれるのかしら。
ラウドラチャクリンのように特別な力を持つ者？

それとも何か国の為になるような一芸に秀でた者だろうか？

私は何の力も、そして何の取りえもないただの娘なのだけど。

054 思索

ラウドラチャクリンの言葉に相づちを打ちつつもルクアディナル
ファ風の料理を前にして、あまり食が進まぬ様子のイエライシャ。

彼女が何を案じているのか見当は付かなくはない。

とはいえ俺としてはまだ、切り札だと思っているものの種明かし
をしてしまう訳にもいなくて、当面の予定へと彼女の注意を向け
ることしか出来なかった。

「イエライシャ……？明日は朝食の後で城から使いが来るのを待つ
よ。後は予定通り……ナムリ侍従長にこの国への滞在の許可を貰え
ばいい」

「えっと……それだけ？」

「俺達はね。ラウには別の用事があるし……王城前の広場や街を案
内するよ」

拍子抜けしたような表情の彼女に努めて明るい口調で俺がそう言
ったので、瞬間ラウドラチャクリンを伺うそぶりでイエライシャは
躊躇いを表現した。

「……いいの？」

「勿論、構わないよ？取り敢えずは……土地勘を身に付ける為にも、
すこし歩きまわったほうがいいだろうし」

躊躇いがちな彼女の言葉にラウドラチャクリンも気にするふうも
なく返事を返したが、付け足すように口を開いた。

「後は、この国に滞在の許しを請うにあたって……君の身柄の後見
をナムリ殿に願い出ねばならんだろうが、このアルマンスール家の
預かりと言う形で体裁を整える事になると思うから。了解しておい

てくれ」

「勿論、お任せするわ」

どう転んでも自分にとって不利になるような手配を我々がする事
は無いのだと、信頼を込めた彼女の短い返事に、笑顔になるのが自
分でも止められない。

上機嫌でカラフェを傾けて彼女の酒杯をも満たすと、案の定困惑
気味な抗議をされてしまった。

「……だから、お酒は得意じゃないのよ」

「これは特別、うちの親父の自慢の品なんだから、試して御覧。何
の為にガラスのカラフェに入ってるか知っている？」

「それは……考えてなかったわ。でも以前のお酒は陶器のカラフェ
だったわね」

イクシールでの事を思い出そうとしているのか、彼女は少しばか
り眉を寄せた。

「上等の酒は……この色を楽しむんだよ？今日は特別お客人も居る
事だし、サヤのサービスだと思うが、ウチの蔵でも出来のいい方の
酒なんだ。この色を覚えておいて？」

「色って……貴方は覚えているの？」

「一応仕込まれたんでね、忘れたなんて言ったら蔵頭に絞られちま
う」

呆れたふうの彼女の言葉に肩をすくめてみせる。

そして、イエライシャの隣で聞いていたラウドラチャクリンが俺
のその言葉に声を殺して笑っているのに気付いた。

同時に彼も、親父の蔵を取り仕切っているあの男の顔を思い出し
ているのだろうと思う。

意外にもラウドラチャクリンと同じ長寿の属性を授かった彼は、
長い孤独の身を費やす場所に親父の酒蔵を選んだ。

彼の長い経験と知識のお陰で何時だって質の良い、安定した品質を保てるようになった親父の蔵はとても評判になったものだ。

何時だったか寂しくはないのかと問うた幼い俺に、地上程激しくはないゆったりとしたこの地の季節の移り変わりが丁度自分には合っているのだと、そう言って笑った穏やかなその姿がいつも忘れられない。

時々彼とラウドラチャクリンが長い会話を交わす事があるのも知っているのだが、その内容は俺には想像も付かないものだろうと思っていた。

じきに食事の給仕も一段落したのか、サヤがイエライシャの様子をうかがいに来てくれる。

浴室の案内と説明をしてくれるらしいので、俺じゃあまり立ち入れない事だからサヤに任せる事にした。

部屋を出てゆく間際に振り返ったイエライシャに片手を挙げると、微かに笑顔が返って来て、落ち着いた彼女のその仕草によりやく安心した。

055 王城

手を挙げて挨拶してくれたファドへと笑顔で返事をしてから、こじんまりした食堂を出て浴室と厨房など建物の内側を見て廻った。

大体の屋敷の間取りは、サヤさんに案内してもらいうちに何とか頭に入っただろうと思う。

こうして見ると建物の一階部分は殆どが「アルマンスール商会」というありきたりな屋号を掲げた商家の為に使われている事がよく分かる。

裏庭に面しての玄関はあくまで家族と内々の客の為のもので、最初に私が待たされた上等の調度品があつたえられた応接室は接客用のものだという。

更に奥に続く通路の両脇には倉庫を兼ねた事務室、更にその奥の突き当たりには何人かが寝泊まり出来る大部屋があるのだと教えられた。

今夜のように隊商の帰還などで人が多い時に使われるもので、此所に留まる予定の者は今夜は夜半まで飲み明かすつもりでしょうね、と諦めの溜め息について肩をすくめたサヤさんについ微笑みがこぼれる。

彼女のそれは、迷惑がると言うよりも寛大さの滲むものだったからかも知れないが。

再び案内された浴室はシャワールームのような所で、浴槽はあるのだけれどあまり使われていないらしいのは、この街の水事情の悪さ故だと説明される。

それでも身体を淨めたい時に好きに湯が使えるのが結構贅沢な事だと言うのは、言われるまでもなく理解出来るわ。

この街に着く以前からこの地の特徴が乾燥した気候なのには気付

いていたし、浴室と言うものの設備が無いかなりお粗末な宿にも流石に慣れっこになっていた。

この乾燥した気候に馴染んでしまえば、頻繁な入浴と言うものもあまり必要ないのかもしれないと考えていたのだ。

そして客人の身の回りの世話も自分がするからと言ってくれたサヤさんに感謝しながらも、出来る事は自分でするからと日常の事について教えてもらう事にした。

更にはこの国の習慣や、明日会う事になっている祭祀王の侍従長と言う身分の方に失礼の無いようにと、自分よりも身分の高い相手に対する敬意の払い方なども教えてもらう事にする。

「今日の所はお体を休めて下さいませ、明日の朝……お使いの方を待つ間に教えて差し上げますから。明日に差し支えてしまつては意味がありませんでしょう？」

早速教えてもらおうと思ったのだが、せっかちに頼もうとした私はやんわりとサヤ……呼び捨てで呼んでくれと譲らない彼女……にたしなめられてしまった。

「でも……早く覚えておきたいの」

「大丈夫ですわ、すぐに覚えられますから。それにまず初めにお会いになる時はご自分の御国の流儀でなさいませ。未だお会いになつた事の無い国の方がどんなご挨拶をなさるのか、あちらの方もご興味がおありだと思えますわ」

「……そうかしら」

不安げな私をそう諭すように言葉を繋いだ彼女に優しい微笑みを貰って、無理強い出来る程押しの強くない私はそれに丸め込まれてしまった。

そんな自分が少しばかり不本意で、浴室で身ぎれいにした後も何となく気が晴れない。

何となくまだ賑やかさの余韻が残る食堂を遠めに見ながら、そつ

と自分に宛てがわれた客室へと戻るとベッドへと潜り込んだ。

翌朝、朝食を終えた私は前の晩の約束通り、サヤにこの国の礼儀作法を教えてもらっていた。

既に着替えも済ませており、迎えが来ればすぐに出掛けられるよう支度は整っているわ。

「もう少しだけ頭を下げれば相手が祭祀王様でも失礼には当たりませんわ。最敬礼ならば叩頭するのが習いですが……今の祭祀王様はそれをお好みにならぬと聞いておりますので。他の方へのご挨拶ならばもう少し頭の下げ方を浅くなさいませ？」

「……こうかしら」

ルクアディナルファ風と言うものの、バーラートに居る間に教わり身に着けた貴人への挨拶とたいして変わらないその仕草を、習慣としてようやく身に付ける気になった私にサヤは穏やかな笑みでうなずいてくれる。

「そうですね、あと、貴族のご婦人方には御国のご挨拶のままでも宜しいですよ。とても優雅なご挨拶ですから……お目に掛けるのも良いのではないかしら」

「物珍しいうちだけだと思っただけけれど、私の見てくれと一緒に？」

「……そうですね。こちらに長くおいでになるおつもりならば、早いうちにこちらの習慣に馴染んでおかれた方が良いでしょうね」肩をすくめた私の仕草に、笑いをかみ殺したサヤの返事。

少しばかり投げやりともとれるのを承知の上で、根眉を寄せたままもう一度上体を屈め教わったばかりの挨拶をおさらいする。不機嫌そうな表情でおじぎをする自分を鏡の中に観察しながら。

そちらに気を取られていたので、そっと開いた扉からファドラー

ンが私達を伺っていたのには気が付けなかった。

「大分慣れたみたいだけど、俺はいつもの仕草の方が好きだな」

「いやね、覗き見なんてお行儀が悪いわ」

そう掛けられた言葉に、微笑みを浮かべているであろう彼の表情を見もしないで少しばかり高飛車に返事を返した。

ようやくこの地に馴染もうと努力し始めたのを見られた事が、なんとなく、決まり悪かったただけなのだけれど。

「王城からのお使いが着いたから、知らせに来たんだよ。……照れる事は無いじゃないか」

「照れてません。それなら初めにそう言ってくればいいじゃない」挑発的なファドラーンの言葉にいつものようにもう少し言い返そうと思ったものの、何となく隣のサヤが驚いたような顔をしていたので思いとどまる。

「ありがとう、サヤ。じゃあ行ってくるわね」

何か驚かせるような事をしたかしら、といぶかしみながらも彼女に礼を言う。

ラウドラチャクリンと使いの者が待っているから、とファドラーンに先導されて一階の玄関へと向かう途中でその疑問を抱えたまま彼を見上げた。

「……どうかしたの？」

「え？……っと……私、もしかして言葉遣いとか……はしたないかしら。何だかサヤが驚いたような顔をしていたのが気になるのよ」

「ああ、違うよ。俺と君とがあんな風にやり取りするのを知らなかったただだよ。サヤは……俺が女性にあんな風に話すのを見た事が無いだけさ」

大した事じゃないとばかり、ファドラーンは気にも止めていなかったらしい。

「いつもはどんな風に接しているの？」

「……それはもう、紳士的に。ラウはほとんど店に顔は出さないし、まだ君は会っていないんだけど、ここの店を俺と一緒に切り盛りしている奴は俺やラウが特定の女性と仲良くなるのをあんまり歓迎しないんで……なるべく相手にも隙を与えないようにしているんだ。特に、誘われても一緒に外へ出掛けたりなんてしなかったよ」

自分に何か非があったのかと心配になっていたのに、そうあっさりと答えられてしまったのは拍子抜けしてしまう。それにしても。

「じゃあ私も歓迎されないかもしれないわね……その人に」

明るいい口調で言葉にしてみたものの、なんとなく声のトーンが下がってしまう。

「シャーンドル・ハルヴァイ……って名前なんだけれどね、彼は一応親父からここの店の事と俺たちを任されているって気負いが強くて……心配性なんだよ。……ほら、彼がそう。今朝方まで別の用事で出掛けていたんだ」

指差されたほうへと恐る恐る目をやると、玄関に面したホールの片隅にラウドラチャクリンとともに立っている男性が目に入った。

イスナードさんと同じくらいの年齢だろうか、髪には随分白いものが混じりはじめているのにとてもしっかりとした体格。

そして私を見つめていたその視線は予想通りに厳しいものだった。

正直に言うならば初めて会った時のイスナードさんのそれよりも鋭く、そして心持ち拒絶の意も汲み取れるその視線の厳しさは予想以上で、うろたえてしまうよりは畏縮したと言った方がいい。

どうしてそれほどに厳しい視線を注がれてしまうのか、その理由がさっきフアドランが説明してくれた事だけではないのを十分に理解出来てはいるのだけれど、でもやっぱり誰かにそんな視線を向

けられてしまうという事はつらくて、心が萎えてしまいそうになる。

「ああ、来たね。ハルヴァイ、昨日からこちらに滞在する事になったイエライシャ嬢だ。……そんな風に怖い顔をしなくてもいいよ、わたしは彼女を信用しているしファドラーンも同様だ。ファドはこないだ彼女をめぐってケサルに宣戦布告したくらいだから……お前も気をお付け？」

ラウドラチャクリンがいつもと変わらない口調で、イクシールでの出来事をほのめかす。

今になって、あの時のファドラーンの私を保護すると言ってくれた、その対応が既に破格の待遇だったのだと、そう判ってしまったこんな状況だと言うのに妙に嬉しい。

「イエライシャ……これはシャーンドル・ハルヴァイ、この店の……まあ監督役のようなものだ。石頭だから融通の利かない時もあるが、たいていは頼りになるよ。……そんなに恐がらなくても大丈夫、彼が君に何か失礼な態度をとった時にはきちんとわたし達に言ってくれ。勿論そんな事は無いと……わたしは信じているけれどね」

私があまりにも緊張した表情をしていたからかしら、ラウドラチャクリンはそう、あからさまな牽制を込めた言葉で隣に立つ男を見つめた。

につこり笑顔付きなわりにはラウドラチャクリンの目は笑っていない。

そんな時、本来ならば明るいき空の色のように見える筈の彼の瞳が湖の底の霞んだような光を湛える。

こういう時のラウドラチャクリンは、正直いつも以上に怖いと思うのだけだ。

主人の息子のその態度に、うろたえるかと思った高齢の彼はしかし意外にも微笑みで応じた。

それでもどこことなく驚いているような印象は隠せないが、余裕の

その微笑みがけして引かないぞと語っているようにも感じられた。

表向きは丁寧な対応のハルヴァイト、にこやかなラトーとに見送られて私達はアルマンスールの屋敷を出発した。

庭で待ち受けていた王城からのお使いは、何処と無く無愛想で物静かな感じの若い男だった。

僧籍に在る者は剃髪するのが習いとかで、綺麗に剃りあげられた頭に鮮やかな指甲草染めのフード付きの僧衣を纏っている。

わりと新しいその布地の鮮やかさは乾燥して少しすすけたような街の壁に異様に映えた。

「凄く……鮮やかな衣なのね」

先導するように先を行くその後ろ姿を見ながら呟くと、ファドラーンの視線をちらりと感じた。

「基本的にこの国には二つの勢力がある。政治を司る摂政と宗教を司る僧侶達。それらを纏めているのが祭祀王……と呼ばれる者だ。それは以前にも話したよね」

確認するようなファドの言葉に頷くと、再び言葉が続けられた。

石畳に行く規則的な馬の蹄の音を意識しながらも彼の言葉へと心を集中させる。

「あの指甲草染めの衣のみが僧侶に許された色なんだ。僧籍にある者は皆あの色をまとう。その中でフードのある衣をまとう事が出来るのはかなり上位の僧侶なんだよ。今のこの国の体制も元々は僧侶が支配権を握っていたらしいが……その中で細分化されて今の体制に落ち着いたみたいだな。祭祀王の侍従長は、僧侶の中では王に次ぐ地位でね、僧侶側の摂政のようなものだ。……本来の摂政を僧侶が兼ねる事もあったけれど、両者による権力争いがよく起きた。以来適任者が居ない場合を除いて……摂政は文官から選ぶ事になったと聞いている」

「誰がその高官を決めるの？」

「祭祀王自身の指名だとか」

「でも……王様が僧侶だったら跡継ぎはどうするの？僧侶は……結婚できるの？」

確か以前妻帯は出来ないと、そう聞いたわ。

意味ありげなファドラーンの微笑みが気になったものの、彼の答えは私の記憶通りだった。

「できない。だから次の王を決めるのは、祭祀王の守護をするときされる水王に任される。……水を司るといふこの国の守護神が選り出した者を次の祭祀王として教育し、即位させるんだ。王が不在の間は摂政と侍従長が協力して国を治める」

「どうやって次の王を捜すのかしら。神様を選ぶって言っても……本当じゃないわよね？」

信じていない訳じゃないけれど、信仰心と神と言う存在を直結出来ない私の所謂不躑躅な言葉にファドラーンは曖昧な微笑みを見せる。

……どう説明すべきか言葉を選ぶような感じね。

「いろんな手がかりを集めて……王が亡くなった年に産まれた子供達の中から、水王の試験を通った者が選ばれと聞いているよ。侍従長と摂政以外は立ち会わないから……一般庶民の俺達は本当の所は知らないな」

軽く肩をすくめて彼はそう纏める。とても興味深そうな話題ではあったけれど今の状況からすれば非常識と取られかねないと思いつき、私も口を閉じる事にした。

黙ったままのラウドラチャクリンとお使いの僧侶と、そして私達。王城はもう目の前だ。

そう思っただけで、途切れた建物の向こうに大きな池が広がっているのに目を奪われてしまった。

乾燥した都市の真ん中に、大きな清水をたたえた湖のように広が

るそれに言葉もなく見入る。

風もなく鏡のように静まり返ったその水面には、抜けるような青空を背後にした壮麗な王城が写り込んでいた。

その高地の山脈の中とも思えぬ風景。

つい、とその視界へとファドラーンの腕が伸びた。

「この池の向こう側に……この街の中心を流れる川がある。そこから常に水を取り入れているんだ。一応聖別された湖として儀式の舞台になるが……本当の神聖湖はこの都市から離れた山の中にある。……その周囲は聖別された土地として隔離されていて、集落もなく……寺院すらない」

「聖地として認められた場所に寺院があるほうが……当然のような気がするの？」

「その地はこの国の導主たる水王に奉じられたので、静寂を好むとされるかの神の為に……人の立ち入り自体を制限してあるんだ」

故国で歴史に名を残す聖地と言えば、巡礼の対象として多くの人々を集める華々しく壮麗な建物が約束だった。

王侯貴族から多くの喜捨を集めて栄えるそれに清らかなイメージはなく、作り物のような「聖地」と呼ばれるそれ自体が私は好きになれなかった。

「本当に私の国とは違うものが一杯よね……」

眩きのような言葉に振り返ってこちらを見ていたラウドラチャクリンが微かに微笑み、大分慣れていたものの、それでも私の頬は微かに赤くなってしまった。

「暫くこちらでお待ち下さい」

丁寧な挨拶をして去って行ったお使いの僧侶の後ろ姿を見送り、暫くと言われた時間を案内された部屋を観察する事で費やす事にし

た。

ラウドラチャクリンやファドラインは慣れた様子で、それぞれに書架の前と上質なソファへと場を占める。

どうしようかと暫くきよろきよろと見回していると、促されてファドラインの隣りへ座ることになった。

更にその隣に何か目的の物を見つけたらしいラウドラチャクリンが腰を下ろす。

覗き込むと何やらびっしりと細かい文字が書き込まれた、日記のようにもとれるものだ。これを書いた人はかなり几帳面な性格だったのだろう、字体の変わらないそのページを黙って読みはじめたラウドラチャクリンにファドラインが苦笑している。

「まさかとは思うが……ナムリ殿の日記とかじゃあるまいね。勝手に手を触れても良いのか？」

「……これは彼の執務日誌、一応わたしが見ても良いとの許可は貰ってあるんだよ」

声を掛けたファドを見上げもしないで、口の端を上げるいつもの微笑みを見せて答えたラウドラチャクリンはそのままその日誌に没頭する事にしたようで黙り込んでしまった。

時々ページをめくる音が聞こえるだけ。

そのラウドラチャクリンの様子に少しばかり肩をすくめ、ファドはソファへと深く身を沈めるとやはり黙り込んでしまった。

二人の一樣にらしくない、強いて言えば無理に落ち着こうとしているような気がするその態度に、今日の用件はそんなに困難で深刻なものだったかと改めて不安になった。

「ごめん、君の用件は大丈夫だよ。ただ……ラウの不安がうつっちゃまったみたいだ、器が小さくて悪いね」

ふいにそう言ってくれたファドラインに驚かされたけれど、少し

ばかり嬉しくなった。

そして彼等が何とか落ち着こうとしている、と感じた自分の感覚があながち間違いではなかった事に、何とも言えない感慨すら抱いていた。

随分とこの人たちの心の動きが判るようになっていたのだわ、と。なるべく落ち着いてファドラーンへと頷いてみせると、再び彼は黙り込んでしまう。

そしてやはり手持ち無沙汰な私は、一人きよろきよろと室内を見回す事でこの緊張から逃れようとしていた。

056 侍従長

「……？」

その奇妙な沈黙が途切れたのは、不意に日誌を閉じて立ち上がったラウドラチャクリンの動きでだった。

閉じた本をソファの前の低いテーブルにのせ、扉を見つめる。

「どうか……したの？」

問い掛けるのと、扉が開いたのとはほぼ同時だったかもしれない。

「済まない……待たせてしまったね」

穏やかな声、しかしほのかに疲れの感じられるその言葉の主を、座ったままぼんやりと見つめていた。

僧侶が身に纏うとされる指甲草染めの衣……はここに来るまでに大分見慣れていた……にフードを後ろへと払っていたので、きちんと手入れされているのだろう剃髪された頭に目がいく。

そして次に疲れの見えるその表情へと。

少し遅れて立ち上がったファドラインが手を差し伸べてくれたので、それに縋ってようやく私もソファから立ち上がる事が出来た。

「お久しぶりです、ナムリ殿。今日は帰国のご挨拶と……連絡を差し上げていた件についての裁定を頂きにまいりました」

すでに立ち上がっていたラウドラチャクリンが優雅な礼と共に口上を述べるのを、少しばかりよそよそしい感じだな、と思ってしまう。

多分、この人ともラウドラチャクリンは普段はもつと砕けた会話をしているそうなのに。

今は私が居る事を意識してこんな口調なのかしら。

「そうだったね。そちらがその……御婦人かね？」

ラウドラチャクリンの挨拶に、彼の視線が私を捉える。

穏やかな声と表情のその人だったが、その侮れない瞳は厳しい。

緊張しているのでぎこちないのは否めないが、サヤの助言通り……

……故国風の腰を落とす挨拶をして相手の表情を伺った。

ナムリと言う目の前の人は先に出会っていたシェカルの実力者テイサ卿と同じくらいの歳だろうか、疲れたような雰囲気纏っているせいで本来の年齢は分かりにくい。

もう何日もこの王城に詰めているのだろう、とは推測出来るが。

「先に書状でご紹介させて頂きました、ユグドラセアのイエライシヤ・グレンフォード嬢です。バーラートのシュヴァーゼ藩王の元から出奔なされた後に我々と偶然出会ったので、ジャヤルの主の力を御借りしてここまでお連れしたのです。結果的にはバーラート内の勢力争いに巻き込む形になってしまったのですが、無事に自由の身になる為にはナムリ殿の御協力が欠かせません。どうぞ良しなに……」

「……ジャヤルの王からの贈り物として遣わされた娘御故、平時であれば私一人の裁量で事を進める事は出来ぬのだが……。幸いにも今は非常時だ、既に猊下より事後を託されておる事もあり……。そなたらの希望に添う事も出来よう」

流暢に言葉を紡ぐラウドラチャクリンに、彼は寛大な処置を惜し気もなく約束してくれた。

そのあまりの気前の良さに、更に裏では何かの取り引きがあったのではないかしらと疑いたくもなる。

「ありがとうございます」

そう口を開いたのはファドラーンで、敬うように深い礼をした彼

を見てナムリ殿は微笑みを見せた。

「早速ジャヤルの王には私からの書状を用意しよう。書類の上とは言え……一応この令嬢の身元は私が後見に立ち、君たちの預かりという事にせざるを得ないが、くれぐれも問題を起こさないように頼むよ。摂政のカルザンとは良好な関係を崩したくはないのでね」

「勿論承知しています。彼女の身辺警護はこのファドラーンが務めていますから、ご心配なく」

とうに決まっていたような口ぶりのラウドラチャクリン。

やはり既に事態の流れそのものにはあらかじめ打ち合わせがしてあったみたい。

手早く話をまとめたナムリ殿はそれでも、最後には少し不安そうに念を押していた。

摂政、とは何度も耳にしていた役職だが、王に次ぐ地位とされるナムリ殿でさえ顔色を伺わねばならぬ程の人物なのかしら。

「どちらかと言うと侍従長と摂政とは同等というのが理想の力関係なのだが……今の摂政は貌下が殊の外重用なされた者でな。わしらよりも随分若い故：気負いが強く、今手綱を誤れば共に破滅じゃよ。これからの時期に無用な波風を立てれば、付け入られ易くもなるうからな……自重しておるのじゃよ。儂も、彼もな」

そう説明するかのようなナムリ殿の言葉に黙ってうなづいた。

私の表情から、私が抱いたであろう疑問まで推測出来てしまうその洞察力には降参する他ないもの。

そして付け入るのが誰かとは敢えて口に出されなかったものの、それが山地を隔てた隣国であろうと言うのは流石に推測が立つ。

同時に事情に疎い私にですら、同じ敵を持つが故に、このルクアディナルファの王とフィルダウスの勢力とが利害の一致を見て手を結んだのだとも理解出来た。

「ジャヤルの主殿への書状は後ほどラウ殿に誂えましょう。儂は猊下のお側へ戻らねばならぬ故、これで失礼するが……令嬢は護衛殿にこの町を案内して貰うと良い。早々に猊下が化身を収束なされる事となれば、本来のこの地の賑わいをお目に掛ける事は適わぬかもしれないからな。ラウ殿は儂と同行してくれるかね？猊下は君に会いたがつておられる故」

「もちろんです」

用件が済んだと判断したのか、ナムリ殿はそそくさと席を立つとついでのようにラウドラチャクリンへと声をかける。

神妙にそれに同意したラウドラチャクリンは私達を見遣ると、少しばかり元気が無いいつもの微笑みを見せて言った。

「わたしは戻るのが遅くなるだろうから……サヤとラトーにそう伝えておくれ」

「……判った」

返事を返すファドラーンの声も硬くて、予想はしていたけれど事態は切迫しているのだと痛切に感じられた。それにしても……。

「さっきナムリ殿が言っておられた……化身を収束する……ってどう言う意味？」

疑問に思った事を口に出せたのは、城を出て城下の賑やかな通りが近付いて来た頃だった。

私達を案内して来てくれた、初めの無愛想な僧侶が再び城の外へと案内してくれたので、預けていた馬を引きながらのんびりとした風情で王城の前の大きな池に面した街を眺めて歩いていたのだ。

「祭祀王は……水王の導きで生まれるとされるので、水王の化身だと考える向きもあってね。俗界の王が亡くなる場合は崩御と使うが……ルクアディナルファの祭祀王の場合は化身を収束する……つまり本来の神に戻るという意味合いを込めてそう言う表現をされる事もあるんだ」

「神様……の生まれ代わりなの？」

「厳密には違うらしいけれど、ナムリ殿や摂政殿は主義は違うものの、王を敬愛していると言う所では近いものがあるらしくてね、特に敬った表現を好むんだ」

ファドラーンの説明を聞きながら戸惑っていた。

私の故国には「生まれ変わる」と言う概念そのものが無かったのだ。

バーラートやイクシールでも当たり前のようにその言葉は使われていたが、通り過ぎる者としての感覚でしか対していなかった私はその意味を、そして世界観を理解しようとしていなかった。

「人は死ぬと生まれ変わるの？……私もいつか死んだら……生まれ変わるのかしら」

「俺は……それを信じていない訳じゃないが、何だか逃げてるような気がして好きになれない。今生がうまく行かなかったからって……来世が良いとは限らないだろう。それよりは今を出来る限り精一杯頑張るほうが俺の主義には合ってる……と俺は考えているんでね」

彼なりの解釈を聞きながら、黙って通りを歩いた。

この辺りは商店街のようなところで王城に近いせいか高級そうな店が目立つ。

特に気に留めずに通り過ぎて来たが、もう少し先の人通りが少なく目立たない場所にアルマンスール商会は位置している。

王城に遠くはなく、けれど取り立ててにぎわう場所でもなく、あくまで目立たぬようにとの意図が手に取るようだわ。

「少し戻って……市場の辺りを見て行くかい？」

ファドラーンは観光を優先に考えてくれているようだが、さっきのラウドラチャクリンとナムリ殿の後ろ姿が何時迄も心に残ってしまっていて、正直それどころではない。

「……欲しいものがある訳じゃないし、今は人混みにまぎれる気分でもないわね。まだ昨日見たものを忘れてしまう訳にも行かなくて……気が休まらないってのもあるけれど」

控えめに見回してもやはり町中の至る所で見かけるのだ、クアーナ人を。

とは言え全てのクアーナ人が危惧しているような人種ではないのは判っているわ。

それでも彼等の姿が視界を掠めるのはいい気分では無かった。

「むかし……今のクアーナが国として確立する前身の国とも、このルクアディナルファは領土の帰属をめぐる問題を抱えていた。当時のクアーナは封建制度の王国で……お互いがお互いを従えようと争っていたんだ。でも、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。少なくとも君は侍従長の後ろ楯を持った身分だ、彼等と言えども簡単に手出しはできない。それに……俺たちにしても、簡単に彼等に尻尾を掴まれたりはしないよ？」

優しいけれど言い聞かせるようなファドラーンの口調に、彼は私が出身の身の安全を危ぶんでいるのではと思っているらしいのが付いた。

私が案じているのは自分自身ではなく、目の前の男性の安全なんだけだ。

それをどう表現すれば判ってくれるのかしら。

……イクシールにいた時もそうだったわ、自分達の事よりも私の安全ばかり。

確かに私はなんにも取り柄の無い娘かもしれないけれど、それでも目の前のひとを心配させて欲しいと、そう思うのは思いうるが

の
だ
ろ
う
か。

「……心配しなくても大丈夫だよ？」

彼女を守り、安心できるようにと努力するのは俺にとって当然の事だった。

不安そうな表情を見せる度に、勇気づけたいとの思いからそう口にしてきた。

けれども、いつからかその言葉を耳にした後の彼女は不満そうな、哀しそうな顔をするようになった。

それが何故なのか、俺には理解出来ない。

大切な女性を護りたいと思うのは当たり前だろう？

この地に着くまでに何度も意見を衝突させ、時にはほとんど喧嘩になった事すらあるのにまだ俺は彼女の事が判らないらしい。

思い上がりではなく俺の事が嫌いだとは思えないのに、俺の望む返事をくれようとはしない彼女に戸惑うばかりだ。

王城での会見も無事終わり、この辺りでは一番大きな市を冷やかしにイエライシャを連れ出したものの、何処と無く元気の無い彼女にそう繰り返す。

案の定不満げな瞳を向けてくるイエライシャに出来る限り優しく接することしかできなくて、とてももどかしい。

あまり気乗りしないふうの彼女を連れて一通り市場を廻り、その中の店で軽い昼食を取ってから帰る事にした。

一応この街の名物と言われるメニューで、知ってる店の中じゃそこそこの味の店だ。

残念ながらサヤもまだこの味は真似出来ていない。

「どう？サヤでもこの味は真似ができないと言っていたよ」

「……うん、おいしいわよ」

少しばかり上の空な返事に、流石にトーンダウンしそうだ。

どうしたのかと問いつめるべきなのか、気付かない振りをするべきなのか、その判断に迷う。

もしも彼女の不安の原因が昨日見かけたクアーナ人にあるのだとしても、彼女があまり気に病む事ではない筈だ。

「何だか、旅の疲れが出たのかしら……今日はもう戻って、明日も一日外出は無しで……ゆっくりしていてもいい？」

「もちろん。君がそうしたいのなら」

「ありがとう」

だからふいにイエライシャが口を開いた時も、咄嗟にはそう返事を返すのが精一杯だった。

いぶかしむ俺に気付いているのか居ないのか、その返事に彼女はにっこりと微笑んだだけだ。

それからは特に何か話すでもなく、時々周りを景色か、廻りの人並みかを見回す彼女の馬と鎧を並べて帰路へと付いた。

「ただいま、ラトー」

アルマンスールの店に戻り、厩に2人の馬をつなぐと既にラトーが玄関のドアを開けて待っていた。

「お帰りなさいませ。首尾は如何でしたか？それに……ラウ様は？」

「こちらの用件は無事に片付いた。ラウはナムリ殿の所に残っている。今夜は……遅くなると言っていたから」

俺とイエライシャの2人しか見当たaraぬのでそう問われ、言われた通りを返事にする。

流石にそれで通じたのか、ラトーの表情も少しばかり曇ってしま

った。

「……判りました。あと、ハルヴァイがお時間を頂きたいと」

「ああ、わかった。それからラトー、イエライシャ嬢は少しばかりお疲れのようなのでしばらくは部屋で休むそうだ」

ハルヴァイのしかめっ面を思い出して少しばかり気が重くなったが、それを伝え忘れるわけにはいかない。

「何処かお加減が？」

ラトーは案ずるような表情を見せ、見つめられたイエライシャはしかしゆったりとした微笑みを返した。

「いいえ、大丈夫よ。ただ……ここまでが慌ただしかったから、ゆっくりしたかっただけなの」

「では何かご入り用なものはありますか？」

「有難う。でも……休ませて頂くだけだから、気にしないで？」

ラトーの言葉にそう答える、イエライシャは自分に宛てがわれた客室へと階段を上って行った。

それをじっと見送っていた俺はラトーの咳払いで否応無しに現実へと引き戻される。

「何を惚けておられる。そのような所をハルヴァイに見つかりでもしたらどうなさるおつもりです」

「別に……どうもしないよ。俺は奴の所へ行ってくるが、いちどサヤをイエライシャの部屋へ遣ってみてくれ。気疲れし過ぎているといけないから」

「わかりました」

何かしら楽しそうなラトーの言葉に、面白がられているのだと自覚はあったが、気にしない事にしてそう言い付ける。

心得ていると返事を返して来たラトーは、それでもまだ楽しそうだ。

「今戻った。大分待たせたか？」

通りに面した店舗部分の奥まった部屋に設けてある事務室に入り、机で書類と睨めっこしている男にそう声をかける。

意外そうな顔で俺を見たハルヴァイは……滅多に見られない表情だ……すぐいつも通りの仏頂面に戻って返事を寄越した。

「いいえ、むしろお早かったな……と驚いておりますよ」

「……どういう意味だ？」

彼お得意の持って廻った言い方に、少しばかり引っかかる含みを感じる。

「言葉通りですよ。貴方が随分入れ込んでいらっしゃるらしい女性との外出ですから……いつお戻りかと気を揉んでおりましたが。安心しました」

「今日の事で緊張していたし……旅の疲れが出たんだよ。部屋で休むと言っている」

言外に俺達の間がさほど深いものではないと理解したのだと仄めかす。

反論しながらも結構俺としては傷付く言葉を平気で口にする男をにらみつけてみたが、彼は澄ました顔で書類をめくっていた。

そしてその中から何枚かの書類を選び出すと、俺の方へと押して寄越した。

「それに目を通しておいて下さい。シエカルからのものですが……クム・ウタール辺りから、貴方がたの廻りをうろついているクアーナ人の身元を調べてあります」

「……判った」

相変わらずの手際の良さだ。

受け取った書類をめくりながら目を通し、予想通りの記述にやりとりしてしまう。

俺のその表情に様子を窺っていたらしいハルヴァイが怪訝そうに

寝眉を寄せる。

「どうかしましたか？」

「……こいつはあんまりよく顔を見るんでお馴染みになっちゃった奴だ。しかもクアーナの使節館にこうもあからさまに出入りしているとは……」

やる気ないんじゃないのかとすら思ってしまう。

クム・ウタールのあの市場で俺とイエライシャをいつまでも監視していたあいつだ。

「行動は単純ですが……その男は暗示処理を受けている可能性があります。何をするか判りませんよ」

憎々しげなハルヴァイの言葉に今度は俺が眉を顰める番だった。暗示処理、とはラウドラチャクリンの一番嫌う手段だ。

古来よりクアーナに伝わる術と聞き及ぶそれは、与えられた任務を果たす為には自分の命すら顧みない忠実な僕を作り出すものだった。

人格も個性もそのまま維持しつつ……それでも暗示に操られ任務に向かう。

そしてその任は、目下のところ幻、或いは伝説の都とされるフィルダウスの搜索。

古い体制を捨て新たな国の体制を築きながらも、根幹にはかつての専制国家の影を引きずって居るあたりは何処の国でも一緒だなとは思うのだが。

何故……ここまでクアーナがフィルダウスを捜すのに、なりふり構わぬのが俺には理解出来ない。

ただの伝説の国だ。国と言う程の規模ですらないかもしれない。

……どうして放っておいてはくれないのかとさえ思う。

改めて手元の書類に目を通して、男の名……通称だろうか……と出身や部族を頭に入れておく。

この男にした所でクアーナの中央にはほど遠い辺境部族の出のようだ。

何を願ってかの秘術を受けたのか、受けさせられたのか、は知らないが所詮は道具として使い捨てにされるだけなのに。

「いつも言っている事です……彼等に同情なさってはなりませんよ？」

「……判っているさ」

見透かしたようなハルヴァイにそう応じつつも、思い出さずには居られない。

俺達はこれまでに何人もあの術の犠牲者を捕らえて来た。

腕の立つものも多く、捕らえるのに苦労した事も度々だが、術から解き放ってやれた者は一人としていなかった。

術を解こうとしてもうまく「外せない」とフィルダウスの術師は言う。

……それでも強硬に術を解こうとすれば、正気を失う者、突然事切れてしまう者、そしてそれ以前に突然暴れ出して乱闘で命を落とす者もいた。

訊ねようも無いが故に、彼等が誰にどのような経緯でこの術を掛けられたのかすら判明しない。

そこまでして何を求めているのだろうか、幻でしかないはずのフィルダウスに。

「他にも貴方への用事はあるんですから、そこでそんなに黄昏れないでくれますか？」

「思案に暮れる……と言ってくれ」

穏やかな声に物思いを遮られて、不機嫌そうに応じてみたものの、ハルヴァイは俺を見遣ってうつすらと微笑んだだけ。

「……途方に暮れてるようにしか見えませんね」

鼻先であしらわれるとは、こう言う事を言うのだとがっくりする。軽く睨み付けてみたが相変わらず彼は気にするふうも無い。

こんな奴でもラウドラチャクリンには絶対服従の従順な僕ぶりだ、自分に与えられた役割をそつなくこなしている。

諦めのため息をつく、手近にあった椅子を引き寄せ彼の隣へと座り込み、貯めに貯めた書類とようやく向き合う事にした。

058 星空

午前中に王城で別れたきりのラウドラチャクリンが戻って来たのは、かなり夜が更けてからだった。

私がそれに気付いたのは全くの偶然に過ぎなかったけれど。

どこか心配そうなファドラーンにくすぐったい思いをしながら夕食を済ませると、ハルヴァイの監視するかのような瞳から逃れるように、サヤに導かれて浴室へと逃げ込んでいた。

ハルヴァイは私の何気ない仕草にも怪しい素振りは無いかと、常に厳しい視線を向けていて、ピリピリしている。

それに気圧されて萎縮しがちな私に、サヤですら彼の事は気にしないようにと励ましてくれたほどだった。

宛てがわれた二階の一室にようやく戻ってからは、街の夜景とともにこぼれ落ちてきそうな星空がとてもよく見えるのに気付いた。

これまでの旅の間にも夜空を見上げた事が無かった訳ではないのに、この街の夜空の方がより鮮明に星々を見る事ができる。

考えてみれば、ここは山地の王国だわ。

一番星空に近い国だと言ってもいいのかもしれない。

故国で見慣れていたものとも、そしてしばらく滞在していたバーラートで見たものとも大分配置の違う星々に吾知らず目を奪われていた。

とはいえどう風情を気取ってみても、思ってもみなかった人物からのプレッシャーで過敏になっていて、どうにも寝付けず、ぼんやりと夜空を眺める事しかできなかったただけなのだけれど。

そうやって灯りを落とした部屋の窓際でその夜空に見入っていると、微かな馬の蹄の音に気が付いた。

深夜とあって辺りの家々は殆どが暗闇に沈んでいる。

窓の下は丁度、通りからアルマンスール家の裏木戸へと通じている細い路地だった。

暗闇に目を凝らして見ていると、窓の真下を静かに馬が一頭通り過ぎてゆき、木戸では灯りを持った誰かがそれを迎え入れているのが見える。

明かりに浮かび上がる人影はラトーだろうか。

彼はずっと起きて、待っていたのね。

馬から降りた人物が馬とともに木戸へと消えてゆき、迎え火の灯りが見えなくなったのを見届けると私も窓を閉じてベッドへと引き取った。

けれど、すぐには寝付かれるはずも無い。

昼間に会ったナムリ侍従長の疲れの滲んだ表情が思い出されて、何度か寝返りを打った。

彼が付き添っているというこの国の王……祭祀王……とはどんな人物なのだろう。

そしてその彼の親しい友人として旅の間気に掛けていたラウドラチャクリンは、今際の際にあるというその人物を見舞ってどんな気持ちで一人、夜の街を帰って来たのだろう。

私が母を亡くしたのは幼い頃で、確かに悲しかったけれど奇妙に実感が無かった。母は早くから臥せていたから、あまり触れあった思い出のようなものが無かったからかしらとも思ったが、単に私が薄情な娘だったからかもしれない。

それからは誰か近いひとを亡くすと言う経験は、幸いにも無かった。

母方の親戚は何故か数が少なかったし、父方の親戚とはあまり深

い付き合いをしていなかったせいもあったのだが。

あの……昏い瞳を持つ男性にとって……友人たりえるひとは、どれほどの重さを持っているのだろう。

比べるべくも無いがそんな風に自分の経験と重ね合わせて考えているうちに、どうやら眠ってしまっていたらしい。

微かに扉を叩く音で起こされる事になってしまった。

「……どなた？」

ついそう問い掛けてから自分の間抜けさを、起き抜けとは言え噛み締めてしまう。

こうやって私の事を気に掛けてくれるのはファドラーンの他に誰が居ると言うの。

「俺だよ。いつまでたっても朝食に降りてこないから……皆心配しているよ」

案の定のファドラーンの声に安堵しつつ、けれどその後続いた言葉に我ながら慌ててベッドから飛び起きた。

咄嗟に鎧戸を降ろした窓の方へと目をやり、隙間から明るい光が差し込んでいるのに気付いてしまう。

「嘘っ……いまだどれくらいの時間なの？」

「大丈夫、まだお昼は過ぎていないが……疲れ過ぎていて起きる事ができないのなら、食事をこちらに届けようかと、サヤが案じているんだよ」

慌てて飛び起きた気配を察知したのだろうか、ドアの向こうのファドラーンの声は楽しそうにも聞こえる。

「ち、違うの。夕べ夜更かししたから……それで起きられなかっただけなのっ。すぐ支度して降りて行くから……大丈夫よ」

「じゃあ、ここで待っているよ」

「……それは……駄目よ。ほら、この屋敷の中なら一人で動いてもいいんでしょ？だから大丈夫だし」

皆に心配をかけてしまったのだと慌てて弁解してみたものの、そ

れに続いたフアドラーンの言葉に更に慌てる羽目になってしまった。

彼の好意は嬉しいのだが、瞬間苦々し気に見つめるハルヴァイの姿が脳裏を過ったのは否めない。

ハルヴァイが私を歓迎していないのは承知の上だが、これ以上彼のご機嫌を損ねる事はしたくなかった。

けれども、更に続けられたフアドラーンの言葉に諦めの溜め息を吐く。

「……ハルヴァイの事を気にしているのなら大丈夫だよ。彼はああ見えても……根は悪い奴じゃないんだ。それに、昨日の態度は大切な客人に対するものとしては……あまり褒められたものじゃあ無かったからね、今朝がたラウの奴に改めてしっかり釘を刺されていたよ。どうやら……サヤも君の味方ようだし」

彼女が私を擁護してくれているのは昨日から判っていたわ。

……それすらもハルヴァイにとっては腹立たしいものようだったのに。

「何と言っても奴はラウドラチャクリンには弱くてね、ラウに何か言われると面白いくらいしよげかえっちゃうのさ。他の奴にはなにげに厳しい男だから……ミシエイルなんかは、あんな顔したハルヴァイを見たのは初めてだとか言って珍しがっているよ」

「判ったわ、フアド。着替えるから……少し待っていて下さる？」

「もちろん」

何がそんなに楽しいのか判らないが、放っておいたら何時までも話していそうなフアドラーンに、ようやく観念したと受け取れる返事をする。

そしてベッドから降りると、身支度を整える為に室内に整えられていた鏡へと向かった。

「まだ旅の疲れが取れていないのですわ。まわりの事は気になさらないで……ゆっくりおやすみになればよろしいのですよ？」

身支度を済ませ、フアドラーンに付き添われるようにして厨房へと顔を出すと、サヤはそう言って案ずるような表情で暖かいスープと軽い食事を用意してくれた。

言葉を区切った時に彼女がフアドラーンの方をちらと見つめた所からすると、私よりは彼の方を軽く皮肉ったのだと察したが、私はそれには気付かなかったように振舞う事にした。

当のフアドラーンはそんな言葉なぞまったく気にしていないらしい。

それにしても、と、きちんと片付いた綺麗な厨房を眺めながらぼんやりと考える。

じきに昼食の支度に取りかかるのだとしても、顔を出してすぐに温かいスープを出してくれたという事はいつ、私が起きて行っても良いように待っていてくれたという事なのだろうか。

何食わぬふうでフアドラーンにお茶をサーブしている彼女の横顔をちらりと見つめる。

嬉しくも申し訳なくなつて、早めに食事を済ませると言い訳のように事情を説明していた。

「夕べは……ここの夜空につられて、ついすっかり夜更かししてしまったの。とても夜空が綺麗だったものだから。お陰で今朝はこの通り……しっかり寝過ごしてしまったわ」

「夜空ですか？まだこの辺りは人里ですから大した事はないですわ。僧侶以外の者では近付く事もかありませんまいが、神聖湖の辺りまで行けば……一番良いのではないかしら。湖の表にまで星が映ってと

ても美しいと聞いた事がありますわ」

サヤの言葉に一瞬、昨日見た風景が思い出された。

湖面に映りこんで幻想的な姿を見せる、この国の王城。

「許可を貰えばいい訳だから、そのうち連れて行ってあげるよ」

「……随分簡単に言うのね」

夢のような儂げなああの景色に、吾知らず表情が緩んでしまったのをのんびりとしたファドラーンの言葉に現実へと引き戻されてしまった。

雰囲気壊されたと言わんばかりの返事に意地の悪い言い方を選んだのに、それでも彼は笑顔を崩さない。

いつのまにかサヤも笑顔になっていてその理由が判らない私は戸惑ってしまったが、彼女に頼み事をするには都合良くも感じられた。

「……私のお手伝いですか？大切なお客さまにそんな事をしていただかなければならない程、人手不足ではありませんし……旦那様のご意向を伺っておりますので私ではお返事致しかねますわ」

「それもそうね、ご免なさいサヤ……無理を言って」

無理と言うよりは突飛な申し出に、戸惑いながらも慎重な彼女の言葉。

その様子に、サヤを困らせてしまったのだと思い、大人しく引き下がる事にした。

あくまで使用人としての立場の彼女には私の我侭に対しての決定権は無いのだし、彼女を口説き落とす事が見かけ程簡単ではないのを初日の晩に既に経験済みだ。

「何か……ここに居る事を遠慮しているのなら、気にしなくてもいいよ？君は我々がナムリ殿から預かった大切な客人なんだから。もっと自由にしても良いんだ」

「……その言葉は有り難いのだけれど……できれば身体を動かしたいのよ。それにこの街の事をサヤからも聞きたかったの」

どこまでも優しいファドラーンの言葉に、理由は言わずにそう説明だけを返す。

考えている事を悟られてしまいそうで、視線は合わせる事ができなかった。

身体を動かしていれば考えなくても済む事があるから……とは、どうして口に来るだろう。

けれどじっとしていればどうしても考えてしまうのだ。
定まらない自分の心、そしてこの先の見えない不安を。

「……でしたら、貴女が外出なさらなかった日の夕方だけお手伝いをお願い致します。だからといって夕方の外出をやめる理由にはなさらないでくださいね」

諦めていただけにそうサヤの返事が返って来た時は本当にびっくりして、我ながら惚けたような顔をしてしまった。

そのままにつこりと微笑みを浮かべた彼女の顔を見つめる。

それが彼女に出来る最大限の譲歩だと理解出来て、その好意が嬉しくて、ちよつと涙腺が緩みそうになってしまう。

「ありがとう、サヤ。迷惑にはならないと思うの、これくらいなら構わないわよね？」

後半の言葉は隣にいたファドラーンに向けたものだったが、彼は特別な感情の変化は見せず、軽く肩をすくめただけ。

「君の時間だから好きに使えばいい。でも暫くは忙しいと思うよ？明日はナムリ殿の在家の一族に一応挨拶をしに行く事になると思うし」

「……聞いてないわ」

「うん、まだ言っていなかったね」

食事の後で言うつもりだったんだよ？とにこやかに答えられてしまったのは、すこしばかり言葉に忍ばせた刺も引っ込めざるを得ない。

それにしても、サヤが食器を下げてくれるのを見送りつつ言葉を選ぶ。

「在家の一族……ってどういう事？」

「今でこそナムリ殿は僧籍に在り王に属する身だが……彼の出身である一族も、この国の中枢を占める有力な貴族なんだよ。知り合いになっておいて損は無いだろうしね」

「彼の権力はその一族の力を背景としたものの？」

つまりは一族の傀儡として、王の近くにあるのだろうかという問いにファドラーンは苦笑する。

「違うとは言い切れないな……けれどナムリ殿は長兄殿や一族からの干渉を最小限に押さえている。だからこそ……祭祀王に重用されたといってもいいんだ」

「そういう人だから貴方達とも交流が持てたのね」

「まあ……そういう事だ。彼の前任者は王ですら御するのが大変な人物だったと……聞いた事があるしね」

かなりな苦労話だったのだろうと、苦々しげに笑みを浮かべたファドラーンから推察しながらそれが誰から聞いた話なのかと突っ込みたくてうずうずしてしまった。

どうせ答えては貰えないのだろうとは判っているけれど。

「そういえば、ラウ……は？」

だから答えを得られない問いの代わりにそう訊ねた。

昨夜彼が戻った時間はとても遅いもので、しかも彼にとってはかなり緊張を強いられる一日だったはずだわ。

私以上に疲れていると言ってもいい状況に違いなかった。

その彼がどうして居るかと言う疑問には心配というよりは好奇心に近い、不謹慎な興味が先にあったことは否めない。

「奴なら、ちゃんと起きているよ。流石にいつもよりは遅かったけれど……他にも用事があるらしくて、もう出掛けているんだ」

「……なあんだ」

微笑んで、私の興味を見透かしたかのようなファドラーンの返事にちよつとがっかり。

それでも改めて、ラウドラチャクリンの気力と行動力には感嘆させられた。

只者ではないとは以前から感じているが、それを再認識した上で視線をファドラーンへと戻す。

彼にも同じ印象を抱いてはいるのだが、ファドラーンの方が私にはより近い存在として映っている。

それを彼はどこまで感じていてくれるのかしらと、訊ねてみたくなつた。

もつともそんな事は恥ずかしくて聞けないけれど。

「どうかした？」

ぼんやりとそう考えながら彼の顔を見つめてしまっていたので、いぶかしげに問いかけられてかなり焦る。

「……ううん、なんでもない。今日の夜は早速サヤを手伝う事にするわ、貴方の予定はどうなっているの？」

咄嗟にはそう口にするのが精一杯だった。

「俺も昼食の後はハルヴァイとミシエイルとで挨拶回りがあるから、留守にする事になる。その頃にはラウも戻って来ているはずだから……もしも何かあっても大丈夫だろうと思っているよ」

ヨシユアもいるしね、と締めくくった言葉に神妙な表情でうなづくイエライシャ。

俺が外出して彼女だけがここに残る事に不安が無い訳じゃないだろうに、それを表にあらわす事はしなかった。

ただ、何か言えずにいる事があるのだけは感じ取れて、それが孤独の不安のせいなのだろうかといつもの台詞を重ねて口にしようになった。

「大丈夫だよ」と。

けれどいつもその後彼女が見せるとことなく不満げな表情を見るのが嫌で、言葉ではなくつい腕が出てしまった。

言葉が足りないのはいつもの事だ。

だったらそれ以外の方法で気持ちを伝えたかった。

俺からすればかなり小柄で華奢な彼女の身体を抱き込むように胸の中へと仕舞い込む。

サヤは食器を下げるついでに厨房へと入ってしまったので、つかの間の二人きりに便乗したと思ってくれればいい。

「本当は……置いてきぼりになんてしたくはないんだ。けれどこのの方が安全なんだよ」

俯いた姿勢のせいで声がかすれたが、本当にそれだけだったかは自信が無い。

彼女は抵抗もしないで俺の胸の中から見上げて来た。

その金色の瞳に見とれて少しの間、時間を忘れる。

このまま口付けてしまいたいと暴れそうになる心を何とか押さえつけて、その代わりに右手をイエライシャの髪の上に潜らせてみた。短くしているのも、結い上げないで肩の下辺りで揺れているその柔らかな金色の髪。

すい……と髪の上に差し入れた指が頭の後ろで彼女の髪を弄ぶ。その刺激がうなじから耳の後ろにまで伝わって、どんな感覚に襲われているかはすこし鳥肌の立った彼女の首筋が言葉よりも明確に語っている。

「……判っているわ」

微かに震える声でそれでも彼女が返事を紡ぐ。

強がっているその言葉に本心を見せまいとする、虚勢を張っていた頃の彼女の姿が思い出され、愛しさに抗えなかった。

情けない程衝動的にイエライシャの首筋に顔を埋め彼女の香りに満たされる。

短いけれど、とても甘い時間だったと思う。

イエライシャは依然として返事をくれた訳ではないのだが、こうして彼女の気配を求める俺を拒む事は無い。

彼女が返事……詰まる所俺の求婚への答え……をいまだに出来ない理由にはいくつか思い当たる節もあり、決断をせかそうとは思っては居ない。

ただ、時々こうやって彼女の温もりを求めてしまふ、情けない自分をいかに押さえるかが難しいのだ。

触れたくて仕方が無い相手が拒む事をしないのなら、どうやってこの昂りに歯止めが掛けられると言うのか。

……それでもまだ貰っていない返事が俺の中の欲望に歯止めをかける。

「……ありがとう、これから俺は事務所に戻るよ。興味があるなら

店を覗いてくるといい、丁度今はミシェイルが担当しているから」

「いいの？」

ひとしきり彼女との抱擁を堪能して、それでも渋々ながら身体を離れた。

まだなんとなくかすれたままの声でそう告げると、彼女は驚いて俺を見上げる。

そういえばアルマンズール商会という外見しか彼女は知らなかった。

イクシールにいた時も、店舗部分を見せてあげる時間の余裕がなかったのに気が付いてはいたのだが。

だから俺たちが具体的にどんな商品を扱い、どんな客層を持っているのか全くと言って良い程知らないはずだ。

「興味が無いのなら無理にとは言わないけどね、暇だと退屈するだろう？ ハルヴァイは主に事務方で店にはあまり顔を出さないんだ。

ラウと一緒にさ」

だから警戒しなくてもいい、そういうニュアンスを込めた言葉に上気して赤い頬の彼女はゆっくりと微笑んだ。

その微笑みがひどく夢げでもう一度抱きしめそうになってしまう。まじめにやばい。

「この廊下の奥……布の暖簾からなら、事務所を通らずに店に入れる」

いぶかしげな彼女にそう順路を教えると、見守るイエライシャの視線を背後に感じたまま手前の扉から事務所へと戻った。

早速サヤを手伝うと言っていた彼女だが、夕方までは手が空くのを知っていたから敢えて次の行動を見守る事はしないでおいた。

ある程度イエライシャが自分に出来る事を模索するだろうと言うのは既に予測が付いていたので、サヤに手伝いの時間を区切るようにとラウドラチャクリンが指示を出しておいたのだ。

しかし、午前中には店舗部分に彼女が現れる事はなかった。

事務所に顔を出したミシエイルからそう聞いた俺は、昼食の時間より少し早めに厨房を覗きに行き、涼しい顔のサヤに「お嬢様ならお部屋ですわ」と軽くあしらわれる羽目になった。

「そんなにご心配なら事務所のご自分の横にでも居ていただければ宜しいのに」

いつからイエライシャがサヤの「お嬢様」になったのかと突っ込みたいのを見送った所で、更にそうカウンターアタックを喰らう。

見た目は充分な手弱女であるサヤだが、実は容赦がない。

流石はあのミュゼナを姑に持つ女だ。

夫であるラトーの母親ミュゼナはラウ……チャクラヴァルティンの乳姉妹を務めた女性で、彼の所領内の影(?)の実力者でもあるのだ。

「……自分がそんな事されたら、息が詰まっちゃうだろう?」

「あら、真面目に仕事している所も見ておいて頂かなければ」

……って、まるで俺が何にもしてないみたいじゃないか。どうやって言い返そうかと迷った所で後ろからの気配に気付いた。

どうやら少し前から居たらしいそいつに、なんとかしてくれと視線を向ける。

「なんだ気付いたのか。……かなり面白い展開だったのに」

「お帰りなさいませ、ラウドラチャクリンさま」

呆れて言葉が出てこない俺を尻目に、サヤは彼に対して恭しく腰を折る。

それにうなづきながらもラウドラチャクリンは少しばかり人の悪い微笑みを引っ込めようとはしなかった。

「ああ、それにしてもサヤ……あまり若い者を苛めるものではないよ?それでも一応頑張っている方なんだから」

「傍で見えてあまりにももどかしいものですから、つい……ね」
苦笑混じりに彼女はそう言うと、もう一度挨拶をして自分の仕事

へと戻って行った。

「皆して……俺たちを楽しんでますね？」

「皆して反対するよりはいいと思うが？」

俺の苦情に奴はさらりとそう言うのと、にっこりと気持ち悪いくらい爽やかな笑みを残して自分の部屋へと入って行く。

外出着を改め、昼食迄の少しの時間を休息に充てるつもりなのだろう。

確かにそうなんだけど、と、その後ろ姿をひとしきり睨んで不承不承もう一度事務所へと戻る事にした。

この後に控えている外出に備える準備を思い出したからだ。大半の用はハルヴァイの得意先回りだが、帰国の挨拶をしておかなければならない要人も中にはいて、その為に俺が同行する。

一応ここでは俺が父の名代として取り仕切る事になっているので、これは逃げられない。

そして、そんな雑事に等しい用にイエライシャを同行させるまでもない。

頭ではそんな事は十分に理解出来ているのだが、すこしばかり寂しい。

まるまる一月以上の旅の間、ずっと隣に居たのだ。

当たり前のようになっていたその存在が側に居ない、それがこんなに空虚感を伴うものだとは思っても居なかった。

061 駆け引き

部屋の扉をノックする音で目が覚めた。

昼食の準備が整ったと呼ばわる声に慌てて飛び起きて、鏡を見る。どうやらまた眠ってしまったていらしい。

何だか目許が腫れぼったくて……穿った見方をすれば、泣いていたとも取られかねない表情になってしまっているのにさらに焦る。咄嗟に水指しの水をハンドタオルに含ませて両目に当て、少しでも落ち着くようにと深呼吸を数回繰り返した。

「……如何なさいました？」

「ごめんなさい、すぐに行きます」

不審げな声にその主がフアドラインではない事を悟る。

多分、サヤの旦那様だと言うラトーだわ。

何処と無く掴みどころのない人物、という印象があったのだが、彼からはハルヴァイのような拒む気配は感じられなくて、たったそれだけで私は彼に対して警戒感を抱いては居なかった。

扉を開けると、ラトーは案の定顔色を伺うようにいつもより長く見つめて来た。

「……うたた寝してしまっていたのよ、夕べ……ラウが戻る頃まで起きていたものだから」

それがどれほど深夜だったかは、ラウドラチャクリンを迎えに立っていた彼に判らないはずはなかった。

一瞬困ったような顔をしてそれから彼は微笑んだ。

それは穏やかな表情ではあったものの、何故そんな時間まで眠れずに居たのかを理解している、そんな微笑みだった。

「ラウ様も先程戻られて……少し休んでおられるはずですが、貴女もあまり無理はなさいませんかよう」

「ありがとうございます、気をつけるわね」

「おや、わたしの事は起こしに来てくれないのかい？ラトー」

穏やかな対応に促され、食堂へ向かおうと階段へ差し掛かった所で聞き慣れた声が背後から追って来た。

交差する廊下の奥からゆったりとした風情でラウドラチャクリンが姿を現す。

「貴男にも休息が必要でしょうから、敢えて声を掛けずにおこうと思いましたが」

溜め息混じりのラトーの言葉。

それに対していつもの微笑みでラウドラチャクリンは応じるとすたすたと先に立って食堂へと向かう。

その途中階段の中程でラウドラチャクリンは不意に振り向いて、ラトーへと視線を向けた。

不満げなラトーの気配に気付いたのね、と見守ると相変わらず穏やかなラウドラチャクリンの声が続いた。

「お前の心配は判っているが……まだ大丈夫だよ。本当に駄目な時はきちんと言うから、その時は頼むよ？」

「承知致しました。それでも……早めにおっしゃって下さいよ？」

「……心掛けるよ」

まだ少し納得がいけないという風情のラトーだったが、かなり明確な言質を取った事で幾分安心したらしい。

態度も目に見えて柔らかなものになり、いつも通りなのだろうかすかなほほえみを浮かべている。

反対にやれやれと言う表情を見せたのはラウドラチャクリンだった。

「どうも……この夫婦は心配性なんだよ。わたし達の事をまだ子供

だと思っているようだね」

そう私の方を振り向いて言い訳じみた説明をしてくれるのだが、取り澄ましたその表情はふざけているとしか思えない。

それに一歩後ろを歩いているラトーは、どういう訳だか込み上げて来た笑いを堪えるので精一杯のようだ。

「ここは笑うポイントじゃないと思うんだけど……もしかして、2人で私をからかっているの？」

「とんでもない」

相変わらず澄ましたラウドラチャクリンの言葉に、やっぱり、と確信めいたものを感じた。

けれど、あきらかにふざけているらしいラウドラチャクリンには、呆れていると取れる溜め息を返すのが精一杯。

だってこれ以上何かを言っても、彼を面白がらせるだけだって事くらい流石にこれまでの経験で学習している。

だから、もう何も取り合わないぞ、という顔で食堂へと向かう事にした。

ふざけて軽口を叩き合うのは私としては嫌いじゃない。

ただ、今のラウドラチャクリンの様子は無理に振舞っているような気がしてしまうから、それに付き合っあけるのが彼に取って良い事なのかどうか判らないからなの。

連れ立って入って来た三人の、それぞれの表情を見て俺は何となく変な表情をしてしまった。

一番に目をやったイエライシャは一見澄ました顔だが、それが時には言い合いに発展しかねない複雑な感情を抱えた時の表情だって事を俺は気付いてる。

怒っている訳では無さそうなのだが、何があったのか今は訊ねられる状況でもない。

その後に続いて入って来たラウドラチャクリンはいつも通りの無表情で、少しばかり疲れが溜まっているのではとラトーが心配していたとは思わせる素振りもない。

そして最後に入って来たラトーもいつも通りの穏やかな表情で、やはり特に変わった様子はない。

イエライシャだけがなにやら不穏な感情を抱えているというこの状況に、何があったのか聞きたくても聞けないジレンマを抱えてラウドラチャクリンへと視線を合わせる。

だが妙にご機嫌らしい彼はそれには気付いているふうもなく、俺の隣の席の椅子を引くとイエライシャを誘う。

俺がそれを彼女にしてやる事は至って普通になっていたが、ラウドラチャクリンがそんな事したのは初めてだった。

先を越されてなにげにテーブルを見回すと、今までよりも更に驚いた顔をしているハルヴァイを見つけ、ああ、と妙に納得する。

多分、あれは数カ月前の俺の反応でもあったろうから。

イエライシャと出会う前のラウドラチャクリンは、進んで女性にサービスするような男では無かった。

ましてや国元のフィルダウスにあってはその必要もなく、むしろ敬意や奉仕を受けるのが当然の立場だった。

柔軟に見せてはいるものの、その実、固定観念でガチガチな石頭。ハルヴァイと互角だと思える所すらあったのに。

けれど、イエライシャが隊商に同行するようになってからの彼は、少しずつ変わっていった。

何処がとは明確に言えないのだが態度にも何がしかの余裕が見えるようになり、ミシエイルに、彼の家族の消息を訊ねた時の意外に落ち着いた表情はその変化の最たるものだ。

あの時も、変化のきっかけはイエライシャだったような気がする。今回の隊商に同行していて、彼の僅かづつではあったものの変化に立ち会っていた俺やミシエイルとは違い、ハルヴァイにとっては突然とも言える主の変化だ。

確かに驚くのも無理は無い……と、同情半分の微笑みで彼が何とか平静を保つのを見守った。

そんなハルヴァイを尻目にイエライシャが椅子に座り、ラウドラチャクリンも腰を落着けた所でいつものように彼のグラスへと飲み物を注ぐ。

厨房を預かるサヤの主義で朝食と昼食には特別な理由か、来客でもない限り、彼女は酒をテーブルに出さない。

今ピッチャーに入っているのも、ほんのりと季節の果物の香りを移した水だ。

同じようにそれをイエライシャのグラスへと注ぐと、香りに気付いた彼女がことさら嬉しそうな表情を見せるのが微笑ましい。

「有難う、フアド」

「どう致しまして。今日は店の方へは顔は出さなかったんだね」

興味は無かった？と言外に訊ねた俺に彼女は慌てて首を振った。

「違うの、一度部屋へ戻った所で……更にもう一度眠ってしまった

のよ。自覚は無かったんだけど、かなり疲れが残っていたのかしら。ラトーに起こされて……寝ぼけた顔で出て来たのよ」

「本当にそれだけ……？」

さっきの微妙な表情の説明にはなっていないと思い、さらにそう訊ねると、彼女は困ったような表情で視線を彷徨わせる。

どう言葉にしようかと迷ったらしい所を隣から引き取ったのはラウドラチャクリンだった。

「……わたしとラトーがふざけていたから、困ったんだよ。扱いかねたんだな」

サヤが運んでくれた食事のトレイを見下ろしつつ、かなり面白かったのだろう微笑み以上の笑みを浮かべている。

その様にやはり驚きを隠せないハルヴァイを意識しつつ、いつものイエライシャの食前の祈りが済むのを待って食事へと取りかかった。

「夕方……暗くなる前には戻るから、大人しくしていてよ？」

「失礼ね、ちゃんと待てるわよ」

出掛ける為に馬に鞍を置いて準備を整えた所へ、見送りに来てくれたイエライシャ。

どこことなく不安そうな彼女の耳元へそう言葉を送ると、ぷうと頬をふくらませる彼女につい笑い声がこぼれる。

一緒に庭に来ていたラトーへ後を託すと俺とハルヴァイ、そしてミシエイルの三人は通りへと馬を進めた。

この屋敷に残っているのはラトー夫妻とイエライシャ、ラウドラチャクリンとヨシユアだけだがラウドラチャクリンが居る以上何の心配も無い。

いつだったか、彼に付けられた渾名は？護衛要らず？の君だった。

夕方までに用事を済ませてしまいたいのでゆっくりとしている訳にも行かず、馬を並み足で歩かせていると隣に居たハルヴァイが重い口を開いた。

「ファド様……あの方は……本当にあの娘御にお気があるのではありますまいな？ 今まであの方が女性にあのように振舞われた事はありませんんだ」

「その心配は無いよ、ハルヴァイ。イエライシャに対する振る舞いは……彼女に敬意を払っているだけに過ぎないとは思えないかい？ 私はその場に居なかったが……彼をして「見込んだ」と言わせた女性 は初めてだよ」

ハルヴァイにとって最大の関心事なのだろうその話題に、何と答えようかと奴を睨んだ所で俺の代わりにミシエイルが口を挟んで来た。

見当違いな奴の疑問をからかっているようでもある。

「……だから心配なのです。あの方にあのような待遇をされて……のぼせ上がってしまうのではないかと危惧しておるといふのに」

「今まで彼の廻りに居た娘達ならそうだったろうね。でも、彼女はラウドラチャクリン様を見ては居ない。……それぐらいなら君にも判るだろう」

「さて、……それはファド様次第でしょうな」

ミシエイルの言葉をさらりとそう躲すハルヴァイ。

なんでこいつはいつも俺をイビリの対象にするかな。

結構痛いあてこすりに流石にむっとしてしまった。

不機嫌丸出しで八つ当たりされて、こっちにもそれなりにダメーシはある。

「陛下にしても奥方は地上の女性であられたし、あの方までもが御

相手を国内から選ばぬとなれば……貴族らの落胆は激しいものになりましょう。守護主の庇護の元、自由を保障された方とは言え……その決定がいつも受け入れられるとは限りませんし」

「……いい加減にしとけよハルヴァイ。どれだけあんたが気を揉んだ所で……彼の意見を変えられはしない事ぐらいとうに判っている筈だろう。それに……国元に「あの」従妹姫が頑張っている間は彼は自分の伴侶を選ぶ気すらないと思うけどな」

不機嫌をのせた俺の言葉によりやく彼も黙る。

「アルダウーラさまか……」

ため息をつくミシエイルに、チラと視線を送ってしまった。

ミシエイルが一番嫌悪している名だ。

現フィルダウス国王の一人娘にして、ラウドラチャクリンの従妹にあたる女性。

何があったかはウワサでしか知らないが、父親の権を笠に着た娘の悪評は静かに語られていた。

彼女が何とか次代の国王にして自分の従兄を手に入れようとして手を尽くしているの知らない者はいない。

それ故にその従兄は国元へ戻ろうとしないのだと、まことしやかに囁かれてすらいる。

俺をダシにしてラウドラチャクリンに近付こうとした貴族娘が、当のラウドラチャクリンに拒まれた後、かの姫君にかなりひどい目に遭わされたとは有名な話だ。

その彼は殆ど手がかりも掴めない何かを捜して、世界を彷徨っているというのに。

れがフィルダウスの為なのだとは、彼等護られている民は気付きもしないのだろうか。

報われない、けれどそんな他人からの評価の為に彼は行動しているのではないと、俺達は知っているから彼に従うのだ。

「……どれだけ彼に意見した所で、奴の気を変えるのがいかに難しいか……お前が知らぬはずもあるまい。よしんば彼がいつか相手を選んだとして……それがお前の価値観に添う相手ではない、とだけは俺でも想像が付くぜ」

宣言するかのようにそうハルヴァイに言い放つと、半馬身分先行させる。

おしゃべりは終わりだ。

いつも通りの商人の仮面を被りなおした俺達は、予定に遅れないようにと先を急ぐ事にした。

063 探索

得意先に帰国の挨拶をするためと言って出掛けてゆくファドラー達を、私は木戸の内側から見送った。

なるべく通りからは姿を見られないように、気をつけて。

バーラートに居た頃ならば少し珍しい色の金髪という程度で済んでいたこの外見だったけれど、この国では全く異質な姿として目立ってしまうから。

この国の人々といえは黒髪黒瞳で少し濃い色の肌、と相場は決まっているのなもの。

他国との交易を主とするアルマンスール家の人々ですら人目を引くのだ、顔立ちからして大分違う私が悪目立ちしない訳がない。

いくら王の侍従長から後見を頂いているとは言え、外国人に対してこの国の人がどんな印象を持ち、どんな態度で接してくれるのか昨日の今日ではまだ把握出来ない。

ましてやクアーナ人の、私に対するものなのかもはっきりとはしない監視の件もある。

そんな事情を踏まえた上でのひっそりとした見送りだったが、息苦しいような緊張に自分でもどうして良いか判らない。

彼等が見えなくなって溜め息をついてしまった私を、ラトーが優しい声で屋内へと促してくれた。

「お疲れならばもう少しお休みになられては如何です？」

「有り難いけれど……駄目よ。そんなことしたら、今夜も遅くまで星を眺める羽目になってしまうわ」

私の答えにはラトーは困ったような微笑みを浮かべるばかり。

たいして身体を動かした訳でもないし、このままのんびりしていたら本当に生活のリズムが狂ってしまう。

そこでようやく、アルマンスールの店舗を見学しようと思いついた。

時間つぶしと言っては失礼なのだろうが。

「どうぞ、構いませんよ。店の方はヨシユアが、そして事務所の方へはラウ様が詰めておいでのはずですから」

「有難う、早速行ってくるわ」

にこやかに見送ってくれたラトーへ背を向けると、まずは事務所のラウドラチャクリンを訪ねる。

廻りを柵で囲まれた室内で、何やら書類に埋もれている様は隊商で見慣れていた彼とは別人のようだ。

かなり以前から積み上げられていたらしい沢山の書類の束を、下から抜き取っては目を通し、それぞれに何かを書き足しては違う場所に積み上げてゆく。

その切りの無さそうな仕事を、けれど嫌そうでもなく淡々とこなしている彼を見ているのは不思議と面白かったのだが、どうしても会話が無いと間合いが保てない。

ただ見つめているのも決まりが悪くなって、そそくさと店舗側へと逃げ出す事にした。

「お店の方も見てくるわね」

と言葉をかけたのだが、ラウドラチャクリンは仕事に没頭しているらしく返事はない。

そうっとドアを開けて店舗内を伺うと、やはり書類を片手に何かを捜しているふうなヨシユアの背中を見つけた。

「お邪魔してもいいかしら」

「ああ、どうぞ。奥で一人にいるのも退屈でしょう、ここなら面白いものもあるかもしれませんよ」

声をかけるとそう返事が有り、彼は再び捜し物に専念しはじめる。

思った程広くはない店をぐるりと見回すと、奥まったカウンターに何やら積み上げてあるのが目に入った。

近寄ってみるとなかなか可愛らしい女性向けの装飾品が幾つかならんでいる。

暫くそのまま見つめていると更に幾つかの小物を手にしたヨシユアが戻って来て、それらを布張りのトレイへと並べて行く。

「興味がありますか？ バーラートで質にこだわってあつらえさせたもので、この辺りの貴族の娘さん達からの注文品なんです」

「バーラートでは……どちらかと言うと一般庶民の飾りではなかったかしら」

彼の手元を見つめているとそう説明してくれる。

バーラートでの記憶を辿るが、材質は確かエナメル作りの、きらびやかだがさして高価でもない物だったはずだわ。

「古くは……バーラートの貴族の内でも限られた者しか身に付ける事ができない、特別な身分を象徴する意匠だったそうですよ？ いつの間にか庶民の間にも広がって……随分安っぽい物になっていますがね。この辺りの小金持ちの婦人達の間では、今……流行りなんだそうですよ。これは銀を使って仕上げさせた物で高価なんです。素材としては、こっちに來て本来の姿に戻った感がありますね」

「そうなんだ……。物知りなのねヨシユア？」

「こう言う蘊蓄も商売の小ネタでしょう？ ハルヴァイに仕込まれましてね」

仕方無さそうに肩をすくめつつ手を動かすヨシユアに苦笑。

こう言う細かい物を扱うにしては厳つい指先が、意外と器用に動くのを感じて見つめつつ、ファドラインの指先もこんな感じでちよっぴりごつごつとしていたな、と思い返す。

商人らしからぬその手の主には、いつかイクシールの森で見たあんな鋭い剣のほうが不思議と似合うような気がする。

それに対してラウドラチャクリンの手は優しい感じで、いかにも

育ちの良さそうな印象を受ける。

同じ優しい手と言っても、裕福な商人の息子と言うよりは貴族に
ありがちな。

それから暫くは何か特別な話をするでもなく店の中の布や雑貨、
そして装飾に使う物なのだろういろんな飾りなどを眺めて廻った。

時々品物に付いて尋ねると、ヨシユアはすぐに淀みない言葉で説
明をくれる。

その対応も知識も、昨日今日頭に入れたと言う訳ではなく、ある
程度の熱意と年月を以て修得された物だと判る。

だがそれ故に彼が「本来従事すべき仕事」ではなさそうな此所
での仕事に、かなりのやりがいを抱いているのも感じ取れてしまう。

「どうしてこの仕事をしているの？」

訊ねられない、訊ねてはいけない問いが喉元まで出掛かる。

フアドにさえ訊ねていないその言葉を飲み込んで、違う次の質問
を考えようと店の入り口の扉を見つめ、嵌め込まれている摺ガラス
に映った人影に気付いた。

064 手紙

「ラウドラチャクリン・アルマンスール殿はおいでか」

細く高い音の鈴が来客を告げ、開けられた扉には先日私達を侍従長の元へと導いてくれた若い僧侶が立っていた。

指甲草染めのフードを目深く被っていたので一瞬誰だか判らなかったのだが、その下から覗く綺麗な二重まぶたにそう思い当たる。背筋を伸ばした少しばかり尊大な彼の態度はしかし、店の中に入った途端に人目を忍ぶような態度へと変わっていた。

店へと踏み込んだその僧侶はぐるりと見回しそうラウドラチャクリンの名を口にした。

「……奥にあります。しばしお待ち頂けましょうか？」

けれど丁寧な口調で訊ねたヨシユアを見つめ、彼は困った顔をする。

「長居はできぬのだ……これをお渡し頂きたい。ナムリ侍従長から故……確実にな」

念押しすると、装束の合わせから手紙を取り出してヨシユアへと手渡した。

「お待ち下さい……これを」

そのまま身を翻そうとした僧侶だったが、咄嗟に呼び止めたヨシユアが差し出した一抱えもある荷物に黙って視線を注ぐ。

「お身内の元へと行かれるのでございましょう？この商家へお寄りになって……皆様にお土産もなしでは失礼ですから、どうぞお持ち下さい。お気に召さなくともお納めいただければ宜しいので」

「……お心遣い感謝する。ではまた寄ろう」

笑顔で「商家」と強調したヨシユアに何かを思い付いたような顔

で僧侶はそれを受け取ると、短い言葉を残して通りへと出ていった。数人の供を連れた彼の馬の気配が無くなると、不意にヨシユアが大きく詰めていた息を吐き出す。

機転の利く店員振りだったのだが、どうやらかなり緊張していたらしい。

「……とうとう来たかな」

「え？」

小さく呟いたヨシユアに聞き返そうとしたのに、目の前に今さっき彼が受け取ったばかりの手紙を差し出されてしまった。

「すみませんが……これを隣のラウさまに届けて頂けませんか？僕は此所の当番なので」

「あ、ええ……いいわよ？」

差し出された手紙を受け取り、その手が少し震えているのに気が付いてしまった。

隣の部屋にいるのだからすぐに済む用事だ。

けれど彼は自分では行きたくないのだとも気付く。

「有り難うございます」

ことさら丁寧なヨシユアの言葉遣いに本心から礼を言われたのだと気付いて、何やら曰くのある手紙の配達を請け負ってしまったのだと悟ってしまった。

躊躇して手紙を見つめるものの、今更断る訳にも行かない。

仕方が無いかと覚悟を決めて、隣の事務所のドアをノックした。

心配そうなヨシユアの視線がかなりくすぐったくて、返事も待たずにドアを開け部屋の中へと踏み込むと後ろ手にドアを閉じて。

「どうかしたの？」

「……これを貴方にとって。侍従長のお使いの方よ」

せわしなく部屋へと入って行くと、先程とは違い顔を上げ穏やか

に声を掛けてくれたラウドラチャクリンだったが、そう言って私が差し出した手紙に流石に眉をひそめた。

それでも机から立ち上がり無言でそれを受け取ると、すぐにその封を開けてしまう。

……隠すとか、人目を気にするとか、そういうそぶりも無かったので、私もプライバシーを尊重して部屋を出るとか後ろを向くとかいう配慮をする時間は正直に言っただけでなかった。

ただ無造作に開けられた封筒から、綺麗な赤い紙……きちんと置かれた……が取り出され、何処と無く心ここに在らずなラウドラチャクリンの手をすり抜けた「それ」が私の足下へと落ちていくのを呆気に取られて見ていた。

そしてその紙には何も記されては居ないと言う事にも気が付いてしまう。

「……何？これ」

ようやく我に帰って、身を屈めた私がその紙を拾うまでにどれだけの時間がかかったのだろう。

拾い上げたそれを、けれどラウドラチャクリンは受け取ろうともしない。

「何も書いてないんだね？」

「ええ」

ただそう問われ、ありのままを答える他は無い。

「一体……これは何？」

「あらかじめ……取り決めておいたのだ、ナムリと。祭祀王が崩御なされし時の合図を」

それでも不吉なまでに鮮やかな赤い色の意味を尋ねずには居られなかった私に、そうラウドラチャクリンが答える。

平たんで抑揚の無いその声に、つい見上げてしまった彼の表情はいつも通りの穏やかな表情で、唇の端にはいつもの微笑みすら浮かんでいる。

いつも通りを「装って」いるのだと直感では判ったものの、その平静を突き崩すだけの手札を私は持っては居ない。

私にこれを託したヨシユアは手紙の内容を察知していて、それでも……ラウドラチャクリンのこの顔を見たくはなかったのだわ。

仮面のような表情のままラウドラチャクリンは机を離れ、黙ったまま事務室から出ていってしまった。

封筒から飛び出してしまった赤い紙は、そのまま彼が使っていた机の上に置きっぱなし。放置しておくわけにはいなくてそれを封筒に納めなおすと、彼の後を追って部屋を出た。

けれども、いつも通りの足音が階段を上っていくのを耳に捉えただけだった。

流石に部屋まで追いかける勇氣はない。

そして今、階段を上がって自分に宛てがわれている部屋へ戻るのも何だか気が引ける。

もしも彼が自分の部屋で亡くなった方を悼むつもりなのならば、ということだが。

行く当てがなくなってしまった私は、他にする事も無いので厨房のサヤの所へ逃げ込む事にした。

夕食の準備にはかなり早い時間だが、手伝いはさせてくれると言っていたし、このまま居座ってしまえば何とかなる。

単に一人になりたいはなかったただけなのかもしれない。

大切なひとが逝ってしまったのに、悲しいであろうその人はその思いをたった一人の胸の中に仕舞い込んでしまおうとしている。

……平静を装ういつもの表情で。

祭祀王さまは私にとっても関わりの全くない相手という訳ではなかったわ。

会った事は無い方だけれど。

それでも残される悲しみが湧かないはずが無い。

ずっと一緒に付き添っていたであろうナムリ殿はもっと悲しいはずよ？

でも王から事後を託されていると言っていたその立場上、個人的に悲しむ為の時間をまだ作れては居ないだろうけれど。

それでもいつかはその悲しみときちんと向き合い、そして昇華させてゆくのに。

ラウドラチャクリンは、それすらを拒んでいるような気がする。

人目のある所で自分の感情を露にする事を好まないというよりも、無理矢理感情を切り捨てようとしているの？

それでは……いつか耐え切れなくなってしまうのではないの？
捨てきれず押し込めたその感情の重さに。

厨房を訪ねた私の表情にサヤは訝しげな表情を見せた。

哀しいのと、腹が立つ……何に？……のでかなり複雑な顔をしていたのだわ。

「お使いが……来たの。ナムリ殿から」

そう告げると、案の定サヤの表情も曇ってしまう。

あの合図の手紙の事をヨシユアが知っていたのなら、他の皆も知っているに違いないと、そう考えた通りだった。

それとも同じ目的の為に集う者達だから、かなりの情報も共有しているというべきなのかしら。

ため息をついた私に、それでも彼女は湯を沸かしていたらしい大きな鍋から湯を掬いそれでお茶を入れてくれた。

「もうじきだとは思っていたんですが……あの方は本当にぎりぎりで間に合ったんですね」

「ヨシユアは……とうとう来たなって……言っていたわ？」

ついそう言う困ったように微笑むサヤの瞳がうなづく。

「現実としては判っていたの、いつか来る事態だと。けれど……出来る事ならば……その時期が遅ければ良いのにとって……そう思い願った事は無いですか？」

誰でもそんな思いをした事があるはずだとサヤの瞳が語っている。そして、思い出さなくなかった風景が心に蘇る。

私も、壁に飾ったあの赤い婚礼用の民族衣装を着なくてはならぬ日、その事をそんな思いで見つめていた。

「ええ……無い、とは言い切れないわ」

「避けられない事だと……判っては居ましたわ。でも、その時にラ

ウが苦しむのを……皆見たくはなかったの。今までとても良くして下さった王様が亡くなられた事は当然悲しい事よ？そしてその時に……置いていかれる者の苦しみを、再び彼が味あわなければならぬ事が判っていたから実現して欲しくはなかったの」

そして同時に、その苦しみをどうにもしてやれない、自分達の無力さを思い知らされてしまうのが。

うなづいて同意を示した私にサヤは珍しく饒舌で、そんな彼女の言葉が聞こえたような気もした。

大切に思う人物のその心の支えに自分達が成り得ない事、その無力感を滲ませたサヤの言葉はとても意外なものだった。

けれど同時に理解も出来た。

私が恐怖とともに見つめるラウドラチャクリンの昏い瞳は、同時に何処か深い所でこの仲間達をも脅かしていることを。

それでも理解しながらも不思議に思える。

これだけ付き合いにくい相手なのに、サヤを初めとする皆は彼を大切に思っている。

『付き合いにくいって言う奴もいるけれど、結構お人好しで……憎めないんだ』

いつかのファドの言葉が思い出されたが、違うわ、あの時のあれは彼の上司の話だったじゃない、と考え直した。

サヤが特に追い出そうとしてこないのを良い事にそのまま厨房に居座って、外出からファドが戻るまで彼女の手伝いに時間を費やすことにした。

イクシールに居た時、ルツイエラさんにレシピを教わったスープは此所でも定番らしく、今夜のメニューにも入っているのを確認している。

最後の仕上げはサヤがしてくれると言うので、初めてそのスープを私が一人で作る事になったのは何気ないサヤの一言だった。

「そう言えば、貴女はルツイエラさまにレシピを教えて頂いたんですって？早速腕試しをしてみない？」

多分ファドラーン辺りが漏らしたのだろうが、サヤの耳の早さに舌を巻きつつ彼女の誘いを受ける事にした。

どのみちファドラーン達が戻ってくるまで私がするべき事は特別何も無いのだし。

とは言え彼等が戻って来たのはかなり暗くなってからだった。

あらかたの夕食の支度も出来上がり、店を片付けたヨシユアも手持ち無沙汰のように食堂と玄関を行ったり来たりしていた。

ラウドラチャクリンはあれから一度も姿を見せては居ない。

待つものには慣れたという風情のサヤとラトーだけが、いつも通りとばかりに窓などの戸締まりの確認をしたりしている。

姿を見かけないなと思っていたラトーは昼からの時間を馬の世話に費やしていたらしく、何処と無く埃っぽいのをじきにサヤに見とがめられると、浴室へと追いやられてしまった。

その彼が浴室に向かってから少しして、ようやく厩が賑やかになる。

帰って来た一行を出迎える為か、ラトーの代わりにヨシユアが玄関に向かった。

私も無意識にその後を追っていたらしく、ヨシユアが掲げる灯りに浮かび上がったファドラーンの姿に……本当に……我知らず安堵の息を継いでいた。

それなのに、帰って来た彼等と言ったらお気楽なもので、迎えに立っていたヨシユアの肩を叩き屋敷の中へと入ってくる。

そしてファドラーンはそのままヨシユアに捕まり何事かを耳打ちされ。

その内容は勿論想像に難くないわね。

「おや、すっかり馴染んでるね、イエライシヤ？」

そう言って厨房に居た時のまま、借り物のエプロンに身を包んだ私に目を止めたのはミシェイルで、しかし次の瞬間には私の表情に気が付いたらしく訝しげに瞳を細めた。

「……何かあったの？」

「……お使いが……」

けれどそれ以上は口にできなかった。

深刻そうな表情のフアドラーンが脇を通り過ぎ様、その続きを引き取っていったのだ。

「城から侍従長殿の使いが来たそうだ」

「赤い……紙しか入っていなかったの」

特に驚く素振りもなくミシェイルが再び見つめてくるので、そう言葉をつなぐ。

ゆっくりと彼はうなづき、肩に手を回されて皆が集まっている食堂へと促された。

幾分平静ではないフアドラーンとは違って、ミシェイルは来たるべきこの日について既に準備は整っていたらしい。

「手紙の事も、誰かが亡くなったという事も……決して公言してはいけないよ？ 祭祀王様が亡くなられたからと言って……すぐに公表されて喪に服す訳ではないからね」

「どう言う事？」

「政務はこれまで通り……王の側近に依て通常通りに進められる。新しい祭祀王の後継者が見つかって初めて、前王の崩御が伝えられるんだ。代々新しい候補者探しは難航するのが常でね、余計な情報が流れる前に秘密裏に捜すんだよ。近隣諸国に情報が流れても困るしね」

「……偽物が出るってこと？」

想像して答えると、ミシエイルは疲れた微笑みを見せる。

「それだけじゃない。候補者は……生まれたばかりの子供だ。選定に入る前に候補者が事故死した例は過去に無い訳じゃない」

「だって生まれたばかりの……」

「そう……身を守るすべを持たない者を、必要以上の危険にさらす訳にはいかないからね」

穏やかだがきっぱりとした彼の言葉に声がうわずる。

「誰が……赤ちゃんを危険な目に遭わすって言うのよ」

「新しい王の後見になる者に敵が多ければ多い程危険は増えるのです。少しでも自分に都合の良い王を望む野心家は多いし……現在の王国の体制、むしろこの国の存続自体を望まない者も居るんですよ」
「そ……んな」

あまり多くを語りたくないと言う素振りのミシエイルの言葉を次いだのは、最後に食堂に入って来たハルヴァイだった。

はっきりとした言葉で具体的に説明されて、分りやすいのは良いのだけれど、その内容に気がめいってしまった。

つまり敵は至る所に居るという事ではないの。

「そこまではっきり言って恐がらせる事は無いだろう、イエライシヤは……」

「此所まで関わっているのです、もはや部外者とは言えますまい。すくなくとも……隊商で一緒だった者達がその方を受け入れている以上、どのように言い訳しても彼等とて見逃してくれはすまいよ」
話の意味が理解出来た私をかばうようにフアドラーンが口を挟もうとしたが、かなり強いハルヴァイの反論にかき消されてしまった。けれどその内容は以前フアドラーンが危惧していた通りの事だわ。そしてハルヴァイの言う、彼等、がクアーナの民であろう事は説明の必要も無い。

正論として自分の思う所をはっきり口にする質らしいハルヴァイの、同様に厳しい視線が私に向けられているのを痛い程意識する。

彼は私がどんな反応を示すかを伺っているのだ。

すぐ傍に居てくれているフアドラインもミシエイルも、今度ばかりは当てにしていけないの。

「待ちなさい、ハルヴァイ。性急に過ぎる所が相変わらずお前の欠点だね。彼女はまだ……私達の全てを把握しているのではないのだから、お前の言葉で混乱させて欲しくはないよ。それにお前の危惧するその疑いを招かない為にも……祭祀王さままでを担ぎ出したのだからね」

066 助勢

誰にも出せないと思った助け舟を出してくれたのは、午後からずつと部屋から出てこなかったラウドラチャクリンだった。

後ろにラトーが控えている所からすると、皆が戻った事を彼に知らせに行っていたのかしら。

「ましてや、何がしかの決定を彼女がする時があったとしても……お前が口出しする関わりはない事だよ」

「……承知致しております」

しぶしぶ引き下がったハルヴァイは恭しい仕草でそうラウドラチャクリンに頭を下げた。

まるで主君に恭順する下僕のようなその仕草に、ラウドラチャクリンに頭が上がらないというファドラーンの表現を思い出すが、彼のその表現も何だか違うような気がする。

けれど、そういった事を追求するだけの心の余裕は私には無かった。

同時にラウドラチャクリンの言葉に悟ってしまっていたから。

全て、私を自由にしてくれる為の茶番だったのだと。

ジャヤル王家と此所ルクアディナルファの祭祀王の名を担ぎ出し、彼等の間の確執すら利用して。

行きずりのたった一人の娘の為に。

泣き出したいような、怒りたいような、複雑な感情にどうして良いか判らなくなってしまうた私の肩をファドラーンが促す。

それに素直に従って椅子に座りテーブルに視線を落としたまま、

何食わぬ顔で私の隣に座り込んだラウドラチャクリンの気配を感じていた。

この人はなんて、お人好しなんだろう。

瞳の奥にはあんなに昏いものを秘めているのに。

相手からの見返りも期待しないうえに、下心もなく、あくまで冷静で。

ジャヤル藩王の希望を容れる事でたしかにこの商家にとっての利益もあつたのかもしれないけれど、その間の駆け引きはかなり巧妙で、手間のかかるものだった筈だわ。

何事も無かったかのように、サヤが夕食の給仕をしてくれるのを幾らかぼんやりと見つめていたが、今までの騒ぎで昼の出来事がすっかり置き去りにされている事に気付いた。

勿論さっきの騒ぎも関係がない訳ではないのだが、皆があまりにも普通にラウドラチャクリンに接しているのが却って不自然に感じられてしまうの。

ラウドラチャクリンは彼の親しい友人が今日亡くなったと言うのに、あまりにもいつも通りの態度で、彼が無理にでも平静を装っているのだとは嫌でも判ってしまう。

私のような行きずりの娘の為に心を碎く事の出来るひとが、自分の心の嘆きに素直になる事が出来ないなんて、不自然でその不器用さに苛立ちすら感じてしまつて。

「悲しいのなら……ちゃんと悲しいって顔をすれば良いじゃない」
深夜、人目をはばかりようにして裏庭から戻ったラウドラチャクリンを待ち伏せて、ついそう口走ってしまった。

「……長く寝付いておられたのだ。ようやく楽になったのだ……と

思っているよ」

表情を曇らせつつそう答えるラウドラチャクリンの真ん前に立ち
はだかつて、ファドラーン程ではないものの自分よりも背の高い男
を見上げた。

薄暗いとは言え廊下を照らす灯りのお陰で、彼の表情は何となく
把握出来る。

彼からすれば、自分達の事情も知らない部外者が何を言うのかく
らいの余計なお世話だったかもしれない。

けれど私としては、彼が自分の心を必死に押し殺しているように
しか見えなかった。

知らせを受け取った直後の平静を装う表情よりはましだったかも
知れないが。

「貴方がそうやって感情を隠すから……余計に廻りの皆が心配して
いる、というのが判らないような人じゃないでしょ？それに貴方が
そんなじゃ、他の人だって祭祀王様の事を悲しめないじゃない」

「痛い所を突いてくれるね……そんなにわたしの態度が気に喰わな
いの？」

言葉を重ねると、ようやくそうラウドラチャクリンの言葉が返っ
てくる。

怒っている風でもない淡々としたその口調。

確かに隊商に加わって暫くした時に余計な事でラウドラチャクリ
ンに負担をかけないよう、言葉には注意しますって約束もしたわ。

でも、これは譲れない気がした。

「そんなじゃないわ。ただ不思議なだけよ？貴方が……自分の感情
をどうしてそんなに隠そうとするのかが判らないの。悲しいと感じ
ているはずなのは判るけれど……」

「隠している訳ではないよ……ただ……随分沢山の人と……別離れ

てきたから……。これ以上悲しい思いをしたくないと思ってしまったのかもしれないな」

「私は……母様としか別離の経験は無いけれど……それでも、皆違う人でしよう？同じ悲しみなんて無いわ。そんなふうに悲しみを押さえ込んでしまっていたら……祭祀王さまだって貴方の事が心配で、安らかにいられないでしょう？」

変わらず穏やかなままのラウドラチャクリンの口調に、これでもかと切り込んでしまった。

態度にも変化の見えない彼に、あしらわれているような気すらしたからかもしれないが。

「……君の度胸の良さは尊敬に値するよ。皆の気遣いを良い事にわたしが我を通していたのは事実だが……それをこうもあっさりと突き崩されようとは思わなかったな。イエライシャ、君の言いたい事は判っているつもりだ。けれど……」

ようやく口を開いたラウドラチャクリンだったが、言い淀んだ先を奪う。

「貴方に完璧を求めている訳じゃないわ。結構不器用なひとだってちゃんと判っているもの。だからこそ……感情を抑えて隠したりなんて……しなくて良いじゃない。そうでなければ廻りも貴方の事安心してみてられないわ」

多分、サヤが少しだけ見せた無力感も此所に端を発しているのだと妙な確信があったから。

暫くの沈黙の後、見つめていたラウドラチャクリンは相変わらず微かに表情を曇らせたままだったが、やがて静かに詰めていたのだろう息を吐き出した。

「わたしが不安定では、皆に迷惑を掛けてしまうと……自制していたつもりだったが」

「何の為にファドやミシエイルがいるの？彼等を信用してよ。貴方か……或いは他の誰かの理想なのかもしれないけれど……何事にも

動じないひとつ、本当は居ないのだと思うの。貴方が何に固執しているのかは知らないけれど……周りの仲間は貴方が頼ってくれるのをずっと待っている筈だわ」

低く押しつぶしたようなラウドラチャクリンの声に、幾分譲歩のようなものを感じてもうこれ以上彼を追いつめる事の無いよう自分の言葉にも気を配る。

言いたい事は言ってしまったし、此所からどう動くかは彼次第だもの。

でも此所からサヤやファドラインが本当に望んでいる変化があれば良いな、と思えるほどに私は冷静に彼と対峙していた。

……もつとも、ラウドラチャクリンのこう言った変化はハルヴァイには歓迎し難いものなのだろうけれど。

ハルヴァイが私に厳しい視線を注ぐのは、部外者としての私がこの仲間達の間をかき回す事を警戒してのものだったのだと、私自身も何となく理解しはじめていたからだわ。

少なくとも彼は、ラウドラチャクリンやファドラインの変化を望んではないから。

「おはよう、イエライシャ」

「おはよう……」

騒動続きだった昨日とその夜のわりには、イエライシャはすつきりとした表情で部屋から現れた。

続けざまに夜更かしをしているらしいので、今朝もお寝坊かと思っていたから普段通りの振る舞いについ笑顔がこぼれてしまった。

彼女は部屋の扉を背にして、不思議そうな顔で見上げてくる。

「……どうかしたの？」

怪訝そうに訊ねてくるのもいつも通りで。

「今朝も……起きられないかと思っていたよ、夕べはラウを捕まえていただろう？」

「気付いていたの？」

途端に少し後ろめたそうな表情になるから、からかうつもりで厳しい表情を浮かべた。

「気配がしていたから……起きていたんだよ。深夜に男を待ち伏せするなんて尋常じゃないしね」

「信用が無いのね……貴方が思っているような用件じゃないわ。ただラウに一言言いたい事があっただけよ？」

「……うん、判ってる。あいつの事を気にしてくれているのもね」
彼女の声のトーンが下がってしまったので、ふざけるのはやめておく事にした。

努めていつも通りの声と口調に戻す。

「……だからって、人の話を聞いていたなんてお行儀が悪いわね」
「違うよ、そんなじゃない。言っただろう……気配がしたからって」

ぷうっとふくれて見上げられ、宥めるように言葉を口にしながら自分の表情がにやけてしまわないよう気をつける。

本当は、優しくされてしまったラウドラチャクリンがイエライシヤに変な気を起こしてしまおうと困るから、いつでも邪魔に入れるようにスタンバっていた、だなんて恥ずかしくて言えないし。

もっともラウドラチャクリンにはそんな気配なぞ筒抜けだっただろうけれど。

潜めた声の2人だったが、何を話しているのか見当は付いていた。俺達じゃ決してラウドラチャクリンに対して言えない事だったが、彼女の立場だからこそ言える。

それを彼女が自覚しているのかどうかは判らないが、イエライシヤのその行動から次に何が変わるのだろうか、と変な期待を抱きつつ気配を追っていた。

そして2人の間に俺の危惧していたような事はなく、それぞれの部屋へと消えてゆく気配にも内心安堵していた。

何故って？ 気付かれていたとしても、立ち聞き野郎だとは流石に知られたくないからな。

「さあ、食事に行こう。その後で出掛ける支度をして」

「……本当に出掛けるの？」

怪訝そうな言葉の裏には、昨日の知らせが影を落としている。

この国の王が亡くなったと言うのにいつも通りで良いのか？ という彼女の疑問は当然なのだが。

「正式に発表されるまでは……王は死んではない事になっているんだ。それを知りうる立場にいる者も当然そのしきたりを弁えている。喪に服すのは……新しい後継者が見つかり、王の遺体を城の聖殿に安置してからだとね」

「それはいつなの？」

「……さあな。何年も掛かる事は間違いないだろうな。今の祭祀王

さまは……五歳で城へ納められたと聞いているし」

「それまで何年も隠しておくの？亡くなった事を？」

「もちろん。そして王の遺体は防腐処置を施されて……聖殿に納められる時を待つんだ」

促すように先に立って階段を下り、イエライシャを食堂に案内しながらそう説明する。　イエライシャは納得いかないような表情だったが、待ち受けていたサヤとはいつものような雰囲気では会話している。

　ようやくわだかまりも解けたのだろうか、とその会話を聞くとともになしに耳にしつつ食事を済ませた。

　出掛ける為に馬の調子を見てからその背に鞍を乗せていると、一度部屋に戻っていたイエライシャが玄関から出て来た。

　微かな話し声にそちらを見遣るとラウドラチャクリンも一緒だ。夕べ自分を追い詰めた相手と、今朝は一緒に何気ない会話をしている辺り彼の神経の太さが判ろうと言うものだ。

　それとも、イエライシャが悪意ではなく心底から自分を案じているのを理解しているから、平気なのだろうか。

　「わたしは今日は此所にいるよ、気を付けて行っておいで。……ナムリ殿の兄上にも宜しく伝えてくれ」

　ゆったりとした風情で玄関の柱に寄りかかったラウドラチャクリンは俺たちを送り出してくれたが、多少は昨夜の出来事に付いて考えるだけの心の余裕は出来たのだろうか。

　街の様子は昨日とどこも変わりがなかった。

　振り返れば街の中至る所から見上げる事の出来る王城の主が、昨日この世を去ったのだとはこの中の誰一人知らないのだ。

この街、ルクアディナルファの首都クティナンに着いた時とやら変わりのない市場の様子や行き交う人々の穏やかな様子。

それらを見回しながらイエライシャが憂鬱そうにため息をつくの
を、黙って見つめる。

彼女のため息の理由なぞ聞かなくても判る。

けれど、この街に来てようやく自由を手に入れたはずの彼女が沈んでいては、要らぬ詮索の的だ。

残して来ていたバーラートでのトラブルも片が付いて、家族の安全が確保されているのも判っている。

そして彼女自身を縛っていたジャヤルの王からの援助の条件も、ルクアディナルファ祭祀王の侍従長ナムリに依て片付けられた。

色々なウワサや憶測は依然として残ってしまったものの、今の彼女は全くの自由なのだから。

「イエライシャ……君が何を気にかけているのか判らない訳じゃないし、あんまり無神経な事は言いたくないけれど……今の君の顔を見ていると、何があったかと余計な推測を誘ってしまうよ?」

「……ご免なさい。でも、気持ちの切り替えてそんなに簡単じゃないのよ?」

俺の言葉に、考え込んでいたふうのイエライシャは弾かれたように顔を上げる。

ようやく少しだけ微笑みを浮かべそう言う彼女に同意を込めた微笑みを返す。

「……うん、判っている。それでも皆……努力しているんだよ」

「そうだったわね、夕べ……ラウにあんな余計な事言うんじゃないか
ったかしら」

意外に弱気な発言で、少し後悔しているのだと察した。

友人を亡くしたというのに明らかに無理をしていると判る態度で

平静を装うラウドラチャクリンを、彼女としては放っておけなかったのだろうが、どうやら今は自分が彼のプライベートに立ち入り過ぎたと反省しているらしい。

「あいつにあそこまではつきりと説教出来る奴は居ないから……どんな顔で君の言葉を聞いていたのか見てみたいくらいだったよ。あいつのあの態度にも理由が無い訳じゃないんだが、俺たちにしても……仲間内の時くらい本音で居ても良いだろう？って気持ちが無かった訳じゃない」

そこまで言葉を唇に乗せてからイエライシャを伺うと、案の定彼女はかなり意外そうな顔をしていた。

でも俺たちが何処かでそう思っていると、感じていたんだろう？

「だから……君があいつに言った事はあながち的外れとは言えない。……俺としては感謝しているよ？」

更にそう続ける。

初めのうち何を言われているのか判らないという表情だった彼女も、ようやくその意味を理解したのか、見る見る頬が赤くなる。

「でも、きつとハルヴァイにとっては余計なお世話だったわね。彼は……周りが変化するのを歓迎していないようなもの」

赤い顔で俯いた彼女がそれでも小さな声でそう言う。

「あいつが俺たちを……管理したがつているだけさ。俺もラウも……もういい大人なんだから、いい加減自由を認めてもらわなきゃな」
そう言って肩をすくめてみせたが、イエライシャは小さく微笑みただけ。

それでも、朝からの憂鬱そうな表情は何とか影を潜めたようで、横で顔を上げて馬を進めてゆく。

その姿を視界の端に捉えつつ、俺達は見え始めた目的の屋敷に向かった。

067 潜聴とジレンマ(後書き)

068 古狸と探索者

「……少しばかり話を聞かせてもらおうか」

お約束のような低い声に、困惑したような、そして不安そうな表情を浮かべてみせる。

いかにも順調な道行きを阻まれた商人らしく。

俺とイエライシャは、少し前に今日の目的地だった貴族の屋敷を出た所だった。

ナムリ侍従長の実の兄で、この国の有数の貴族の一人であるスーイン卿との会見は、弟である侍従長を介してなされたジャヤルの主との幾つかのやり取りを説明する為のものだった。

殊に今回は俺達がこのルクアディナルファへ伴って来た異国の娘の扱いが絡んでいたため、俗世の権力者の同意を得ておいた方が良さだろうという配慮があつての事だ。

異国とは言え、貴族階級の客人ならば相応の格式の貴族の元へ預けた方が滞在先の釣り合いとしては良いのでは、というスーイン卿のその申し出はにこやかな物腰で対応したイエライシャ本人によって拒否された。

「有り難いお話ですわね。シェカルのティサ卿からも、同様のお申し出を頂きましたが……わたくしとしては現在の滞在先に十分満足しておりますので」

そうにつこりと微笑まれて、スーイン卿としてはしぶしぶだろうが引き下がらざるを得ないはずだ。

彼女はさりげなく下心のある申し出を他の男からも……時に対立

する事もある地方の有力貴族だ……受けているぞとアピールする事で、自分は無用の争いの種にはなりたくはないのだと目の前の相手に理解させる方法を選んだのだ。

随分と世渡り上手になったものだ、妙な所で感心していると、スーイン卿も苦笑混じりで。

「これは……随分しっかりした令嬢だな」

「随分いろんな経験をさせて頂きましたので、誤解は特に厄介だと身に染みしましたの」

肩を竦めてイエライシャは応える。

「なるほど、誤解ね。これだけガードが硬いと言う事は、現在の滞在先とやらにもう既に誰か想った相手でも居るのかね？」

けれど、そう訊ねられた時のイエライシャの反応はあまりにストレートで、隣で見ていた俺にも感染してしまうのではと思うくらい面白い程に見る見る真っ赤になってしまった。

彼女を見ていたスーイン卿は更に面白そうに微笑みを浮かべている。

彼程のタヌキを上手くあしらう事は、イエライシャにはまだ難しいだろうな。

「随分立ち入った質問をしてすまないな。なに……私の姪に当たる娘がラウドラチャクリン・アルマンズールに御執心でね、同じ屋根の下に妙齡の女性が居ると知ったら……何かと喧しい事になるかも知れないと、うんざりしてしまったのさ。それにしてもまさか……貴女の想い人は彼ではあるまいね？」

「勿論、ええ、彼ではありませんわ」

さつきは驚く程真っ赤になっていたイエライシャだが、彼のその問いには意外にもはつきりとした口調と態度で答えを返す。

疑いようも無いはっきりとした否定だ。

「……その言葉を信じておくよ。他にも何か問題があれば相談にも乗るし……いや、本当の所は報告が欲しいと言っておいた方が良い

かな。どうにもここしばらくクアーナの者達がよく動いているようだから……君たちも気をつけたが良い」

相変わらず笑顔のままのスーイン卿はイエライシャの返事がお気に召したらしく、かなり好意的な態度だ。

「承知しております」

そう言って頭を下げた俺にもにこやかな表情を向けてくる。

とはいえ海千山千の古狸の事だ、イエライシャの言葉をストレートに信じた訳ではないのだろうが、一応彼女の建前を受け入れた、そんな処だろう。

予想していたよりもすんなりと状況説明が済んだので、スーイン卿からの昼食の誘いを辞退して市街地へと出る事にした。

まだこの街にイエライシャが到着して三日目だ、市街地の観光もまだだと言ったら彼は俺たちをあっさりと解放してくれたのだ。

市街地では馬が邪魔になる事もあるので、帰りに取りに寄ればいいからと預かってくれる事にもなった。

確かに一度アルマンスールの屋敷へと戻るよりも、此所からならすぐに街の中心部へと出かけられる。

町中で俺達をあからさまに付けてくる者が居るのに気が付いたのは、スーイン卿の屋敷を出てから程なくだった。

おかしいと感じたのは距離を詰められはじめる前。

移動するそれぞれの路地に人影を感じた時点で、今日はただでは返しては貰えなさそうだと覚悟を決めた。

隣を歩くイエライシャはまだ事態に気が付いては居ない。彼女がイクシールで俺の母親から貰い受けた外套を羽織っているのを改めて確認して、安堵の溜め息を押し殺した。

早速これが役に立つとは思わなかった、母には感謝してもしきれないな。

追い込まれるように、彼等の思惑通りの小径へと誘導されているように見せかけて移動しつつほくそ笑む。

この先の人気が無い袋小路は小さな民家を挟んでクアーナの商館が建っているのだ。その小さな民家が、商館の裏口をカムフラージュする為の物であるとはとうの昔から知っていた。

そして逆にこの通りには俺達もある仕掛けを仕込んでいる。

通りの中程を進んだ辺りで、俺とイエライシャは六人ばかりのクアーナ人に囲まれて立つ形になっていた。すぐ近くに件の民家の入り口がある所から察するに、俺達の身柄を確保するつもり満々という事か。

「わたくしたちは貴方がたに用など無いわ」

思いがけない事態に遭遇していると言うのに、恐慌を来すかと思つたイエライシャが俺の隣でそう低い声で言い放つ。

けれど彼等は大して気にもしていないらしい。

「それでも、こっちとしてはいろいろ聞きたい事があるんだよ。異国のお嬢さんにも、そしてアルマンズール殿にも……ね」

リーダー格なのかそう口を開いた男は、クム・ウタール辺りからすっかりお馴染みになっていた顔だった。

何時の間に廻りを囲まれていたのか、足を止めた時には既に廻りに何人かの人の気配があったわ。小さな路地の壁を背にして足を止めたファドラーンに、後ろ手で庇われるようにその背後へと隠される。

「何ですか、貴方がたは」

落ち着いたファドラーンの誰何に彼等が答える気配は感じられなくて、穏やかならぬその場に聞き覚えの無い声が聞こえたのはもう少ししてから。

「……少しばかり話を聞かせてもらおうか……？」

奇妙な訛りのある言葉。

今までに聞いた事が無いその声の主を一目見ておかなければ、私としても事態が掴めない。

私を庇っていたファドラーンの左腕から何とか顔を出して通りを見渡すと、ぐると取り巻くように何人かの男達が目に入った。

その中でも一番私達の近くに立っていたのは、かなり見慣れた顔だった。

クム・ウタールで初めて私とその監視に気付いた男。

何を考えているのか判りづらい表情のまま、鋭い目つきで私達を睨み付けている。

これだけの人数で囲んでいるのに、怯えの色を見せないファドラーンを威嚇しているみたい。

「わたくしたちは貴方がたに用などないわ」

その威圧的な態度が気に入らなくて、つい言い返してしまってい

た。

肩越しにファドラーンが私の方を伺うのを見上げる。

けれど彼はとても心配そうな表情をしていて、余計な事をしてしまったのかと却って不安になってしまった。

「それでも、こっちとしてはいろいろ聞きたい事があるんだよ。異国のお嬢さんにも、そしてアルマンスール殿にも……ね」

口元に嫌な感じの笑いを浮かべてその男がそう言うのを、相変わらずファドラーンに庇われるようにして聞いていた。

不安そうな表情を見せたファドラーンだったけれど、それは私を案じたためのようで彼等に対しては変わらず動揺を見せてはいないままだ。

「何も話す事はありませんよ。そこを退いてもらいましょうか」

重ねてそうファドラーンが要求するものの、彼等が応じる訳もない。

それどころかジリジリとにじり寄る彼等に距離を詰められつつあった。

その距離はおよそ三メートル位だろうか。

間合いを詰められる恐怖に、つい、ファドラーンに捕まっていた指に力が入ってしまった。

「うわぁッ」

その次の瞬間、ファドラーンが突然動くのと誰のだか判らない悲鳴が響くのは同時だった。

さらにファドラーンの左腕が私の肩を抱くようにして、もと来た方へと走り出す。

視界の端にひっくり返るように倒れている一人の男が写り、背後から追いつがる足音を聞きながら夢中で走った。

けれどもっと走って、この通りよりも広くて人目のある場所へと移動するのと思ったのに、ファドラーンはそうはしなかった。

その代わり再び民家の壁を背にするように立ち、クアーナ人がさつきよりも近付いて来るのを待つように彼等の方へと向き直る。

逃げ切れそうに見えた相手が立ち止まった事に、一団になって追いつがろうとしていた彼等も意表を突かれたのか、さつきよりは近い位置で戸惑ったように立ち止まった。

「おや、俺達を捕まえるんじゃないのか？」

しばらく硬直したようなにらみ合いの後ファドラインがそう口火を切り、挑発するようなその口振りにどうやら何人かのクアーナ人は激昂したらしかった。

先程ファドラインに引っくり返された男が、文字通り彼に飛びかかる。

けれど次の瞬間、再びその男ははあっけなく地面に放り出されてしまっていた。

すぐ隣に居たのに私にはファドラインがどうやってその男を捌いたのか見当も付かないくらいの早業で。

どうやら商人の息子としての偽装は止める事にしたらしい。

更にもう一人が殴り掛かって来たのを、あっさりと仕留める。

……流石に今の相手は喉元に肘を入れられて、起き上がろうとしない所を見ると意識を失ったのか昏倒したらしい。

予想以上の反撃にか、仲間の昏倒した姿かに男達が怯む。

その戸惑いが齒がゆいのか次にはクム・ウタールで顔を覚えたクアーナ人が罵るように何事かを喚きつつ、ファドラインへと飛びかかって来た。

きらりと、何かがその手の内で光を反射する。

身体は何処に帯びていたのか、クアーナ人が手にした大きめのナイフが鈍い光を放つのに気が付いたのはその切っ先がファドライン

によって躲された時だった。

後ろに庇っている私を彼の左腕が誘導して、大きく移動させられる。

その背後に空いた空間で彼が踊るように身を翻し、クアーナ人の剣先から逃れる。

次の瞬間翻ったフアドラーンの片足が、空振りしたナイフに身体を持っていかれ少しばかりバランスを崩したクアーナ人の足を掬った。

まるでお芝居か何かの一幕のような鮮やかな動きで、相手が道に転がる。

「くそっ」

多分そんな意味合いなのだろう、クアーナ語とおぼしき罵声とともに尻餅を突いたその男はそれでもすぐ立ち上がると再び私達を睨み付けて来た。

かろうじて手放さずに居たナイフを再び握り直してフアドラーンの隙をうかがう。

「所詮多勢に無勢だ……痛い目を見ないうちに降参した方がいいぜ」「すぐ刃物に訴えるって言うのは頂けないな……きちんと使い方を教わったのか？」

抵抗を続けるフアドを脅すつもりでそう口にしたのであるが、あっさりフアドラーンに言い返される。

なんとか平静を装っていたクアーナ人だったがその言葉に明らかに気色ばみ、そして次の瞬間再び彼はフアドラーンへと斬りつけていた。

「フアドッ……！」

ナイフが布を裂く鈍い音に無我夢中で叫んでいた。

先程からの身軽な動きといい、私が今まで見て来た彼の経験値の高さから、今度も彼はその剣先を軽々と躲すのだらうと半ば事態を

樂觀視していた。

こんな事でこの程度の相手に遅れを取るはずが無いと信じていたのに。

ファドラーンは微かに身体を動かしただけで、確かにナイフの刃先が彼の右腕の上部を翳めた筈だった。

斬りつけた男はその利き手にファドラーンの左腕の手刀を受けてナイフを取り落とした所を、返す右足の蹴りを腹部に受けその場へとくずおれていた。

けれど以前のファドラーンは飛んで来た矢をも薙ぎ払う事が出来たのだから、これくらい避ける事ができない訳が無い。

一瞬、嫌な考えがよぎってしまった。

もしかして、私が足手纏いになっていたからは避けられるはずの刃を避けきれなかったの？

咄嗟に私をしっかりと捕まえているファドラーンの左腕を振り払い、ファドラーンとまだ睨み合っているクアーナ人との間に割って入ろうとしたのに、彼はそれを許してはくれなかった。

腰に廻されたファドラーンの左腕が難なく私を抱き寄せて、まるで肩でも組むように彼の身体の隣へと押し付けられてしまう。

「イエライシャ、落ち着いて。俺なら大丈夫だから」

耳元にそう囁かれて、それでも心配で彼を見上げる。

けれど彼は薄く微笑んだだけで、すぐに視線を目の前のクアーナ人達へと戻した。

動転したのか、それとも俺を庇おうとでも言うのだろうか。

俺とクアーナ人とが睨み合う間へ割って入ろうとしたイエライシヤをその気配だけで捕まえ、自分の傍へと引き寄せる。

視線を彼女へと落とすと、とても心配そうな顔をしていて微笑ましい。

「イエライシヤ、落ち着いて。俺なら大丈夫だから」

そう小声でその耳元に囁き、目の前のクアーナ人へと視線を戻した。

浅く切られた右腕は初めの鋭い感触から変わって、傷口独特の鈍い痛みのシグナルを送ってくる。

鼓動に合わせて出血している気配も。

斬りつけて来た相手は俺の右足の蹴りをまともに喰らって、まだ立ち上がれずにいた。

足下に落ちたナイフを視線で追うのだが、俺がそいつを踏み付けているのに気付いて悔しそうな顔を見せる。

「……これであんた達が傷害の現行犯だと……訴え出る事も可能だな。まあ、そんな事の為に敢えてその刃を受けた訳じゃないけど」

俺の言葉に、クアーナ人も訝しげにその瞳を細めた。

彼等の目の前に居るのは人数を頼んだ自分達に追いつめられて、しかもナイフで傷を負った男だ。

多少腕が立ったものの所詮は丸腰。

すぐに取り押さえて依頼主へ引き渡せばそれで済むとそう軽く思っていたに違いない。

俺としては、出来ればその依頼主とやらを突き止めたいのだが。

しかし今は何より同行のイエライシャを危険な目に遭わせたくはないし、ましてや動き出す時期としては尚早に過ぎる。

「自分達を囷にしたつもりは無いが……一緒に来てもらうよ。お前達がこのままこの辺りで嗅ぎ回ってくれては、迷惑なんでね」

自分でも嫌々だと言うのがはつきりと判る。

しかし、しなければならぬ義務を果たすように、ため息をついて傷付いた腕を持ち上げた。

衣服の袖下辺りが血を吸い込んで重い上に体温で生暖かく、馴染みの感覚とは言え気持ちが悪いくらい。

「……………」

呟くように簡潔に纏められた呪歌の一節を唇にのせ、その言葉に合わせ血まみれになった腕を上げて思い切りよく振り下ろす。

飛び散った血飛沫にイエライシャが悲鳴を飲み込む。

その気配とともに地面に吸い込まれていった俺の血潮は呪歌の贅となり、この場所に込められていた仕掛けを発動させた。

070 賛と歌 (後書き)

ちと短めですみません。

071 逃走

よく聞き取れなかった。

ファドラーンが何かを呟いたのに。

彼の口振りから、怪我をしたのは私のせいではないらしい事、何か理由があつてそうしたらしいとは推察出来たの。

でもそれに安堵してしまつて気が散漫になつていたのかもしれない。

もしも自分が大切な人の足手纏いにしかなれないのだとしたらと、無力な自分に愕然としていたのだもの、ファドラーンの言葉は救いの光明のようなものだった。

続いて彼は傷付いた方の腕を肩くらいまで持ち上げて、何かを叩こうとでも言うような仕草で振り下ろした。

今までに流れ出していた彼の血が、水のような鈍い音を立てて地面へと叩き付けられ、その鮮やかな血の色と生々しい音とに悲鳴を上げそうになつてしまった。

でも、それは声にはならなかった。

見慣れない真つ赤な血の色と、その鼻を突く匂いに身体が言う事を聞かなかつたから。

むしろ膝から力が抜けて、崩れそうになる身体をファドラーンの背中で支えているのが精一杯で。

そのせいで廻りの風景が変わつたらしいのに気付くのがかなり遅れた。

目からの情報よりも、刺すように冷たい空気と、街中では有り得ない新鮮で清浄な森林の香りに正気に引き戻されたと言う方が正しい。

いのかしら。

それに気付いて見回した廻りは最早薄暗い街の片隅、陰気な小径ではなくなっていた。

大して太くはないけれど、かなりの高さに茂った葉を持つ木々が私達を取り囲み、そして広く広がっていた。

「何処なの……此所」

当然のように口にしてしまった問いに、しかし答えは無かった。

それどころかしつかりと腕を取られて、見上げたファドラーンは既に走る態勢だった。

「静かに、すぐ此所から離れるよ」

そう言い終わる前に既に彼は走っていた。

すぐ後ろでクアーナ人達のうろたえた叫び声上がりはじめ、彼等もこの異常な事態に困惑しているのだと知った。

何度も下生えの草や木の枝に足を取られ、倒れそうになるのを時には引張り上げられ、時には抱きかかえるようにファドラーンのサポートを受けて、かなりの距離を走ったと思う。

木立の中、ひっそりと白い石が立つ所を見つけたファドラーンがそこへ向けて足を速める。

探るように彼が左手を動かしたので、答えるように握り返した私の右手に込める力が一瞬強くなった。

けて離さないように……そんなふうに感じられるその力に、そして彼の手のひらの力強さとその温もりと、全てにドキドキした。

もうとつくに息が上がっていて、鼓動は休息を求めて暴れている。それでも、疲労から来るものではないとはっきり言い切れるその感覚にもうどうしようもなくなった。

白い石の脇を通り過ぎるその一瞬、何か重い空気の中を通り過ぎるような、或いは見えない壁のようなものを感じたけれど。

ファドラーンが強く手を引いていてくれたから何とかそこをやり過ぐす。

そして、ようやく立ち止まったファドラーンの胸に、ただ何も考えずに飛び込んだ。

彼が驚いているらしい気配に更に満足して、そのまましっかりとファドラーンの胸を占領する。

耳をぴったりとくっ付けて私と同じように早くリズムを刻むその鼓動にしばらく聞き入ってから、ようやく心を落ち着ける為に深呼吸を一つ。

彼がそこで何も言わなかったら、私はこの感情の昂りのまま彼に返事を返していたかもしれないなかった。

ぐずぐずと何時迄も保留にしている……とても大切な事。

けれど突然の私の行動を、脅えていたからだど勘違いしたファドラーンが様子を窺うように覗き込んでくる。

「この先に休める所があるから、行こう」

心配そうな瞳のファドラーンと視線を合わせたが、いつもの事ながら彼には私が考えている事が判っていないらしい。

ちよっぴり悔しくて睨んでみたが彼には通じない。

判っているの、彼が私の安全と休息を優先してくれているのは、ね。

そう自分を納得させ、そして一瞬前のその浮かれるような感情の昂りから離れてしまった今は、咄嗟の思い付きのような自分の行動の大胆さに改めて頬が火照って来るのを感じていた。

幸いにもさっきまでの全力疾走のお陰で息も上がり、呼吸すらまだ荒い。

これだけ頬が赤くなっているでも不自然には見られないだろうと自

分を納得させると、先に立って歩きはじめたファドラインにエスコートされるように目的地へと向かった。

そしてまだ彼の左手は私の右手を掴んだままで。

一歩遅れてファドラインの隣を歩きつつ、じっとそれを見つめる。差し迫った危険はなくなったのだから、手を離してくれても良いだろうに、彼にその気配はない。

右手の自由を確保しようと思ったら、私は彼の手を振りほどかなければならない事になる。

この手を離してしまいたいのかどうかもしはつきりしないまま、彼と一緒に歩き続けた。

072 灯火（カンテラ）

境界線の目印であり、力場を形成させる為の要石である白い石、通称ウツザーが造り出すペリスタイルを抜けた所でようやく俺は走るのをやめた。

無事にその力場を抜ける事の出来たイエライシャの腕を引いたままだったから、彼女に何も異常が無いか確認しようと振り返った所で胸に衝撃を感じる。

それが俺の胸に飛び込んで来たイエライシャだと、判っては居たが、普段の彼女からは想像出来ない意外なその行動に余程此所までの出来事が怖かったのだらうと納得した。

どう言葉をかけようかと迷っていたら、ようやく彼女は深呼吸を一つ。

「この先に休める所があるから、行こう」

そう言葉を掛けると、胸の中の上気した頬の彼女は少しばかり不満そうに表情を作る。走って来たのだから当然だが、息が上がつている彼女を立たせたまま状況説明をする気はなかった。

手を繋いだまま、それでも俺が一步だけリードする形で目的地へと歩く。

着くまでにこの心を鎮めるつもりだった。

自分の胸の中で、真っ赤な顔で息を乱す彼女のその姿にかなり邪なシチュエーションを想像してしまった俺自身を戒めながら。

「前にもここに来た事があるの？」

何本かの木が倒れて、少し広くなった所が俺の選んだ休憩所だった。

倒木に腰を下ろしたイエライシャにそう問いかけられつつ、空間の廻りを巡って他の人間の痕跡が無いか確認すると、俺もようやくイエライシャの隣へと腰を下ろした。

血まみれの腕なぞ見せられないから彼女の右側に腰掛けようとしたのに、頑として彼女はそれを許してはくれない。

仕方なく左側に座った所で、やはり譲らない彼女に傷の手当を任せる。

さっきは飛び散った血に倒れそうになっていたのに歯を食いしばって傷口を見つめ、ペチコートの下に着用していたドロワーズのリボンで傷口より少し上を縛ってくれた。

止血点を押さえられない時の応急処置としてずっと親指を中に握り込んだまま強く握りしめていたから、実はもう大分出血は止まっていたのだが。

何とか処置を済ませたイエライシャが先程の問いの答えを待っている。

「……俺があ通路を使ったのははじめてだよ。あれはフィルダウスの民の緊急避難用なんだ。あの通りの近くにクアーナ絡みの建物があつてね、もしもあの辺りで何かあつた時には逃げ込めるようになつていゝんだ」

「で、ここはどこなの？ さっきの人たちも一緒に居たようだけれど、まさか……フィルダウスなの？」

こわごわ辺りを見つめるイエライシャについて微笑んでしまう。

「まさか、だろう。ここはルクアディナルファの神聖湖チュクンの畔なんだよ」

「確か前に、立ち入り禁止だって聞いたわよ」

「そう、だから都合が良いのさ。ルクアの民は祭祀王を最上として居るから彼の法には背かない。この辺りに居るのはルクアの民ではないとも言えるね」

「じゃあ、さっきの彼等は逃げてしまったの？」

「ここに来るまでの事を思い出して御覧。あの……白い石の辺りで何かを感じなかった？」

途端に不安そうな素振りを見せるイエライシャに記憶を辿らせる。戸惑ったように首を傾げつつ彼女は口を開いた。

「何か、目に見えない……壁のようなものを感じたわ、貴方が手を引いてくれたから……抜けられたみたいだったの」

「あの辺りにあの白い石は幾つか配置してあってね、特殊な場所を形成させてあるんだ。その中側に出口が開く。そしてその石の空間……ペリスタイル……からはフィルダウスの民しか抜け出る事はできないんだ。じきに俺達があ通路を使ったのに気が付いた奴が迎えに来てくれる、そしてさっきのクアーナ人も捕まえるよ」

「私は……貴方の国の民では無いわ。どうして出られたの？ 貴方が手を引いてくれたから？」

心底不思議そうなイエライシャのその胸元へと俺は指を突き付ける。

「この外套にはフィルダウスの辺境守、つまり俺の上司の守護印が結んである。これを着用している者は彼の加護を受けている者として保護を受ける権利を持つんだ。随分前に親父達が彼から下賜されたものだ」

瞬間イエライシャの動きが止まる。

息を呑む、そんな感じでまじまじと自分が着ているその外套を見つめて。

「多分、母さんは君が危険な目に遭わないようにとそれを贈ってくれたんだ」

「それは……とても良く分かるし、有り難い事だとも思うわ。けれど……いいの？」

「……何が？」

問われた事の意味が分からなくてそう問い返すと、いつになく真剣な表情でイエライシャは見つめてくる。

「以前に貴方の上司は王族だって言ってなかった？ そんな方から下賜された物を勝手に他人なんかに譲り渡して……貴方の両親に迷惑は掛けられないわ」

「……ああ、それね」

たしかに普通なら王族からの下賜品は家宝と言ってもいい。それを安易に手放す事は家名に傷を付けるに等しい行為だ。

場合に拠っては何らかの懲罰がある場合も考えられるだろう、とイエライシャが案じたのだと理解する。

そして彼女の故国ユグドラセアでも、この辺りの国々でも、下賜の品にはおおむね似たような配慮をするんだな、とも思った。

「大丈夫。下賜した本人がその場に立ち会い、許可を下した以上……誰にも文句は付けられないよ」

自分達を案じてくれたイエライシャに少し照れくさくて、簡単にそう説明するが彼女は再び絶句していた。

「イクシールのアルマ家にその方が居たの？ あの時？」

「……まあね」

視線を彷徨わせるイエライシャに、この外套を受け取った時の事を思い出しているのだろうとその様子を見つめていたが、思い当たる節が無いのか不思議そうな表情のままだ。

「分からないわ……まさかあの隊商か、アルマ家の家の中に居たのか？」

「さあね、俺の口からは言えないけれど……君が自分で気が付くのなら問題は無いな」

その問いをはぐらかして空を見上げつつ時間を計る。

さほど時間が過ぎたようには見えなかったが、夕暮れの早い山の事だ、すぐ薄闇に包まれてしまいうに違いない。

「ほら、これを羽織って」

随分日が傾き肌寒くなったのだろう、外套の上から自分の肩を抱いて少し身震いしたイエライシャに、俺は脱いだ自分のマントを羽織らせる。

丁度血止めの為に縛っていたリボンを一度外したついでだった。縛ったままでは壞疽を起こしてしまふ。流石にまだこの若さで利き腕を失うつもりは毛頭ない。

「以前にも言ったろう、俺達は結構寒さには強いんだよ」

案ずるような彼女の瞳にそう言い聞かせ、再び彼女の隣へと座り直すと、身に付けていた物入れから更に小さな小袋を取り出した。複雑に結んだ紐が鍵の役目を果たすその袋の中身もまた、辺境守の君からの下賜の品だった。

「何それ……凄い飾り紐ね」

「飾りじゃない、実用品だよ。解くのにコツが要るし、元通りに結び直す事は簡単じゃない。かなり防犯性の高い細工だろう」

「その袋を切ってしまったら？」

簡単に最終手段を提起するイエライシャに苦笑いで応じる。

「……それはちよつと遠慮したいな。こいつを創った奴の性格からすると……リスクは高く付きそうだ」

奴の事だ、なんか絶対仕込んでる、とあの澄ました顔を思い浮かべつつその可能性を確信する。

創る事を最上とする彼は、無意味な破壊を望まないから。

ましてやこれが俺以外の者の手に入っただけの場合の事を考えていないはずが無い。

そんな事を考えつつ左手だけでその紐を解こうとしたが、どうもうまく行かない。

見兼ねたのかイエライシャが手を出して、なんとか解き終えるとその袋を彼女に開けさせた。

「なに……これ」

袋から出てきたのは、イエライシャの片手でも握り込んでしまえる程の大きさの石だった。

かすれゆく夕陽を浴びて、それでも懸命に光を反射してくるその石を彼女は不思議そうに見つめる。

半分は白っぽい茶褐色の普通の石だ。

その石に抱き込まれてでもいるかのように、半分白く透き通って様々な色を見せる虹色の鉱石のようなものがほの白く光を放つ。

…オパレックスと呼ばれるこの石独特の反射効果だ。

「その宝石質の部分は蛋白石と言って……この辺りやフィルダウスでもよく採れる石なんだ。これは特殊な加工で実用に向くようにしたものでね……カンテラ「灯火」とよばれている。巻貝の形のものとかはインテリアとしても重宝されていてね」

左の手のひらに受け取ったそのカンテラを俺は自分の口元へと運び、軽く口付ける。

何をはじめめるのかと興味深げなイエライシャの視線がくすぐったい。

「俺の代わりに持っていて御覧」

あらかじめ決められた動作、この石の場合は口付けだな、で効果を発動させられるようになっていてそれをイエライシャの手のひらに預けて、その効果が現れるのを待つ。

やがて陽が落ちた薄暗がりの中、それは柔らかな光を徐々にその内側から現しはじめた。

「熱くはないのね、これは貴方達の魔法なの？」

それはけして大きな範囲を照らし出す強力な灯りではなく、自分達の周りを辛うじて照らす柔らかな灯りだ。

かなり長い事言葉もなくその灯りに見入っていたイエライシャは、やはりその石から視線を外す事なく口を開いた。

周りは殆ど闇に閉ざされている中、唯一の光の中で彼女の髪が淡く浮かび上がるのをぼんやりと見つめて、どう返事をしようかと迷う。

「その石自体はオパールとよばれるありふれた宝石だ。硬くもないし乾燥に弱いと言う弱点があつて……細工師には敬遠されがちな。ただ人為的な干渉で光を生む成分を持つ、数少ない種類というだけさ。君たちの言う……魔法……とは根本的に違うよ」

「……私には貴方の言う違いが、もう既に判らないの」

拗ねたような口振りの低い声で彼女はそう言うと、再び灯りを見つめて黙り込んでしまった。

073 灯火の導くもの

私の手のひらで「それ」は淡く柔らかな光を放ち続ける。

ときどきそれを手のひらに握り込んでみると辺りは真っ暗になり、手の中から抗議するように石の灯りがこぼれて、気が付くと私は微笑みすら浮かべてその石を見つめていた。

少し前の私は何となく重い気持ちで沈んでいたと言うのに、温もりの無いこんな光にすら癒す力はあるものらしい。

火も使わず、口付けただけで薄やみの中光り出す「石」なんて、私の知っている理屈にはあわない魔法のようなものだわ。

けれどファドラーンはそれをいとも簡単に、違う、と言い切ってしまう。

以前にも彼は道具も使わずに蠟燭の灯りを灯してくれた事があったわ。

あの時も魔法と言う言葉を歓迎してはいないみたいだった。

そして……思い当たる。

「どうして今日はこの石なの？ 貴方だったら簡単に火を灯せるはずなのに……不自由な手であんなややこしい組み紐を外してまでこれを使わなきゃならない理由があるの？」

唐突に質問を口にする、ファドラーンは少し目を細めて応じた。幾分見慣れたその表情に、彼が言葉を選んでいるのだとようやく分かるようになっていたので大人しく返事を待ち続ける。

「理由は幾つもあるんだけど……簡単な理由はここが神聖湖の畔だから、かな。この国の導主として崇められているのは水の神様だからね。その近くで火を焚くのはどうかと」

「血塗れの間が言ってもなあ……」

人の血が穢れだとして忌み嫌われるのは流石に私でも知っているわ、特にこんな聖別されるべき場所では。

溜め息混じりの私に、ファドが苦笑いを浮かべるのを見つめる。

「…だから、余計に気を使うんだよ。でもあの仕掛けはフィルダウスの者を助ける為のものなんだから…神様も困った者の為に目を瞑っていてくれるのさ」

「……神様と取り引きしないでよ」

つい不機嫌な声で応じてしまって、はっとする。

彼が気を悪くしたのではないかと思つて。

でも、見つめた彼はむしろ面白そうに笑っていた。

「いいね、そういう感じ方も。君たちの神様は至高の存在で……逆らうなんてもつてのほか…って類いだったよな。でも俺達の場合は違うんだ。彼等には彼等、俺達には俺達……それぞれの世界があり、法がある。時には助けてもくれるし……干渉し合う時すらあるんだ。互いが出し抜こうと競う事もね。厳密に言えば……君たちと俺達の「神」は存在の根ざす根本が違うんじゃないかな」

「何よそれ、難しい話なら私は分からないわよ」

すこし間をあけてそう返事をした。

何だかこんがらかりそうな話になりそうだったから。

「難しくはないさ、俺達の崇敬を受けるに値するものはこの世界そのもの……って話だよ」

ファドラーンは意味ありげな微笑みを見せるだけ。

それでも私の故国の習慣を意外にもよく知っているらしい彼等の事だもの、宗教についても詳しいのかも、とちよっぴり不公平な気がした。

「貴方の国の神様は？」

答えは無いと思っていたから、ただそう聞いてみた。

それについて私は何も知らない。

むしろ知っている人の方が少ないのだろうけれど。

「……フィルダウスの「神」は王国の祖を助け……追われる民を受け入れてくれた。罪人ではなかったのに、ただ……特殊な能力を持っていたと言うだけで隷属させられていた人々をね。「彼」はその人々を慈しみ時には愛しすらした。ようやく安住の地を得た俺達はその地を護る為に、外の世界の民とは一線を画す事にしたのさ。再び流浪の身にはなりたくないしな。隠された王国なんて……世人が思う程ロマンティックな理由がある訳じゃない」

肩を竦めてそう答えてくれたファドラーンの少し疲れた微笑みがなんだか辛かった。

腕っぷしは強いけれど決して争いが好きな訳ではなく、変に自信家でもなく、コンプレックスありまくりでやきもち焼きの……とても優しいひとだと分かっているから。

「そんな事まで……話してくれるとは思っていなかったわ。……ありがとう」

素直に感謝の言葉が出て来たのは自分でも意外だったけれど、そんなことはおくびにも出さずに、真面目な表情で見つめてくるファドラーンに微笑んでみせた。

彼が私を信用して大切な話をしてくれたのが何より嬉しかったから。

……そう、嬉しかったのだ。

いつだって彼はそうだった。

例えば言葉がすれ違って、ぎこちない時ですら彼は優しくかった。

何だかそれに気付けて、ようやく準備が出来たような確信にも似たそれをすんなり受け入れる。

そして、その確信めいたものを隣に座る彼に伝えようとしたのに。

けれどファドラーンはこの小さな空間の外を一心に見つめていた。

私が自分の事ばかりにかまけている間に何か起きたのだろうか。気配を探ろうとする幾らか警戒のこもったその瞳に、何か尋常でない事が起きたのかと心配になり、息を潜めてじっとしていた。

そして、自分の手のひらのほのかな灯りが暗闇の中では恰好の目印だと気付く。

「この……灯り……を消した方が良いのではない？」

緊張し集中している相手に声を掛けるのはとても勇気の要るものだった。

びくびくしながら、それでも辛うじて聞き取れる程度の声で問い掛ける。

ファドラーンは一瞬驚いたような顔をしたものの私が状況を悪い方へ受け取っているのだと理解してくれたらしい。

「心配させたみたいだね、すまなかった。そろそろ俺達の迎えが来る頃だと思って……様子を見ていたんだ。さっきのクアーナ人に手間どっているのかもしれないな」

先程までの緊張のカケラもない、優しい微笑みで彼がくれたその答えの中に、更に幾つもの疑問が浮かぶ。

「お迎えって……何処から来るお迎えなの？それにさっきのあの人は……一体どうなるの？」

そう矢継ぎ早に質問してしまってから、少しばかり彼が困った顔をしているのに言葉を止める。

また答えられない質問をしてしまったのかと逡巡していた私に答えをくれたのは、ファドラーンではない違う声だった。

074 迎え

「勿論、フィルダウスからの……ですよ。先程のクアーナ人たちは全て身柄確保完了です、ファドラーン殿。こちら側の損失はありません」

突然そう背後から声を掛けられて、文字どおり飛び上がってしまった。

相手が答えに困る質問をしてしまったのかと困惑していたし、何より今までの出来事で緊張していたのに。

けれど隣のファドラーンは当然のような顔で、その「迎え」の者と言葉のやり取りをはじめてしまう。

「随分掛かったな。あの程度の人数に手間どるようでは心もとないから……捕り手の人数を増やすか、配置換えが必要かと考慮していた所だぞ？」

「大して手間どった訳ではありませんが、一人ずつ処置の確認をするようにと……パドマさまのご指示でしたので」

少し言葉遣いが居丈高なのはファドラーンの方が立場としては上だからのようなだが、他にも指示を出す者が居るらしく、聞き慣れない名前に耳をそばだてる。

そして同時にこのお迎えの姿をも目立たないように気を使いながら観察していた。

歳はファドラーンと同じか、少し若いくらいだろうか。

灯りに照らされて見る限りでは、すっきりと後ろで纏めた黒い髪に明るい茶色の瞳の、何処と無く柔らかい感じの青年だ。

灰色の外套で身体を覆っているのでよく分からないが、やはり戦いに慣れた人なのかしら。

「……そうか。それで該当者は居たのか？」

「はい、2人居りました」

「2人？それにしても随分な烏合の衆だったようだが……どんな指示で動いていたか迄は探れては居ないのだろうか？」

「ええ、残念ながら。取り敢えず他の者が彼等を調べる為にここに残る手はまずです」

彼の答えにファドラーンはとても驚いたようだった。

何か彼の予想とは随分違う事態だったのね。

そう考え、再び目の前の青年に視線を戻し、そしてその彼と思いつき目が合ってしまった。

かなり愛嬌のある瞳が真っすぐに私を見ていて、じろじろと彼を観察していた自分のお行儀の悪さに居たたまれなくなってしまった。

こっそり人を盗み見るなんて、所謂貴婦人の行動としては失格もののだもの。

「それにしても、ファドラーン殿。お連れの貴婦人を紹介しては下さらないのですか？アルマンスールの若君がバーラートからお客人をお連れだとは伝え聞いておりますが……こちらのお方がそうなのでしょう？」

にっこりとそう微笑んで彼はファドラーンを促す。

私の好奇心を容認した上で、彼もまた彼自身の好奇心に従っているのだと推測してちよっぴり緊張する。

「……ああ、そうだった。イエライシヤ、こいつは北の塔門の守護者パドマさまの弟子の一人で……ヤハン・エク・ツイ・ラグヌス。さっきの仕掛けを使ってここへ来た者に対処する為にパドマから遣わされているんだ。さっきの石は……俺達がここに居ると言う目印にもなるから使っていたんだ」

思い出したと言う感じで、ファドラーンは彼を示してそう教えてくれた。

そして彼に対しても。

「ラグヌス、こちらはユグドラセアの貴族令嬢セシリア・グレンフ
オード嬢。我々はイエライシャと呼んでいる」

「はじめまして、よろしく。ヤハン殿」

「ラグヌスとお呼び下さい。こちらこそ、よろしく。イエライシャ
さん」

ファドラーンの紹介に合わせて立ち上がった私は、いつも通りの
故国の挨拶で応じた。

自分の胸に右手を当てて軽く頭を下げ、気さくに応じてくれるラ
グヌスにさつき感じた緊張が少しほぐれる。

「では、ファドラーン殿の傷の手当をしてからお望みの場所へお
送り致しましょう。どちらまでが宜しいですか？」

「……クティナンのアルマンスール家だろうな、当然」

「わかりました、傷は何処です？」

少しばかり事務的な口調になったラグヌスに、しぶしぶファドラ
ーンは右手を差し出す。

手当と言うからにはラグヌスには医術の心得があるのだろうか、
と見つめていると今まで腕に巻いていた包帯代わりのリボンを無造
作に外すと手をかざした。

いつか見た、ラウと一緒にだわ。

特に服の袖をめくったりもしないで、翳されるその手の下でファ
ドラーンの傷口は癒されているのだろう。

程なくしてラグヌスが翳していたその手をどけると、ファドラー
ンはいつものように右手で前髪を掻きあげた。まるで怪我なんては
じめからしていなかったかのように。

ただ、衣服に残る血糊がその名残だった。

「すまないな。あの小径の仕掛けの発動に必要なであれば、こんな
手負いにはならず済むんだが」

「そうですね、他の手段があればいいのですが。属性に関係なく使える仕掛けとしては……アレが手っ取り早いんです。効果も確実にすしね」

そしてラグヌスはふと、こちらを向いて付け足した。

「今のも見てもあまり驚かない所を見ると、誰かの癒しを御覧になった事があるんですね？」

「……ええ、私自身が……ラウに助けてもらった事もあるし」

あの時には意識は無かったから、本当は覚えては居ない。

けれど、きつとこんな風に彼も私を癒してくれたのだ。

「ラウ……殿ですか、彼もお元気ですか？」

「ええ……多分。昨日……ちょっといろいろあったのだけれど」

私が口にしたラウドラチャクリンの名にラグヌスは少しばかり眉を動かした。

そして彼の消息を訊ねられて、けれど、私としてははっきりとした答えを返す事ができなかった。

「パドマ殿は気付いておられるとは思いますが……きのう祭祀王様が崩御されたのだ」

言葉を濁した後をファドラインが補ってくれ、それには流石に得心がいったと言う表情でラグヌスもうなづいた。

「そう言う事ですか、分かりました。ではもう随分遅い時間ですからお送りしましょう。そうそう、ファドライン殿？ヴァル様に宜しくお伝え下さい」

其の口調はさっきまでの碎けたものではなくて、つい聞き耳を立ててしまった。

「……分かった」

低めた声でうなづいたファドラインを確認すると、ラグヌスは数歩私達から遠ざかろうとした。

再び聞き慣れない人の名を耳にしたものの、移動する彼の後に続

くのかと思って歩き出そうとした私を、どうしてだかファドラインの腕が捕まえる。

「行かないの、ファド？それに、さっきの、ヴァル様って誰の事？」
何だか不自然に彼の腕が私に廻されるので、びっくりして焦る。

この場を誤魔化そうと言うのでもないけれど、そう質問してみたが答えは無かった。

数歩先で立ち止まり、振り向いたラグヌスがにっこりするのがファドラインの腕の中からも見える。

「おやおや、役得ですね。ファドライン殿」

悪戯っぽい彼の言葉に頬が赤くなるが、役得って何よと疑問を抱いた所で世界が揺らいだ。

075 追求

文字どおり世界、いいえ私の周りが揺らぐ。

景色が不自然に歪み、瞳を閉じてでも周りの空気に名状し難い異常を感じる。

とっさに唯一手に感じられるものへとしがみついた。

それがファドラーンの腕だと、そして彼の身体に包まれるようにしてしっかりと抱きしめられているのだと改めて認識したのは、周りの異常が収まってからなお暫く経ってからだったと思う。

「……落ち着いた？」

目を閉じていたけれど、自分の周りの先程までの異常な空気が消えたのに気付いて深呼吸を一つ。

そして耳元にファドラーンの心配そうな声。

ようやく周りを、相変わらずファドラーンの腕の中からだったけれど見回すと、そこは見覚えのある場所だった。

こぎれいに整えられたアルマンスールの屋敷の玄関ホール。

さっきまで私達が居たのは馬で何日も掛かると言う神聖湖で……。

「……一体どうなっているの？」

ようやくそれだけが言葉になった。

とにかく訳が分からなくて、疑問だらけの顔でファドラーンを見つめていたのだと思う。自分の腕がまだ彼をしっかりと捕まえたままの状態で、はたからみたら単にいちやつしてる恋人同士ぐらいにしか見えない事なんて全然分かっていなかった。

所謂、溺れるものは藁をも掴むていう心境だったのに。

だからファドラーンがいやに嬉しそうな顔で私を見下ろしている、

その訳に思い当たったのはもう少し経ってからだった。

「取り敢えず、無事とは言い難かったけれど……帰って来たんだよ」

「それは分かっているわ、私が知りたいのはどうやってって事よ。」

今度は仕掛けなんて使っていないかったじゃない」

「さっきのあいっ……ラグヌスがその代わりなんだけど、転移の力を持っていてるんだ。俺は残念ながらその手の力を持っていないからね……だから目印の石を用意して待っていたと言う訳さ」

ファドラーンの説明にまだ納得がいなくて、ようやく彼の腕から抜け出す。

そして、しっかりと睨み付けてみた。

「でも、今日はあんな事態になるなんて……思っても居なかったはずなのに。何もかも用意が出来過ぎているわ」

「何があっても対応出来るように……準備に抜かりは無いって事だよ。ひとつ間違えばあいっ……クアーナの狗……に奴らが探し求めているものへの手がかりを与える事になってしまうのだから。俺達がそんなへまをしたら、何の為にここまで出張って居るのか意味が無いだろう？」

むしろ余裕で振り切るくらいの方が無けりゃな。と、呟いたファドラーンをやっぱりまだ少し納得いかない気分で見上げる。

そしてもう一度、さっきの質問を口にした。

「ラグヌスが最後に言っていた……ヴァル様って……だれ？」

見つめていたから、ファドラーンが少し眉を動かしたのにもちゃんと気が付く。

私なりの推測もあったのだけれどやはりきちんと確認を取りたかった。

ラグヌスは自分よりも立場が上らしいファドラーンの事を「殿」と呼んだわ。

けれど、その「ヴァル」と言う人の事は「様」と呼んだの。

特に敬意の籠った恭しい口調で。
つまり、そのヴァルという人が。

「君のこの外套を……俺の母親に下された方だよ。俺の母親には昔、とても中の良かった女友達が居てね……彼女はこルクアの民だったのだけれど。……彼女の為にと彼からの贈り物だった。その友達はまだ随分前に亡くなったんだ、俺たちとはやはり時間の流れが違うから」

分かっているの？
私と貴方の間の時間もそうだわ。

どう表現していいのか分からない恐怖心が背中から這い上がる。
胸が締め付けられるようだなんて言う陳腐な言葉ではなく、心底からの恐怖心。

無意識の言葉に依て穿たれた私と彼との距離は現実の身体では半歩もありはしない。

今の今まで抱き合っていたくらいなのに。

けれど、こうして言葉の端からこぼれる現実。

それはどれ程覗き込んでも底を見定める事の適わぬ、深淵そのものの。

彼はそれを自覚しては居ないのかもしれない。

「その……ヴァル様って方が貴方がたの上司なのね？王族の……」
「……ああ」

諦めにも似たため息について言葉を続けると、少しばかり緊張し

ていたらしいファドラーンの答え。

真っすぐに私を見つめて、ゆっくりとうなづく。

どうやら、彼はこの上司への私の追求の方に気を取られていたのだと判った。

「フィルダウス辺境守＞イレ・イフェく。俺達の上司にして……フィルダウスの次期国王……だよ」

「……嘘」

「嘘なんかじゃない。それこそ何の為に」

呟くように言うと、それを否定するのはもういつも通りの彼だった。

確かに王族だとは言っていたけれど、そんな重要な人だとは思ってもみなかったわ。

「そんな人が、私の近くに居たと言うの？」

これまでの間に知らなかったとは言え、その人に無礼な事をしていなければ良いのだけれどとか、そんな意気地のない事を考えている私が居て。

「フィルダウスへ行きたいんだろう？」

「それは……」

私の無様な心の迷いなぞ関係なく、畳み掛けるようなファドラーンの言葉。

「直談判って手もあるよ」

「片道切符が欲しい訳じゃないのよ？」

笑顔でそう言われても、納得出来なくて言い返していた。

それってつまり口封じと一緒にして事じゃない？

随分と彼等の事を知ってしまった私をフィルダウスへと連れていき、帰れないようにしてしまえば良いのだもの。

その言葉にしかしファドラーンは意外そうな顔をした。

「君が望めば戻る事は不可能じゃないよ？そりゃ……俺としては……君が居てくれた方が良いんだけど」

「もしかして……それってプロポーズのつもりなの？」
そこまで突っ込んだ質問をするつもりは毛頭なかったのに。

「もしかして……それってプロポーズのつもりなの？」

「ずっと前から、そのつもりなんだけど？」

すこし心もとなげないエライシヤの言葉にあっさりと、そう答える。

そうでなければ、ここまで彼女に詳細を教えはしない。

初めはエライシヤが「ヴァル様」の正体に気が付いたのかと思つて、流石にうろたえたのだが。

けれどもどうやらそうでは無さそうなので少し気を抜くことにした。何しろ、目の前のエライシヤは俺の言葉に反応して真っ赤になつてしまつていて、とても可愛らしかったから。

俺の言葉を納得させる為にもその華奢な身体を抱き寄せてしまおうか、と思つた所で階段を下りてくる気配に気が付いた。

落ち着いた足取りで現れたのは、俺達の帰還をすら当然のものだと言ふような顔をしたラウドラチャクリンだった。

「お帰り。あの仕掛けを使つたのだから無事ではなかったかもしれないが、戻れて良かったよ」

「大した怪我じゃなかったから、取り敢えずラグヌスが癒してくれた。それにしても……馬をスーイン卿の屋敷に置いて来てしまったな」

ラウドラチャクリンは相変わらず、穏やかな表情だ。

全てを把握している彼らしい物言いだ、俺は自分の忘れ物に気が付いて眉をしかめてしまった。

「ああ、それなら大丈夫。いまラトーとヨシユアが取りに行つているよ。ハルヴァイは捕らえたクアーナ人の確認に出た所だ」

「じゃ、今日俺がすべき事はもうないな」

「厨房の支度をしながらサヤが心配していたから、安心させてやっておくれ。それに……イエライシャのフォローもお前の仕事だよ？」

「仕事なんじゃないさ、俺が好きでしている事だ」

義務だと受け取られかねないラウドラチャクリンの言葉を訂正しながら、隣に居るイエライシャの様子をうかがう。

今の好きという言葉はどう受け取るのか興味があって見つめていたのだが、彼女は少し心ここに在らずと言う表情でラウドラチャクリンを見つめていた。

「……もしかして辺境守の「ヴァル様」って……貴方の事なの？……ラウ？」

どうやら、彼女は今までの出来事からの推測を答えにまで導いていたらしい。

確信を持って問いつめると言うのではなく、まだ幾分かの躊躇いも残るその問いかけだったものの、それに俺は正直に驚いた。

結論に辿り着くのが随分早かったような気がしたのだ。

「……その根拠は？」

当のラウドラチャクリンは至って平静なまま、穏やかな声と表情でイエライシャへと問い返す。

けれど、その視線は少し厳しいものだった。

「……貴方とファドラーンが、兄弟だと言うには……あまりにも……似ていないからよ」

彼女がちよっぴりふざけたような返事をしたのは、そのラウドラチャクリンの視線に対抗する為だったかもしれない。

けれどラウドラチャクリンの対応はにべも無かった。

「そんなものは理由にもならんだろう？ 似ていない兄弟ならば世の中に幾らもあるう」

「そんな意味で言ったのじゃないわ。ただ、ファドラーンとアルマ

ンスール家のご両親は本当に実の親子だと思えるの。けれど……父様のイスナードさんとラウ……貴方との間にはそうは思えない雰囲気があったのよ」

ちら、とイエライシャは俺に視線を向けたが、すぐにラウへと向き直る。

これから対する相手に向かって構えたようにも見えて、俺もいつの間にか強く拳を握っていた。

「私達がイクシールの屋敷にお世話になった時……私を滞在させる……と言った時のイスナードさんの視線がずっと気になっていたの。貴方を見つめた彼の視線がね。あれは……部下が権限のある者に、許可か指示を求める……そんな目付きだったわ。あの時からそれが不思議だったのよ。そして今日ラグヌスがファドに言ったわ。「ヴァル様」に宜しくって。つまり、それはファドといつも一緒にいるか、身近に居る人の事だと思い当たったの。そしたら、貴方しか思い浮かばなかったのよ」

ラウドラチャクリンの反応を待つように一旦イエライシャは言葉を切ったが、無言のままの相手に再び口を開いた。

「私がルツィエラさんからこの外套を頂いた時……貴方も当然あの場に居たし、一番積極的に勧めてくれたのも貴方だったわ。つまり、あれは私にこの外套を譲渡する事を認めると同時に、ファドのご両親にも手放す事を認める……そう言う意図があったのでしょう？」

立て続けにイエライシャは自分の推測を言葉にした。

はつきりとした口調で語られるそれが、間違っていないように居まいと自分の意見だと主張している。

その言葉を静かに聞いていたラウは、言いたい事を言い終えたイエライシャが一つ、大きく息を吐くのを見届けてから随分満足げな微笑みを見せた。

そう、滅多にお目にかかれない極上の微笑みだ。

しかし、次の瞬間公式の場でよく見せる厳めしい表情を浮かべ、それに相応しい改まった口調で話しはじめた。

「……よく気が付いた、と言っても良いのだろうか。まあ、周りが随分ヒントをくれたのだと思うが」

ちらりとその視線が俺を見たのには当然素知らぬ振りで。

「そなたの推測通り、如何にもわたしがフィルダウスの辺境守り、ルドラ・チャクラヴァルティン？イクシュヴァーク……ヴァルだ」

さらりと続いた言葉に、イエライシャも背筋を正す。

流石に緊張しているのは隠しようが無いけれど、意外と落ち着いた表情をしていたのが印象的で、ついそれに見とれてしまう。

更に彼女は名乗った相手に対して相応の敬意を表するものなのだろう、今まで見た中でも一番低く腰を落として実に優雅なユグドラセア風の淑女の礼を執る。

「……改めて挨拶を受けて頂けますか？」

「受けよう」

俯いたイエライシャのくぐもった声に、相変わらず厳めしい口調でラウ……ヴァル……も頷いた。

「ユグドラセア南部ヴォールゼントに領を置きますガイゼル・グレンフォードが次女。セシリア・イエライシャ・グレンフォードにございます。これまでのわたくしの無礼をお詫びすると共に、此所に到るまでの御身の寛大なる処置に心から感謝を申し上げます」

多分彼女が言いたかったのは、チャクラヴァルティンのプライベートに立ち入り過ぎたという自分の反省をも込めたものだったと思う。

そして出会ってからここに至るまでの、明らかに好意的な我々の対応に対するものでもあったろう。

彼の満足げな微笑みが、イエライシャが言いたかったその事をき

ちゃんと理解しているという証のようなものだ。

顔を上げたエライシャがチャクラヴァルティンの笑顔に気付いて安心したような表情を浮かべるのを、俺も微笑みを浮かべて見守っていた。

そしてチャクラヴァルティンの視線が俺に突き刺さっている……その訳に思い当たる。

「俺は……辺境守の君たるチャクラヴァルティンさまの……親衛隊の長。ファドラーン・クーフア・アルマンスール」

心持ち背を伸ばし姿勢を正して、そう俺が名乗るのを見つめるイエライシャは、さほど驚いては居ないようだ。

「……やっぱり軍人だったのね？」

「わたしの護衛であると同時に……フィルダウスにある我が領内の管理の一部をも預けてある。いずれ彼の父上が隠居なされし後は……我が腹心の大臣として務めて欲しいと思っているのでね」

「大臣……？」

なんとなく俺の正体には気が付いていたらしいつぶやきを漏らした彼女だったが、続けられたチャクラヴァルティンの言葉に今度は流石にうろたえた。

親父の事に付いてはあまり詮索してはいなかったようだ。

「ファドラーンの父……イスナードは王の重臣の一人でもある。もつとも……次代国王が寵臣……とのそしりもある程にわたしへの忠義篤い者故……その息子も同様に良く仕えてくれる」

チャクラヴァルティンの俺と親父へのかなり好意的な評価に応じて、いつもならないような臣下としての礼を執って彼の言葉へと応えた。

自分が忠誠を捧げている主人から、随分と高い評価を下されているのを知れば親父は喜ぶだろう。

何と言ってもチャクラヴァルティンは面と向かってそう言う事は言わないから、俺も実は初耳なのだ。

「これで……あらかたの名乗りは済んだ、と解釈しても構うまい。これから君がどうしたいのか、訊ねても良いのだろうか？」

そして次にチャクラヴァルティンが口にした言葉に、イエライシヤは一瞬だけ俺の方へと視線を向けた。

彼の言葉はイエライシヤに決断を促す訳ではなかったものの、これから先への彼女の覚悟を問う物のようにも聞こえる。

そして俺もそれを知りたいと思っていたから、息を詰めて彼女の返事を待っていた。

俺とチャクラヴァルティン2人の視線の中、イエライシヤは俯き加減の冴えない表情のまま。

勿論この問いを予想していたであろう彼女だが、その表情は彼女自身にもまだ明確な答えが出せていないのだと、手に取るように判るものだった。

「申し訳ありません……判らないんです。自分がこの先どうすべきなのか……何をしたいのか……」

消え入りそうな声で彼女は呟くようにそう答えただけ。

その言葉に俺は自分の腑甲斐無さを噛み締める。

俺を信じて欲しいと思っている、愛して欲しいとも思っている、その想いもまだ彼女に届いては居ないのだと感ぜられて。

それともその決心をさせる事ができない程に、俺と言う男は頼り無いのだろうかとも。

「君がそう望むのであれば……我が権限に於いて、君をフィルダウスへと招く事も出来るが……それが君の決断の一助となるかは判らないな。正直な所」

自分の暗い考えに落ち込みかけていたが、そう口を開いたチャクラヴァルティンに現実へと引き戻された。

かなり気前の良い申し出に、俯いていたイエライシヤも驚いた表情で顔を上げる。

「幻の都とも、隠されし楽土……とも世人が噂する我が王国だとて、君の故国と大して違いはせぬ。フィルダウスの民とて所詮は人間……君の知る故国の民と、そしてこの辺りの国々の人々とも……幾らも違いはしないのだ。その性質も、暮らしぶりも、そして……心の暗さもね。……わたしのように」

その言葉にイエライシャは顔を上げたまま訝しげに根眉を寄せる。幾らか自嘲的な笑顔をつくるチャクラヴァルティンの、その理由や心境を推し量る事は出来なかった俺も、彼のその物言いには少なからず驚いた。

だが沈黙はすなわち「肯定」の意になると思い、口を開いてしまった。

「誰も……御身の事を、そのように思っている者など居ません。でなければ……上帝が御身を継承者へと望まれよう筈は有りますまい」
「違うよ……ファド。彼はわたしを試しているのだよ。わたしが己の中に有る闇と、どのように折り合うか……をね。そうでなくともわたしは厄介な存在だ、彼の国にとっても……彼にとっても」

「俺は御身の昔の経緯を知りません……が、一緒に居る間の御身が御身ご自身でおっしゃる程厄介な存在だとは思えませんし、闇なんぞ……誰の心にもあるものでしょう」

少しばかりムキになったように言い募る俺を、ラウ……チャクラヴァルティンは面白そうに見つめている。

彼の口調に乗せられて、彼が聞きたかった事を言わされたような気がしないでもなかったが。

そしてイエライシャも俺の方をじっと見つめているのに気が付いた。

「貴方は……この方の事が本当に好きなのね」

「……イエライシャ？」

優しい微笑み付きでそう言われてしまい、うろたえると、チャク

ラヴァルティンの低い笑い声が追い打ちをかけてくれる。

「正直で……思った事をきちんと言葉にしてくれるのが彼の長所だ。わたしが過てる時には……きつと大きな声で諫めてくれるのもこの者だと、そう思っているからこそ、身近に置いて居るのだよ」

「……まあ、容赦はしませんからね。覚悟しておいて下さい」

明るいヴァルの笑い声に励まされてついそう口に出したが、王族に進言するなぞ正直命がけだ。

上下関係にかなりフランクなチャクラヴァルティンは、その辺りの危険性を何処まで理解しているのかが疑問ではある。

「さっき……ファドラーンが私をフィルダウスへと誘って下さった折に、片道切符なら要らない……と返事をしました。私が望めば帰していただくのを条件に……お国を訪ねさせていただく事は可能でしょうか？」

「不可能ではない……が、君を帰す時はフィルダウスに居た時の記憶を封じる事が、わたしからの条件となるが？」

俺とチャクラヴァルティンとのやり取りを聞きながら、ようやくイエライシャは進む道を決めたようだった。

しかし……自分の問いにそう応じたチャクラヴァルティンの言葉に動揺の色を見せ、瞬間俺へと視線を向ける。

困ったような、迷うような、その表情。

「仕方が無い事だとは思いますが、記憶を封じたら……貴方の事も忘れてしまうのかしら」

「……それは……」

見つめてくる途方に暮れた彼女のその表情に、口籠るより他に何が出来ただろう。

「ただの商人として、君をこの地より故国へと送り返す男としてならば……記憶に留める事も出来ようが、君がその男を選ばぬ限り……最早必要の無い記憶だろうか？」

「……判りました。条件には異存ありません、お連れ下さいますか？」

チャクラヴァルティンの感情を抑えた言葉に、ようやくイエライシャも言葉を返した。

けれど、まだ葛藤は残っているのだろう少し辛そうなその表情。その横顔を見つめながらまだ希望があるのだと、その迷いを嬉しく思ってしまう俺は不謹慎なのか、ただの身勝手なのだろうか。

「わたしは明日より暫くフィルダウスへと戻る。君の同行を認め……あちらでの案内役兼、護衛としてこのファドラーンも付けるよ」

「有り難うございます」

「では、わたしの客人として……そなたをフィルダウスへと招く事にする。我が館への滞在を認めるが、くれぐれもファドラーンの指示には従うように。ナムリ殿程ではないが無用な揉め事は起こしたくないのでね」

同意の印として頭を下げたイエライシャにうなづくと、事務所に向かうつもりなのか歩き出そうとして彼はこちらを振り向いた。

「明日の朝、朝食の後外出の支度をして待っていてもらおうか」

神妙な顔でうなづいたイエライシャを見届けると、チャクラヴァルティンはそのまま廊下へと姿を消した。

……後に残されたのは俺とイエライシャだけで。

「勝手に決めてしまって、怒っている？」

少しの沈黙の後、彼女はそう言って見上げて来た。

幾分俺の機嫌を気にしているらしいその素振りに、諦めの溜め息が出る。

「俺が怒る筋合いじゃないだろう？君は……希望通りに自分の行き先を確保したんだ、自力でね。ヴァルも俺も……君の意志を尊重しているんだよ」

「……ありがとう」

俺の態度を気にしていたらしいイエライシャは、そこでようやく

笑顔を見せた。

まあ、フィルダウス行きに関しては、俺としてももつと積極的な行動を取りたかったのは否めない。

それでもイエライシャがラウドラチャクリンの偽装を見破る為の情報の提供、という点では充分役に立てたと自負してもいいだろう。とはいえ、チャクラヴァルティンがこんなにあっさりと彼女をフィルダウスに招く事に同意したのが、正直意外だった。もっと彼女の意志がはっきりとしたものになってからかなと考えていた俺とはやはり思惑が違うのだと思い知る。

「とりあえず厨房に行こう。ほら、サヤが心配していたって……ラウが言っていただろう？」

俺とは多分に……違う物思いに耽っていたのだろうイエライシャを促して厨房へと向かう。

ここに戻った時間が遅かったし、他の者達も出払ってしまったているとなると今日の夕食はバラバラになってしまうだろう。

それに先にイエライシャを落ち着かせてやりたかったので、部屋で一人きりするよりは誰かと一緒に居た方が良さだろうと思ったからだ。

076 首肯（後書き）

思いのほか長くなり過ぎ。
区切れなかった。泣

077 状況

「お帰りなさいませ。ご無事を疑っては居りませんでした……流石に心配致しましたよ。さあ、お掛け下さいな」

安堵した顔で迎えてくれたサヤに促されてテーブルに付くと、すぐに彼女は簡単な夕食を用意してくれた。

「他の皆は先に食事を済まされましたの。お二人で最後ですわ」

彼女の言葉に既に遅い時間なのだと納得したのか、イエライシャも食事に手を付けはじめた。

その隣について、サヤは今日の事を色々と俺達に教えてくれた。

「ラトーがあのだの仕掛けが使われた事を感じして……すぐにミシエイルがあのだの聞き込みに行っただけです。その時に得られた情報は、歩行の二人連れとクアーナ人が数人という事だったのですが……この辺りで私達が知らないフィルダウスの民が居るはずありませんし、直接王国から来た者なら仕掛けなど使う必要もなく、自分達の自力で戻る事が出来るはずですよ。ラウ様もそれをいぶかしんでいた所へ、夕刻過ぎにスーイン様のお屋敷から……お二人が馬を置いたままだと連絡があつて……あなたの方が危ない目に遭ったのだと判ったのですわ」

サヤは珍しく饒舌だった。それだけ俺達の事を心配していてくれたのだろう。

「しかし、パドマさまからすぐに連絡は無かったのか？彼はラグヌス以下の者達に、クアーナ人を詳細に調べるよう指示を出しておられたようだ。俺達を迎えにくるのが遅れた理由を、ラグヌスはそう言っていたから」

「ラウさまは……何も言っては居られませんでしたわ？」

怪訝そうなサヤによく確信を持つ。

ラウドラチャクリンは既に知っていたのだ、あの仕掛けを使ったのが誰かを。

そしてその上で俺達に危険は無いと判断して、放置したのだ。

現場の処理が済み次第、パドマさまの配下が此所まで送ってくれるのを承知していたから。

「……どうかしたの？ファド」

不安げなイエライシャの声にふと我に帰って、思いっきり寄せていた根眉を元に戻す。

如何にも不機嫌そうな顔をしていたのだろう俺に、サヤも思い当たったらしく彼女は急に笑顔になった。

「ファド様がご一緒だったから、ラウさまも安心しておられたのですわ」

それを疑う訳ではないが、他にも彼の思惑を感じ取れなくもない。なんだか今更なんだが、かなり心配性の身内を持った気分になった。

「ねえ、ファド……教えてくれない？ラウ……ヴァルさまの事」

仕方なく大きな諦めのため息をついた所で、そう続けられたイエライシャの言葉にサヤが固まった。

「ヴァルさまって……イエライシャさんっ！」

「気付かれたんだ。随分……早かっただろう？そうそう、それで明日から……俺もヴァルとイエライシャのお供でフィルダウスに行くんだよ」

慌ててイエライシャを見つめたサヤに、俺としては微笑むしか無い。

「……情報源は貴方でしょう？」

どうしてだか俺には厳しい視線を注ぐサヤだが、一応俺の名誉のなけなしだが為に反論はしておく事にした。

「大半はね。けれど決定打を打ったのは俺じゃない。多分……ラグヌスだ」

そう言つてイエライシヤを見つめると、彼女も同意の印だろうか
うなづいて寄越した。

「大半はね。けれど決定打を打ったのは俺じゃない。多分……ラグヌスだ」

そう口にして、私を見つめて来るファドラーンの瞳が柔らかい。頷いてその言葉を肯定しながら記憶を辿る。

以前から、何かしら不自然なものを感じていたわ。

兄弟だと名乗っていた2人の間は勿論、親として接しているアルマンスールの主人夫婦からもそのぎこちなさを感じて居た。

目的があるグループなのだから偽装の親子関係なのかもしれない、と私は自分を納得させていたわ。

だからあのラグヌスの言葉は確かに決定打だったのだ。

ファドラーンの事は「殿」と呼んだラグヌスだったが、とある人物の事だけは「様」と付けた。

恭しいその呼称に一瞬ハルヴァイの態度を思い出してしまったのだ。

昨夜私を問いつめようとして、逆にラウドラチャクリンに論を封じられた彼。

あの時のハルヴァイの、ラウドラチャクリンに対する態度がまさにその、恭しいと表現するのに相応しいモノで。

以前からファドラーンが折に触れては話してくれる、彼の上司の話と微妙に近いと感じていたラウドラチャクリンがその人物なのは、と関連づけるのは容易かった。

そして……それに気が付いてしまったら、後先も考えずに問いつめてしまっていた。

むしろ意外だったのは、私の、あの程度の追求をあっさりと彼が

認めた事だった。

否定しようと思えば、幾らでも言い逃れようは有った筈だわ。
なのに彼等はそれをしなかった。

それはつまり、私の事をラウドラチャクリンも認めてくれている
と言うことなのだろうか。

「元々、おかしいと思ってはいたのよ。けれど……皆うまく取り繕
っているから、敢えて追求しないでいたのに。でも、夕べのラグヌ
スさんの言葉で……考えが纏ったの。そうしたら、彼以外にぴった
り当て嵌まる人が居なかったのよ」

探るような視線を向けてくるサヤに言い訳じみているとは思った
ものの、そう説明をする。

それは隣に居たファドラーンの想像通りの展開だっただろうか。

「では、初めから……ヴァルさまは貴女をフィルダウスに招くお心
づもりだった、と言う事ですわ。そうでなければ……このような隙
だらけのなさりようは考えられませんもの」

サヤの言葉に同意するようにファドラーンもうなづいてくれてい
る。

くすぐったいけれど、それには私も異論は無いの。

「でも、どうして？」

それだけが言葉になる。

隣で私を見つめていたファドラーンの表情が優しいものになり、
サヤですらふふつと意味ありげな微笑みを浮かべた。

その意味を掴みかねて、困った顔をしているのに2人はそれ以上
を教えてくれる気はないらしい。

「……で、彼の何を知りたいの？」

「じゃあ……取り敢えず彼の本名。アレでも略称なんでしょ？」

改めてファドラーンからそう尋ね返されてしまい、話をそらされ
たとは判っていたけれど、今までの経験からしていつか判る事もあ
るだろうと樂觀する事にした。

その代わりに当初の質問へと戻る事にする。

「長いよ、かれは父方と母方の二つの家系を継いでるからね。マンジュゴーシャ・ヴァイローチャナ・ルドラ・チャクラヴァルティンⅡイクシュヴァーク……どう？ ついでに言うなら年齢は聞かないで」ふざけたように付け足すファドラーンに抗議しようにも、長い単語に言葉を継げない。

「母方のヴァイローチャナ第三王家は母上の代で潰えてね、家門自体は王国の管理下にあるんだけど……今は彼が代理の主を務める事もあるんだ。現在彼の所領とされているものもその一部なんだよ。第一王家のイクシュヴァーク家は父上の弟君が王位と共に預かっているんだ。彼が即位する気になるまでね」

「次期国王って言うから、国王陛下はお父様かと思ったのに」

「先王が崩御なされし折に……フィルダウスの真の主との話し合いでそう決まったんだよ。彼は今のままでは王としての資格いや資質が十分ではないと言うので、国を出奔していた王の弟が中継ぎの王に立ったのさ。世継ぎ王子のままのヴァルは国土を守護する為に辺境守の任を希望したと聞いている」

「それで、どうして……年齢を聞いちゃいけないのよ」

込み入った事情があるらしいのは察する事が出来たが、ファドラーンの言葉には納得がいかない。

「……それを知って君の態度が変わらないのなら話すよ。でも今はまだ駄目だね」

取り付く島の無い彼の言葉にぷう、とふくれた私を宥めるように、サヤが熱いお茶をテーブルに置きながら口を挟んだ。

「相変わらず……表現が不器用なのですね、ファドラーン。代わりに私から少しだけ手がかりを差し上げますわ、イエライシャ。貴女が明日お訪ねになるフィルダウスには、チャクラヴァルティンさまのお屋敷を取り仕切るミュゼナ様と言う方がおられます。その方は

チャクラヴァルティンさまの乳姉妹であられたとか。うまくすれば……その方からお教え頂けるかもしれませんわよ」

恭しげなその口調に、宮廷の最奥に仕える女官の雰囲気を感じ取る。

そこまでがやはり彼等としての譲歩の限界なのだと悟り、この件についての追求をも諦めざるを得なくなった。けれど、さり気なく私を呼んだサヤの呼称から「さん」が抜けていた事に気が付く。それはつまり、私が彼等の仲間としての範疇に入ったのだと思ってもいいと言う事なのかしら。

「じゃあ代わりに教えて、ファドラーン。貴男は本当は幾つなのよ」
「……38」

肝心の知りたい事にばかり答えが得られないのはちよつと癪に触ったので、かなり強い口調でファドへと矛先を変えたが、不承不承吐き出された彼の答えに本気で驚いた。

だって、私の父ですら四十代に入っただけなのに。
同時に何かが胸の奥できしむ。

「本当に……長生きな人たちの国なのね」
なるべく平然を装ったつもりだった。

けれどそれ以上何か特別な事を聞き出そうという気も失せて、私はそのまま自分の部屋へと戻ることにしたわ。

送って来てくれたファドラーンの、何処と無く案ずるような気配もいまは何となく煩わしく感じられる。

「本当は……経験豊富な訳？」
「随分マナー違反な質問だな」

いつだったか私と彼との間で交わされた会話。

あのとき私を捕まえて抱きしめていた彼のあの暖かな胸を、そしてその想いも疑っては居ない。

……でも。

「まだまだ……道のりは遠そうね」

明日の事をもう少し説明しなければならぬので、再び戻った厨房でサヤはそう言って俺を見た。

イエライシャが求める質問の答えが得られなくて沈んだ顔になったのではないのを、俺もサヤもちゃんと判っては居るのだ。

けれど俺としては彼女の反応に不安を抱かざるを得なかった。

どうして本当の年齢を聞いた所で、そんなに暗い反応をするのかと。

「あの娘が貴方との年齢差を気にしていると思っっているのなら……もの凄いいお門違いよ、判っていて？」

何処と無く俺を責めているらしいその口調に、思い当たる節が無い訳ではない。

『私の方が先に……おばあさんになってしまうの？』

こんな時になって、ミシエイルの下した決断の重さをようやく理解する。

彼は王国よりも、愛する者とともに同じ時間を渡る事を選んだ。

それでも、未だ切り捨てる事の適わぬしがらみ故に此所に居るのだが。

俺にも同じような選択が出来るのだろうかと考え、一見穏やかな微笑みを浮かべるヴァルを思う。

俺がどんな決断を下したとしても彼はその表情を崩さないだろう。だがもしも、イエライシャを諦める為の言い訳に今の任務やこのしがらみを持ち出したのなら、どんな表情を見せてくれるだろうか。「そんな事を理由にしたら……即刻国外追放でしょうね。そんな根

性無し、あの方には不要ですわ」

何も言っていないぞ、と睨んでみたがサヤは表情で人を読むのをすっかり失念していた。

多分俺よりも既にイエライシャの心情に付いても多くの事を把握しているのだろう。

けれど自分の属性故に知り得た個人の秘密をおいそれと教えてくれるような人じゃないから、諦めのため息を吐くと、今日の穢れを落とす為に浴室へと向かった。

「よお、ファド。なんだか大変な一日だったな」

スーイン殿の屋敷に預けていた馬を受け取りに行っていた2人、ラトーとヨシユアを出迎えてくれていたらしいミシエイルと行き会ったのは、浴室から2階へと通じる階段までの間を繋ぐ廊下だった。事務所に行ったままのラウドラチャクリンに、戻った2人の事を報告に行く所だったのだろう。

大変と表現した彼に、俺もふざけたような仕草で、入浴を済ませ着替え終わって処分するつもり of 服を見せる。

右肩の辺りから下にかけて一面に血糊の付いたそれは、刀傷をぱっくりと口のように開けていた。

「お陰で一張羅が台無しさ。思ったより単純な奴らだったが……陽動なのか、脅しなのか判別が付かん。おまけに処置を受けていた者が2人居たと、ラグヌスからの報告もあるから……こっちも慎重にしないと」

「……そうか。ところでイエライシャは？」

「先に部屋へ戻ったよ。……俺と、ラウ……それと彼女は明日から暫く国元へ戻るから、後はお前とラトーな。ここの留守番を頼むぜ？」

「お前とラウ……ヴァルさまは当然として、なんでイエライシャが？……もしかして、彼女からの返事を貰えたのか？」

何だか我が事のように嬉しそうなミシエイルの態度に、かなり申し訳ないが暗い表情で首を横に振った。

途端に何を察したのか、彼は眉を顰めてしまう。

「残念ながら違う、彼女がラウの隠し事に気付いたんだ。ラグヌスの奴……こうなる事を判っていて、イエライシャの前で彼の名を言ったとは思えないんだが」

「あいつは……ハルヴァイと一緒に石頭だからな、ヴァルさまがフイルダウス国内におわさぬのが不満なのさ。きっかけがあれば……彼が国内に戻る事を承知している辺り、ハルヴァイよりも計算高いな。気を付けろよ、足元を掬われてからでは遅いからな」

「……そうするよ」

「それに……フイルダウスでのある意味……現実……を見てもらう方が、イエライシャにとっては良い事かもしれないしな」

心配そうにそう言うミシエイルに判っていると片手を上げて自分の部屋へと向かおうとしたが、そう付け足された言葉について振り返ってしまった。

ミシエイルは、やはり心配そうな表情で俺を見送っている。

何と答えたものか考えたがこんな時に気の利いた言葉が出てくる訳もなく、改めて手を挙げ直すと、そのまま自分の部屋へと向かった。

080 夢と本心と

とても嫌な夢を見た。

優しい微笑みのまま彼は私に背を向ける。

いつも通りの愛嬌をたたえた瞳が私から離れてゆく。

心は彼を引き止めたいと思うのに、どうしてもか身体は言う事を聞かない。

むしろ、私はそれ以上彼には関心が無いのだという素振りです。

飛び起きたベッドの上で、ドキドキする鼓動とそれよりも痛いくらい胸の奥が締め付けられて束の間呼吸が出来なかった。

はしたない位大きく口を開けてようやく空気を吸い込むと、ぶるぶると頭を振ってさっきの嫌な夢を頭から追い出そうとする。

昨日の、ラウドラチャクリン……ヴァルの言葉のせいだわ。

私の記憶を封じる、と彼は言った。

だから私は、彼が、ファドラインが私から離れる夢を見てしまったの？

「封じると言われて……忘れてしまう事が出来る程、私は薄情なのかしら」

眩くとベッドから出て窓を開けた。

同時に疑問が浮かぶ。

私が彼を忘れてしまったとして、彼は……ファドラインは……平

気なの？

高地特有の爽やかで冷涼な朝の空気を期待して窓を開けたのに、開けた世界は曇天で微かに湿った気配も感じられる。

今日はじきに雨になるのかしらと気分まで滅入りそう。

身支度を済ませて一階へ降り、厨房のサヤを訊ねようとしていたらその手前の玄関ホールでラトーとヨシユアに会った。

「ああ、おはようございます、イエライシャさま」

「おはよう、ラトーさん、それにヨシユア。早いね」

いつものように挨拶を交わすも、2人の態度はなにげにぎこちなく感じられる。

「昨日は大変だったね、体調を崩したりしてない？」

「ありがとう、いろんな事にびっくりしたけれど……大丈夫よ」

慎重に尋ねてくるヨシユアに、彼等が心配してしてくれたのだと察して、笑顔でそう返事を返す。

少なくとも私の今のダメージはあの一連の出来事では無かった。

「それならいいけれど……何かあったら、皆相談に乗るからね」

「ええ、……本当にありがとう」

笑顔でそう言ってくれた2人に改めて礼を言うと、今度はサヤを捜して厨房を覗き込む。

「あら、お早うございます。すぐ朝食の支度が出来ますから……ラウとファドを呼んで来て下さる？」

本当は彼女に聞きたい事があったのに、見越していたかのように用事を頼まれてしまい渋々2階へと引き返す羽目になった。

イクシールで会ったファドラーンの母、ルツイエラはこまごまと気を使ってくれる優しい人だが、サヤは自分の答えは自分で見つけなさいねって言う自立タイプらしい。

仕方なく、ファドラーンに訊ねようと彼の部屋をノックする。

「ああ、お早うイエライシャ。早速サヤに使われたの？」

少し間が空いたものの扉を開けてファドラーンが覗く。

「どうやら彼女の性格はお見通しらしいファドラーンの言葉に苦笑しつつ、彼が小さく欠伸を噛み殺すのに気が付いた。」

「どうかしたの？眠れなかったの？」

「いや、国に戻るのなら……何枚か書類を出しておかなければならない先があるから、それを纏めていたんだ」

「思いつきり寝不足って顔になってるわよ？」

至って平然としたファドラーンの返事にそう突っ込むと、彼はいつもの明るい笑顔で。

「ラウと違って俺は、書類と格闘するのは得意じゃないんだよ。……でもほら、朝一番で元気な君の顔が見られたから……少しは元気になったかな」

しれっと続けた言葉の後、頬に暖かく微かな感触。

無防備にしていた頬に口付けを落とされ、途端にその頬が火照ってしまふ。

「朝の挨拶」

抗議しようと睨み上げたのに、軽くそうあしらわれては怒る気さえ削がれてしまふ。

「って、イエライシャ……何処に行くの？」

「ラウの所、サヤは彼にも声を掛けてって言っていたもの」

怒っても今更始まらない相手をその場に残すと、更に奥のもう一部屋へと向かう。

慌てたふうのファドラーンの言葉にもそう返事だけを返し、教えてもらったばかりのラウドラチャクリンの部屋の前に立った。

ちよっぴり躊躇ったけれど、思いきってノックしてみる。

「……ラウ？」

ノックしたものの返事はなく、気配もないので訝しげに声を掛けてみた。

それでも返事はなく、もう一度ノックしようとした腕をファドラーンに軽く押さえられてしまった。

「……ファド？」

微かに面白がっている気配がして、ようやく私はサヤに担がれたのだと気が付いた。

ラウドラチャクリン……チャクラヴァルティンはとても早起きで、一緒に旅をしていた間一度として寝坊などした事が無かったのだ。

当然こんな時間に起きていないはずがなく、返事がないとなればここには居ないという事になる。

「もうとつくに彼は事務所だよ。まあ……俺の倍以上の書類を片付けたところだろうね」

「2人とも……ちゃんと寝たの？」

面白がっているらしいファドラーンをつい睨み上げてしまった。彼等の事を心配して見上げているのに、当の本人は涼しい顔で、ただ面白がっているだけのよう。

「もちろん、自己管理を怠ると……ひどい目に遭うのを承知しているからね」

「じゃあ……もういいわね？サヤの所へ戻るわ。彼女に聞きたい事もあるし」

素っ気なくそう言うのと彼に背を向けて、厨房へと歩き出そうとした。

けれど……すぐ後ろから伸びた腕に抱きすくめられてしまう。

「連れないなあ……けど、俺達の事を心配してくれていたのなら……嬉しいな。ありがとう……イエライシャ」

抗議しようとしたのに耳元へとファドラーンの言葉が注ぎ込まれ、微かに掠めるその吐息に鳥肌が立つ程の感覚を覚えてしまった。

いつだったか彼に抱きしめられた時に感じたのと同じ、痺れるようなその感覚。

息を詰めてそれをやり過ごそうとしたものの、身体が一瞬震えるのを止められなかった。

「……愛してる」

しかも突然そう告げられて、さらに狼狽えてしまった。

みっともないくらい驚いているだろう顔で振り返ると、ファドラーンは優しい微笑みのまま。

「だからこそ、君の選択を尊重するよ」

深い深い意味を込めた言葉。

啞然として、何時の間に彼が抱きしめていた私を自由にしてくれたのかも定かではなかった。

「溜め息なんてついて……どうしたの？」

朝食の後、玄関ホールで外出の為にラウドラチャクリン……本当の名はチャクラヴァルティンと言うのらしい……を待っていた私とファドラーン。

けれど、何を思い出したのかファドラーンは「ちよつと、忘れ物……」と再び2階へと上がって行ってしまう、彼と擦れ違うように現れた当のチャクラヴァルティンと共に今度はファドラーンを待つ事になってしまった。

食事だと呼びに行った時にファドラーンが言った事がずっと心に引っかかっていて、何気ない振りを装って皆と食事をしていても、実は何を食べたのかすらほとんど覚えていない。

改めて、そしてストレートに告げられたその言葉に偽りのカケラも無いのは十分に承知しているのに。

けれど未だにそれにすら返事を返せない私は、こうして彼を待っている間も何だか落ち着かなくて……こっそりと詰めていた息を吐き出した所をチャクラヴァルティンに見つかってしまったのだ。

「何でも無い……です」

いつも通りに返事をしようとしたものの、彼の正体を知ってしまった今となっては自然と言葉が固苦しくなってしまうのを止められなくて、下を向く。

自分の国の王族にすら会った事も話をした事すらないのに、あまつさえいつかと願った国の、いずれは王様になるかもしれないひとに最早今までのようなぞんざいな口なんて利ける訳が無い。

まるでちょっと近所へ出掛けるのだとでもいうような、外套すら羽織らないいつも通りの軽装の彼はそれすら見越していたかのように軽い口調のままだ。

「べつに君を取って喰いやしないよ？王宮以外でなら……今まで通りの態度でいいんだが」

「貴方の国へ行ってしまったら……そんな事出来る訳無いじゃない。そこまで私も礼儀知らずじゃないわ」

深呼吸してようやくそう言い返すと、彼がにやりといつももの笑みを浮かべる。

「解釈は君に任せるよ。それにしても、ファドラーンは君にまだ何もアプローチしていないのかな？君が自分の事を忘れてもいいなんて、殊勝に諦めの付く男じゃないからここまで追い詰めてみたのに」
「人の事で……遊ばないで」

今朝の私達の間で何があったのかを既に気付いているような彼の言葉遣いに、流石に少しむっとしてついいつもの調子で反論してしまい、慌ててチャクラヴァルティンを振り返った。

「そう、その調子」

ようやくペースが戻ったという彼の微笑みに、なんだか馬鹿らしくなってしまったのは何故かしら。

肩に必要以上に入っていた力を抜いていつものように言葉を繋いだ。

「見かけに抛らないけれど、貴方が……一番心配性なのね。そんなじゃ、早く老けるわよ？」

けれど私の言葉にチャクラヴァルティンが今度は少し変な顔をした。

「やっぱりこんな口調じゃ気に入らない？それとも、私……何か変な事を言ったかしら」

「……いや、なんでもないよ」

いつもと違う彼のリアクションを訝しく思ったものの、さらりとそう躲されてしまえば問いつめる訳にもいかない。

なにげに自分が口にした言葉が、何かしら彼に影響を及ぼしたのだとは判るけれど、その理由を推察出来る程にはまだ彼との付き合いは長いものではないのだから。

少し残念な気がして、軽く肩をすくめてみる。

「ご免、待たせたね」

急いで来たのだと知れる足音で階段からファドラインが降りて来たのはその後すぐだった。

「何を忘れたの？」

「まだ纏め終わってない方の書類。これをつくり直す事の方が骨が折れるからね」

愛用らしい剣を腰に帯び、いつも持って歩いている書類入れを軽く持ち上げてみせる。

おどけたように質問に答えるファドラインによりやく私は自分が失念していた事を思い出した。

「……私、身の回りの物もなんにも用意していないけれど、いいのかしら。今朝それを聞こうと思っていたのに……」

朝食前、ファドラインの突然のあの言葉ですっかり頭から抜けてしまっていたのだ。

タイミングが良いとは言えないファドラインのあの言葉。

意味ありげに彼を睨み上げると、誰の真似をしているのかにっこりと微笑んでみせる。

確かにフィルダウスに連れて行って貰える事にはなったけれど、すぐに戻るのか、何日も逗留する事になるのか、という詳細すら知らされては居ない。

けれどラウ……チャクラヴァルティンの立場からすれば、とんぼ返り出来る程に気楽な身分でも無さそう。

「何日……フィルダウスに居る事になるのかは判らないけれど、そ

の間の身の回りのものとか……用意しなくても良いの？」

「何も必要ないよ？」

「君はわたしの客人としてわたしの領内に留まるのだから、その間の事は全て……わたしに任せてくれれば良いのだが？」

あっさりとしたファドラーンの返事をチャクラヴァルティンの言葉が追う。

寛容な言葉だが確かに、貴族が客を迎える際……特に相手を庇護する場合……よく取られる手段だわ。

「何だか……どこまでも貴方のお世話になりっぱなしね、私」

流石に申し訳なくて頭を下げつつそう言葉にしてみたが、チャクラヴァルティンはいつもの微笑みを見せただけ。

それでもちらりと、となりに居たファドラーンの少しばかり複雑な表情を横目で見つめているのが気になるけれど。

「……どう致しまして。君の後見にはアルマンスール家でもいいのだが……わたしの名を背負っていた方が最終的には障害は少ないかと思っただけ」

少しばかり計算高い発言だが余計な波風は立てない方が良く決まっている、と彼の判断に納得しておく事にした。

取り敢えずファドラーンも当面はその上司の意向に従うつもりのようにだし。

「では、行こうか」

何の問題も無かったかのようにさらりとチャクラヴァルティンは言い放つと、私に背を向けた。

でも、何処から、どうやって？

見当が付かなくてとまどっていたら、彼の言葉に応えるかのようにファドラーンの腕が私の肩へと廻された。

咄嗟に昨夜経験した事が思い出される。

あの、表現しようの無い奇妙な感覚。

「……」

左腕を肩程の高さに掲げたチャクラヴァルティン。

いつもより低い声何かを呟くのを聞きながら、昨日と同様に襲って来た違和感をフアドラーンに縋るようにして何とかやり過ごすけれど、どう表現すればいいのか判らないその感覚に何だか、気持ちが悪くなってしまった。

周りの景色が一変しているのだろうかという事を察してはいたものの、胸の奥の違和感にフアドを頼って掴んだ指が離せない。

「イエライシャ、大丈夫か？」

落ち着いた彼の声になづいてみせたものの、顔は上げられなくて……彼の胸に縋り付くような形になってしまった。

「移動に酔ったようだね。王城からの『扉』を使えば良かったのだが……」

隣からそう言うチャクラヴァルティンの声が聞こえて、背中に暖かな気配を感じる。

何の名前だろう、またしても知らない単語が聞こえた。

けれど不快感によるめかないようにするのが精一杯で、背中の気配にも注意を払えなかった。

それが彼の癒しの暖かさだと気付いた頃には初めの不快感も大方が消えていて、ようやく私は顔を上げる事ができた。

背中に軽く手を翳したラウ……チャクラヴァルティンの癒しを受けて、多少顔色は悪いもののイエライシャは何とか顔を上げると周りを見回した。

「ありがとう……チャクラヴァルティン殿。フィルダウスに着いたのね？」

並んで立つ俺達ではなく、移動した先である室内を観察しているようでもあるその視線が部屋の中を壁に沿うようにしてなぞる。

ここは辺境守の館の中でもこういった移動して来る者を受け入れる為に使われる部屋で、部屋の四方の壁に扉がしつらえてある。

本当の出入り口はそのうちの2か所しか無いのだが、間違ってこへ入り込んでしまった者、もしくは招かれざる客を惑わす偽装の為に取り付けられているものだ。

間違った扉を開けようとすれば、不審者として捕らえられる事になる。

「辺境守の君の……ヴァルさまの屋敷だよ。この部屋は移動してくる者を受け入れる為の専用でね、わざとこんな地味な造りになっているんだ。まるで……地下室のようだろう？」

「何の為に？」

「陰気なこの部屋から出たなら、さして明るくもない外の景色を見ても……よもやこの国が地上の国では無いなどとは思うまい？ 敢えて地底の王国などと言う暗いイメージを持たせる必要も無いからだよ」

本来の血なまぐさい用途を俺とヴァルとの2人の誘導で誤魔化しつつ、イエライシャを部屋の外へと案内する。

先程の部屋とはがらりと変わって、明るい採光の施された半地下の廊下がスロープのように伸びているのに沿って本館に当たる棟へと移動する。

「移動の属性を持つ者や……王族ならば、大体何処の場所でも移動出来るんだけど。他人の家や土地の中へ勝手に入るのはどう考えてもお行儀が悪いからね。大きな館では大抵……こういった移動する者を受け入れる為のスペースを設けてあるんだ」

主翼の回廊へと移り、物珍しそうにきよろきよろと天井の高い廊下や柱を眺めている彼女は、半分くらい俺の話聞き流しているような気がする。

「余程珍しいものでもあったかい？造り自体は豪奢なものだが、建築様式はイクシール辺りの古い建造物と大して変わらぬものだよ」如何にも笑いをかみ殺している、といった風情のチャクラヴァルティンの言葉によくイェライシャは前を向いて歩く事にしたらしい。

仄かに頬が赤いのは、チャクラヴァルティンの言葉で自分がお上りさん扱いをされたと思ったからだろうか。

今度は背を伸ばして、貴族の令嬢に相応しいゆったりとした姿を見せる。

「無理して猫をかぶる事も無いけれどね」

つい微笑んでそう口にしてしまい、きっちり彼女に睨み上げられてしまった。

淡い金色の髪から覗く更に深みのある黄金色の瞳から目が離せない、そのまま見つめてしまったら、イェライシャは今度は気まずそうにふいと視線を外す。

彼女のその頬がほんのりと染まっているのを見つけてしまうと、少しは期待を持ち続けてもいいのかなと思えて、真面目な顔に戻れない。

収まらない笑顔のまま暫く回廊を進んだ所で、人の気配とともに

前方に見慣れた人影が現れた。

チャクラヴァルティンの侍女長ミュゼナの配下で、ヴァルの身の回りの世話をする事の多い侍女だ。

国内の一部の疑い深い関係者の誤解を受けない為にも、チャクラヴァルティンの侍女は意図して皆年配の女性で固めてある。

まあ、一部と言っても、嫉妬深い従妹姫の勘気を被らない為の処置だとは言うまでもないのだが。

華やかさに欠けると言う向きもあったが、これはこれで落ち着いていいとチャクラヴァルティンは気にも留めていないようだ。

「まあ、主人へあるじ」さま！ようこそお戻りなさいました」

はじめは呆気にとられたような表情だったものの、その侍女はすぐに腰を折ると丁寧な挨拶をしてみせる。

「ああ、ただいま。前触れもなく戻ったからね、ミュゼナにお小言を食らってしまっただろうが……お客人もご一緒だからと伝えておくれ。取り敢えず書斎に行っているから」

「はい、ご伝言承りました」

素直にうなづいて自分の上司の元へと報告に向かった侍女の後ろ姿を見送るでもなく、チャクラヴァルティンはいつも通りの歩幅で書斎へと歩いてゆく。

一瞬戸惑ったふうのイエライシャを促してその後に続くと、ヴァル曰く書斎、つまりは彼の執務室へと向かった。

083 破笑

さして明るくもない、とチャクラヴァルティンは言っただけで、屋敷の外も中もとても明るく感じられる。

窓の向こうに見渡せるのは広大な耕作地なのだろうか、明るい緑が目眩しい。

何の予備知識も無しに連れて来られたとしたら、この地を地上の土地と勘違いしてもなら不思議は無いかも知れない。

大きな開口を持つ窓がずらりと並ぶ回廊を幾つも巡り、階段も上がってようやく辺境守の君の書斎とやらへ辿り着いた。

豪華な造りの重厚なドアに躊躇したものの、招き入れられるままに足を踏み入れると、そこは書斎なんてモノではなかった。

「……これは書斎とは言わないのじゃない？」

「普通はね。けれどこの主がそう言い張るものだから、いつの間にかそれで通じるようになってしまったのさ」

独り言のように呟いた私に、フアドラーンの答えはすっかり諦めたような感じで。

見回すまでもなく、ここでもやはり大きな窓が外からの明かりを十分に取り入れているのだが、その開口部以外の壁を覆い尽くすように高い書棚が巡らされて、様々な書物や綴じられた紙や羊皮紙の束が詰め込まれている。

それこそ目一杯に。

そして窓寄りに設えられた重厚な造りの机。

落ち着いたマホガニーのその机にも、補助の為だろうかその隣に設けられた机にも、これでもかと言わんばかりに書類が積み上げられている。

この部屋の主がかなり長い間ここで仕事をしていないであろう事

は推して知るべし、だ。

「普通……こんな部屋は執務室とか言うんじゃないの？」

「この屋敷はあくまでわたしのプライベートエリアだから、書斎……でいいんだよ」

山と積まれた書類にため息をつきながら、そう……ラウ……じゃないチャクラヴァルティン殿下が応える。

これだけの書類に目を通すだけでも、何日掛かるか判らない。

これじゃあ、彼はすぐにはクティナンに戻れないわね、と変に確信が持ててしまった。

「大半は事後承諾でもいい書類だから、本当に目を通すだけでいいんだよ。残りはわたしがきちんと決裁をしないとイケないものだが……まあ、ファドラーン以下人足は確保する予定だから、大丈夫」

「……何が大丈夫なんですか？」

私の呆れたような顔付きから推察したのだろう、さらりとそうヴアルが独り決めてしまったらしい予定を続けると、その後ろでファドラーンが渋い顔でそう突っ込む。

たしかファドラーンはデスクワークは大の苦手だったはずだから、この人選は初めから彼を当てにしていけないと言う事なのかしら。

それとも只の嫌がらせ、かもしれない。

自分が一人で仕事をしなくちゃいけないのにのんびりしている人が近くに居たら、私だって少しは腹立たしいかもしれないもの。

「冗談だと言いたい所だが……少しは手伝ってくれるんだろう？」

「……少しだけですからね」

笑いをかみ殺していると一目で分かる上司の言葉に、ファドラーンは仕方無さそうにそう答える。

肩を落としているファドラーンのしおれっぷりが面白かったのだけれど、ここに来る以前にチャクラヴァルティンが言っていた事を思い出して、私なりになけなしの反論をしておく事にした。

「あら、それじゃあ……私の案内は誰がしてくださるの？たしか、辺境守の君は客である私の案内役として……ファドを付けて下さるとおっしゃったでしょう？」

「……イエライシャ？」

両方の腰に手を当てて、思ってもみなかったと言う意外そうな表情のファドラインと、いつも通り余裕の微笑みを浮かべたラウ……辺境守の君チャクラヴァルティン……とを睨むように、交互に見上げてみる。

睨み上げるとは言っても、所謂パフォーマンスなのは明らかでじきに私のそのポーズは思いも掛けないもので崩されてしまった。

「……ラ、ラウ？」

「ヴァルさま？」

ファドラインの声ですら呆氣にとられて。

はじめは喉の奥で堪えたような、笑い声、だったと思う。

だんだんと表面に現れたのは大きな笑い声で、初めて目にするその光景に対応出来なくて、ただ立ち尽くしてしまった。

彼が笑うと言え、せいぜいが唇を少し動かす程度の微笑み程度しか見た事がない。

彼の明るい笑い声を聞いたのすら初めてだった。

隣に居たファドラインですら同じように驚きの表情を見せている所からしても、声を出して笑う彼の上司が如何に珍しいかを物語っているわ。

呆氣にとられたまま、ひとしきり笑ったヴァルが呼吸を整えるのを見つめて、そんなに私の言った事が面白かったのかとかなり複雑な気持ちになっていた。

「何がそんなに面白かったのか知らないけれど、そこ迄笑うなんて……少しばかり失礼だと思うわ？」

「それは……申し訳なかったね。だが、ここ迄笑ったのはほんとう

に久しぶりだ、涙が出てしまったよ」

余韻を引きずって掠れ声の彼は、目尻を拭いつつ……本当に涙が出る程に笑っていたのらしい……背筋を正した。

「もう、本当に失礼なひとね」

呆れつつ膨れっ面で追い打ちをかけると、今度はにやりと落ち着いた微笑みを見せる。

「随分と楽しませてもらったから、そのお礼も兼ねてファドラーンを自由の身にしてあげるよ。ここに居る間……公式な行事などにわたしの用事で随員として付き従う場合を除いて、彼を君の専属の守護騎士として任ずる」

そう続けた時のチャクラヴァルティンはもうすっかりいつもの彼で、さっきの笑い顔とのギャップが激し過ぎて言葉に出来ない。

「しかし、ヴァルさま……」

私の態度と、予想外の彼の反応で、呆気にとられると言うよりは何となく自失していたようなファドラーンが、ようやくそれに異論とはとても言えない言葉を挟んだ。

「問題は無いだろう？ 当分……公式の行事は無い筈だから、お前はこれで……こっちに残している親衛隊の部下とイエライシャとに時間を割けばいい訳だし。わたしはここで書類と睨めっこだから、とりたてて護衛の必要は無いしね」

「……信用出来ませんね。あなたが……大人しく一人でじっとしていられるタイプだと確信が持てれば、俺も余計な心配をしなくて済むんですが。残念ながら、今迄そんなあなたを見た事が無いので」

狼狽えていたようだったファドラーンは、それでも何とか態勢を整え伸ばした背筋で上司への反論を試みた。

「大丈夫だよ。これだけ書類を溜めてしまったのだから、ジェイルも他の者も……わたしが怠けるのを許してはくれないだろうし。ミユゼナの目を眩ませる事が出来る程、わたしはかくれんぼがうまくはないしね」

「……そうですね。祭祀王様の状況が差ししまっていた事もあり、随分と大目に見ては居りましたが……お戻り下さった以上はきちんとお仕事をして頂かねばなりませんわ。わたくしから逃げられるとは……お思いになりませぬよう」

難なくフアドラーンの反論を言いくるめたかに見えたチャクラヴァルティンの言葉にそう続いたのは、穏やかだけれどしっかりとした女性の声だった。

勝手な関心だけど、フアドラーンの自由が掛かっているらしい2人のそのやり取りにすっかり気を取られていた私は、その声の主の気配には全く気が付いていなくて。

「おや、来たね？ ミュゼナ」

そう微笑んだチャクラヴァルティンの言葉に、慌てて振り向いた先に居たのは貫禄のある初老の女性だった。

貫禄とは言っても嫌みが無いのは、大貴族の使用人にありがちな驕った上の尊大な態度ではなくて、自分の職務に忠実で且つそれに自信と誇りを抱いている、そういう雰囲気纏っているからかしら。彼女の見た目の姿は決して若いとは思えないのに、きちんと結い上げられた不思議に艶のある茶色の髪が目を引く。

『……鍵を差し上げますわ、貴女が明日お訪ねになるフィルダウスには、チャクラヴァルティンさまのお屋敷を取り仕切るミュゼナ様と言う方が居られます。彼の方はチャクラヴァルティンさまの乳姉妹であらせられるとか。もしかしたら……』

昨夜、そう恭しげな口調で語ってくれたサヤの言葉がああ時の彼女の表情とともに思い出される。

乳妹、だと聞いていたけれど、見た目はミュゼナの方がチャクラヴァルティンの母親程にも歳が違う。

そして鋭いそのまなざしは淡い藤色で、故国でよく見た花の色に

似ている、と思った。

雪深く厳しい冬を越え……春の最初に開く花。
春を呼ぶ花として……春の祭りの主役となる。

その瞳で射るような厳しい視線でチャクラヴァルティンを見つめていた彼女は、すぐにその視線を外して私へと目を向けて来た。

「この辛口の彼女が……わたしの腹心とも言える侍女長のミュゼナだよ。こちらはユグドラセアの貴族令嬢イエライシャ嬢……ラトーからの報告が届いているとは思うが、わたしの客としてしばらくここへ滞在するから。その間の部屋と世話を頼むよ」

ここ迄の厳しい言葉とその態度から、同様にその瞳に晒される覚悟をしたのだけれど、次に続いたのは優しい言葉と柔らかな口調だった。

「ようこそフィルダウスへ、お客さま。気ままなお館さま故……色々と戸惑う事もありでしたでしょう？こちらではわたくしとその……ファドラーンが主にあなた様のお相手をさせて頂きますわ。わたくしは辺境守の君の侍女頭ミュゼナと申します……お見知り置きを」

「セシリア・イエライシャ・グレンフォードと申します。よろしく」
優雅に挨拶されて、負けないようにと故国風の礼を執りそれに応えた。

顔を上げるとミュゼナと視線が合い、微笑んでくれた彼女の心遣いに素直に感謝が込み上げる。

見知らぬ土地でその地の領主の庇護を得ているとは言っても、冷遇を受ける事もなくはないのだ。

シュヴァーゼに於ける私のように。

ましてやこの国が抱える特殊な事情からしても、外からの客なぞ疎まれても文句は言えないくらいなのに。

「まったく……おまえに掛かるとわたしも形無しだね。イエライシ

ヤ、そのミュゼナがこの屋敷の影の主だからね、何でも入り用な物があれば彼女に言っておくれ」

「無論、辺境守の君のお客さまに不自由はさせませんわ」

溜め息とともにそうチャクラヴァルティンが言うのを、謙遜するでもなく受け止めた彼女の言葉にその自信を感じ取り、私は唇の端が綻ぶのを隠せなかった。

「それでは……後は任せるよ、ミュゼナ」

彼女の態度全てを容認しているらしい彼はそう言っとうなづくと書斎の机へと向かうことにしたらしく、ファドラーンとミュゼナに促されてその部屋を後にする時には、その背中が見えただけだった。

084 案内

「まずはこの屋敷でお過ごし頂くお部屋へご案内致しますわね。何か質問がお有りならば……わたくしとファドラーンに答えられる範囲でお答え致しますが？」

書斎からの長い廊下を導かれるままに歩いていた私に、そうミューゼナが振り返って言う。

何処に案内されるのだろうかと考えていた正にそのタイミングでの問い掛けに、喫驚しつつ絶対このひとは人の心が読めるのだと、妙に確信を持った。

以前にも同じように絶妙のタイミングで思っていた事を言い当てられた事があったからかもしれないけれど、フィルダウスの民は何処かしら自分とは「違う」のだという思い込み故だったかもしれない。

それにファドラーンが、実は見かけ以上に凄く年上だったと言う事実もその一端を担っているのは否めない。

「いろいろ……知りたい事があったんじゃないの？」

迷って泳いだ視線は自然と隣を歩くファドラーンの横顔に留まっていて、日に焼けた頬を見つめてしまう。

その視線を感じたのか、私の方を伺う素振りも見せないままそうファドラーンが口を開いても、どう何から尋ねれば良いのかすら判らない。

「その筈だったのに……私はここで何をすれば良いのかすら判らないのよ？何を尋ねれば良いかなんて……見当も付かないの」

「……そっか」

意気地のない私の答えに、ファドラーンは短くそう答えただけ。

「ここにヴァルさまがおいででしたならば、先程以上に笑って下さ

いましように……惜しいこと」

ミュゼナの皮肉るような声がして、慌てて前に行く彼女の背中を見つめる。

私の反応を伺うように一瞬だけ彼女が振り向き、目が合った彼女の瞳は言葉とは裏腹に柔らかい光をたたえていた。

「明確な目的の無い方であっても、お館さまがお認めになり……お連れになられたお方故、この館の者は貴女を歓迎致しましてよ。ましてや主人さまのあのようには朗らかな様を拝見致したのは実に久しぶりですから、わたくしとしては……貴女には当分こちらにおいていただきたいですわね」

「……え？」

どうやら、チャクラヴァルティンの笑う姿を珍しいと感じるのは私達だけではないらしい。でも何だか彼女の物言いには引っかかるものがある。

「歓迎して頂けるのは嬉しいのですが……私は道化ではありませんわ」

「無論でしょう。あの方が道化に惑わされるようでは困りますわ」先程の皮肉とも取れかねない言葉に対抗するつもりではなかったが、黙って引き下がる訳にも行かなくて口にした言葉に、間髪入れずにそう返される。

「ミュゼナ」

少し強い口調のファドラーンはまるで彼女を咎めているようだったが、ミュゼナの声は微笑みを含んだままで。

「あの方にとってこの地での慰めが少ないと言う事は事実ですが、誤解なされないで頂きたいですわね。あの方は道化を愛でるだけの者であってはならないと……それを強く自身に戒めておられる方です」

「……だからあんな仏頂面になってしまったのね」

つい、そう口にしてしまい流石に今度こそミュゼナを不快にさせ

てしまったかなとひやりとした。

自分の主人にかなりな誇りを抱いているらしいミュゼナの言葉だったが、その言葉の裏側を見れば、愉しみとか心を癒すモノの無い殺伐とした環境なのだろうと思えてしまったから。

流石にじろりと睨み付けるようなミュゼナの視線を何とか受け止めつつ、どうやら隣ではフアドラインが言葉もなく笑っているらしいのを感じ取る。

仮にも自分の想い人が困った状況に陥っているのに、呑気に笑ってられる彼に無性に腹が立って、隣を歩くその無防備な脇腹について肘を喰らわせてしまっていた。

勿論かなり手加減をしたし、彼が躲すのを承知の上でのじゃれ合うようなものだったから、案の定彼がそれを難なく躲して更に笑うのを睨み上げて見せる。

「まあ……その物怖じなさらな所がお気に召したのかしらね。それにしてもフアドライン、随分余裕たっぷりだね」

少し厳しい瞳ではあったものの、やはり微笑みのようなものを見せながら意味深な事を言うミュゼナにもう少し導かれて一つの部屋へと辿り着いた。

「お客さま用にこちらの部屋をご用意させて頂きましたの、中をお改め下さいな。一通りの日用品は備え付けてございますが、他にお好みのものがありましたら遠慮なくお申し付け下さい」

扉を開けた彼女に促されてその中へと入り、必要以上に広い部屋と豪華なその内装に流石に気後れしてしまった。

壁面を覆う何枚もの大きく縦長なタピストリーは何かの物語の一場面づつだろうか、赤い色を主体に纏められたそれが室内の淡い色調を引き締めている。

さらに窓には色目を押さえたドレーパリーとドレープカーテンがどっしりと重々しく掛けられている。想像以上に贅沢な造りの室内

には、やはり同じように統一された色調の家具が重過ぎない間隔を取って配置されていた。

初めの間はリビングとして使えるようになっていて、低いテーブルと座り心地の良さそうなソファセットが中央に置かれているだけだわ。

縦長なタペストリーの複数の隙間には幾つものニッチが穿たれ、その窪みには照明用の燭台とインテリアとしての美術品が交互に配置されている。

「この奥は？」

多分寝室だろうとは思ったものの続くドアを示して尋ねると、したり顔のミュゼナの返事が返って来た。

「寝室と……その一角にクローゼットを設えてございます。その奥には浴室もございますので、ご自由にどうぞ」

「浴室？」

「夜会などへおいでになる時は、仕度は侍女に手伝ってもらうと良いでしょうから、お申し付け下さいね」

にっこり当然のように言われて、かなり困る。

「……ご招待いただく当てもありませんし、何の支度もしていませんから」

それにそんな所へ出て行っても見せ物のように扱われてしまうのでは、と妙に気弱になってしまっただけでそう答えるとミュゼナはびっくりしたような顔をしていた。

「辺境守の君が、地上の女性を伴ってご帰国されたとの知らせは既に王の元へも届いておりますから、じきに何らかの動きがあるでしょうし……お館様もそれを待っておられるのだと思いますわ」

私はそんな事の為にここへ来た訳ではないのだけれど、そう顔に出ってしまったのかしら、ファドラーンが如何にも面白そうに笑顔を見せる。

喉を鳴らすような笑い声付きのその微笑みには、私の彼に対する

第一印象だった爽やかさのカケラが無くて。むしろ、何か企んでいそうな雰囲気すらするわ。

「お部屋の確認がお済みならば、もう一か所ご一緒に下さいますか。お針子を手配してありますから」

「お針子？」

「そうですわ、でなければ明日は何をお召しになりますの？」

その準備をしようと思っていたのに、ファドラーンが突然あんな事を言うから……。

と考えて、連鎖するようにあの時の彼の言葉を思い出してしまい、頬が上気してしまうのが自分でも判る。

「お客人に便宜を図るのはあるじとして当然の義務ですから、どうか……お気になさらないで下さいな。それにフィルダウス風の衣装にもご興味がおありでしょう？」

様子を伺っていたミュゼナはどう解釈したのか穏やかに宥めてくれるのだが、奇妙な居心地の悪さはちっとも変わらなかった。

085 衣装部屋

再びミュゼナの後に続いて、与えられた客室からかなりの距離を歩いた所へと案内された。

大きな屋敷だし、建物の配置も知らないのでここがどの辺りに位置しているのかはとうに判らなくなっている。

「先にこちらにご案内した方が良かったかしら……」

呟くようにミュゼナが扉を開けると、私はその先の光景に暫く言葉が出なかった。

正直、呆れたような表情になっていたのではないか、とも思う。開いた扉の先にあったのは、かなり広い部屋とその中を埋め尽くす程に並べられた色とりどりの衣装だったから。そして、待ち構えるように四人の年配の女性達。

「お待ちしていました」

彼女達はそう言葉を並べ、次には手にしていた何着かの衣装と私とを明らかに見比べている。

「金髪の方だと伺っていましたが、思ったよりも淡い色合いの髪の色ね。瞳の色も綺麗な金色だから……本当に似合う色はかなり限定されてしまうかしら」

そうなのだ、この髪と瞳の色の組み合わせはどの色とも相性がいのように見せかけつつ、実は結構色を選ぶ。あまりそう言う事にこ

だわれる環境ではなかったもので、どれ位微妙な色が本当に自分に似合うのか深く追求しては居なかったのだけれど。

「イエライシャ、じつとしててよ？」

ふと、隣からファドラーンの声が降ってきて。

近いなと思った瞬間、私が身に着けていた外套……ファドの母ルツイエラから譲られたものだ……が肩を外され、するりと地に落ちていく。

隣りにいたファドに脱がされたのだとは咄嗟に理解したけれど、意図は汲めなかった。

確かにずつと着ている訳にはいかないものだったが、なにも今脱がされなくとも……。

「ソレが貴方の決断ということなの？」

焦るような気恥ずかしさにあたふたしている私を他所に、思いのほか真面目な声を出したミュゼナ。

誰に問うているかと思えば隣りにいるファドラーンが静かに頷くのに気が付いた。

「既に決めてる。ヴァルさまとも確認済みだしね」

「そう……」

ミュゼナの反応は落ち着いている、でも今の会話の意味が私には分からない。

「では御衣装を選びましょうね」

先に部屋にいた女性がさりと事態を進めてしまい、問う事が出来なかった。

しかも慌ただしく、寸法を測られはじめてしまう。

この場で唯一の男性という立場に遠慮したのかファドラインが用事を口実に部屋を出た途端、有無を言わず旅着を兼ねて着ていた簡素なドレスとその下に何枚も重ねていたペチコートのうち薄手の一枚を残して、ドロワーズさえ脱がされてしまった。

呆れる程の手際の良さで採寸を完了させると、色目が合うと見繕われたかなりの数の衣装を次々と宛てがわれ、着せ変え人形宜しく袖を通され、細かい寸法を直される。

幾度それを繰り返しただろう。

流石に何度もドレスを脱いだり着たりを繰り返したので、力を入れていた足が痛くなってきてしまった。

「……これくらいでいいかしらね。シンプルなものはずぐに仕上がるし、取り敢えず今夜の夕餉にはこれがいいかしら」

満足げにミュゼナが示したのは、特にサイズの直しも必要ないくらい私にピッタリだった衣装だ。

深い緑の生地に金色の刺繍が縁取りであしらわれているもので、落ち着いた雰囲気のはウエストのやや上で切り替えが取られ、足さばきも楽なように裾は広くゆったりとしている。

その下に身に付ける長いペチコートは若草色で、上衣より少しだけ長めに作られていてドレスの裾から覗くのが可愛らしい。

けれど今まで私が習慣として身に付けていたドロワーズはこの国ではあまり用いられないと聞いて、少し淋しいような心許ない気持ちになった。

更に揃いの生地で作られた柔らかな靴も、皮で裏打ちされたものを素足にそのまま履くのだから、身軽と言うよりはあまりに無防備な印象が拭えない。

「……なんだか落ち着きません。脚がとても……無防備で……」

正直にそう告白すると、ミュゼナを始め皆穏やかな微笑みで答えてくれる。

「大丈夫、すぐに慣れますよ。これに馴染むと地上の装いが辛いと、ファドラーンの母上もよく零しておいででしたもの」

「ルツィエラさんが？」

問い返しながらも、彼女らしいと思えてつい微笑んでしまった。けれど、その後に続いた言葉に正直うろたえる。

「それでは……これらの装束は順次お直し致しまして、お部屋の方へお届けしますわね」

「でも、こんなに沢山のご衣装を直してしまったら、お返しする訳にも行かなくなってしまいます。すぐに戻る事になるかもしれないのですから」

涼しい表情でそう纏めるミュゼナに縋るような口調でそう訴えたのに、彼女はあっさりと私の言葉を一蹴してしまう。

「お館様のあの様子では、すぐにルクアディナルファへお戻りになるとは考えられませんし……貴女も何かご自分の目的があったのではなかったのですか？」

「それは……そうなのですが……」

逆に問いかけられて答えに窮する。

助けを求めるように室内を見回してみるものの、ファドラーンは衣装合わせに遠慮して別の用事に行ってしまったているから誰も助けてはくれそうにない。

「それに……お客さまに十分なお支度を差し上げるのもお招きした者の義務。どうぞ、ご遠慮なさいませぬよう。主人へあるじ」さまとしても……久しぶりのお客人を飾り立てるのに異存はありますまいよ」

「でも、これだけの質の品です……どなたかこの屋敷のご婦人の為に逃えられた物ではないのですか？」

畳み掛けるようなミュゼナの言葉に対して、逃げ道を捜すように口走った私に一瞬周りがざわめいた。

私の言葉の何処に彼女達が反応したのかは判らないものの、そのざわめきがありいい雰囲気のものでは無い事は流石に理解出来るわ。

「……残念ながらこの屋敷には使用人以外の女性はおりませんの、それが私の悩みの種ですわ。主人さまが女性をお連れになる、トラトーからの報せに……いよいよかと思いましたのに。どうやら貴女様はそう言う方ではないようですね」

廻りのざわめきなど気にはならないとばかりにミュゼナは溜め息混じりにそう続けて、意味ありげに見つめてきた。

私はと言えば、言葉の意味を何とか理解して、今度は顔が赤くなるのを止められなかった。

「主人さまにご家族が在れば、貴女も一番にお会いになっておられましょう。ましてや……何日も家を空ける夫を迎えに出ぬ妻も居りますまい」

「……それでは」

「あの方はご家族もなく一人でこの屋敷にお住まいですの。そりゃもう、いい加減お子さまがおいででも不思議の無いくらい、かなりいい歳におなりですもの……。昔から御仕えしております私どもとしても、出来るだけ早くこの屋敷の奥方さまになれる方にお目にかかりたいと思っておりますわ」

言われてしまえば当たり前な事なのに、考えてもみなかった。

ラウ、じゃなかった「チャクラヴァルティンの家族」という存在に。

ミューゼナの返事に疑問は払拭されたものの、目の前に在る室内を埋め尽くす程の衣装の説明にはならない。

それを理解したのだろう、彼女は穏やかな表情で室内を見回した。

「ここにある衣装は、主人さまの領内の娘達に贈られるものなのです。毎年行われる行事の一つに、その年に成人となる若者達を祝う祭りがございます。その折に祝いとして……若者達にこれらの中から気に入ったものを選び取らせるのですわ。隣の部屋には同様に、青年達の為の衣装が用意してございますの。それをどのように使うかは受け取った者の自由ですが、婚礼の為の衣装にする者が多いようですから……清楚な物が一番人気ですわね」

「懐が広いと言うのか、気前の良い領主さまなのね」

見ず知らずの私の為にすら面倒な交渉事の手間を厭わなかった彼に、らしさを感じて溜め息と共に言葉を吐き出す。

「あの方にとっては気晴らしのようなものなのでしょうね。祝いの宴にはヴァルさまも必ず臨席なさり、領内の民に祝福を贈られるのです。……もともと領内の民と言っても多い数ではございませんから、本当にささやかなお祭りなのですけれど」

さっきまでの心配げな風情は何処へやら、柔らかな笑みで話し続けるミューゼナの誇らしげなその表情に、彼女がこの地に抱く感情を羨ましくも思う。

私は、まるで子供が飽きた玩具を放り出すように、いともあっさり故国を離れ、新しい土地バーラートでの目新しい暮らしを楽しもうとしていたのだから。

でもそれは、いずれ故国に戻る事を前提とした旅だったからよ？

誰に対してもなく言い訳のように呟いてみるものの、自分がまるで軽薄で薄情な人間のような気がしてしまう。

「私は……自分に一体何が出来るのかを知りたくて、無謀な旅に出たんです。それが如何に危なっかしいものだか気付きもしないで」

「随分な大冒険だったようですね」

動機、と言うにはあまりに漠然とした言葉をようやく探し出して、目の前のミュゼナに告げると、彼女はそれにとっりと答えてくれる。

「そんな恰好のいいものでは無かったと思います。ただ、廻りに流されるようにして……好きでもない相手と婚礼を挙げるのが嫌で、ただそれだけの理由で、父や姉を残して逃げ出しただけだったのかも知れないって思う事は今でもあるんです」

「主人さま……ヴァルさまが如何に情の篤い方とも言えども、ただ逃げ出して来ただけの者にここまでお目を掛けられる事は在りますまい。何がしかを貴女の中に見出されたが故だと解釈して差し支えないと思いますわ？そして……それを抛り所として、胸を張ってこの国の者達とも相対なさると宜しいですわね」

ミュゼナの愛国心、それとも主人への忠誠心だろうか、がとても眩しく感じられる。

そういった抛り所を持たない私は……そうとは知らずに……自分の不安定さを露呈していたのかも知れない。

諭すような彼女の言葉に、それを悟って本来ならば恥ずかしくて居たたまれない気持ちになる筈なのに、その言葉は抵抗なく胸に馴染んでゆく。

その抵抗の無さが納得するという事なのだと妙な実感があって、保身のためのように構えていた力を抜く事が出来て、此所に来て初めて楽な心持ちになった。

「すぐに済む用事だとおっしゃいましたのに、何処で油を売っておいででしたの？」

「ちよつと野暮用に捕まっていたんだよ、すまないね。……イエライシャは？」

主人からの伝言以外の用事で俺を引き止めていた相手を何とか次の日へと廻して、イエライシャが着替えている部屋へと戻ったのは、ちよつとはとても言えない時間を費やした後だった。

ミュゼナの非難には反論出来ないし、してもどうせろくな事にはならないと身に滲みて理解しているので、ここは素直に謝っておく事にする。

そんな俺の腹の内なぞお見通しだろうミュゼナだったが、それ以上特に追求する事はせず身体で塞ぐようにしていた扉から横へとその身をずらすと、入ってもいいというなづいて見せた。

「幾つかドレスの試着をして頂きましたの。今日は特にお直しの必要のなかったものを御召しいただく事にしましたわ。如何です？」

よく知っている部屋という事もあり、室内へと踏み込んで、特にきよろきよろする訳でもなくお目当ての存在を見つける。

そして、彼女を包む深い緑色の生地を使ったフィルダウス風の衣装に目を奪われてもいた。

いつも頑な過ぎる程にしっかりと何枚もの生地を重ねる故国の装束を守っていた彼女の、打って変わった軽やかなその出で立ちから視線を逸らす事ができない。

視線の隅では、微かに微笑みを漏らす屋敷の侍女達を捉えてはい

るのだが、今はそれすらも気にならない。

「……意見を聞いてもいいかしら？」

「あ、うん。……ちゃんと似合っているよ」

どれ位そうしていたのか自覚は無かったが、そうイエライシャに促されて何ともありふれた返事の他に言葉なぞ出てはこなかった。

「女性が殿方に意見を求めるという場合は……その言葉だけを聞きたいという訳じゃありませんわよ」

隣で如何にも仕方が無い奴だと、言外に仄めかすミュゼナにちらりと視線を向ける。

彼女のその表情もいつの間に似たのやら、ヴァルにそっくりのしたり顔だ。

ラトーからかなりの情報を得ているのだろう、俺の反応の理由もやはりはつきりと確信しているらしい。

それに最低限の言葉に絞っておかなければ、ついついそれ以上に個人的で余計な事まで口にしてしまいそうだったからだ。

「俺は……誰かさんみたいに舌を操るのが上手くはないものでね」

少しばかりの当て擦りと共に慥然とした表情を浮かべてみせると、きよんとした表情のイエライシャを除いて他の者達は皆一様に微笑みを浮かべている。

「そんな事はもう十分判っているけれど……もうちょつと何か無いの？」

「……本当に良く似合っているよ？俺にとっては君はいつだって綺麗なんだけど」

流石に呆れたと言う雰囲気のエライシャに、それでも……やっぱり言うておくべきなんだよな、と覚悟を決めると不満そうな彼女のすぐ側まで近付き、そう耳元に言葉を送り込んだ。

勿論、その後に真っ赤になってしまいうだろうその姿を間近で観察

する為でもあったのだけれど、イエライシャの反応は予想とは全く違うものだった。

「ありがとう、ファド」

はじめは驚いたような表情だったのに、すぐにそれは晴れやかな微笑みに変わり、その笑顔の眩しさに俺の方が真っ赤になってしまっ
いそうだ。

「……べ、別に」

嬉しそうなその声に、そうしどろもどろな返事を返すのが精一杯。さっきまでは気にならなかった廻りの侍女達の視線も、流石に気に触りはじめたのでさっさとここから逃げ出す事にした。

「もうこの用事も済んだのなら、屋敷の中を案内がてら次の用事に行こう」

歩くのに脚元をかなり気にしているふうのイエライシャに手を差し出し、衣装の見立てを手伝ってくれた侍女達に彼女が礼を言う間だけ足を止めてその部屋を後にした。

「じきに昼食の時間ですから、お忘れにならないで下さいませ」

ミュゼナは涼しい顔でそう言っただけで、俺の行動を特に咎めるふうもない。

その言葉に力付けられたと言う訳ではないがイエライシャの手をとって、改めて屋敷の正面にあるエントランスポーチへと足を向けた。

何処へ向かうのかは教えてくれなかったけれど、私の手を取ったファドラーンはゆっくりと歩いてくれる。

それが、初めて身に纏った慣れないフィルダウス風のドレスに配慮しているからだとは言う迄もなく、相変わらず優しいその心遣いがとてもくすぐったい。それに、幾重にも重なる故国の衣装よりも身軽すぎるこのドレスは不思議に心を浮き立たせてくれるので、足取りも自然と軽いものになりつつある。

「着心地はどう？」

見上げると、目もとの辺りに笑い皺を作ったファドラーンが様子を伺っていた。

「馴染んでいた衣装とはずいぶん違うから戸惑っているし、急に身軽になり過ぎて……却って気を使うわ」

「なんだそりゃ」

如何にも判らないというような彼の言葉に、仕方がないわねって曖昧に笑って見せる。

私の故国の衣装がどうしてあれ程に何枚もの生地を重ねるものなのか、を彼は理解しては居ないのだわ。

あれは防寒への必需品ではなく、たしなみとしての必需品だから。幾重にも厳格に伝統の衣装に身を包む事は、自分がそれだけ慎重深く且つ道徳を遵守する者である、と言う無言のアピール。

そしてそれをしない者、そうではない者を差別し排斥する為の口実。

そんな窮屈な衣装から突然解放されてしまったら、その開放感に浮かれて余計に羽目を外してしまいそうな気がする。

そんな口には出せない事を胸の内です持て余しながら、リードしてくれるファドの横顔を見上げて歩いた。

「……着いた。ここが一応この館のエントランス……まあ玄関だな。一応初めてのお客さまだからここからはじめるのが妥当だろう？」
そう言って彼が私を再び見下ろす。

まっすぐ見つめてくるその瞳がとても好きなんだけれど、それはまだまだ口には出来ない。

足を止めたファドラインから一歩踏み出して、ルクアディナルファからここまで『移動』して来た部屋よりも、ひとまわり以上大きく見えるその空間を見回す。

来客を迎える為に、或いはその権威を誇示する為にだろうか、今まで見て来た屋敷の中でもさらに一際華やかな造りだ。

そして真ん中に威圧的にそびえ立つ両開きの大きな扉。
丁寧な細工に覆われているせいで繊細に見えるけれど、その大きさからして重厚な感じは払拭し切れてはいない。

「大きな扉ね。ここから外に出てもいいの？」

「もちろん。庭園になっているから散歩も出来るけれど、今日はぜひぶんくたびれたんじゃないか？」

「まだお昼前でしょ？大丈夫よ」

扉を見上げて好奇心優先の私に、それを容認してくれているファドはくすくす笑いながら大きな扉に手をかけた。

さして力を入れたようにも見えなかったのに、その大きな扉は軽々と開いてゆく。

見た目の予想を裏切られて、呆気にとられたような感想しか出てはこない。

「……力持ちね、驚いた」

「力が必要ないようになっているんだよ。それに、ちょうど来客も

あるから、この辺りで待っていいようか」

「お出迎えなの？」

いつの間にそんな事になっていたのかとも思ったけれど、私が着せ替え人形よろしく、何枚もの衣装に翻弄されていたのはかなり長い間だったのだわ。

「まあ……そんな感じだね。散歩はまた後で行ってみようか」

気付くと、扉を出たすぐ両側にそれぞれ一人ずつの人影がある。揃いのティール・ブルーの制服をきっちりと着込んで帯剣しているのを見ると、彼等はこの屋敷の警護に当たっている人達なのらしい。

彼等も私達に気付いたのか、姿勢を正してからしっかりとした深さで頭を下げて来た。

「お帰りなさい、隊長」

「しっかり務めているようだな、ガティノワ、それにセグリエス。紹介しよう、こちらはセシリア・イエライシャ・グレンフォード嬢。しばらくこちらに滞在する予定のヴァルさまのお客人だ、くれぐれも……無礼の無いように」

同じようにきりつと背筋を伸ばしたファドが、少しばかり低い声で自分の部下に当たるらしい2人に紹介してくれる。

「イエライシャ……です。よろしく」

「ガティノワ・エブランデティオスです。はじめまして」

「ようこそ、フィルダウスへ。セグリエス・ティルガです」

礼儀正しい挨拶とは裏腹に、彼等の瞳は明らかな好奇心に輝いている。

それに気圧されてしまいそうになり、私はいつものように腰を落とす故国風の挨拶を返し、そして少しだけファドラインの後ろへと下がる。

故国であればこれ以上の会話はファド（保護者）を通して欲しい、という無言の意思表示になる私の動作。

それを彼等が理解してくれる事を期待しながら。

「今は勤務中だからね、無駄口は叩くなよ？」

2人は何かを言いたそうにしていたが、強引にそう会話の糸口をファドラインに断ち切られては仕事に戻らざるを得ない。

それが彼等の規則だからなのか、ファドラインが気を配ってくれたからなのか、はっきりとはしないわね。

当座の質問攻めからは逃れる事が出来たとはいえ、これから暫くは彼等のような視線を覚悟しなくちゃならないのね、と少々げんなりとしてしまった。

彼等の私を見つめるその視線が、拒絶を伴う冷たいものでなかっただけ……良かったじゃない。

「驚かせたかな？地上からのお客はとても珍しいし、チャクラヴァルティンさまが自らお連れになった女性という情報の方が先走っているようだから……興味本位の奴らも多いと思うんだ」

「……興味本位って？」

如何にも申し訳無さそうなファドラインの言葉遣いに、何か彼等の事情のようなものを感じ取る。

彼等と言うよりはチャクラヴァルティンの、というべきだろうか。

まだ視線を感じる気がするから、何気ない散歩を装って警護の2人から離れる事にした。

エントランスの大きな扉を背後に、明らかに整えられた庭園へと続く小道を少しだけ進む。

「ミュゼナがヴァルさまの乳姉妹だという、サヤのくれたヒントからもう判ってるとは思うけれど、ラウ……チャクラヴァルティンさまは長寿の属性を持つ王族の中にあって特にその徴候が顕著な方で、さらに今の所というのか未だに独り身で……」

「つまり、見た目も良くて肩書きもあって、それなのに独身で隙がある男が連れて来た女性だから……勘繰る人もいる……と言いたいよね？」

「……まあ、そういうことだね。けれど、理由も無くそんな思わせぶりな立場に居る訳じゃないのは……彼の性格からしても理解して貰えると思う」

言葉を濁すようなファドラーンの言葉がじれったくて、すっぱりと切り込んでみる。容赦の無い言葉に苦笑いしながら、それでも彼は自分の上司を擁護する言葉を口にした。

「私だってそんなに……長い付き合いではないのだから、簡単にはうなづけないわ」

「イエライシャ？」

意外だと言う表情で見つめてくるファドラーンに、ふざけているのではない真剣な眼差しを返す。

「誤解しないでね？私が貴方や他の皆を信用していないとか判っていないとか……そういう事ではないのよ。ただ、彼の考えは私には理解出来ないくらい遠いものだから、例え貴方の意見でも安易には同意出来ないの。なにより私は、本当の彼を昨日知ったばかりなのだから、彼の事情なんて判りっこないわ」

そう言葉を続けると彼の表情は微かに和らぎ、そして同時に困ったような笑顔になった。

「何と言うのか……君らしい答えだね。うん、実に君らしい」

納得したようにうなづかれて、さすがにちょっと反応に困った。その妙におもしろがっているような笑顔も納得いかないわ。

088 訪い

「おや、仲良くデートですか？羨ましいなあ」

笑顔のままうなづくファドラーンにどう応酬しようかと見上げた所で、背後からそう聞き覚えのある柔らかい声がした。

「……ラグヌスさん」

慌てて振り向いた先には、昨日会った若い男ともう一人、背の高い人物が立っている。

いつの間にそこに居たのかは……問うだけ無駄かしらね。

「ようこそおいで下さいました、パドマさま。昨日はご助力を有り難うございます」

驚くふうもなく、さっき迄の楽しそうな気配を恭しい敬意に換えてファドラーンが丁寧に頭を下げる。

私もそれに倣うように黙って腰を落とす仕草で敬意を表した。どうやら来客とは彼等の事だったらしい。

言われてみれば、この名は昨日も耳にしたわ。

確か、ラグヌスの師匠だったわね。

押さえきれない好奇心で見上げると、背の高いその人物は右手をラグヌスに預けていて……まるで騎士にエスコートされている貴婦人のように見える。

もっとも、彼の方がラグヌスよりも少し背が高いので、その誤解はすぐに解けるけれど。

銀髪と言うよりも白髪と言った方がいいのだろうか、長い髪を後

ろに流し、ゆったりとした衣装に身を包むなやかな姿。

そしてかなり痩身であろうことは目に付いた鋭い顎のラインから想像出来る。

何処と無くその人の面差しが懐かしいような気がして見詰めるのだが、はつきりとはしないまま次に気になるものを見つけてしまった。

それは、その人の両の瞳。

彼は両目をしっかりと閉じたまま、その全体の違和感からか、その人物を見つめたまま立ち尽くしてしまった。

全く目が見えていないのかしら、それとも何か理由があってそうしているの？

でも閉じたままの瞳では、私の姿も見えていないのではないかしら。

侮る訳ではないが、そう疑問を抱き見つめていた彼の表情が動き、柔らかい微笑みが浮かんで……その微笑みに引き込まれそうになってしまった。

この人はなんて優しくそうに微笑むのかしら。

「昨日ラグヌスに会った時に言ったと思うけれど、彼がパドマさま……この国の守護結界を保持する役を長い間務めておられる方だ。

そしてヴァルさまの古くからの友人でもある」

ファドラーンがそう説明してくれるのを、何処と無く上の空で聞いているような気もするわ。

「イエライシャ？」

「……初めまして、セシリア・イエライシャ・グレンフォードと申します。昨日はお連れのラグヌス殿にお世話になりました」

怪訝そうなファドの声に我に返って、そう言葉と共に改めて挨拶をする。

「初めてお目にかかる、イエライシャ嬢。この弟子から報告は聞いておりましたが……確かにユグドラセアの方のようですね。懐かしい顔立ちだな」

「……お判りになるんですか？それに懐かしいとは……？」

優しい微笑みに相応する柔らかな声。

けれど一度も瞳を開けた気配もないのに私の顔立ちまでも判ると言うのかしら。それよりも、もしかして本当は、目が見えているのね？

疑問が優先してしまい、かなり不躰な質問を口にしてしまう。

「師匠は、物を見る為の視力は失ってしまわれましたが……違う方法で世界を視る事がお出来になるんです。とはいっても、日常の不便がありますから、こうして弟子が交代でお世話をね」

おおまかな説明のようにラグヌスが言葉を挟んで来たので、改めて彼にも視線を向ける。

昨夜は暗くなっていた事と、外套をすっぽりと身に纏っていたのでよく分からなかったが、やはり長い黒髪を後ろですっきりと束ねて、とても動き易そうな出で立ちをしていた。

束ねられたその艶やかな漆黒の髪は、多分ラウ……じゃなかったチャクラヴァルティンと同じくらいに長いだろうと思われる。

体格もよく似ているわね、と観察してしまい慌てて注意を目の前の人物に戻した。

「私の父が……貴方と同じくユグドラセアの民でした。その当時としては最後の純血の世代でしたし……今は純粹な容貌を持つ者はこの国には居りませんしね」

優しそうな声色で語られるのは、それには似つかわしくはない内容だった。

ただその穏やかな語り口のお陰だろうか、悲壮感は感じられない。「……だから皆さんがユグドラセアの習慣をご存じだったのですね」

「この国に馴染んでしまった彼の国の習慣も多くありますから、遠来のお客人としては驚かれたでしょうね。けれど……この国の習慣を構成しているものは、ユグドラセアだけに限ったものではありません。周辺諸国は勿論、この国を構成する多くの民族の矛盾しない習慣を取り入れる事により……この国は維持されて来たのですよ」

「……それだけ多くの民族がこの国には居ると言う事ですか？」

「そう言う事になりますね。もっとも……民の数自体は多いものではありませんが」

どこまでも穏やかな口調で私の言葉に同意を示したパドマさまに、ヴァルやファドラーンには聞く事すら思い付かなかった質問が心をよぎる。

とはいえ口に出す事はやはり躊躇われて、いつものようにその質問を呑み込んでしまおうとした。

それがファドラーンの手前だから遠慮したのか、つまらない虚栄心の故だったかは我ながら判別がつかなかったけれど。

「だとしても、特別な力や……能力を持つ者だけがこの国に住まいます訳ではありません。この国の在り方を理解しえた者にのみ、フイルダウスの民を名乗る事が許されるのです。尤も……長くこの国に住む者は、その事を幾分か忘れていくような気がしますがね」

次に、ついでのように何気なく付け足されたその言葉に目を見張る。

どのような力を持つ者であればこの国の民となれるのか？

なんという幼稚で単純な質問。

けれど私は、それを今まで誰にも問えずにいた。

それなのに……まさに見透かしているように、優しい微笑みのその人は口に出せなかった問いにあっさりと答えをくれたのだ。

驚いて見つめていたので、彼の表情が微かに動いたのに気が付く。何処と無く少年のように悪戯っぽさを感じさせる、その微笑み。

私の心の無様な迷いなぞ承知の上で、偶然を装い答えをくれたのだと判る。

その優しさに少し目許が熱くなってしまったが、他の人たちの手前もあるし流石にあからさまな態度に出す訳にはいかないわね。

それでも精一杯の感謝を込めて私としては最上の微笑みを浮かべ、その微笑みに彼の意図を汲んだという私なりの意思表示をのせると、丁寧な仕草で礼を執った。

「ご教授有り難うございます」

取り立てて大切な事ではないけれど、知らなかった事を教えてもらった、そんなニュアンスを装って口にした言葉に、パドマさまは一層にこやかな微笑みを見せてくれた。

そして微かに顔の向きをフアドラーンの方へと変える。

「なに、大した事ではありませんが……この程度の事も貴女にお教えしていないとは……貴女の案内役も大した事は無いですね」

「いじめないで下さい、パドマさま。私もヴァル殿下も……彼女には予備知識無しで、ありのままのこの国を見て欲しいと思ったんです。その上で……彼女の自由意志を尊重すると」

やんわりとした口調でからかわれて、どう反応するのかわかったフアドラーンは意外にも真面目な表情でそう答えた。

ムキになる訳でもなくあくまで冷静に向き合っているその姿は、パドマさまの性格を知り抜いた上で自分達が決して考え無しに事態に対処しているのではないと、そう主張しているようにも見える。

「……まあ、とても彼らしい考えですね。ではその主人殿の元へ案内を頼みますよ、フアドラーン」

フアドラーンの答えをどう解釈したのか、それ以上は追求するふうもなくさらりと本来の用件へと軌道を修正してしまうパドマさまのその鮮やかさに、感心すると言うよりは呆気にとられて見つめる。

「どうぞ、こちらへ」

それすらもファドラーンにとってはいつもの事とばかりに、難なく受け流すと先に立って大きな玄関ホールへと向かう。

次に続いたパドマさまとラグヌスの後を追うように、私も再び屋敷の大きな扉の前へと立った。

余裕の仕草で来客に敬意を表する警護の2人、ガティノワとセグリエスの視線をまだくすぐったく感じながらも扉を潜ると、改めてその屋敷のエントランスが壮麗なものであると感じた。

「いつ来ても大げさな屋敷ですよ。ヴァルが望んで此所を住まいにしている訳ではないのが救いですが、無駄に豪華が過ぎるでしょう？」

「……望んでいる訳ではない？」

相変わらず飄々とした口調でパドマさまに話しかけられ、どう答えればいいのか正直戸惑う。

肯定すればこの屋敷の主人、私にとっては招待主でもある男を貶めているとも取られかねない事態になる。

相手の思惑が読み取れなくてそうおうむ返しに問い返すと、それに答えをくれたのは意外にもファドラーンだった。

「この屋敷は、何代か前の退位なされた国王の為に建てられた屋敷だと聞いている。豪華好みの方だったらしくて、ここがかなり手の込んだ造りになっているのはそのせいだとか」

ちらりと彼の視線がパドマさまをかすめ、さっき言われた事を気にしているのだと判ってしまう。

「ヴァルが今の任に就くにあたって王宮を出、外沿地……辺境の事ですが……にある所領の小さな屋敷に移るつもりだと陛下に申し上げた事がありましたね。陛下はヴァルの所領を増封するついでにこの屋敷もヴァルの管轄へと変えてしまったのだとか。仮にも次期国

王の居館と成すならばこれくらいの構えは必要だと……そう奴を押し切ったあたり、国王陛下の粘り勝ちだったようですね」

パドマさまは、ファドの視線には気付かぬ振りで後をそう続ける。そして少し前に見た悪戯っぽい微笑みを浮かべている所を見ると、どうやらこの状況を楽しんでいるのは明らかだわ。

089 食前の・・・

ホールから何処へ向かうのか、淀みない足取りで先頭を進むファドラーン。

一行の一番後ろに付いてその背中を見つめていたら、捜すように振り向いた彼に目線で促されてしまった。仕方なく足を速めると、彼の隣へと並んで歩く。

「お待ちしていました、皆様。どうぞこちらへ」

更に歩いて幾つかの角を曲がると、廊下の中程に立っていた女性が丁寧な口調で腰を折り、側の扉へと案内してくれた。軽くそれにうなづいたファドラーンが皆を振り返り、ゆっくりとした仕草で扉を開けると中へと促す。

「じきに主人さまもおいでになります。寛いでお待ち下さいませ」
きよろきよろと案内された室内を見回していた私には構わず、侍女はそう告げると扉を閉める。

来客とこの時間帯と言うシチュエーションから想像した通り、そこは広いけれど仰々しくはない空間で少人数向けの食卓が詭えてあった。

既に食器もセッティングしており、後は人数が揃うのを待つばかり。

けれど、その配置には少し違和感があり、思わずじっとそれを見つめてしまった。

何処かが通常の会食の席とは違っているのだと感じられるのに、それがはつきりと判らないもどかしい感覚。

「イエライシャ、食前酒は如何？」

「先にパドマさまにお訊ねするのが筋でしょ？」

楕円形のような食卓を見つめて思案している私に、その脇に寄せられたワゴンからグラスを取り、デカンタに入れられたものを軽く揺らしてみせるファドラーン。

そののんびりとした風情についてそう切り返す。

この場で一番の年長者であり、一番目上の存在と言えれば彼しか考えられない。当然、礼儀の上では彼に最初に訊ねるべきなのに。

「私は仕事柄もあって酒を嗜みません。ファドはそれをよく知っているのですよ、貴女はお気になさらずどうぞ？」

「……私も結構ですってば」

パドマさまもそう自分の事情を口にしてやんわりと勧めて下さるのだが、面白がっている気配があらさまに出ているので、つい口調がぞんざいなものになってしまう。

他の皆も同様のようで、ラグヌスの穏やかな微笑みさえもがちよっとばかり口惜しい。

「……待たせたね、どうかしたのかな？」

相変わらず間がいいのか悪いのか、無然としてファドラーンを軽く睨み上げた所へと入って来たのはラウ……チャクラヴァルティン殿下で、その後ろにはミュゼナ以下数人の侍女の姿が見える。

室内に入るなり向かい合って立つ私とファドラーンに気が付いたのか、訊ねる彼の声色はしかし状況を案じるものではないわね。

そののんびりとした主人の後に続き軽く一礼して室内に入ってきた侍女達は、いつも通りとばかりに手際良く食卓の上に料理を給仕してしまうと、ミュゼナともう一人を残してそそくさと退出してく。

そして、食器の配置を見ながらさつき感じた違和感の原因によりやく思い当たったの。

ごく一般の家庭のように支度されたこの食卓には、会食という性質の席にありがちな上座というものが設定されていないと言う事に。

その証拠に主人も客人も、相手の身分を前提とした仰々しくも改まった挨拶というものを一切省いてしまっている。

けれどこの屋敷の主人は次期国王で、そしてパドマさまも何やら重要な役を担っておられるらしい。

それなのに上下関係はこの場に持ち込まないということは、あくまで友人としての立場でこの席を過ごす、ということなのかしら。

部屋を出て行った侍女達が席につくでもなく立っている客の事をあまり気にしているふうではないのが救いと言えるのかどうか。

とはいえミュゼナはそれを見過ごす気はなかったらしい。

「さあ、お掛け下さいな。料理が冷めてしまいます。パドマさまも、この地へおいでになって日の浅い方をおからかいにならないで頂きたいですわ」

食卓の椅子を引きながらそう軽く眉を上げてパドマさまを睨んでみせる。

「貴女には適わないね、ミュゼナ。なかなか彼女の反応が面白いものだから、つい調子に乗ってしまったんだよ」

見ていた筈もないのに、彼等の質をよく把握しているらしい侍女長の言葉。

相変わらずの微笑みを浮かべながらしおらしい事を言うパドマさまだったが、私としては同様に私をからかおうとしていたファドラーンにも何か一矢報いてやりたくて堪らない。

「イエライシャ、そんな怖い顔をしていないで席に着かないかね？ ファドラーンへのお仕置きなら後でも出来るし、なんなら一緒に効果的な方法を考えてあげてもいいよ」

「パドマさま、そうやって喉けないで下さいよ」

落ち着いた風情でラグヌスの介助を受け席に着いたパドマさまの言葉に、今さらながらファドラーンが慌てる。

先程までの悪戯仲間があっさりと自分を裏切ったのを恨めしげに

見つめている、彼のその風情に私の中でも感情が動いた。まだまだファドラーンはパドマさまからすれば軽くないなしてしまえるヒヨツ子のようなもののなのだわ。

惘然としたファドは気が付いていないようだけれど、ラグヌスだけは何処と無く気の毒そうな表情を見せている。

ラウ……じゃなかったチャクラヴァルティン殿下も、少し面白がっているような仕方ないなあって表情だ。

そう考えてしまうと、何だかさっきまでの自分の少しばかりムキになっていた感情すらもがどうでもいい、幼いものに見えて来てしまった。

「彼にこの程度で噛み付いたらキリがありませんもの、大目に見ておいてあげる事にしますわ」

ポーズなんかではなく本心からの溜め息を吐いてそう言葉にすると、待ち受けていてくれるミュゼナのサービスで椅子へと腰を下ろす。

その隣へと何処と無くほっとしたような複雑な表情のファドラーンが腰を下ろしたので、私はファドラーンとパドマさまとに挟まれて座る形になった。

パドマさまの向こう隣にはラグヌスが座ったのだが、更にその隣にはチャクラヴァルティンが腰を下ろしているので、彼は私以上に居心地が悪そうだ。

「こうして見ると、ラグヌスはやはり……ヴァルとよく似た雰囲気を持っているんだね。どうかな、彼を君の影武者にするって言うのは？」

皆のグラスに淡い色の付いた果実水が注がれてゆく傍らで再び口を開いたパドマさまに、今度はラグヌスが引きつった顔をした。

それに当然気付いていながらもパドマさまはにこやかなまま、閉じた瞳で2人を見比べているらしい。

確かに2人が似ているとは、私も思った事があったけれど。

彼等の間での会話としては今さらな話題なのではないかしらと考えて、その言葉の裏に何かしら思惑の存在を確信してしまった。

内輪の席での話題だとしても、ここでは核心に迫れない何かがある？

誰かが居るから……？

それに該当するのは、多分ラグヌスと私しかないわね。

そう考えるのは少し胸が痛かったけれど仕方がないじゃない、私はあくまで部外者で。

ラグヌスにしたってパドマさまの弟子だと言っていたけれど、まだ完全に師匠の信頼を得てはいないのかもしれないじゃない。

ファドラーンはどう見たってチャクラヴァルティン「殿下」の腹心の部下、とも言うべき貫禄なのだし。

とりあえず詳しい話は後でする事にして、私達の居る所では具体的な話をする気がないと言う事なのかしら。暗い方向へ考えてしまいうさだだったけれど、確かに自分は部外者には変わりはないじゃない、と自分を納得させファドラーンに勧められるままグラスを手にしていた。

「まずは無事の再会を祝して」

軽くグラスを掲げてチャクラヴァルティンはそう言うのと、にこやかな笑みを見せる。

合わせて掲げたグラスへと口を付けると、仄かに果物の香りと微かな甘みを感じた。

でも、何となく気が塞いでしまうのは仕方ないのかしら。

何とも、浮き沈みの分りやすい性格だろうかと静かに、やけに静かに食事をするイエライシャを隣から見つめて微かに微笑んでしまった。

微妙な表情と、時々チャクラヴァルティンに話題を振られた時のぎこちない受け答え。

俺とチャクラヴァルティンにはそれでもう、彼女が何かを思い詰めている、と判ってしまうのに。

フィルダウス国内での最近の出来事などをかいつまんで話すパドマさまは、何も気付いていないふうを装っているが、この状況を相変わらず楽しんでいるのであろう事は曲解の余地もない。

「もう少し庭を散歩するかい？それとも部屋で少し休む？」

何か月ぶりに戻った国元で友人との食事を楽しむ、そんな雰囲気
気に終止した昼食が終ると、あっさりとパドマさまは弟子を連れて
自分の領域へと戻って行った。

そんな彼等を見送りながら意外そうな表情をしているイエライシ
ヤに向き直ると、そう言葉をかける。

「……てっきりこの後パドマさまとヴァル殿で何か内密の話し合い
でもするのと思ったのに、違ったの？」

「わたしが知リたかった事は最初に済んでしまっていたから、構わ
なかったんだよ。一度、直接彼の顔を見ておきたかっただけなのだ
が、なかなか一筋縄では行かない男だね。ようやく保護者同伴で希
望が叶った所だが……」

彼女なりにこの会食の流れを推測していたらしいのだが、俺が何かを答える前にヴァルさまがそう返事をしたので、彼女は更に意外そうな瞳を彼に向けた。

「彼って……ラグヌスさん？何の為に？」

「それはまだ言えないな、わたしの個人的な事柄になるからね」

チャクラヴァルティンの言葉から推測をしたのだろうが、何故彼なのか、その理由までは当然判らないだろう。

そう思っていたのだが。

「何言ってるのかしら、貴方は次期……国王さまなんですよ？そんな身分にプライベートがどれ程あるって言うのよ」

今さらながら遠慮のない、容赦ないツツコミに俺も困った顔になってしまった。

「確かにそうなんだけれどね、それでもなけなしの秘密にしておきたい事柄もあるんだよ。だから……ファドラーンに聞いても無駄だよ？」

勿論お前が漏らすなどとは思ってはいないけれどね、とにこやかな笑顔を見せられてはうなづく他はない。

後でイエライシャにはこっそり事情を説明しようと思っていたのを見透かされていたのだと、自分の主人ながらその頑固さには舌を巻く。

自分の数少ない一族の醜聞だけではどうしても表沙汰にたくはないのだろうか。

だが、今それを隠して野放しにしてしまう事の方がより危険なのではないだろうか、そう俺は考えているのに。

俺達の会話に不満そうな表情をしているのだろうイエライシャを想像したが、いずれは話す事もあるだろうと覚悟を決めると、諒解の意を込めてチャクラヴァルティンに対して臣下としての礼を執っ

た。

「済まないが、イエライシャ」

無言で主人に恭順の意を示した俺を見下ろして、流石に少し申し訳無さそうなチャクラヴァルティンの言葉に、彼女がどう反応するのかを見守る。

「失礼ね、何もそんなに念押ししなくたっていいじゃない。彼から無理に聞き出して……人のプライベートに土足で踏み込むような事はしないつもりよ?」

ため息をついたイエライシャの吐息が苦しいが、彼女は取り乱す訳でもなくそう言っただけだった。

チャクラヴァルティンも穏やかな表情のまま、そんな彼女の仕草を見守る。

「勿論、それは信用している。けれど、まだ君が深入りしている事だとは思えないのでね。……それに早ければ、明日の晩には全て判るかもしれない事だし」

次に彼がそう口にした言葉に、イエライシャはぱっと顔を上げてチャクラヴァルティンを見上げた。戸惑ったようなその表情が無防備な印象を拭えない。

「明日の晩に何があるの?」

「先程……叔父から使いが来てね。明日の晩、お客人ともども王宮へ顔を出すようにと誘われたんだよ」

相変わらずのんきなその物言いに、イエライシャは華奢な両肩がっくりと落とした。

「……多分それって、お誘い……とは言えないんじゃないかしら」

「強制ではないんだから、良いんだよ。わたしには一応、拒む権利も認められているのだから」

にこやかな表情であっさりとそっくり切ってしまうと、彼は俺達

をその場に残しすたと廊下を歩いてゆく。

その方向から推測すると、どうやら自分が不本意ながらも溜め込んでしまった仕事に戻るのだろうと、半ば安堵してその背中を見送った。

例え相手がどんな積もりであろうと、自分の解釈次第でどうでも事態を收拾出来るとそう言いたげな、受け取りかたに拠っては傲慢とも取れてしまう彼の態度が意外ではあったけれど。

「何を隠しているのか知らないけれど……私ってそんなに信用ないのかしら」

同じようにチャクラヴァルティンの後ろ姿を見送っていたイエライシャは不満そうにそう言ったが、俺を見上げて事態の説明だか追求だかにおよぶ気配は見せなかった。

「君を信用していない訳じゃないって……ヴァルさまも言っただろう？ただ、彼の口からは言うのを憚られる事がこの国にも少なからず存在するってことなんだ。俺としてもかなり不本意なんだがね」

スキャンダルならば何処にでもある。それは判っている。

それでも自分の事でもないのにそれについて想いを巡らせる時、無性に苛立たしい気持ちになるのは、主人であるチャクラヴァルティンの心の痛みを慮ってしまうからだ。

「貴方がそんな顔するくらいなもの、私は聞かないでおく方が身の為だって……納得出来るわ」

気がつくといエライシャが俺を見上げていて、自分がかなり厳しい顔をしていたのだと悟った。

「……悪い、うっかりしてた」

ゆっくりと息を吐くと表情を緩める為に上を仰いで、大きく息を吸い込む。

窓の向こう、雲のようにも見える靄の遥か上にある岩盤に想いを

馳せ、考えを不愉快なものから切り離すように地上の今日の天気を思い描いた。

此所に向けて出発した時、クティナンは曇りであり雲は晴れそうにもなかったな。

眉間に刻んでしまっていたしかめっ面の皺がなくなる事を祈りながら、のんびりとした事を考える。

「明日の晩の準備はミュゼナに任せておけば大丈夫だとは思うが、少し慌ただしくなると思う。……済まないが付き合ってくれるかな？」

とは言え心配事はなくなる訳ではないから、ゆっくりと俺を見上げていであろうイエライシャへと顔を向けながらそう訊ねる。

そこには予想通り、少し矜持を傷付けられたような彼女の表情を見つけた。

「私をそこまで我侘だと思っているのなら、私は貴方に対して怒るわよ？他人の領域にお招きいただいて……廻りの方々にご挨拶をしない訳にはいかないことくらい承知しているわ。義理を通すだけのことでしょに、どうしてそこまで下手に出るのよ」

まだ俺が自分の事を理解し切っていないと幾ばくかの落胆すら感じ取れるその雰囲気、ようやく浮かんだ微かな微笑みを隠す事が出来ない。

「それだけの理由があるんだよ。だから……心配しているんだ、俺も……そしてヴァルもね」

「……ヴァル殿絡みで、私にも何かあると思っているのね？」

察しのいいその返事に、イエライシャを見下ろすと困惑の色を浮かべるその淡い金色の瞳へと視線を合わせた。

「ないとは……言い切れないな。だとしても俺達のバックアップは信用してくれていい」

それが今の俺に言えるぎりぎりのライン。

それに彼女が納得してくれるかどうかが判らなくて、見つめてい

るとイエライシャはひたと金色の眼差しを向けてくる。

「それは、初めから信用しているわ。でも……改めてお願いするわね？」

「諒解」

困惑のようにも見える、落ち着かない彼女の瞳にはつきりとした言葉で返事を返す。

初めからそれ以外に用意していた答えはない。

その瞳に応じ、微かに微笑み返してくれたイエライシャの頬へ挨拶程度の軽い口付けを落としてから、彼女の部屋へと足を向けた。

091 按試

玄関のエントランスから、ゆっくりとした足取りでファドラインが先をゆく。

メインの大きな廊下を外れる事なく通りすがりの部屋や設備を簡単に説明してくれるその背中を見つめ、一体どこへ案内してくれるのかと思っていたら、辿り着いたのは見覚えのある扉だった。

それは何て事はない、私へと宛てがわれた客室。

どうやら、ファドラインはエントランスからこの部屋への道順を覚えさせようとしていたらしい。

少しだけ隙間の開いている扉を訝しみながら、隣に留まったままのファドラインが特に制止する様子もないのでその扉に手をかけた。

「あら、……まあ」

そして室内を見回した途端、私の口について出たのはそんな言葉だったと思う。

リビングを兼ねる初めの部屋のローテーブルの上には、大きめのトレイが二つ並んでいた。

一つにはシンプルながら優美な絵柄で統一された茶器の一揃いが、焼き菓子とともに用意されていて、ほのかに甘い香りを漂わせている。

来客への心遣いとしてはそれはとても嬉しいのだが、その隣りのもう一つのトレイにはつい溜め息をついてしまったわ。その上に幾つも積み上げられている小箱がこの場には余りにも不似合いだったから、少なからず呆れたと言うのが正しいのだろうか。

後ろではファドラインが小さく笑いをかみ殺す気配がする。

「どうかなさいましたか？」

そして、奥の部屋からは先程の衣装合わせを手伝ってくれていた

侍女の一人が顔を出して、怪訝そうな顔を見せた。

「これは……？」

「ミュゼナさまが先程お持ち下さった、主人さまからお客様への贈り物にございます。明日の今頃には今日の衣装もいくつか仕上がってくると思いますから、それらに合わせてお使い下さいとの事でしたわ」

私の視線から察したのか彼女はさりと答えをくれると、お茶を入れる為のお湯をとりに行くと言いつけ加え部屋を出て行った。

入り口に居たファドラーンへ頭を下げる仕草さえ、さりげなく優雅なの。

その背中を見送り、改めて卓上の小箱達に視線を戻す。

高価なものを納めているのだと細かな細工が主張しているその箱の中身は、見なくても想像がゆく。

確かに明日の晩には高貴な身分の方へのお目通りも控えているらしいのだから、最低限の身なりは礼儀の内だと理解はしている。

「有り難く御借りすると……ヴァル殿へ伝えに行くべきなのかしら」扉へと背を預けるように立っているファドラーンへと視線を向けると、微かに困ったような彼の微笑みに気が付いた。

「贈り物だと言っていただろう？」

「それでも、返却する自由だってあるはずだわ。彼や皆の心遣いは有り難いけれど、もう充分にして頂いているもの。これ以上は、駄目よ」

頑なだと受け取られても構わない、そう思ったからはっきりと言葉を紡ぐ。

拒絶ではないの、感謝しては居るのよ。だけれどこれ以上甘えてしまったら、私は旅に出る以前の無知で愚かな娘から何も変わっていない事になるような気がするの。

でも、今でも臆病なのは変わってはいないみたいだけれど。ずいぶん自分は変わったろうと思うのに、未だに、目の前に居る

人の腕の中へと飛び込むだけの勇氣すら無い。

「頑張って彼を説得しなくちゃならないよ？」

「……判っているわよ」

面白がっているようなファドラーンの言葉に、既に結果を予測しているのだろうと察して力の抜けたような声で返事をしてしまった。判っているわよ、まだまだ私では彼にはかなわないだろうなんて事は。

溜め息と共にそのままソファへと腰を下ろして見上げると、相変わらず扉にもたれたままの彼と視線が合う。

部屋の「今の」主である私が彼を招き入れる為の言葉を口にしていないから、律儀にそこで踏み止まっているのだと知ってはいるのだけれど。

そのための言葉を口にできずにいた。

『一緒にお茶を如何？』

そう、今のようなシチュエーションならば、たったそれだけの言葉で済む事だというのに。

逡巡して視線を彼から外そうとした時、軽やかな足音と共に先程の侍女が戻って来た。

腕には湯が入っているらしいポットを抱えている。

「……あら、こんな所で何を突っ立っていらっしゃるの？もしかしたらお邪魔だったかしら」

ファドラーンへと向けたにこやかな笑顔はそんな事ちっとも心配していないような風情で、むしろ微かにからかうような気配を含んでいるようだ。

それに対するファドラーンも微かに微笑みを見せて返しただけで、

特に言葉を返す事はしない。

けれど他の人にさりとそう口にされて、さらにファドラインのそんな反応を見てしまうと改めて気恥ずかしくなってしまうわ。まるで私が彼との恋愛の駆け引きを楽しんでいる、と皆がそう考えているような気すらしてくる。

妙に頬が火照るのを俯くようにして隠しながら、けれどと反論も考えてみた。

私はまだ彼に返事を返した訳ではないの、だからこんな風にかかわれて、赤くなっていたら駄目なのよ？と。

そして同時に違う事も考えてしまっていた。

そんなに私達は、判り易いのかしらと。

「興味本位でならば……そう言う事はおっしゃらないで頂けませんか？」

声を荒げてしまいそうな内心の鬱屈した怒りをなんとか抑えてその言葉にする。

流石に悪ふざけが過ぎたと思ったのだろうか、侍女はソファに腰掛けた私の元に膝を付くと、俯き加減の私を下から覗き込むようにして視線を合わせて来た。

「ごめんなさい、お気を悪くなさったのなら、お詫び致しますわ。ですが……悪気があった訳ではない事だけは……判って頂きたいの」
穏やかな表情と言葉だったけれどその瞳が余りにも真剣だったから、拗ねたようにふて腐れた態度だった私も、彼女の瞳を見つめな
いわけにはいかなかった。

「貴方が何処までこの国の事を知っていらっしゃるのかは存じませんが……この国の民はそんなに多い数ではありませんの。主人さまの領内の民なぞ殆どが顔見知りと言っても過言ではございませんわ。ですから……誰かにおめでたい事があれば、皆も同様に嬉しいので

す」

まだ、そうとは決まった訳じゃないのよ？

私は、彼を選ばないかもしれないじゃない。なんていう天の邪鬼な言葉が脳裏をよぎったが、真剣な彼女の眼差しにそれは口には出来なかった。

「余所者の私に、皆さんがとても良くして下さっているのは感謝していますわ、けれど……私はここへ伴侶を捜しに来た訳ではないのです。ですから、あまり……そういう風にかかわらないで頂きたいの」

無難な言葉を選んで口にしてみたものの、固い口調になってしまふのは押さえきれなくて、侍女の瞳を見つめていた視線をも背けてしまった。

口にした言葉は拒絶を伴う堅苦しいものだったのに、私の頬はいつまで経っても熱を帯びていて、それが何だか嘘を吐いているような後ろめたい気にさせるのだ。

「判りました、気を付けるように致しますわ。……ご機嫌を直して頂けますかしら？」

「ええ、……もちろん」

此所まであっさりと引き下がられては当然そう言葉を繋がるを得ない。そして、目の前の彼女もそれは計算に入れているはずだわ。

それじゃあ。

「……わざと？」

故意に、私を怒らせようとした？

その可能性に思い当たって顔を上げると、彼女はにっこりと微笑

んで見せた。

「わたくしの独断ではありますが……どの程度で感情的になる方なのか知りたかったのですわ。試するような真似をして申し訳ありません」

独断でと目の前のこのひとは言ったが、その言動の陰には瞬間淡い色の瞳を持つ侍女長の姿が見えたような気がする。

けれど私はその事には気が付かなかった振りをしたまま、深く無礼を詫びる礼を執る彼女を見守った。私の反応はこの地の人から見てどう受け止められているのだろうと、他人からの評価を気にしてしまっていたから。

油断していた、と言ってもいいかもしれない。

「では……お茶を淹れましょうね、勿論フアドラーンさまも一緒に下さりましょう?」

次にあっさりと彼女が口にした言葉を拒絶する訳にもいかなく、黙り込んでしまった。

今度はどう言葉を弄しても拒絶すれば角が立つ。

けれど2人きりでは、この場の雰囲気は和やかとは言えないものになってしまいそうで……。

「では、貴女もご一緒に下さる? まだお名前も伺っていないし、こちらの事も私はさっぱりわからないのです……いろいろ教えて頂けると助かるわ。ね、フアド?」

咄嗟にそう侍女へと話を振ってしまったのは、所謂溺れる者は藁をも掴む、って言うのかしら。

同意を求められたフアドラーンはゆっくりとした動作でソファへと腰を下ろしながら、にこやかな表情を崩してはいなかった。

「君の好きなように」

いつも通りの彼の声が、そう落ち着いた返事をくれる。

彼の言葉を承諾と受け取って促すと、侍女……ティセルと名乗っ

た……はようやく同じソファへと腰掛けてくれた。

時々手慣れた仕草でお茶をサービスしてくれる以外は、侍女としての振る舞いを押さえる事にしたりしいティセル。

彼女の同席を言い出すまでは奇妙な緊張感を身に纏っていたイエライシャも、今は娘らしい微笑みを浮かべてティセルの話に相づちを打っている。

それにしても先程の、わざとイエライシャを怒らせるようなティセルの態度には正直びっくりしてしまったのだが、今の彼女はそんな事はまるでなかったような素振りで笑顔を浮かべている。

ティセルはしぶん打ち解けた様子で自分の仕事の事や、他の者達の仕事の内容、そして侍女長ミュゼナの人柄などさしあたって当たり障りの無い範囲でイエライシャの質問に答えていた。

「主人さまのお留守ですか？そりやもう、年の半分以上は確実に屋敷にはおいでになりませんから……お仕える者達が気を緩める事の無いよう、ミュゼナさまはとても気を使っておいでですわ。それに時々は今回のように突然お戻りになる事もある主人さまですから……気は抜けませんもの」

この屋敷の主人に話が及ぶと、そう言ってティセルは肩を竦めた。「……辺境守りと言うお役目はそんなにお忙しいのですか？」

「こんなにお留守が多いのでは、奥方になられるお方がお可哀相ですわよね。ただ、このお役目はもともと前例のないものだとかで……。主人さまが国王陛下と相談の上、幾つかの部署をまとめて管轄としておられるのだと伺っております」

あまり詳しくはないのだと仄めかすティセルの答えでは納得出来

なかったのか、俺はイエライシャの視線が俺に向けられるのを黙って受け止めた。

「……聞いても良い？」

「俺に答えられる範囲でいいのなら」

そう答えると、彼女は真剣な表情でうなづく。

とは言え様子を探るように、下手に出て来た彼女の仕草が可愛いからと言ってほいほいと話す事は出来ない類いの話題だ。

どう説明するかをしばらく考えてから、俺はゆっくりと口を開いた。

「もの凄く大雑把に言ってしまうえば、この国の国境の管理と警備、そして入出国の監督……ってところかな」

「それでどうして貴方達は他の国を旅して廻っているの？……商人を装って」

「閉じ籠っているだけでは世の中が判らなくなってしまうだろう？」
妙に納得がいかないらしい彼女の言葉に返事を返すと、少しばかり居心地悪くて俺は組んでいた足を組み替えた。

決して嘘を吐いている訳ではないのに。

ただ、今自分が口にした仕事はあくまで表向きの、お綺麗な建前の仕事だ。

その裏側のドロドロしたものをわざわざ披露するまでもないし、気が付いていないのならばその方が良いに決まっている。まるで自分に言い聞かせてでもいるかのように俺は一人ごちて居た。

「じゃあ……どうして？前例のない役職を作ってまでして……彼は何をしようとしているの？」

だから、彼女のその問いは全くの不意打ちに近かった。

そんな風に受け止めるとは思っていなかったから。

「自分自身が前例のない存在だから……これまでと同じ事をしていては、意味が無いだろうと言ってね。本来の彼の仕事の内容とはあまり関係がないような……外遊を繰り返すのにも、彼なりに追求したいものがあるかららしくて。……まあ、俺達もずいぶん彼に振り回されているんだよ」

薄々気付いている者も居るのだろうが、あまり他の者には言った事の無いプライベートな内容を少しばかりこぼして、仕方が無いだろう、と俺は肩を竦めた。

……そんな俺にイエライシャは小さな溜め息を一つ、してみせる。

「何だかんだ言っても、貴方も付き合いがいいのね」

「一応、俺は彼のお守役だからね」

困ったような視線で彼女に見つめられ、平静を装ってそう切り返す。

その言葉に柔らかにつこりと微笑んだイエライシャの反応に、今まで俺が説明した事以外にも多くを理解してくれているのかな、とも思える。

気が付けば、同じように穏やかな微笑みを彼女に返していた。

093 消息と好奇心

二人きりではぎこちなくなりそうだったお茶の時間も、かなり無理に過ぎていった。

まあ、ティセルのお陰だとは言うまでもないわね。

ファドラーンもとても穏やかな表情を見せてくれて、自分達の仕事の内容……と言うよりは、主人であるチャクラヴァルティン殿がこの仕事に関わっている理由の一端を、ほんの僅かではあったけれど教えてくれたのが意外だった。

とはいえ、昨日の出来事や、一緒に旅をしていた頃の出来事などから推測しても、彼が教えてくれた内容がほんの一部でしかない事は私でも流石に判るわ。

隠す気であるらしいのも判ってしまうけれどそれに対して怒る気が起きなかったのは、彼等が国の者達を心配させまいとしているからなのだと、そう感じたから。

勿論、本当の事を話してくれてもいいのになんて思いが無かった訳ではないの。

そんな、奥歯に何か挟まったような少しばかり歯がゆいお茶の間を、そろそろ終わりにしようかと思いかけた頃、ティセルがごく内輪の事を思い出したかのように口にした。

「……そういえば、ジェイルさまのお子は男の子でしたの。パドマさまがおっしゃった通りになりましたわ」

「いつ生まれたんだ？……確か……もう少し先の予定だったと思っただが」

何かを計算しているらしく、思い出そうとしているファドラーン

の顔は眉間にしわを寄せている。

「皆様がお戻りになる2日前でしたわ。徴候が予定よりも早かったので、ジェイルさまは陣痛が始まった日からお休みを頂いて付き添いをしていらしたのです。ミュゼナさまの強いお言い付けだったようですが、ジェイルさまはしぶしぶで。でも……かなり難産だったようで、奥方の傍に居てあげられたのは良かったと思いますわ」

「それで、奥方の……アリシャの容態は？」

難産だったと聞いて慌てたような表情になったファドラーンに、ティセルはにっこりと微笑む。

「大事ないと、知らせが届いておりました。お子もとても元気な様子だと」

「それなら良かったよ。でも道理で奴の顔を見なかったんだな、ミュゼナ殿の腰巾着とまで言われた男が」

「ずいぶん失礼な事を言うのね……？」

気安い仲らしいものの、その人物を侮っていると取られかねない彼の言葉遣いに、私は流石に咎めるように口出ししてしまった。

黙って話の流れを追うだけにしようと思っていたのに。

「ああ……大丈夫。ジェイルと言うのはミュゼナ殿の片腕でね、この屋敷の執事のような役割を果たしている人物なんだよ。君に彼女を紹介する時に一緒に会えると思っていたんだが……居合わせなかっただろう？それが少し引つかかっていたんだが」

「ジェイル殿自身も、侍女長との繋がりが密でなければ務まらぬお役目故……その呼び方も甘受すると、苦笑していましたものね」

私の言葉ににやりと応じただけのファドラーン。

助け舟を出すように、その時の事を思い出してでもいるのだろうか、可笑しいのを堪えている風情のティセルが言葉を補う。

「それで結局、子供はどっちだったって？、パドマさまの言った通りになったと言う事は2人目も男の子だったってことかな？」

彼は更に思い出したと言うようにティセルへと向き直った。

「ええ、長男のラシャの次は可愛い女の子が欲しいって、ずっと言っていたんですが……こればかりは思うようには行かないものですわね」

残念そうに肩を竦めたティセルは、そのまま私の方へと視線を寄越した。

「でも、ラシャもとても可愛いんですもの。今度のお子も皆とても楽しみにしていますの」

如何にも楽しみだと言うその表情に子供好きな女性なのだなとありきたりな事を考えながら、ふと、ファドラーンの考え込む表情にも気が付いてしまった。

「お祝いか、お見舞いに行きたいのならば、行ってくればいいんじゃない？」

普通に親しい間柄の者達ならそうするだろうと思っただけに、彼は少しばかり意外そうな表情を向けて来た。

「どうせ、ラウ……じゃないヴァル殿の事を考えていたんでしょ？彼も一応この屋敷の主人として報告は受けているのでしょし、彼を引っ張って明日の午前中にでも一緒に行ってくればいいのよ。主人だとか王族とか言わずに友人としてなら問題ないんじゃないかしら。どうせ置いて行ったら拗ねるかもだし。それなら名目上無理も無いし、ヴァル殿だって幾ら忙しいからってお祝いに行くのを拒んだりはしないでしょう？」

「……どうして主人さまが拒まないと、言い切れるのですか？」
ファドラーンと同様の表情を見せるティセルに、私の方が不思議になってしまう。

「私がこの三か月近くの間見て来たひとは、そう言う事にも気を配る事のできるひとだと、そう思うからよ？確かに無愛想に見せては居るようだけれど……成功しているとは言い難いもの」

自分がこれまでの旅の間に見て来た人物は、本人がどう装ってい

ようと、そういう本質を持つ人だと解釈していたから。

私はいつになく強気な態度で目の前の2人にそう答えてみせた。

「本人が耳にしたならどんな顔をするのか……見てみたいような台詞だな」

どう反応するかしら？と思っていた2人の内、ファドラーンはそう言うてよく見せる悪戯っぽい微笑みを浮かべる。

一方、ティセルはと言えば微笑みを浮かべては居るのに、何処かぼんやりとしていた。

「……ティセル、私はそんなにおかしな事を言ったのかしら？」

つい、その声を掛けてしまった私に彼女は穏やかな瞳を向け、今度ははっきりとした笑みをくれた。

「あの方を……そんな風に見て下さる方がいらっしゃるのなら、あの方の奥方になって下さる方もきつといらっしゃると思って、安堵しましたの」

「……それは……」

「……どうだかなあ」

あまりに本心から安堵したという表情を見せる彼女に、否定する事もできなくて曖昧に言葉を濁そうとした私の後をファドラーンが引き取る。

彼は今度は明らかに面白がっているらしい。

限りなく可能性が薄いと言いたげなその返事に、ティセルは仕方がないとはかり肩を竦めてみせた。

「まだまだ当分は無理な話だって……判っては居るんですけどね」
少しばかり諦めの混じったその口調に引っかかる。

当分の間って、どういう事なの？

それでも訊ねればチャクラヴァルティンのプライベートに踏み込んでしまうのだろうと判っていたから、私は何かを呑み込むように、その質問を我慢していた。

ティセルはと言えば挑発するようなファドラーンの言葉にも特に反応する訳でもなく、諦めにも似たため息を一つ吐くとテーブルの

上のカップを片付けはじめる。

「聞かないの？なんの事だか」

ついさっきまでティセルに向けていた口調のまま、フアドラインが私に問い掛けた。

片付けた器をのせたトレイを持ったティセルが静かに部屋を出ていく。その背中を見つめていた私は、そのままの姿勢と逸らしたままの視線でそれに答える事にした。

眼を合わせれば、好奇心で一杯の心を読まれてしまうのは判り切っていたもの。

「……そのうちに判る、でしょ？」

「まあね」

視線をそらしたままだったので見えてはいなかったけれど、気配で苦笑したらしい彼もまたいつもの身のこなしで立ち上がると扉へと手をかけた。

「何処へ行くの？」

心細そうな声は出さなかったつもりなのに、振り向いたフアドラインは余裕の笑みを浮かべているのが少しばかり口惜しい。

「ここの敷地内にある……兵舎のような所だよ。戻ったからには一応顔を出しておかないとね。……俺がいない間に規律が弛んでいると困るし」

「警備とか護衛の為の人たちの事ね？」

彼がいなくてもきつと代わりに纏める立場の者が居るはずなのに、と喉元までで掛かったのを違う言葉で誤魔化してみる。

「王族の護衛だから一応所属は近衛になってるんだけど、殆どヴァルさまの親衛隊のノリでね。結構皆好き勝手やってるんで、手綱は握っておかなきゃならないんだ」

どうやら私の呑み込んだ言葉には気が付いていたらしい。そして、思い出したとでも言うように付け足した。

「そうそう、さっき会ったセグリエスやガティノワ達も交代して戻って来ているだろうから……君も来るかい？夕食前までは君の自由時間だから休息に充てても良いし」

「長くかかるの？」

「そうだなあ、少し身体を動かす事になるとは思うから……2時間くらいかな？君さえ良ければ」

セグリエスさんにガティノワさん。その名前を聞いて、一瞬昼前に会った彼等の視線を思い出し、尻込みしかけたのは否めない。でもここに滞在している間中彼等の視線から逃げ続けている訳にも行かないのだから、と覚悟を決めた。

「……行くわ」

そう言葉にする事で自分に踏ん切りを付けた私に、ファドラーンは少し瞳を細めた視線を向けて来た。値踏みされているようなそれを、負けるものかと意地っ張りな気持ちで黙って見つめ返す。

そしてそのまま、数秒間。

「じゃあ、行こうか」

ふっと、微かな微笑みを漂わせた彼はそれだけを言うと、背を向けてさっさと歩きはじめた。

094 不意打ち

通い慣れたいつもの道を歩いている、そんな気樂さが漂う背中を見つめながらファドラーンの後ろに続く。

今までいた主翼と呼ばれる建物を、およそ通用口とは思えぬ程に立派な裏口から出る。

見渡せばさほど広くはないけれど手入れの行き届いて、落ち着いた雰囲気の庭園が広がっていた。

バックヤードとして使われているらしいその向こう側には厩らしき建物も見える。

そちらへと向かうのかと思ったのに、ファドラーンの身体はその脇、整然と整えられた庭園の植え込みの隙間をするりとすり抜けてゆく。

通い慣れた者ならではの足取りは時々ひよいと方向を変えるので、慌ててその後を追いつながらこれがこの屋敷の者達が使う近道なのかしらと推測してみる。

けれど皆が使う道ならば、芝生のように揃えられて育っている下ばえの緑が踏み荒らされて自然と道が出来上がっていても不思議は無いはずだわ。

けれどファドラーンが進むその先に標のような踏み後は見当たらない。

そう思って彼の足元を見つめ、要領の良さにと言うのだろうか、抜け目の無さに舌を巻いてしまった。

偶然なのか地面から顔を出しているように見える小石、植え込みの仕切りのような顔をして半分ばかり地面に埋め込まれている木材、

そして時々幾何学模様を描くように配置されている陶製のタイル。何の脈絡もなく、ただ庭園を構成する素材としてランダムにそこに在る、それだけの筈の物の上を一種独特のリズムを刻むように彼の足が辿ってゆく。

少し迷って、私も彼のその足取りを真似てみる事にした。

大柄なファドラーンの辿るそれを自分もこなせるかどうか不安はあったけれど、すぐに付いてゆく事ができて、むしろ拍子抜けしてしまう。

私が後ろで自分の真似をしながら付いて来るのを承知しているのだろうか、黙ったままのファドラーンの後ろを同じように口をつぐんで、もう少し歩いた。

大した距離でも、速さでもなかったわ。その間に庭園の植え込みは途切れ、私達は幾棟かの建物の脇へとひょっこりと顔を出す恰好になった。

「ちゃんと付いて来れたね」

見上げれば、振り向いたにこやかな表情の彼と視線が合う。

「……随分な獣道だったけどね」

息も殆ど上がってはいないし疲れも無いけれど、そう混ぜっ返すと彼が大きく笑う。

何となく嬉しそうなのは何故かしら。

今度は落ち着いた足取りで歩きはじめた彼の隣を、同じ速度で歩きながら見上げてみた。

「この道は、昔……俺がよく使っていた抜け道なんだ。踏み痕で芝が禿げたりして他の者に気付かれないようにとずいぶん自分で工夫してね。石やらタイルやらをこっそり埋めたり、木杵なんかをはめ込んだりしたんだよ。勿論……この屋敷の主人は承知していたし、むしろ面白がっていたんじゃないかな」

「この屋敷の主人って……ヴァル……さま？」

まだ馴染まない彼の人の名に戸惑いながらも敬称を付ける。今までの気安さもあって、つい呼び捨てにしてしまいそうだった。

「そう」

「昔って、貴方が子供の頃……？」

私の言葉のぎこちなさからそれに気付いているだろうに、ファドラーンは気にするふうも無い。

それに私としても、彼が話してくれた内容の方に気を取られてしまっていた。

「そんなに子供だったって訳じゃないな、この屋敷に俺の剣の師匠が居候していたのもあって……勉強と修練と行儀見習いもかねて通っていたんだ」

以前なら隠していたはずの事をあっけらかんと、そう、無邪気にすら見える程にあっさりと肯定されてしまい、それが何を意味するのか一瞬理解出来なかった。

「その時に、彼は……既にこの屋敷の主人だった訳？ヴァルって一体幾つなのよ、それに……こんな事以前には教えてくれなかったじゃない」

「ああ……もう大丈夫かな、と思って」

幾分感情的になって問いつめた私に、ファドラーンはさらりと言葉を紡ぐ。

「……彼は……俺の爺さんよりも年寄りでね、たしか……あと十数年で百歳になるんだよ」

その時は盛大に祝ってやろうと思ってね、とにやりとする彼。

「それを喜ぶ人だとは……思えないわ」

「……隊長、ファドラーン隊長じゃありませんか。お帰りなさい」

どんなつもりでそんな企みを考えているのかは知らないが。

妙に嬉しそうなファドラーンへとそ異論を唱え彼へと向き直ろうとした時、背後にしていた建物の方から声が掛かる。

意外そうな、でも明るい声で、若い男性のものだわ。

瞬間、先程の二人かと思つて身構えてしまったが、廻りを見廻しても人影は見当たらない。

そこから見上げて、ようやく2階の窓から顔を出している人物に気が付いた。

どうやらさつき会った二人とは別の人物みたい。

声の感じからして若者と言うよりはまだ少年に近い、のだろうがはっきりとその顔を見分ける事が出来なくてつい見つめてしまっていた。

かなりはつきりとした金色の髪が輝いているのに、その表情は影になつているのかしら、と思うくらいに色が黒い。

「アルガ、そんな所から見下ろすんじゃない。お客さまに失礼だろう、おりてきなさい」

「はい、済みません」

やんわりと窘めるファドラーンの言葉に素直に謝罪して、彼の姿は窓から消えた。

「彼の肌の色はそんなに異様かな？」

その問いかけで私はようやく、彼が生まれつき肌の色が濃い人々の出身なのだと気が付いた。

「もっと濃い色の人も見た事があるわ、確かバーラートで。確かに初めて見た時は怖かったけれど、慣れてしまえば、いろんな話をしてくれる陽気な人たちだって聞いた事もあるもの」

伺うような、それとも私の反応を試すかのような、だろうか心配そうなファドラーンの問い掛けにそう答える。

振り向いて彼を見上げると、案の定彼は安堵したような表情をしていた。

確かに、私の故国では肌の色に何らかの偏見を持っている人々が

多いのは確かだわ。

私もそんな狭量な偏見を持っているのではないかと案じたらしい彼の、その気持ちも判らなくもない。

より肌の色が薄い自分達の方が優位なのだと、そんな根拠のない優越感から他の民族を蔑視する者が居る事を知っている。

誰かより自分の方が優れていると、そう思い込むのは容易いし、何と言うのか……心地よくさえあることも。

でも変よね、自分自身がそれで本当に優れた人間になれるはずもないのに。

「先程は失礼致しました。改めてお帰りなさい、隊長」

正面の入り口の方から回り込んで来たのか、先程の彼がすぐに小走りで姿を見せた。

私達が来たのとは逆方向から彼が現れた事からしても、今私達が通って来た道が裏道中の裏道である事は間違いない。

「近道、と言って欲しいね」

私の耳元にそう言葉を送り込むとファドラーンは彼に向き直る。

「イエライシャ、彼はヴァルさまの客分としてこの屋敷に住んでいるアルガ・ペーシア。早くに両親を亡くしたので、成人するまではヴァルさまが後見を引き受けたんだ。今は一応近衛の見習いとして、必要な勉強や修練を受けている所なんだ」

「そして、アルガ。こちらはヴァルさまのお客さまで……セシリア・イエライシャ・グレンフォード嬢。さて……彼女がどちらの出身か判るか？」

「……え？ 出身ですか？」

思いがけない問いかけだったのか、アルガはきよとした表情でファドラーンを見上げている。どうやらアルガの身長は私と同じ位のようなだわ。

そして彼のその愛嬌のある瞳は明るい青色。

ヴァルの昏い蒼の瞳とは対照的と言ってもいい良い程に爽やかな色

だ。

にっこりと笑っているファドラインと私とを交互に見つめて、困った表情を浮かべている彼にとうとう笑いが堪えられなくなった。

「……私はユグドラセアの出なの。このファドラインだって初めは判らなかつたくらいなもの、気にしなくても良いわよ」

「そんなにあっさり白状してしまつたら、つまらないじゃないか」突然そんな事を訊ねられて困り果ててしまつたらしい彼に、吹き出してしまいそうなのを我慢してそう種明かしすると、アルガの表情はぱっと明るくなった。

隣のファドラインは如何にもつまらなさそうにそう言い、そして少しばかり肩を竦めて見せる。

「随分……旅慣れているふうな貴方だつてすぐには判らなかつたのだから、まだ若い彼が知らなくて当然じゃない。そんな意地悪さんだとは知らなかつたわ」

「せめて、もう少し推測させてから教えようと思つたんだよ」睨み上げて見せると、ファドラインがそう付け足す。

でも、難しい質問に狼狽える生徒を楽しんでいただろうというのは、その表情で判るわよ。

「初めまして、お客さま。あの……貴女がヴァルさまの……お妃候補だつて噂はホントなんですか？」

094 不意打ち（後書き）

お約束のご長寿ネタで

095 噂の速度

好奇心からの問いだったのだろうと思うけれど、何うような、探るようなその問いは全くの不意打ちだったわ。

私は瞬間黙り込んで、その質問をして来た多分私とそんなに年は違わない彼、をまじまじと見つめてしまった。

「……ほら来た。誰だ、早速そんなガセをばらまいた奴は」

隣で同じように凍り付いていたファドラーンがそう言葉を繋ぐのだけれど、彼の言葉の端からも明らかな動揺を感じ取れる。

これは、今後何回でも遭遇するであろうこんな場面で、私もきちんと対応しなくてはいけないのね、と気を引き締めざるを得なかった。

「さつき警備の当番から帰って来た、セグリエスさんとガティノワさんがそう言っていたんですよ。主人さまが女性をお連れになったと」

「……それで二人は？」

「ガティノワさんが……すぐに用事ができたからと外出を。セグリエスさんはさつきまで食堂でしたけれど」

この話題が出てから急に厳しい表情になってしまったファドラーンに驚いたようで、アルガは少し落ち着きが無くなっている。

「やっぱり、か。今更だが、ガティノワの行動には今後更に気をつけなけりゃいかな。あいつの……エブランデティオス家は家柄の良さが自慢でね。そのお陰でここに所属しているのだが、どちらかと言うと現王の勢力に迎合していて、時々自分の主人の情報を実家

に流しているらしいんだ。」

さらりと何でもない事のようにそう説明してくれるのだが、内容はかなり微妙な、護衛の任に当たる者にはあってはならないような内容ではないの？

私の表情が強張っているのに、ファドラーンは至って軽く肩を竦めただけで。

「勿論初めからそれは承知の上なんで、どの情報をどの程度見せるか……は気をつけているんだよ。勿論、今回の君の事もね」

ちゃんと手綱は付いているし、ある程度計算済みだと言いたいらしいのだが、あっさりとそれを受け入れるには不安があり過ぎた。

理由は判っているの。

私は彼等に対して、と言うよりは自分に自信がないから。

別の言い方をすれば、何の為にこの国へと渡って来たのか、そう問われた時に胸を張って答える理由がはっきりとしていないからだわ。

でも、はっきりと意思表示しておかなくちゃいけない事があるのは判ってきた。

「えっと、アルガ？確かに……私はこの屋敷のご主人の招待を受けてこの国に来たのだけれど、そのヴァル殿とは……さっきの彼等が噂していたような事は一切ないの。浮ついた噂を流されるのはとても不本意なので、協力して下さる？」

「協力……ですか？」

怒っているのではないと判ってもらう為に笑顔で、それでも訝しげなアルガにゆっくりとうなづく。

「別に何かして欲しいって訳じゃないの。ただ、私とヴァルさまの……その手の噂を振られた時に、否定して下さればいいだけなの」「……それで僕が嘘つきにされる、と言う事はないんでしょうね？」
「こら、アルガ」

少し目を眇めるようにしてアルガの瞳が私を伺う。

真面目な表情で言った私が疑われているのではなく、多分彼が慎重な性格だからそんな言い方になったのかしら。不躰とも取れなくはない彼のその言葉にフアドラーンが何かを言おうとしたのだけれど、私はそれを遮っていた。

「もちろん、ありませんわ」

他の事には自信はなかったのに、これについては確信にも似たものがあった、そうはっきりと肯定すると改めて私は彼を見つめた。そして彼も私をしばらく見つめ、そして不思議そうな表情を見せる。

「……わかりました。なるべくご希望に添えるよう……努力はしますが、大した働きは出来ないと思いますよ？」

「どういう意味でしょう？」

「……噂でもいいからあの方との仲を疑われない、っていうご令嬢になら随分沢山お目にかかってきました、貴女はその逆なんですね」

アルガの唇の端に浮かんでいるのが微笑みだと判って、ようやく私もぎこちないけれど作り物ではない笑顔で、それに応じる事ができた。

「ええ。そう思われる事が、私にはとても不本意なので」

深い意味もなくそう言っただけの私の言葉なのに、アルガは明らかに曲解したらしい。

含みのある視線をフアドラーンへと向けて、にっこりと更に微笑んでみせる。

「残念でしたね、隊長。ヴァルさまが身を固められ、さらに隊長に彼女ができれば貴方がヴァルさまと怪しい仲だって言うウワサも消えちゃうんですけどね」

「……え？」

「ばっ、な、な、……何を言ってるんだ、アルガ？」

私が間拔けな声を出すのと、ファドラーンが裏返ったような変な声を出してアルガへと問い返したのはほぼ同時だったと思うわ。

少年が口にした事の意味をすぐには理解できなくて戸惑う。

そして彼が仄めかしたのは私の故国では忌わしい背徳的行為と看做される行いの事だ、と思ひ当たった頃にはアルガは既に事態を楽しんでいるといった満面の笑みを浮かべていた。それに対して私は頬が火照って赤くなるのを何とか隠そうと、両方の頬を手のひらで隠すことしか出来ない。

「あまりにもヴァルさまに女性絡みの噂がないものだから、一部のご婦人方の間ではそんな戯れ言も囁かれているんですよ。そうでなくは彼女達のブライドが許さないんでしょうね。それとも……遊ばれているだけなのかな」

「もういいから、アルガ」

かなり困ったようなファドラーンの様子と、けろりと悪びれる風もないアルガ。

ファドラーンもその噂は既に承知していた風にも見えるけれど、

私の耳には入れたくなかったのかしら。

彼のその狼狽えぶりは面白い程で、普通ならば眉をひそめてしまう類いの話題だと言うのに私はただ彼等のやり取りを見守っていただけだったわ。

「お前はラズイルに声を掛けて、皆を集合させるんだ。ヴァルさまは臨席なさらぬが、そのお客人に代理を頼んでの閲兵をする。まさかすぐに用意が出来んと言う程に弛んでいるとは思わんが、長くは待たせるなよ」

「はい、御命承りました」

背筋を伸ばして、ようやく気を取り直したらしいファドラーンがそう言葉を続けると、応じたようにアルガも姿勢を正して礼儀正しく答える。

そして踵を返して急ぎ足で建物の中へと入っていった。

アルガの変わり身は見事なまでに鮮やかで、先程の態度からは想像も付かないくらいに礼儀正しい。

それに半ば呆れて彼の後ろ姿を見送ってしまった私は、ファドラーンが何かを言ったらしいのにも気が付かなかった。

「……何？」

名前を呼ばれたのだと気付いて見上げると、笑顔が妙に楽しそうだわ。

「そんなに呆れなくても良いだろう？ さ、行こう」

「行くって……何処へ？」

突然そう促されても、何の事だか判らないじゃない。

「練兵場として使っている馬場。この主人の代理として、そこで君が彼等を閲兵するのさ。今のアルガと俺のやり取りを聞いていなかった訳じゃないだろう？ さ、どうぞ」

ぼんやりしていた私をからかうような口調で揶揄した彼は、笑顔のままで腕を差し出す。護衛も兼ねる案内人だからこれくらい傍に近寄っても礼儀上の問題はないけれど、それ以外の思惑もちゃんと判った。

内緒話は近い程聞き取られにくいって。

でもどうして私なの？

しかもヴァルの代理だなんて、口実に過ぎない事は明らかすぎる。隊を動かすだけなのならば、隊長としての貴方の権限があるじゃない。

差し出された彼の腕に素直に手を沿わせ、どんな言葉でそれを訊ねようかと思案しながらファドラーンの横顔を見上げた。

「君がこの屋敷の主人からどれほど信を置かれた客か、という事を誇示しておきたいんだよ。ヴァルさまからの指示もあつての事だか

ら、当然と言う顔をしていてくれるね？」

「この屋敷にはガティノワさん以外にも、貴方達が信用していない人が居るの？」

私が疑問に思う所なんてちゃんと判っていると、前を向いたまま特に表情を変えるふうもない彼にそう尋ねてみる。知らないままに居て、余計な騒動を起こすような事はしたくないもの。

「そうじゃない。むしろ、ここ以外の外部の人間の動きを把握しておきたいと思っている、と言った方が良いかな」

「よく……わからないわ」

「説明してあげられない事ばかりで、すまない」

肩を竦めて、呟くような返事になってしまったのは誰かを困らせる為ではなかったのに。

本心からそう思っている、と少し不機嫌そうに寄せられたファドラーンの眉が語っている。

けれどその不機嫌が自分自身に対してなのか、私を手駒の一つとして扱おうとしている彼の主人に対してのものなのかは判らない。

「でもね、聞いてくれる？ 私は不満に思っている訳ではないわ。リスクもあるでしょうに貴方がたは私をここへ連れて来て下さったのだもの、そのリスクに見合うだけの代償を支払う覚悟は一応あるのよ？」

「イエライシャ……？」

それは今まで口にした事はなかったけれどずっと思っていた事で、ファドラーンに知ってもらうには丁度良いタイミングのような気がした。

偉そうな事を言っているという自覚はあるの。

その代償に見合うどんなものをも、私が持っていない可能性すらあるのだけれど……それでも。

私のなけなしの覚悟を初めて知ったという彼の表情が、驚いたも

のから穏やかな微笑みへと移ってゆく様をドキドキしながら見守る。
こんな事を言って、自分の進むべき道も見つけられないくせに、
なんて身の程知らずな事を言う女だろうと呆れられてしまうかしら
とも思っていたから。

「莫迦な事を言っていると思う？」

「いや、びっくりはさせられたけどね。でもそれはヴァルには内
緒にしておいてくれる？」

「どうして」

「これ以上彼が調子に乗ると、フォローするのが大変だから」
そう言ったファドラーンの表情は私からは見えなかった。

彼は、再び前方を向いて目的地へと歩き出してしまっていたから。

096 異例と慣例

少し早足で目的地に向かいながら、俺は心の中で溜め息をついていた。

黙って俺のエスコートについて来るイエライシャをちらりと見遣り、もう一度溜め息を零しそうになる。

これから先、この国に滞在する間に彼女が辛い思いをする羽目にならなければ良いと……そう心から思うから。

思いがけず聞く事のできた彼女の覚悟。

それこそが、俺達が彼女に期待できる代償の最たるものと、当の本人は気付いているのだろうか。

そしてその覚悟を以ってしても、彼女がこれから先に予想しうる事態を無傷で切り抜けられるとは、俺には到底思えなかった。

それはヴァルの権威と俺の采配だけでは防ぎきれない、心理面のダメージ。

はじめから俺の客として招いた者であれば、こんな心配はしなくても済んだかもしれない。だが、悲しいかな俺にはそれだけの権限がない。

こんなデメリットも承知の上で、上司たる彼に依存しなくてはならないのだ。

ヴァルがその権力を傘に無体を働くような人物ではないのが救いとは言え、余計な騒動に巻き込むのが判っているから余計にもどかしい。

珍しくうだうだとマイナス思考に突入しかけていた俺を現実へと引き戻したのは、軽く腕に手を沿わせているイエライシャのその幽かな体温と見上げて来る彼女の視線だった。

「何処まで行くの？」

「すぐそこだよ、もう……見えてる」

慎重に探るような口調で質問して来たのは俺の機嫌を伺っているらしいからだと察せてしまい、努めていつも通りの態度で返事を返した。

伝言を持ったアルガが入っていった建物を回り込むように移動して、開けた場所の縁へと辿り着くと足を止める。

そこはむき出しの地面が顔を覗かせる広場のようになっていて、固く締まった土がこの場所の使用目的を示していた。この広場の向こうには厩が見渡せる事からしても、歩行や騎馬での鍛錬場だと察する事ができるはずだ。

「ここがそうなの？」

「練兵場も兼ねた馬場なんだ。時間があれば皆ここでそれぞれに身体を動かしているんだ。鈍らないようにね」

「フアドラーン、貴方も？」

ぐるりと馬場を見回して物珍しげにしているイエライシャは、俺の言葉にそう質問して来た。

「非番の時には、勿論。後、ヴァルさまもね」

「嘘、彼がここで、皆と一緒に？」

余計な事を付け足してしまっただけかな、と思ったもののイエライシャの反応が面白かったので言葉が続けることにした。

「そもそも本館の方を造った方は武芸を嗜まない方だったから、あちらの建物には身体を動かすのに適した空間がなくてね。新しく造り足すか改築する事もできたんだけど、ヴァルさまがこの屋敷を造った方の趣味にはそぐわないからとか何とか言って……そのままになっているんだ。まあ、本当の所は単に面倒だとか思ってるくらいなんだろうね」

「……変なの」

呆れたような笑顔のイエライシャは、それでも何処か納得してい

るような落ち着きを見せている。

「まあ、普通に考えればそうかもしれないけどね。一緒に身体を動かしたりする事で連帯感のようなものも生まれるし、何より廻りの者達の技量を把握する事もできるから、彼にとってはメリットの方が大きいんだよ」

「はじめっからそっちの理由を聞いた方が納得出来るわ」

そう本音のような事も聞かせてしまったのだけれど、やはり彼女の態度は変わらない。

むしろそれを最後まで隠していた事を責めるかのような視線で下から見つめられてしまい、どぎまぎしてしまった。

多分表情には出ていないとは思うけれど、自分が少し落ち着きが無くなっているのを自覚する。なるべく平静を装いつつ、早く伝言を宛てた相手が現れないかと腕組みをして待つ羽目になってしまった。

そう自制していなければ、欲に負けた俺の腕はイエライシャを掴まえようとしてしまうから。

097 緊張と油断の微笑

理由は判らないけれど何となく落ち着かなさげに腕を組んでしまったファドラーンを視界の隅に捉えながら、私は目の前の広場を見渡した。

そしてこんな場所で自分の親衛隊の騎士達と一緒に鍛錬をするヴァル、次期国王陛下……を想像してみる。

自分から身体を動かしに来ると言う事は、腕は悪くないと言う事なのかしら。ナイフ投げの腕が良いのは以前目にした事だから確かよね。

そして改めて考えてしまう。

確かに身分ある人物、主君としての立場での行動としては奇妙かもしれないわね。

それでも彼がどんな人かを知ってしまっている今となっては、たいてい違和感を感じない。

丁度目の前の下生えの草が踏み荒らされて地面が顔を出している辺りには、確かに馬の足跡と思しき踏み痕が幾つも見て取れる。

武術の鍛錬と言うものがどういうものかあまり判っていない私は、馬を使ってどんな訓練をするのかしらと考えながら、ふと、空を見上げた。

昼食も済ませた昼下がりに。

曇りともいえない明るさの空は一見した限りでは雲に覆われていて、とても奇妙な印象を受ける。でもこの国は氷河の下にある、とファドラーンは言っていたわ。

だとしたら空なんてあるはずがないじゃない。

今頃そんな事に気が付いてしまい、隣のファドラーンを見上げる。ふと、微かな風が頬を撫で、同じようにファドラーンの髪を一筋浮かび上がらせた。

では……この風は何処から来たものなの？

一つ疑問が浮かぶと、やはりそう考えてしまう。

今のファドラーンにはこの質問に答えをくれるだけの余裕があるかしら、と見上げて彼を見つめた。

「ようやく来たみたいだよ」

けれどタイミングが悪かったみたい。

見上げた私にそう彼が口を開いてすぐ、背後にしていた建物から人の気配が近付いて来るのに気が付いた。仕方がないわね、質問は後回しということだわ。

そう自分の中で順番を決めて、振り返るように巡らした視界には二十人以上の若者が揃ってこちらへと向かって来る姿が映る。皆お揃いのティールブルーの制服に身を包み、きちんと帯剣しているのは先程会った二人の若者と同じだわ。

その一団を先導しているのはファドラーンより少し年上かと思える黒髪の男性で、身に着けている衣装はほかの若者達のものとは大して違わない。細部に確かに差は付いてあるのだけれど遠くから見たら見分ける自信はないわね。

そして彼を含めて皆が膝下までのブーツを半分解り返している。

と言う事は今日は馬には乗らないと言う事ね、とこれまでの旅の間に得た知識で判るのはそれくらいの事でしかなかった。

「整列！」

低めの声で先頭の男性が号令を掛けると、大して乱れてはいなかった隊列が私とファドラーンの前で更にしっかりとまとまる。

「この人数で全体の三分の一くらいかな。残りは非番でここを離れ

ている奴らと、今現在屋敷の警護に当たっている奴ら。全員あわせて七十人くらいがヴァルさまの親衛隊に所属しているんだ」

いつの間にか私の後ろへ半歩下がってしまっていたファドラーンが小声でそう説明をくれるのだが、彼に視線を返すとか相づちを打つとかいうリアクションはとれなかった。

なにしろ目の前の親衛隊の視線が私に集中しているのだもの。

あからさまに思惑を感じさせるものではないにしても、押さえきれない好奇心を多く含むその視線に落ち着かないというよりは、今すぐ逃げ出してしまいたいと思う程に緊張してしまった。

それでも逃げ出さないで何とか踏んばっていたのは、先程口にした代償と言う言葉故だった。これもその一部になるのだろうと察していたから、尚更無様な姿を晒す訳にはいかないわ。

「敬礼！」

再び黒髪の男性が大きな声を出して自分の右腕を上げ、胸に添える。

一瞬遅れて彼の背後に並んだ若者達もそれに倣い腕を上げた。

「略式の儀式だけれど……君からも返礼をしてやってくれる？」

どんな表情をしているのか伺うべくもないのだけれど、少し潜めたような低い声で背後のファドラーンが指示をくれる。

私と言えば、もうどうして良いのかも判らなくて、ただ身体が覚えているままに故国ユグドラセア風のドレスに手を添えて腰を低くするいつもの礼を執るのが精一杯だった。

ごく普通に、同じくらいの身分の男性に対してするのと同じレベルの礼を執り、ゆっくりと身体を起こす。そしてふと見覚えのある顔を見つけ、視線があったその人物をつい見つめてしまっていた。

たしか、セグリエス・ティルガと名乗った彼だったわ。

さっきの話題になっていた、ガティノワ・エブランデティオスと

一緒に屋敷の警護に当たっていた人だ。

ガティノワと言う人は多分……自分の身内に情報を伝える為に外出したのだと考えられていたが、この人はそうではないらしい。特別名前も出ていなかったし、つまり、彼は少なくとも警戒されてはいないと言う事なのよね。

頭の隅っこでそんな事を考えながら、私は社交用の微笑みを無意識のうちに浮かべていたらしい。

それに気付いたのは、セグリエスさんがぱっと嬉しそうな微笑みを返してくれたのを訝しく思った時だった。

咄嗟にしまったと思ったものの、後の祭り、だわ。

自意識過剰な訳では無いけれど気安すぎる微笑みなんて振りまいていたら、誤解されて余計な騒動の元になるだけだわ。ヴァルやフアドラーンの迷惑になってしまったらどうするの？

相変わらず間抜けな自分に嫌気が差して、口元に力を入れた。もう間違ってもへらへらとした微笑みなんて浮かべてしまわないように、厳めしい表情を心掛けることにするわ。

098 緊張と油断の微笑2

背筋を伸ばして立つイエライシャの隣に半歩だけ控えて並んだ俺は、彼女の視線が捕らえるであろうものをその頭の動きから追っていた。

勿論そればかりに集中していた訳じゃないぜ？

同時に部隊の動きや揃い具合もきちんと把握出来るようにしている。

好奇心やそれぞれの思惑から注意の多くをイエライシャに向けているおかげで、どうやらいつもより隙の多い騎士達をじっくりと観察する。明日の晩の王宮への伺候に当たって、親衛隊が弛んでいては困るからな。

こんな機会は確かになかなかないから、見せ物のような扱いのイエライシャには申し訳ないのだが。

「略式の儀式だけれど……君からも返礼をしてやってくれる？」

副隊長を務めているラズイル・シアルウィールの号令で皆が一斉に動き、乱れのない揃い具合に満足しながらそうイエライシャに指示を出す。綺麗な姿勢を保っている彼女だが、その実緊張で固まっているだけだとちゃんと判っているからね。

とは言え漠然とした返礼と言う言葉だけでどんな行動を取るかは彼女任せだったのだが、いつも通りの優雅な礼を、浅過ぎずかといつて深過ぎもしない微妙なバランスで披露してみせる。

まるで彼女の立場を表わしているような微妙な危うさだな、と考えながら見守っていた俺は、顔を上げたイエライシャのその視線の先にいた男がイエライシャににこやかな笑みを見せたのに気が付いた。

その男はさっき玄関前の警護をしていたセグリエス・テイルガだ

と咄嗟に判別が付くが、なんでそんな笑顔が出て来るんだ？

そんなに積極的に女性にアプローチするタイプの男ではなかったはずなのに。

そう訝しみながらも、中断させる訳にもいかない型通りの儀式を続ける。

とは言え略式のもので、じきに整列していた者達も隊列を変えると馬場の縁へと移動して一旦そこで解散となった。その後は各自での鍛錬となるのがいつもの流れだ。

案の定、皆は幾人かずつのグループで固まってそれぞれに手合わせをはじめめる。

俺はそれらの動きを目の端に入れながら、副隊長のラズイル・シアルウィールが挨拶に来るのをイエライシャの隣に立ったままで待つ事にした。

ラズイル・シアルウィールは俺より少しだけ年上で、落ち着いた雰囲気のある黒髪の男だ。

瞳の色は一見すると黒いのだが、時々金色が掠める不思議な色をしている。自分の瞳の色が実は嫌いなのだと公言して憚らないヴァルなどは、彼の瞳の色が気になって仕方がないらしい。

こちらへと足を向けながらも途中の若者の指導を怠らない彼が、その視界に俺達を映しているのを承知しながら俺はイエライシャに彼を指し示してみせた。

「彼が副隊長のラズイル・シアルウィール。俺が長い間留守にする事が多いから、実質的にはこの隊を纏め上げているのは彼だと言っても間違いは無いな」

俺の指し示した方向を見つめるイエライシャが少し俯き加減で、らしくない、と感じた。

「……何か気になる事でもあったの？例えば、セグリエスの事とかで？」

鎌をかけた訳じゃないが、思い当たる事と言えばそれくらいのも

のだ。

けれど案の定、彼女は増々俯いてしまう。

どうやら凶星だったらしいのだが、セグリエスのやけに嬉しそうな微笑みと目の前のイエライシャの落ち込み加減とがどうにも繋がらない。

「どう……」

「ご免なさい、失敗したかもしれないわ」

一体何をそんなに深刻に考えているのか問いかけようとしただけに、先に謝られてしまった俺は戸惑う。

「返礼も完璧だったし、隣で見ていた限りでは君は失敗なんてしていないと思うんだけど？」

できる限り穏やかな声でそう返事をする、ようやくイエライシヤは顔を上げて俺を見た。

しばらく言いにくそうにしていたが、聞き取れるぎりぎりの声が帰って来た時はどうしようかと思ってしまった。

「うっかりしていて、セグリエスさんにだけ微笑んじやったの。何か誤解されちゃったらどうしよう……って笑わなくても良いじゃない」

実に他愛の無い事で真剣に悩んでしまっているその姿に笑いが込み上げるが、胸の奥では少し複雑な気持ちも蟠っていた。

社交辞令に過ぎないイエライシャの微笑みに、嬉しそうな反応を見せたセグリエスの気持ちも判らなくはないのだが、それを目の当たりにしてしまうとつまらない独占欲がうずく。

そんな翳りを隠したまま、やはり俺はしばらく笑い続けていた。

099 緊張と油断の微笑3

「そ、そんなに笑わなくても良いじゃない」

実際何が面白いのか判らないけれどファドラーンは随分と笑ってくれた。

そんなに笑われてしまうと、私は自分の自意識過剰ぶりを嗤われているような気がしてくるわ。

真面目に向き合っているつもりなのに、取り合うまでもないとあしらわれているみたい。

ましてや周りからの視線が痛い程なのは相変わらずで、ここでこれ以上ファドラーンに食って掛かる訳にもいかないじゃない。

「ご機嫌ですね、ファドラーン」

そうこうしているうちに、こちらへと歩いて来ていたラズイルさんがファドラーンの隣へと立った。

低めの声がファドラーンの様子を伺っているみたい。それに言葉遣いは丁寧だけれど、補佐役と言うよりは対等の立場に立つ者のよう。

どうしてかしらと見上げていたら、身長も同じくらいの二人はそれぞれ右手の拳を軽くぶつけ合い、そしてにやりと笑みを交わし合う。

「……その笑い方、誰かさんに似ているわ」

そう、何と言うのか彼等の主人にそっくり。

「仕方ないだろう、気が付いたら伝染ってたんだ」

「特にファドラーンの方がヴァルさまとの付き合いが長いから、無理もないですね。子供の頃からだそうですね?」

特に気にもしていない風なファドラーンの返事にラズイルが相づちを打ち、続けた言葉が私に向けたものである事に気が付いた。訝しげに見上げてしまったのは、初対面にしては馴れ馴れしいその態度に戸惑ったから。

お互い自己紹介もしていないわ、それなのに。

「……おや、失礼でしたか？ さっきファドが私を指差していたから、てっきり紹介済みだとばかり思っていました」

「お前がそんな態度を取るとは思わなかったからさ。相手はユグドラセアの淑女だぜ？」

私の表情に気が付いた彼は、少しばかり意外そうにファドラーンへと視線を向けた。

咎めるような彼のその視線を涼しい顔で受け止めたファドラーンはさりとそう流すのだが、私としてはさっきの私の失敗を当てこすられているような気がしてならないわ。

「では改めて、私はヴァルさまの親衛隊の統括を任されています副隊長のラズイル・シアルウィール。以後お見知り置きを」

「セシリア・イエライシャ・グレンフォードです。よろしく」

ファドラーンの言葉に特に気を悪くしたふうもなく、ラズイルは自分の胸に右手を当てると軽く上体を倒してみせた。

これがこの国の習いなのねとその礼を受けた証として、私も腰を屈めるといつもの礼を執る。そしてようやくラズイルを見上げた。

勿論新しく知り合いとなった人物へ向ける微笑みも忘れないわよ？

「ごめんなさい。堅苦しいと思われるかもしれないけれど、やっぱり落ち着かないの」

「随分と礼儀正しい方なんです。さっきセグリエスにはとっても優しい微笑みを見せていらしたから、俺も期待していたのに」

だのにそう言葉を続けられてしまって、私は自分でも笑顔が引き

つるのを自覚していた。隣ではやはりファドラーンが笑いに肩を震わせている。

「どうかなさいましたか？」

「……それは」

余りの目敏さに、言い淀んでしまった私。この人は物腰は柔らかだけれど、なめてかかったら絶対痛い目を見るタイプの人だと咄嗟に思う。

「そのセグリエスへの微笑みは、彼女曰く大失敗なんだそうだ。緊張し過ぎで……うっかり笑顔の安売りをしてしまったと気に病んでいる所だよ」

迂闊な事を口にして揚げ足を取られると困るし、と言い淀んでしまった私の代わりにファドラーンがラズイルへと口を開いていた。まるで冗談を飛ばすような口調で、如何にも大した事じゃないかのように。

「……あの程度で大盤振る舞いですか？この国ではあの程度挨拶レベルですよ。誤解されたくないと言うのならセグリエス以外の者にも同様に微笑んでおやりなさい。あいつも自分にだけ微笑んでくれた女性がいたからって、のぼせ上がるようなお調子者って訳でもないですから。大丈夫ですよ」

「ほらね？」

気にする事ではないとばかりの口調でファドラーンの言葉に応じたラズイル。

それに同調していたファドラーンだったが、その後に続けられたラズイルの言葉には見事に裏切られてしまった。

「まあ……ヴァルさまがそんな事をお気になさるとは思いませんが。それとも、貴女が他の男に必要以上に愛想良くするのを嫌がる誰かがいる、と言うのなら話は別ですけどね」

この人も何かを探ろうとしている、と漠然と感じる。

ただ、穏やかなラズイルの口調には余裕が残してあった。私が彼のその言葉を素知らぬ振りでやり過ごしても特に角も立たない程度の隙間が。

それが意図的に残されていたものだとはいたけれど、それだけでは私や周りの人たちとの関係を特定出来はしないはずだと割り切って、私は微笑んだままでいる事にした。

そしてファドラーンもラズイルの突っ込みに狼狽えもせず、余裕の笑みを浮かべている。

「ヴァルさまがお決めたことだ。イエライシャ嬢の顔見せも兼ねての閲兵を、とね。それ以外の意図は俺に聞くなよ」

「了解」

ラズイルは、合点がいったとか特別な感情を見せずにそう短い返事を返しただけ。

先程のツツコミ加減からすれば拍子抜けしそうなくらいに素っ気ない返事だったけれど、彼なりに何かを理解したという反応なのかしら。

100 緊張と油断の微笑4

ラズイルの言う通りにする訳ではないけれど、それからの私はなるべく微笑みを浮かべてにこやかな表情を心掛けるようにした。

確かに、他の皆にも同じように微笑んでおけば、セグリエスだけに特別の笑顔を向けたのではないという言い分は通るわ。

ただ、なしくずしに自分が八方美人的な笑顔を振りまいているような気がして、自己嫌悪に陥ってしまうのは止められなかったけれど。

例えこの国のモラルの規範が私の故国程に厳しくはないと聞かされていても、やはり自分の中にある規律を覆す事は容易ではないの。それにしても先程の閲兵は本当に略式のものだったみたい。今は適当に間を取った若者が思い思いの相手と剣の練習を始めている。彼等のその様子を見ながら少しそわそわし始めているファドラーンに気付き、彼がこの場に居合わせるのも久しぶりなのだと思いたる。

「私はここに居るから、隊の皆さんとご一緒してくればいいのに」
「……お客人の事なら私が付いていますから、大丈夫ですよ。隊長不在の隊であっても腕は落ちていませんからね、遠慮なくどうぞ」
私の申し出に少し躊躇していたファドラーンだったけれど、ラズイルの言葉を聞いてしまえば出ない訳にはいかない。少しばかり棘のある言葉には、隊長としての責任と言う有無を言わさぬ響きがあったのだもの。

ましてや丸腰でこの場にいた彼に、ラズイルが黙って剣帯ごと自分の剣を差し出せば、受け取らないわけには行かないわね。

「それじゃ、行ってくるよ」

「お気を付けて」

軽く肩をすくめたファドラーンが剣帯を片手に私の方を見れば、そう言葉を繋いだのはラズイル。

険悪になっても不思議はない状況なのに、あっさりとラズイルの剣を受け取ってファドラーンは鍛錬場へと足を踏み入れていった。

「すみませんね、一応これも彼の仕事なので」

背筋を伸ばした彼の後ろ姿を見送っていたら、隣からそうラズイルの声がした。

ちら、と目をやると何処と無く申し訳無さそうな表情を浮かべている。

「いいえ、憎まれ役をして下さって申し訳ないくらいです。私だけだったら喧嘩腰にならなくちゃならない所だったわ」

「……でしょうね。あれで結構心配性なんですよ」

ファドラーンを仕事に送り出す事で私が機嫌を損ねる、とラズイルは思っていたのかしら。

たしかに、寂しいと思う心がない訳ではないけれど、何の為に今ここに居るのかを考えれば我侭は回りの皆を困らせるだけよね。

少し緊張を解いて続けられた彼の言葉に微笑みを返して、私はファドラーンの動きを目で追った。

ティールブルーに統一された制服の中で唯一私服のままの彼は嫌でも目に飛び込んでくる。

だけれど、のんびり見物に専念させては貰えなかった。

「ラズイル副隊長、少しお話しさせていただいても宜しいですか？」
控えめに掛けられた声を伺えば、さっきまで近くで剣を交えていた若者たちが立っていた。副隊長と話をしたいと言うのは建前だとお互い承知だが、特に表情も変えずにそれに応じたラズイルに彼等

は幾分ほっとしたような表情を見せる。

名前の交換と差し障りのない話題。

それに笑顔で応じながら、礼節を弁えた彼等のその振る舞いに感心せざるを得なかった。

お互いの事情に立ち入り過ぎない会話は彼等の規律が行き届いている証かしら。

そしてそれを皮切りに、常に誰彼かが私とラズイルの傍にやって来るようになった。

入れ替わり立ち代わりと数人ずつのグループでやって来ては名前を名乗っていく彼等。

常に何人かの若者が居るのだけれども長居する訳でもないタイミングの取り方が絶妙だわ。

以前、故国ユグドラセアでの田舎の夜会では、数人の娘だけで会話していた廻りを貴族の青年にぐるりと取り巻かれてしまい、その傲慢さにとっても嫌な思いをした事があった。

そんな事を思い出し、隣に立つラズイルを見上げて。

「礼儀を弁えた方たちですね。ヴァル殿の護衛と言うからには、皆格式のあるお家の方なのですか？ガティノワさんのように」

「そうですね、隊の半分はそういった家柄の者ですが、残りは市井からの者なんですよ。一応王族の護衛ですから、賛否両論なんですよ」

「……あの方らしいわね」

確かに彼のやりそうな事だと、私はラズイルに同意の微笑みを返す。チャクラヴァルティンの、柔軟な思考の持ち主のようにも見えるその姿の奥には自分の考えを押し通す頑固な一面があるらしいのは薄々気が付いているの。

勿論彼は自分ではそれを決して認めまいが。

「……驚かれないんですね。ちなみに私も市井からの出身なんです

よ。ヴァルさまの領内からの志願者がこの隊の四分の一を占めているので」

「地元の方の協力は欠かせませんものね」

当たり前障りのない言葉ではそう言うのが精一杯だった。

お世辞でも何でもなく、領主や統治する者にとって領民が好意的か否かは仕事の成否を左右するのだから。

「国は違えど、貴族の子女としての教育を受けた貴女がそんな風に考えて下さるとは思いませんでした。……こんな事を言って気分を害されたのなら謝罪しますが」

「気になさらないで下さい。私は随分考え方が変わったんだな、と自分でも思うんです。故国を出てからのこの半年の間に、随分いろんな事を経験しましたから」

ラズイルは慎重に私との心理的な距離を測ろうとしていたのかしら、私の返事に目に見えて彼の態度は寛いだものになった。表情は前のままの微笑みだったけれど。

「いずれ機会があれば、ゆっくり貴女の体験談を聞きたいですね。とても興味をそえられるもののようにですから」

「そうですね、機会があったら」

そんな返事を返しながら見上げたラズイルは優しい瞳をしていて、先にファドラーンに見せていた鋭いものは微塵も残っていないように見えたのがとても意外だったわ。

「私の家族もヴァルさまが長期間滞在なされる地上にとっても興味があるらしくてね。妻にも何度か訊ねられるんですが、私は行った事がないので答えようがないんですよ」

「奥様……？」

自分の立場も微妙だし、この国にいつまで滞在しているのかとも判らない。いつそんな機会が巡って来るのかもはっきりしていないからと思って、はぐらかす訳ではなかったけれど曖昧な返事をしていた私はその言葉に興味を隠しきれなくなってしまった。

「この土地の方で奥方の話を聞かせて下さったのは貴方で二人目で

すわ。ええ、そう、機会があれば是非」

本心からそう答えると、ラズイルもそれに笑顔で応じてくれる。

「もう一人と言えば、ミシェイルでしょう？ 奴の話も結構おもしろいんですよ、大変ですけどね。今度詳しく馴れ初めでも聞いて御覧なさい」

本気とも冗談とも付かないラズイルの台詞に苦笑いしながら、巡らせた視線にこちらへと戻ってくるファドラーンの姿が映った。

擦れ違う数人に声を掛けながら、それでもその視線はしっかりとこちらを見つめている。

「疲れただろう、そろそろ切り上げるかい？」

戻るなり彼はそう言って、私の手を取ると鍛錬場を出る素振りを見せた。

廻りのひと達はそんなファドラーンに別段変な顔をする訳でもなくて、軽く頭を下げるだけの礼を執って私達を送り出してくれる。一応ラズイルや廻りの若者達に同じような礼を返すと、私もファドラーンに続いてその場を後にした。

「ファドラーンこそ久しぶりに身体を動かしたのだもの、疲れたのではない？」

つい先程まで幾人かの若者の剣の相手をしていた彼は、息はあがっていないもののかかなりの汗をかいているみたい。

私をエスコートしてくれる指先すら暖かくしっとりしている。

ファドラーンの代わりに私の隣にしてくれたラズイルと、入れ替わり挨拶にやってくる若者とが作る人垣の間から、私はずっと見つめていたわ。どんな風にファドラーンが剣を扱うのか、手合わせしている相手の力量にあわせて剣を交える彼の活き活きた表情を。

それは今までの旅の間に見ていた彼とは全く違う表情を持つ人物で……どちらがより彼らしいかと問われれば、今の彼の方が、と答

えざるを得ないわね。

今までの商人の息子を装っていた彼に馴染んでいた私としては少し不本意なのだけれど。

虚像の人物としての彼と今日の前をゆく本当の彼。さっきの暖かくしつとりとした手が、生身の彼を妙にはつきりと意識させる。

だから少しからかうような口調でそう尋ねてみた。ファドラインがどんな反応を返すだろうかと思って。

「とんでもない、ちょっと乗って来たかなって程度だよ」

少し伺うような視線で見上げると、返って来たのはいつも通りの微笑みだった。

いつもの軽口とともにのんびりした足取りのファドラインに、来た道を戻ろうとしているのだと咄嗟に見当を付ける。

「そんなに急がないのなら、きちんとした道順で屋敷に戻らない？ どうせならそちの道も見ておきたいし、夕食までに貴方が着替える時間の余裕もまだあるでしょう？」

だから我俣を承知でそう私は提案していた。

「わかった」

ファドラインは素っ気ない口調でそれに応じたのだけれど、ちらりと見上げたその口元にはいつもの微笑みがある。

「それは構わないけれど、通用口と正面のエントランスのどっちがいいかな？」

「通用門に決まっているでしょ」

しれっと続けられた言葉に、さっきのファドラインに倣うように殊更素っ気ない口調で応じてみた。

けれど微かに私を伺っているようなファドラインの視線を感じて、じゃれ合っているのか互いに相手を探り合っているのか、判らなくなってしまうた。

「通用門に決まっているでしょ」

俺のふざけた問いかけに素っ気ない返事のイエライシャ。

先程の意趣返しかと思ってその表情を伺ってみれば、何となく複雑な表情になってしまっている。

怒っている訳では無さそうなので、何かまだ悩み事を抱えているのだろうかと思ってしまう。

それともまた俺は何か彼女の機嫌を損ねるような事をしていたのだろうか。

うだうだとそんな事を考えつつ、タイルで装飾を施された整った芝生の道を黙ったままもうしばらく歩いた。午後の盛りもとうに過ぎ、夕刻の気配を色濃く含んだ風がそよいでいる。

小径の角を曲がった所で、植え込みの木立の向こうから本館主翼の姿が目に見え込んで来た。

「後でヴァルさまも同じ事を訊ねると思うんだけど、彼等の印象はどうだった？好奇心丸出しだったから鬱陶しかったかな」

特に何をと指さずに訊ねる。

案の定、少し首を傾げたイエライシャはゆっくりと考えをまとめながら、言葉を返してくる。

「悪い印象ではない、と思うわ。ラズイルさんや他の方もとても礼儀正しかったし」

「そう言ってもらえて安心したよ」

本心からそう答えると、チラ、とイエライシャの見上げる視線を感じた。

その視線に微笑みを返すと、彼女も同様に微笑みで応えてくれた。

その微笑みからはさっきまでの複雑さはなくなって、俺の気の廻し過ぎなのかなとさえ思えてくる。

以前の失敗を再び繰り返さない為にも気を付けているつもりなのだが、不安が大き過ぎて必要以上に神経質になってしまっているのは否めない。

それだけ俺はこの女性を失いたくないと、思っているから。

「王族である自分の護衛の半分近くに、貴族出身でない者を入れると言うのはどうかとも思ったけれど、ヴァル殿らしいと言えばそうだし。主人の性格を考えればむしろ、貴族出身の人たちの方が気を使う構成なのではない？」

イエライシャは、自分の立場か経験故か、核心を突いた問いかけをしてくる。

こんな話はヴァルの前では出来ない類いのものだが、一応頭に入れている方がいいかなと思った俺は話を続けた。

「まあね、人選に関してはヴァルさま流の嫌がらせもあったんじゃないかな。重臣の大して有能でもない子息が多くを占めたうえに、自分や親類の姉妹を紹介するのが目的のなら邪魔なだけだと零していたのを覚えているからね」

「だから市井から募ったの？」

「条件はヴァルさまに対する忠誠心と一応の武芸の心得のある者。貴族の子弟でなくとも大抵の成人男性は最低限の腕前を持っているから、冗談だろってくらい最低の条件だね」

ゆっくりと歩きながら不思議そうな表情のイエライシャ。

「最低って……どう言う事？」

「この国はとても小さくて、当然ながら民の数も少ない。だから何かあった時の自衛の為もあって、男女の区別なく教育と武術のたしなみを与えるのは領主の義務でもあるんだ。まあ、混成の部隊になった事で確かにはじめは確執があったのは確かだよ。俺から見ても鼻持ちならない貴族の子弟が随分と辞めていったのも確かだし。俺

とラズイルにした所で打ち解けるのには何年も掛かったんだ。けれど、まあ、なんとかなるもんだね」

肩を竦めてみせると、今度は呆氣にとられた表情になっている彼女の視線を受け止める。

「……随分いろいろあったんでしょね」

「色々だね」

何を想像しているのかは判らないが、神妙な口調になったイエライシャを茶化すようにそう答えると改めて彼女の手を握り直し、目の前に迫っていた屋敷の入り口へとエスコートした。

相変わらず何やら不満そうに通用門として使われるその入り口を見つめているので、つい笑顔にさせられてしまう。

「必要以上に豪奢なのは判るけれど今の主人の責任じゃないんだから、そんな顔はしないで。パドマさまの言っていた事を忘れたのかい？」

「ちがうわ、そんな事を考えていたのではないの。この屋敷がヴァル殿にとって不本意だと言う事は、ヴァル殿と彼の叔父上と言う人物とはあまり意志が通じ合っていないのね？」

思いがけないイエライシャの言葉に、痛い所を突かれた、という表情を押し隠す事は出来なかった。

「まあ、否定はしないよ。もっとも、完全に一致すると言う事自体が難しいけれどね」

一般論のような口振りでそれに応じてみたけれど誤魔化し切れていないのは判っているうえに、俺としては彼女にこれ以上の隠し事をする気もない。

ただ何処から説明するのが良いか判断に迷ってしまう。

さつきヴァルに釘を刺された事柄とも微妙に関連があるだけに、先程の主人の指示に逆らうことにもなりかねないからだ。

「ごめんなさい、立ち入り過ぎたわ。困らせてしまったわね」

逡巡してしまっていた俺を気づかったのだと分かる言葉を唇にの

せて、彼女がこの会話を終らせなかったらどうなっていたのだろう……と自問してしまったが、はっきりと答えを出せない自分自身に戸惑ってしまう。

以前の俺だったら、どう答えようなんてけして迷いはしなかった筈なのに。それどころか主人の命令を絶対として、沈黙を守る方を選んだはずだ。

それが為に廻りの誰と衝突する事があるうとも。

どうやら、変わったのはヴァルだけではなかったらしい、と言う事に俺は今更ながらようやく気が付いたのだ。

自分に宛てがわれている客室への道順のかなりを覚えてたらしいイエライシャをサポートしながらその部屋へと送り届ける。

「夕食の為に着替えたらまた迎えにくるから」

別れ際に少しばかり心細そうな表情を見せたイエライシャに、ついそう約束をしてしまう。

頃合いを見計らって侍女達が客人の世話と案内をしてくれるのを知っているのに、はにかんだような微笑みに隠された心許なさに気が付いてしまうと、後先考えずにそう口走っていた。

「……いいの？」

「主人の公認だから、構わないさ」

慎重に探りを入れてきたイエライシャだが、その表情が先程とは打って変わって明るく見えるのは気のせいじゃないだろう。

さらりと応じてみせた言葉が自分への言い訳だとは充分自覚していたが、むしろ正当化する為の言い訳をヴァルがくれていたのだと……取れなくもないよな。

何を何処まで推測して、何処までを許容範囲として言質をくれているのか判らない主人ではあるのだが、今の所は彼流の好意の範囲内だと勝手に決め付けておくことにする。

了解したとうなづいたイエライシャの部屋の扉を閉めると、俺も

自分の身支度を整える為にこの屋敷の中に自室として確保している部屋へと向かう。

チャクラヴァルティンの護衛としての俺だが、この主翼内のヴァルの私室と自称書斎との丁度中間あたりに部屋を与えられているのだ。

部屋と言っても三間続きのうえ、浴室も付いている客室のようなもので、必要以上に贅沢なその構えはこの屋敷の主人の格式と俺の出自とを照らし合わせても厚遇に過ぎる……とは当初よく叩かれた陰口だった。

親衛隊の隊長見習いの間は俺もラズイル達と一緒に宿舎で皆と生活していたのだが、前任者から隊長の任を引き継いだ時に就任祝いだと言ってヴァルが寄越したのがこの部屋だった。

昔馴染みとは言え家族でもない者に与えるには近すぎるその部屋の配置に、王の周囲からも異議を唱える声は大きかった。とはいえ主人の破格の好意だし断れば周囲に角が立つというので、否応なくこの部屋へと引っ越す羽目になったのだ。

もちろんあのまま隊の宿舎に居る事を選択したとしても、ヴァルが機嫌を損ねるとか何らかのデメリットは全くなかったのだが、つまらない詮索をする者がいない訳でも無かったので俺としては苦渋の選択だった。

ようやくラズイル以下市井からの志願者との軋轢もなくなりかけていて、それなりに良い関係に落ち着きかけていた所だったからなおさらだ。そんな事を思っただけで憂鬱になりかけていた俺に、けれどラズイル達はあっさりしたものだっただけだ。

「……まあ、主人のわがままに付き合うと思えば腹も立ちますまい」
ラズイルらしいもって廻った言い方と、主人であるチャクラヴァルティンをチラと見遣ったその視線から、彼には彼なりの葛藤がある事を知る。

ああ、と妙に納得したあの時。

彼は……自分達の方こそが試されていると感じていたのだろう。

市井出身の自分達を、前例のない部署で使おうとしている人物とその思惑を測りかねていたのかもしれない。市井からの応募者は他の領内からかなりの数だったのを、兵士としての資質と伎倆、思想、そして人格、とかなりの選考を重ねた。

ほとんどコネなどない彼等にとって己の資質そのものしかアピール出来るものはないのだから、最終的に選に残った者は本当に有能な者、もしくは主人の希望に適った者である事は疑いようもない。

それでも主人との間の距離、間合いとでも言うのだろうか……をまだ掴めてはいないのだと、ラズイルのその眼差しが語っていた。

天邪鬼な俺はそれに気が付いて、むしろ気が楽になったのを覚えている。

我ながら嫌な性格だとその時の事を思い出しながら、件の部屋の扉を開けた。

102 部屋

イエライシャが案じてくれた程には疲れはなかったのだが、汗だけはしっかりとかいてしまっていたので取り敢えず浴室を使うことにした。

三か月以上空けていた部屋だけれど、見回しても塵一つ無くきちんと手入れされているのは、部屋の主人が長期に渡って留守をしているのもこの屋敷が弛んではない事の証だろうと思う事になっている。

私室として与えられているとは言っても全くのプライベートという訳ではないのは承知の上だから、掃除の為などで誰が出入りしたとしてもとやかく言う義理ではないのだ。

汗を流してさっぱりとした気分で殆ど無意識の内にもいつも通りの手際で親衛隊の制服を身にまとい、鏡に映った自分のその姿に少し……戸惑ってしまった。

何が、と、はつきりとは言えないこの違和感。

チャクラヴァルティンさまの親衛隊の中で、当然の事ながらただ一人にしか許されていない隊長の制服。

白を基調としたそれは袖飾りと肩章にティールブルーをあしらい、身頃と袖とに金糸の刺繍飾りを施したもので、王の親衛隊とは色違いの誂えとなっている。

王の親衛隊は紫苑のパープルを、そして世継ぎはこのティールブルーをそれぞれのシンボルカラーとするのがこの国の習慣となっている。これにも長い話があるのだがいずれイエライシャに話してあげる機会もあるだろうと思う。

ともあれ、いつもなら当然のようにそれを身に纏っていたのに、初めて感じてしまったこの違和感のせいだろうかどうにも居心地が悪い。そんな落ち着かない表情の自分を鏡で観察して、諦めの溜め息を一つ零してしまう。

公式の場であれ、そうでない場であれ、チャクラヴァルティンに従う自分としてはこの姿になんら違和感を感じはしないというのに。イエライシャが居合わせる時、そんな自分に違和感を覚えてしまうのだ。

こんな事ははじめてだった。

多分イエライシャと出会ってから変わった自分というのは、今までの長い間の習慣、もしくは自分では当たり前だと思っていた事、それらに今一度目を向けて改めて見つめ直す事が出来るようになった、そんな部分の事なんじゃないかな、と取り敢えずそう思う事にしておいた。

そして違和感との妥協を求めて俺は改めて略式の隊服の袖に腕を通し直してみる。

略式のものとは白地ではなく皆と同じティールブルーで襟と袖の折り返しが少しばかり派手なだけだ。

ラズイルは常にこちらを身に付けている事の方が多い。

その略式の隊服の襟を直しながら、窺った鏡の中の自分はお気に入りの玩具をまだ諦められていない子供のような表情をしている。たしかにあの制服が一番の気に入りだと言う事は認めるが、嫌でも明日はそれを身に纏う事になる。

王宮に伺候するからには世継ぎと言えども第一級の盛装を要求されるし、同行する共揃いも同様だ。

商人としての俺の出で立ちしか知らないイエライシャがそれにどんな反応を見せてくれるのかは、明日の楽しみにとっておけがいい。勿体ぶっている訳じゃない。

今夜はあくまで主人の夕食に同席するだけなのだから堅苦しくす

る必要はないのだ。

どうにも言い訳と取れなくはない事を考えながら、約束通りイエライシャを迎えにいく為に部屋のドアを開けた所で、待ち構えていたらしいラズイルに捕まってしまった。

「丁度いいタイミングだったようですね。ヴァルさまから夕食の席へお誘いを頂いたので、留守中の隊の報告もある事ですし貴方に同行させて頂こうかと。……大丈夫ですよ、お客さまのお部屋に着く前に終らせますし、お邪魔はしませんから」

生真面目な口調とにつこり笑顔付きのその申し出に、瞬間俺が返事を戸惑ったのを奴は見逃してはくれなかった。

淀みなく更に続けられる言葉にまじまじと相手を見つめれば、俺と同じように略式の副隊長の制服をきっちりと着込んだ奴は明らかに俺をからかう時の微笑みを浮かべている。

「どうして俺が客人の部屋へ行くと？」

「隊長が彼女の護りだと聞き及びましたので。心配性の貴方の事だから、勿論お迎えに行かれるおつもりなのだろうと思ったんですが」

「心配性って……」

「違うんですか？」

本心ではもう少し突っ込みたいのを我慢しているらしいラズイルの様子に、俺も少し肩の力を抜く事にした。

「判った、報告を頼む。後、ガティノワはどうしている？」

そう言って歩き出すと、一步遅れて続く足音が間髪を入れず応えてくれるのが心強い。

「先程外出から戻ったようですね。明日の王宮への伺候には同行させますか？」

時に堅苦しい程礼儀を気にするラズイルらしい問いかけに、関心が同じ所にあると知る。「この部隊の規律を遵守しているとは言

難い態度だが、一応あれでもエブランデティオス家の跡取りだ。王の晩餐会に出られんとくれば現当主のあの爺いさんが五月蠅くねじ込んでくるだろうな。お前がそれに対応してくれるのなら、奴を留守番にするのは構わんが……目を離すのも却って心配だから連れて行った方が無難なんだろうな」

「やはりそうなるでしょうね」

そしてどうやら同じ意見だったらしい奴の小さな溜め息。けれどすぐに気を取り直したのか報告の続きを始めてくれた。

隊の人員の動きや身内の出来事、この屋敷内の出来事など要点を纏めての報告なので不在の多い身としてはいつも助かっている。

少しゆっくりと歩きながら一通りの報告に耳を傾け、客室へ向かう廊下の角を回り込んだ辺りでそれらを聞き終わった。

「ほら、言った通りだったでしょう」

当然のような顔で自分の見積もりの正確さを主張するラズイルに、俺は振り向くと降参の意も込めて苦笑いしてみせる。満足げに微笑んでそれに応じた奴の顔を確認して俺は客室へと向き直った。

扉の前の廊下には侍女が一人立っていて、俺達を認めると客室の中へと案内してくれる。

「じきにお支度が整いますので今暫くお待ち下さいな」

客室に入ってすぐそう言葉を向けてきたのはティセルで、午後のお茶の時間を共有していた親しげな態度は今は改められている。彼女達を統括しているミュゼナが必要以上の馴れ合いを嫌うので、これは仕方がないだろうとソファに腰を下ろして待つ事にした。

「既にお聞き及びでしょうが、ジェイル様に二人めのお子さまがお生まれになったとのことで。ヴァルさまはどうなさるおつもりでしょうね」

「まだ確認していないから何とも言えないな」

ラズイルの疑問に当たり障りのない返事を返しながら、既にその情報を得ているだろう主人の行動を推測してみようとして、やめた。もともと気まぐれな彼の言動が、ここ暫く更に輪を掛けたものになっているのを実感させられているからだ。

一応の決まり事としては臣下に慶事のあった場合、主人筋への報告に依じてその使いの者に祝いの言葉を授けるのが一般的だ。

そして、その臣下が日を改めて礼を申し述べる為に主人への目通りをした際に、改めてその慶事に応じた祝いの品を下賜される事になる。

今回は産祝いだからミュゼナが主人の委託を請けてそれを選ぶ事になるのだろうか。

それは本来ならば主人の奥方の仕事なのだが、ヴァルが独り身である以上仕方がないだろうな。

色々な要素があり過ぎて段取りをまとめきれずにいた所へ奥まった隣室からのドアが開く。

現れたのはよく見知った顔ぶれだった。

「お手間を取らせて申し訳ありませんでしたわね。明晩のご衣装の試着をお願い致していたので少しばかり遅くなってしまいましたの。ヴァルさまにもそうお伝え下さいませ」

もしも遅れた事で主人が機嫌を悪くしていたのなら、という含みを持たせた言葉と共に頭を下げたのはお針子頭の侍女アイラだ。その彼女に伴われて部屋から現れたイエライシャは少し疲れているように見える。

それでも、俺を見た時のその表情が少しだけ明るく見えたのは……俺の都合のいい見間違いかな。

「アイラは完璧主義者だし、王の宴ともなれば手抜かりは許されませんからね」

俺と同様に立ち上がってイエライシャを迎えたラズイルは、軽く頭を下げてそう言葉を繋ぐ。

彼の言葉に判っていると微笑みだけの返事を返したイエライシャは、昼間の若草色のドレスから淡い紫色の衣装へと着替えていた。

まだあまり選択の余地はないのだろうが、無駄な飾りを極力省いた簡素な衣装は彼女らしいと思えて、俺は微笑んで腕を差し出していた。

「……では行こうか」

イエライシャがすんなりと俺の腕に手を預けてくれたので、そのまま俺達は扉へと向かう。

ティセルが開けてくれた扉を潜り少し薄暗くなっている廊下へと踏み出すと、慣れた道行きを辿って主人の待つ部屋へと向かった。あともう少し闇が濃くなれば照明が灯されるのだが、それにはもう少し時間がありそうだ。

俺の腕に手を預け、背後をラズイルに守られる形で歩いていたイエライシャが小さな溜め息を零したのはその道中だった。こつそりと薄暗がりに紛らわせてしまうつもりだったのかもしれないが耳に入ってしまった以上知らない振りもできなくて、俺は彼女を覗き込むように身体を捻る。

俺の腕に触れているのでそれだけの身体の動きで自分が覗き込まれている事に気が付くはずだ、と思ったから特に声をかける事はしなかった。

「明日の晩の私は、完璧な見せ物だわね」

イエライシャもそれを承知しているのだろう、低く呟かれた彼女の言葉を聞き逃すまいとしながらも、その内容に何とも表現の仕様のない無力感を噛み締める。

「……済まないな」

「貴女にその自覚があれば何とかなりますよ」

神妙な俺の言葉と、それとは反対にむしろ樂觀的な口調のラズイル。つい鋭い視線を注いってしまった俺に奴はにやりとして見せる。

「何といってもヴァル様がらみですからね、必要以上の注意を集め

てしまうのも仕方が無い事でしょう？誰がどのように推測しようとも、貴女はあくまでヴァル様の個人的なお客人としての振る舞いになさればいいんです」

「正論ね」

「どっちかっていうと建前ですがね」

ようやく肩の力を抜いたような返事をしたイエライシャの返事に応えたのは、薄暗がりの中でも肩をすくめたと判るラズイルの気配と少しトーンの落ちた声だった。

「それでも俺やこのラズイル、そしてヴァル様のフォローは期待してくれて構わないから」

「判っているわ、ありがとう」

俺がさらに言葉を付け足すと、イエライシャは少しだけ明るい声で応えてくれた。

けれど重くなってしまった雰囲気を払拭する事は出来ず、言葉も途切れたまま。目的の部屋への扉がすぐそこにあったおかげでかうじて間が持った……そんな危うい沈黙だった。

軽くノックをするとすぐに応じる声があり、部屋の扉が開けられる。

開けてくれた侍女に礼を言いつつ室内を見回すと既にチャクラヴァルティンさま……ヴァルはテーブルに就いていた。もっともその隣に立っている男、ラハティの存在から推測すれば食事のためではなくここまで追いかけてきた仕事のためだろう。

ジェイルの補佐をしているラハティは視線で俺たちを認め、それでももう少しヴァルと言葉を交わす。

そしてようやく最後の書類にヴァルがペンを走らせるのを確認するとその書類を受け取り、既にずいぶん量の書類が重ねられていた盆の上に重ねると丁寧に布の覆いを掛けた。

それを手にしたラハティがテーブルを離れるタイミングを見計らって、俺はイエライシャをそのテーブルへとエスコートすることに

した。

途中ですれ違ったラハティはかすかな微笑みとともに軽く会釈をしてよこしたのでイエライシャもそれに応じて腰を落として挨拶を交わす。

特に紹介されてはいない初対面同士だが最低限の礼儀といったところだろう。

「彼はラハティ・フォール。ジェイルの補佐役でね、彼がわたしを探している時にはわたしは居ないと言っておいてくれ」

のんびりとしたヴァルの言葉にラハティは苦笑して部屋を出てゆく。彼が主の言葉を特に気にする風もないのはいつも通りだ。

扉を潜ってゆく彼の背中を見つめていたイエライシャは、そこからゆっくりと室内を見回して最後に視線をヴァルへと固定する。

「お昼と同じ部屋なのね」

「格式にこだわる来客に、形式に沿った対応をするための部屋も当然あるのだけれどね。わたしとしてはこれ以上肩が凝るのはごめんなんだよ」

イエライシャの質問とも言えないような言葉にそう答えるとヴァルは肩をすくめる。

彼女が居ると幾分ヴァルが無防備になるのだという気がしてそれに胸が騒ぐ一方で、寛いだ風情の主人に幾分ほっとしている自分があるのも否めない。

だからおどけたように肩をすくめたヴァルに俺やラズイルさえにやりとしてしまう。

「そういえばアイラに捕まっていたそうだね。宴の為だけなのに支度が大げさで済まないね」

「……いいえ、おろそかにできない事だと承知していますから、お気になさらないでください。それに飾りの品などもご用意いただけて助かりました、こちらにお邪魔させて戴いている間は有り難く使

わせていただきますわ」

「自由にしてくれと申し付けた筈だが？」

「ええ、ですから」

だから借り物を返すのも自分の自由だとばかり、にっこりと微笑むイエライシャを見つめてヴァルは幾分不思議そうだ。

「女性はあるいふものを喜んで受け取ってくれるものだばかり思っていたのだけれどね」

「そういう方が多いのも確かですわね」

返事をしながら穏やかに変わらぬイエライシャの微笑みに、ドア近くに居たラズイルが笑いをこらえている。誰かが来たのかドアを開けようとしていたらしい。

「あなた様から下心たつぷりの贈り物を貰って喜ぶ女が、そんなに沢山は居ないという現実をそろそろお知りになった方がようございませわね」

「一応……そういうものは無いつもりなんだが？」

ラズイルにドアを開けさせたミュゼナの容赦のない言葉にすら、ヴァルは心外だという表情を崩さない。

彼女は料理の給仕をする為の侍女を数人引き連れて部屋へと入ってくる。

「そっちの方がもっと質が悪いんじゃないんですか？」

笑いを含んだラズイルの言葉にイエライシャはどう反応しようか迷っているらしい。

「今の……ヴァル様の客としての私にはある程度必要な品であつても、そうでない私には使い道の無い物だというそれだけの事です」

「判った。君の好きにすればいいと伝えたのはわたしだしね、君の意向も尊重するよ」

「ありがとうございます」

筋違いの援助はごめんだという……彼女なりのプライドがその言

葉を口に出させたのだろう事は明らかだ。ある種潔癖性とも取れなくはないその性分がいつそ気持ちがいい。

そしてそれはヴァルとしても同様なのだと彼のその返事が語っている。話の腰を折る訳にはいかなかったのでそれまで隣で控えていたが、ようやくそこで俺はイエライシヤを椅子に座らせる為にヴァルの正面の席の椅子を引いた。

「それでは食卓のお支度をさせて頂きますわ」

客が椅子に座ったのを見届け、落ち着き払ったミュゼナがそう言うが早いか付き従っていた侍女達が手慣れた仕草で食卓の上を整え始め、いつもながらの手際であっという間に四人の用意を済ませてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0233m/>

暁の銀嶺と黄昏の蒼

2011年12月28日09時19分発行